

とりあえずキバって行
こうか

ゴランド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東崎莉紅は転生者である。

俺TUEEEEEとかハーレムとかに興味は無い。そもそも原作知識も無い。

果たしてファンガイアの力を宿した彼の運命はどうなるのか。wake up!

運命の鎖を解き放て！

ハイスクールD×Dが再びアニメ化すると聞いたので勢いで書いてしまった作品。仮面ライダーキバとハイスクールD×Dって設定的に合いそうだよねと思ったので程々に頑張っていきたい。

目次

| | |
|--------------------|-----|
| プロローグっぽいもの | 1 |
| 1章 旧校舎のディアボロス | |
| 1話 友人は変態ばかり | 11 |
| 2話 通り魔にご用心 | 35 |
| 3話 通り魔の真実 | 57 |
| 4話 変態と聖女と通り魔(犯人) | 67 |
| 5話 彼女の為に俺は死ぬる | 78 |
| 6話 堕天使達は犠牲になったのだ | 91 |
| 7話 Wake up Dragon | 91 |
| 8話 King of Vampire | 106 |
| 2章 戦闘校舎のフェニックス | 126 |
| 9話 プロローグに繋がっているお話 | 136 |
| 10話 この後、滅茶苦茶(r y | 153 |
| 11話 プライドの高いもの同士 | 170 |
| 12話 ウンメイノ | 186 |
| 13話 合・宿・修・行 | 212 |
| 14話 狂気 | 233 |

| | | |
|--------------|-----------------|-----|
| 15話 | 開戦 | 266 |
| 16話 | 仇 | 282 |
| 17話 | Double Action | 319 |
| 18話 | Time of Victory | 348 |
| 19話 | 戦いの末に | 372 |
| 20話 | ex. 使い魔つて?↑ああ! | 388 |
| 月光校庭のエクスカリバー | | |
| 21話 | おい、テニヌしろ……じやな | 426 |
| 22話 | 約束された勝利の剣(笑) | |

| | | |
|-----|--------------|-----|
| 23話 | 蒼き狼牙 | 453 |
| 24話 | くつころ | 498 |
| 25話 | 聖・剣・破・壊 | 517 |
| 26話 | 愚者 | 553 |
| 27話 | 自分らしくない事を | |
| 28話 | ダークネスムーンブレイク | 595 |

プロローグっぽいもの

悪魔、天使、墮天使

これらの種族は古来より長く争ってきた。

その戦争は三つの勢力に多大な被害を出し、ありとあらゆるモノに影響を与えていった。

しかしその戦争の最中とある種族は言った。

——我等こそ頂点に立つべき種族。それ以外は全て下等な存在だ

その種族は王を筆頭にあらゆる生物の命を奪っていく。

悪魔、天使、墮天使、魔獣、幻獣、伝承の生物、そしてドラゴンまでもありとあらゆるモノの命を奪ってつた。

その中には「二大龍」ウエルシュ・ドラゴン【赤い龍】と【白い龍】バニング・ドラゴンまでも。

双龍は「闇の鎧を纏った王」と争う。肉を裂き、血を流し、骨を砕き、臓器を潰し、ただ殺し合い続ける。

そして長い長い闘いの果てに双龍と王は跡形も無く消えた。

その闘いは戦地を灰に変え、あらゆる種族を巻き添えにして戦争は終わったのだ。

それ故に三大勢力はその種族を恐れた。

世界各地にあらゆる伝承を残したその存在は正に畏怖を形にしたような種族だった。

その種族は生きてはいけない。

いや、生かしてはいけない存在なのだ。

いつしか、その種族は王の死により王位を狙ったモノ達による殺し合いと、三大勢力の手によって滅んだ。

その種族の名は「ファンガイア」

命を奪い取る怪物だ。



「……………」

「ガブッ!!!」

少年はそのまま掴んだ蝙蝠を片方の手の噛みつかせる。すると噛みつかれた手から顔にかけて謎の紋様が浮かび上がる。それはまるで植物のような、ステンドグラスのような美しくも怪しげな神秘さを感じさせる。

——ジャラララララララッ!!!

瞬間、少年の腰に鎖が巻かれメタリックレッドカラーのベルトへと変化する。

少年は蝙蝠を掴んだまま化け物に向かいながら叫ぶ。

「変身ッ!!!」

少年が蝙蝠を赤いベルトに装着すると全身が異形の姿へと変貌を遂げる。

黄色いつり上がった複眼に血のような真つ赤な胸部、そして肩、右足に付けられている鎖がジャラリと音を立てる。

「ハアッ!!!」

異形の存在は化け物に駆け足で近づくと飛び膝蹴りを食らわせる。怯んだ化け物の

「あなた……………一体何者なの？」

「！」

異形の存在が振り向くとそこには、紅い髪の毛をした美しい女性、黒髪ポニーテールの正に大和撫子と言うべきに相応しい女性、金髪の泣き黒子を持つ整った容姿の少年、小さな体格をした可愛らしい白髪の少女、茶髪の情に熱そうな少年、そしてその少年の背後にいるお淑やかな金髪の少女。

その集団は常人よりも優れた容姿を持つ者ばかりだった。そして全員は同じ服装、学生服を見に纏っている。

リーダー格であろう紅い髪の毛の女性は再び異形の存在である少年に問いかける。

「聞こえていないのかしら？もう一度言うわ……………あなたは一体何者なの……………？」

「……………」

異形の存在は黙ったままだ。お互いにしばらく睨み合った後、少年は集団に背を向け歩く。まるで見逃すように、いや、最初から眼中に無いように異形の存在である少年は歩を進める。

「ッ!!待ちなさい!」

紅い髪の毛の女性は呼び止めるが異形の存在の足は止まらない。

「朱乃!!」

「ええ!!」

バチバチツ!!!

黒髪ポニーテールの女性の手から電撃が発生する。その電撃は異形の存在へ一直線に向かう。

「ハッ!!!」

「!」

しかし少年は電撃を地面へと難無く振り払う。すると火花が飛び散りその場に煙が立ち込める。

煙が晴れたその場には気絶した化け物を残して異形の存在は姿を消していた。

「……………逃したわ」

「リアス、さっきのは一体……………」

紅い髪の毛の女性と黒髪の女性が話し合っていると金髪の少年が二人に駆け寄る。

「部長、これを見てください」

「これは何?」

部長と呼ばれた紅い髪の女性を筆頭にした集団は化け物が壁にめり込んでいる光景を目にする。

金髪の少女と茶髪の少年がその光景に大きく驚いている様子だがそれ以外の者達は冷静にその場を分析している様子だった。

「すっげえ……これってアレがやったのか」

「イツセー君、驚くところはソコじゃ無いんだ。はぐれ悪魔じゃなくて、はぐれ悪魔がめり込んでいる壁をよく見てほしい」

茶髪の少年が言われた通りに化け物がめり込んでいる壁を確認すると「なッ!?!?」と言いながら驚愕を露わにする。

「化け物を中心に”蝙蝠の翼を広げたような紋章”が壁に刻まれているのだ。その紋章からは只ならぬ力を、おぞましさを感じる。全員はその紋章を前に冷や汗を流す。

「間違いない……やっぱアレが例の”コウモリ男”なんですよ!部長!!」

「ええ、その通りねイツセー。だけどアレの名前はコウモリ男なんかじゃ無いわ」

「え?」

イツセーと呼ばれている茶髪の少年は腑抜けた声が漏れる。

紅い髪の女性は少年に向かって話す。女性の瞳には決意と不安、そして今も尚襲いか

かつて来ている恐怖に打ち勝とうとする力強さが見られる。

「あなたを度々救って来たアレは都市伝説でコウモリ男と呼ばれている。だけど違う」

——アレの名前は「キバ」ファンガイアの王よ。

1章 旧校舎のディアボロス

1話 友人は変態ばかり

僕の名前は【東崎 莉紅】

毎日ご飯を食べ、学校に行き、風呂に入り、ベットで寝るそんな日常を過ごし、名前が何故か女の子っぽい事以外は普通の高校二年生！

……と言うのは冗談で本当の事を言うと最近流行りの異世界転生系の被害者です。

最近異世界転生が流行ってるだっけ？ だったら乗るしかない、このビッグウェーブに!!!と言う感じのノリした神様(?)に強制的に転生させられました。

神様の話では遠くから飛んで来た野球ボールが後頭部に当たって死んだらしいのだ。ド○えもん時空ならば日常風景のソレが原因に滅茶苦茶ショックを受けました。ちなみに死んだ本当の原因は神様が投げたボールが現世の頭に当たったかららしい。

お前が原因かよ

異世界に転生させるので特典言つてネーって感じに言われたが、特に欲しいモノなんてすぐに決まるわけも無く、神様にどんな世界なのか聞いてみると

——『ん？そりや、悪魔や堕天使、天使がドンパチやつてすんごい魔法や技が飛び交つて幻獣やら神話の生物やら次元ぶつ壊すレベルのドラゴン等が存在する【たのしい^{多延死異}】世界だよ？』

——「おうちかえる!!!!」

——『いや、そもそも帰れないよ』

そんな感じに色々ありました。とにかくマジで死にたくないの

「安心に生きられるようにしてください」

と土下座しながら頼んだ。

ラノベの主人公ならチート系の能力やら技やらを頼み、苦労系主人公ならここで役に立たない能力または物を貰い、マイナー系ならば役に立つかどうか微妙な能力、物を貰

う。

まるでどこかの手フエチ殺人鬼のような願いだが、これでいい。

ん？チート系能力をもらって俺TUEEEはやらないのかだつて？

やめとけやめとけ。

チート系主人公は大体その力を敵やら何やらに狙われるのが関の山だ。確実に面倒臭い事になる。

それにご都合主義展開のように簡単に物事が運ぶ訳でもない。

死ぬ前は大学生だった理由もあったのか、そのような最強無敵無双系なんて夢も冷めてしまっている僕は愚かな選択はしない。僕は確実にのびのびした平和な人生を送る為に神様にそれ相応の態度を見せるのだ。

と云うかラノベの主人公で神様に対してタメ口する主人公いるけどある意味尊敬するよ……。

俺の願いが届いたのか神様はウンウンと頷く。どうやらこれで俺の第二の人生は安息の日々を過ごせるらしい。

——『成る程』。安心安全に生きられるような凡ゆる敵を退ける物凄い力が欲しいのかあ。OK面白い。気に入った』

——「違うそうじゃn」

だが現実是非情だ。

全知全能の筈である神様がまさか勘違いするとは、いや、そもそも神様自身のミスで異世界転生されている時点でアウトなのだが。

そんなこんなで今や僕は高校二年生。町でかなり有名な私立高校に通っており、高校生活をエンジョイしている。

勿論、友達もしっかりと作っているし成績も大体真ん中辺りをキープしている。

だが元大学生だからと言ってしっかり勉強しないと危ない感じだ。

流石は偏差値が高めの私立校。恐ろしい校!!!

そんな僕ですが特典の方に色々と問題がありそうな感じがします。

『……………つい……………オイッ 莉紅!!そろそろ出て大丈夫か?!?』

「あ、ごめん。えつと……………大丈夫だよ」

「つとーふいー、外の空気は美味いぜ」

と僕の学生バックからスポンツと金色のボディ、赤い瞳をしたコウモリが出てくる。

ちなみに声は【杉田○和】さんだ。

もう分かつている人もいるだろう。

どう見ても【キバットバットⅢ世】だ。

どうやら神様は僕に仮面ライダーキバのキバの鎧を授けてくれたようだ。

と言うか何故仮面ライダーなのだろうか。

確かに本格的に見た初めての仮面ライダーで必殺技もカッコよかったから印象が強
く残っているけど、何故これになったのだろうか。

せめてウィザードならば瞬間移動や透明になったりとかで物凄く便利だったのに。
欠点は変身音が凄くうるさい事だけだ。

「おいおい、なんかシャキツとしねえ顔だなオイ。なんか悩んでんのか？」
「いや、大丈夫だよキバット」

「そうかー？にしても【駒王学園】って言ったか？相変わらず凄げえ所だよなあ」

キバットが言っている駒王学園と言うのは僕が通っている私立高校の事だ。駒王学
園は小中高大の一貫の進学校であり元々は女子校だったのが最近になって男女共学に
なったのだ。

その為か女子の比率が多い高校となっており、ソレ狙いで入学する生徒もいるのだ。
ちなみにその生徒は——

「おーい、こんな所で何やってんだ？」

「!?」 「バツ

「お——むぐつ」

僕は急いでキバツトを鞆の中にしまい、声が聞こえてきた方へと向く。そこには茶髪
の男子高校生がいたのだ。

彼の名前は「兵藤 ひょうどう 一誠 いつせい」先程言った女子生徒の比率に目が眩んで入学した生徒だ。

「や、やあイツセー君。君もこんな所でどうしたの？」

「悪い、匿ってくれ!! 詳しい話は後!!」

と一誠君はそれだけを言うところの茂みに身を隠してしまう。

……うん、大体どう言うことか理解できた。

そう思っていると一誠君がやって来た方向から数人の女子生徒がやって来たのだ。

ああ、やつぱりか。

「あ! 東崎君! こっちにイツセー 変態 は来なかった?」

「うん来たよ。話しかようとしたけど、そのままあっちに走っていったよ」

と明後日の方向へ指をさすとそのまま全員はその方向へと走り出して行った。完全にいなくなつたのを確認すると一誠君に「もういいよ」と話しかける。

「悪いな。助かつたぜ」

「いい加減、覗きはやめなつて。それつてただ好感度下がるだけだよ?」

「ぐ、い、いや! だけどな東崎! そこに穴があつたら覗くのが男だろ!!!」

「いや、覗くのは変態だと思うよ」

一誠君はこのようにとにかく思考が変態だ。

その所為で股間と脳が直結し、全身が海綿体と言われる始末だ。顔は整っているのにそのエロさで駄目になっている。＋――〇どころか＋――〇という評価となっている。

他にも松田君と元浜君と言う一誠君の同類がいる。その三人はこの学園でもとても有名であり、変態三人組と呼ばれているのだ。

一誠君が一人だけのところを見るとおそらく囿にでも使われたのだろう。

「はあー、しようがねえか。あ、そういえばこれから元浜達と一緒にエロDVD観賞するんだけど、東崎もどうだ?」

「い、いや、い、いよ」

何が悲しくて男四人でエロDVDを観なくてはいけないのだろうか。そもそも僕は人前でそんな物を見る勇気さえ持っていない。

「ちえつ、付き合い悪いな。男なら見るだる普通！」

オープンになって見る方がおかしいと思うのは僕だけだろうか？



くくくあつという間に放課後

「オイオイ、相変わらず付き合い悪いな。たまには男同士でそういうのも悪くないと思うんだけどな？」

「やめてよ。僕はそんな勇氣無いし。それに今日は帰ったらすぐにやらなきゃいけない事があるんだから」

「誤魔化しやがってくくこのチェリーボーイめ」

うわあ殴りたい。このコウモリ物凄く殴りたい。と、まあそんな事はさておき何事もなく家に着く。

帰るときは殆ど一人で帰る。その理由はあまりキバットを見られたく無いからだ。キバの鎧は一応誰でも変身する事は可能だがファンガイアでなければ負担が凄まじく

死んでしまう可能性もあるからだ。

そのような事が起きないようにキバットは家に置いておきたいのだが、キバット自身が町は危険だから自分がいないと危ないと言っている。いつも鞆の中に紛れ込んでいるのだ。

そんなことを考えながら玄関のドアを開く。

「ただいまー」

「あつ、お帰りーお兄ちゃん」

と出迎えてくれたのはメイド服を着た可愛らしい子だった。

「おうバツシャーか、そりゃあメイド服か？いいねえ。それでおかえりなさいませご主人様だったら尚更OKだったぜ？」

「うん。変な事を吹き込まないでねキバット。まあ、似合っているんじゃない？ラモン君」

そう。ラモン君だ。

ラモンちゃんでもラモンさんでも無い。彼は「男の娘」なのだ。と言うかメイド服なんていつの間にか買ってきたのだろうか？

「あ、コレ？今来ているお客さんに貰った物なんだー♪」

お客さん？……………あ、もしかしてあの人だろうか？

僕は鞆をラモン君に預け、すぐさまリビングへと向かう。

リビングの扉を開けるとそこには赤髪の柔らかな物腰をしている男性がソファに座っていた。

「やつぱりサーゼクスさんだったんですね。いつもラモン君に女の子用の服をプレゼントするのやめてもらえませんか？」

「ハハハ、済まないね。喜んでもらえているようだったから妻の服の予備を持って来たのだがメイド服は嫌いだったのかな？」

「そういう問題じゃないですよ。てか、妻の服って……」

全くこの人は……お得意様だけど色々ダメなんだよなあ。この前だってゴスロリ服をラモン君にプレゼントしていたし……。と言うかこの人は妻にメイド服着せてんのか？

「で、今日は何用で来たんですか？と言っても何しに来たかは大体分かりますが」

「うん。その通りだよ。私の妹の可愛さついてn——」

「次狼さん、力さ——。お客さんが帰りますよ——」

「冗談だよ冗談。もちろん受け取りに来たよ」

「やれやれ全く……」

そう言いながら僕はすぐ側に置いてあったケースをテーブルの上にそつと置く。そ

してサーゼクスさんにもしつかりと見えるようにロックを解除しケースを開き中身を見せる。

「しつかりと直しましたよ。一応確認してください。それにしても中々いいバイオリンですね」

そう、バイオリンだ。

僕は転生した後、音楽に多少興味があつた為なのか物凄く音楽に夢中になつてしまい殆どの楽器の仕組みや使い方を僅か小学生五年生で理解してしまつたのだ。

おそらくそこら辺は神様が色々と自分の才能を弄り回した結果なのだと思う。それでもなければこうやってバイオリンを修理したりできないのだ。

ちなみに一からバイオリンを作ることも出来るがここまで本編に似せなくてもいいと思う。

「フッフ、そうだろうか？少々、力んでしまつて妻にバレないように頼んだが僅か一日で直すとは流石だよ」

「いや、そんなことより気になつたんですがどうやったら1/3が消滅してるんですか？？？なんか空間ごと削られた感じだつたんでビックリしましたよ!!!」

「色々とおつたんだよ。それじゃあ今回の修理費用はこれくらいで良いかな？」

サーゼクスさんは僕の前に分厚い封筒を置く。

.....

とにかく中を覗いてみる。

そして、すぐさま封筒をサーゼクスさんに返す。

「どうしたんだい？これは私のささやかな感謝の気持ちさ。受け取ってくれないか？」

「いや、いいですから!!!なんか覗いた瞬間、諭吉という諭吉がビッシリ入っててヤバイですから!!!受け取れませんから!!!というか何ですかコレ!20万!?!20枚の諭吉さんがチラッと見えた!」

「100万じゃ足りなかったかな？」

「やめて下さい!!受け取れませんから!!!せめて2、3万でお願いします!」

僕は何度も何度も頭を下げた。物凄く怖かったからだ。調子乗って始めた楽器の修理でそこまでの金額を渡されたとなると後々で呪われそうなイメージがあるからだ。

というかマジで勘弁して下さい。高校生（心は大人）の僕はそんな大金を受け取る度胸なんてありません。

「……やれやれ、仕方ない。それじゃあ少し金額を減らしておくよ」

とサーゼクスさんは封筒から何十枚もの諭吉を抜き取る。

「それじゃあ私はこれで失礼するよ。次もまたよろしく頼むよ」

「は、はい……ラモン君、サーゼクスさんを玄関までに連れて行くのお願い」

「はい」

ラモン君は元気よく返事をする。トタトタと玄関の方へと走って行きサーゼクスさんは笑いながらついて行く。

あー、物凄く疲れた。マジで疲れた。

そんな僕の元にキバットがパタパタと羽を動かしながらやって来る。

「お前いつも疲れてんな。お得意様なんだろう？」

「そうだけどさ、あんな人相手にするといつも疲れるに決まってるよ」

マジで色々吹っ飛んでいるからなあの人。これじゃあ奥さんも苦労しているんだろうなあ。

そもそもサーゼクスさんの奥さんってどんな人なんだろう……

「て言うか次狼さんと力さん呼んだのに来てないんだけど……もしかして出かけてる？」

「ん？ああ。ガルルはメイド喫茶に、ドツガは焼き芋の屋台を追いかけてる筈だぜ？」
「え？何やってんのあの二人……じゃなかった二匹は」

もしかしてサーゼクスさんがメイド服持ってきたのって、次狼さんの所為なのか？

何やってんだよ誇り高きウルフェン族の生き残り……

と僕が心底呆れているとキバットがテーブルの上に降り現金の入った封筒をガサゴ

ソと漁っている。

「ぐへへへへ儲かりましたねえ、莉紅の旦那ア。これだからこの商売はやめられねえんだよなあ。」

時々キバツトが中の人そのまんまになる気がする。

何というか坂○銀時っぽい感じがしてならない。基本的にキバツトはいいヤツだが、時々イラツとするような声を出すのだ。

…いや、時々じゃなくてしよつちゆうだな。

「……おおう、あの兄ちゃんすげえ金額置いていきやがったな。これなら半年は生きていけんじゃねえか？」

「え？」

そう言いながら封筒をキバツトから奪うように取り、中身をすぐさま確認する。

およそ、諭吉の枚数80枚!!! 圧倒的金額ツ!!!

「わ—————ツ!!!」

Bannon!!!

あまりの金額に驚いてしまったのか80万の入った封筒を床に叩きつけてしまう。

「おいしいおいしいおいしい!!!折角の大金を何してやがんだ!!!なに害虫扱いするかの様に叩きつけてんだ!!!?」

「そうじゃないよ!!!中を見たら無数の諭吉さんと目が合つてびつくりしたんだよ!!!高校生（心は既に大人）の未熟なハートに悪いんだよ!!!よりにもよつてなんで4/5置いていくの?!?ラモーン!!ちよつとラモンくーん!!!」

と僕がラモン君を大急ぎで呼ぶとまるでニンジャの如く、目にも留まらぬ速さでやつて来る。

「どうしたのお兄ちゃん?」

「お兄ちゃん言うのやめなさい。サーゼクスさんにコレ（80万）返してきて」

「オイオイ!莉紅?!?お前気でも狂ったんじゃないかねーのか!何いかにも当然のように金を返そうとしてんだよ!」

「いや、だつてこんな大金持つっていると逆に呪われそうで怖いんだよ!」

ガタガタと震えながら僕は答える。マジでやめてくれ。チキンの僕には荷が重すぎる。

「あ、そういえば、さっきの人からお兄ちゃん宛に手紙貰つたよ?」

「え、僕に?あとお兄ちゃんと呼ぶのをやめなさい」

僕はラモン君から手紙を受け取ると、おもむろに手紙に書いてある内容をキバットと

ラモン君にも聞こえるように読み出す。

~~~~~

東崎君へ。

この手紙を読んでいる頃にはきつと封筒の中身にビックリして可愛い妹君を呼んで僕にお金を全額返そうとしているだろう。

とりあえずそのお金は返してもらわないので、残しておいた金額を使うかどうかは学生である君の自由だよ？

ここから本題だけど実は息子の為に世界で一つだけのバイオリンを作って欲しい。

君の実力ならば世界一のバイオリンなんて簡単だろう？

80万は先程の修理費用も含めた前金と思ってくれ。

それでは君の実力に期待しているよ。

【最高のバイオリンを作ってくれ】

→何故か物凄く強調されている。

~~~~~

「グツサリと釘を刺されたあああああああああああああああああッ!!!」

「わあ! 凄いよ! これが前金なら物凄い額のお金貰えるんじゃないの?」

「オイオイオイオイ、莉紅ウゝものすっごい期待されてんじゃねえか? こりやあ答えなきや駄目だなあゝ(ゲスイ声で)」

「あああああああああああああああああああああッ! 物凄いプレッシャーが襲いかかって来る! 手紙から物凄いプレッシャーがガンガン襲いかかって来る!」

あの人ヤバイって! そして手の平で踊らされた感がして物凄く腹が立つ!

「にしても、ずっと前から感じていたが………あの兄ちゃん只者じゃねえな。莉紅もそ

う思うだろ?」

「当たり前だよ。あんな物凄いお金とプレツシャーをPONと置いて来る人なんて只者じゃないよ」

「そうじゃねーよ!!!確かにそこもそうだがアイツの髪の毛!!!そこ注目しろ!」

あの髪の毛は普通のヤツじゃねえ。それに、俺の予想が正しければアイツは……」

キバットはそこまで言うと、何かを考えるように口を濁す。

……全く、キバットはしょうがないんだから。僕はそんな様子のキバットに対して溜息をつく。

「キバット………そのくらい僕でも分かるよ。普通なら気付かないと思うけどさ」

「な、莉紅、お前!気付いてんのか!」

キバットは激しい動揺を見せる。まるで何かに怯えているようにも見える。

「だってあんな赤い髪の人、普通じゃないよ」

「そ、そうか………だ、だったら!」

「うん。」

「ふわあ、眠……………」

翌日の朝。

キバットに散々噛みつかれ、やや気怠さが残っている東崎は眠そうに通学路を歩いている。

ちなみに今回キバットは鞆に入っておらず家でお留守番をしている。

「今日のうちに材料を揃えておかないと…あ、学校でいらぬ木材があつたつけ？……………そうだ。旧校舎の壁とかを使おう」

眠いからなのか、東崎はやや思考がおかしくなっている。終いにはそうだチエーンソー買ってこよう。と言う始末だ。

「勝手に校舎を破壊しようとしないうでください」

「ん、あ？……………あ、搭城さん？」

東崎は急に聞こえてきた声の場所を辿り、すぐ側に後輩である【搭城小猫^{とつじょうこねこ}】さんがいたのだ。

「いつの間に……………いやさ旧校舎って全然使われていないから、ちよつとくらいイイかなって」

「よくありません。そもそも破壊すると言う思考がおかしいと思います」

「で、ですよね……………」

東崎はガツクリと項垂れてしまう。余程ショックだったのか物凄く暗いオーラを出している。

「……………もし良かったら美味しいお菓子の店を教えてください」

「え？ 本当に!?？」

先程までの暗い雰囲気は嘘のようにパアアアと明るくなる東崎。実はこの二人同じ甘党だったりする。和気藹々とお菓子の話で盛り上がる二人。しかしそんな二人の後ろから二つの影がやって来る。

ババツ

その二つの影はそれぞれ東崎を挟む形で前方と後方に位置する。

東崎はそんな二つの影に見覚えがあった。それぞれ特徴を持つメガネと坊主頭。エロ三人組であり、イツセーと東崎の友達でもある元浜と松田だ。

「あれ、二人共どうして——」

「クロスボンブーツ!!!」

「え、なん d ————— グフツ!!?」

——ドゴオツ!!!

元浜と松田のコンビネーション技を喰らい地に伏せた東崎。しかしまだ二人のターンは終わっていないかった。

倒れている東崎に追撃をかけるように二人は畳み掛ける。

「東崎貴様ア!!! 学園のマスコットである搭城小猫ちゃんとなに仲良さげに会話したんだア!!!」

「許すまじ!! 何という、けしか r 羨ましいことを!!!」

「…い、いやだつて…実際、仲は良い方だと…思うけど?…それにこの前だつて…一緒に同じ店に行ったことだったあるし……」

しかし東崎のその一言が二人の怒りの炎に油を注いだ。

「死ねえ!!!」

ドゴオツ!!!

「直球!!??」

嫉妬の炎に燃える元浜と松田のボディブローが東崎の腹部にヒットする。

「……それでは失礼します」

小猫はそんな二人を呆れたようにジト目で、いや、いつも通りの目で見ながら一言だけ言うとそのまま駒王学園へと歩いていく。

すると搭城小猫と入れ違いになるように兵藤一誠が通学路を歩いて来る。なにやら鼻の穴を膨らませ目をキラキラと輝かせている。

「おお！同土イツセーよ！今裏切り者の東崎に制裁を加えているところだ！」
「お前も一発殴っておくがいい」

元浜と松田はダウンしている東崎に関節技をかけたままイツセーを誘う。ちなみに東崎は先程から地面をバンバン叩きギブアップのサインを示しているが無視されている。

「ハア……全く、これだから非リア充共は」

すると余裕の表情を見せるかのように一誠はやれやれとポーズをとる。

「なんだと！それはどういう意味だ!!」

「その通りだ！その発言は完全にブーメランになって突き刺さるぞ！」

「い、いやそんな事より早く関節技解いてくれないかな……」

一誠はフツとカッコつけるように笑ったと思うとチラリと後ろへと視線を向ける。

そこには長い黒髪をした学生服を着た女の子がいた。

「突然だけど紹介するぜ。俺の彼女の【天野夕麻】あまの ゆうまちゃんだ」

——ピシリ

瞬間、その場にいた三人は時が止まったような感覚に陥った。

2話 通り魔にご用心

なんだコレは幻術か!??.....イヤ幻術じゃない!.....イヤ.....幻術か?また幻術なのか!??.....いや幻術か?

——なんだコレは
!!!???

ざわ ざわざわ ざわ

三人は目の前の光景に混乱していた。

あの兵藤一誠に彼女ができた。そんな天変地異の出来事を目の当たりにした三人は S A N チェックのお時間です。

東崎 S A N チェック 0 / 1 d 6 ↓ 成功

元浜 S A N チェック 1 / 1 d 6 ↓ 失敗 S A N 値 5 減少 一時的狂気『気絶ある

いは金切り声の発作』

松田 S A N チェック 1 / 1 d 6 ↓ 失敗 S A N 値 6 減少 一時的狂気『肉体的な

「デート……………デートか……………よし！わかった!!!俺は必ず夕麻ちゃんをデートに誘ってみせる!!!」

イツセーはいつになく張り切っている様子だ。そしてしばらくすると表情はいつも通りのエロい事を考えている顔となった。

東崎は「あー、いつも通りで安心した」と安堵する。

「それじゃあまた学校でな、行こう夕麻ちゃん」

「はい、それでは」

「うん。今後ともイツセー君をよろしくね」

イツセーと夕麻はそのまま手を繋いだ状態で通学路を走っていく。その姿はまさに学園で青春のアレだ。

東崎は未だに「あああああ」と叫んでいる元浜と松田の二人を見る。

∨そつとしておこう

東崎はあえて何も言わずその場を立ち去ったのだった。

「あ、搭城さんから美味しいお菓子の店聞いてなかった」

そして美味しいお菓子の店を聞けなかった事を悔やんだのだった。

~~~~風呂場

サービスシーンかと思った？残念だったなあ東崎の入浴シーンだよ！

東崎は湯船に浸かり、キバットはお湯が入った桶に浸かってまるでゲゲゲの親子のような構図となっている。

~~~~♪」

「おっ？随分とご機嫌じゃねえか。なんかいい事あったか？」

「うん。今日は搭城さんから美味しいお菓子の店を教えてもらったし、それにイツセー君に彼女ができたんだよ」

「へえ〜……………ファッ

!!!??」

ザブンツ!!!

するとキバットは驚愕の表情を見せ、桶から湯船へと落ちてしまう。

ブクブクと泡が出てしばらく経つと湯船からキバットが飛んで出てくる。

「ぶっはっ!!ゲホッゲホッ!!う、嘘だろ?!?あのイツセーがか?!?冗談はやめてくれ!!!」

「嘘じゃないよ。天野夕麻さんって名前でき、黒髪のロングヘアの綺麗な子なんだよ」

「オイオイオイ、天地がひっくり返っても起きる事じゃねえだろソレ……………」

キバットは再び桶の中の湯へ浸かる。しばらく温かい風呂で癒されていると「あつー!」とキバットが突然叫ぶ

「まさかだと思うが……………イツセーの中にあるヤツを狙ってたんのか?!?」

「どう言う事?」

キバットがうむむむと唸り何か言うのを躊躇っているのを東崎は感じる。するとキバットは意を決したように口を開く。

「仕方ねえ、正直話すぜ。いいか、イツセーの中にはな、ドラゴン”が宿ってたんだ!!」

「うん。イツセー君が前、『俺のマグナム♂はドラゴン級だ』って言っていたよ」

「そうそう、それで子作りが捗——^{!!!!}違げえよ!!^{!!}そう言う意味のドラゴンじゃねえ!!^{!!}」
 キバットはウガーツと叫ぶ。風呂場なのか声が反響し、東崎は思わず耳を塞ぐ。

「つたく……人間には稀にセイクリッド・ギア「神器」つてのが宿るんだよ」

「神器？」

「そう。神器つてのは特殊能力が使える力、又はアイテムだ。種類は色々あるが中にはドラゴンを閉じ込めた神器も存在するんだ」

キバットの説明を受けた東崎は「本当に異世界なんだなあ」と呟く。自分が前世で暮らしていた世界と瓜二つ、いやほぼ同じの世界じゃないのだと東崎は改めて実感したのだ。

「もしかすると、それに関係してくんじゃねえのかって思ったんだよ」

キバットは眼を怪しく光らせる。少なくともキバットは東崎の友人であるイツセーを心配しているのだ。

もしかしたらソレを狙ってイツセーの身に何かが起こるのではないかと推測したのだ。

「いや、流星に無いでしょキバット」

ソレをバツサリと切られる。キバットはやれやれと言いながら再び風呂に癒される。「ま、お前が言うんなら仕方無いけどよ」

こんな状態のキバットを見るともしかしたら東崎の優しさに影響されているのかもしれない。



ある日の駒王学園。

女子生徒の比率がやけに高い駒王学園では色々と有名な生徒が存在していた。

東崎はいつも通り自分の教室へと向かっていた。

「ううむ……………神器か……………」

東崎は色々と悩んでいた事があった。おそらくこの前キバットと話していたイツセーの事についてだろう。

本格的に異世界なのだとわかり東崎も悩み始めたのだろう。

「バイオリンの材料にでもなるのかな……………」

あ、いや違った。コイツ全然そんな事考えてねえや。

東崎の頭の中はバイオリンの制作についていっぱいなのだろう。神器の事は全く頭の中に入っていないようだった。そもそも覚えているかどうかとも怪しいところだ。

へキヤー！キヤー！キヤアアアアアアアアアアキバクンヨーーツ！！

女子生徒達の黄色い声が後ろの方から聞こえてくる。

「あーらら、王子様のご到着だぜ」

鞆からキバットが少しだけ顔を覗かせる。周りの生徒から見えないように東崎は自分の身体を壁にする。

そして女子生徒達の声が聞こえる方は向くとそこには金髪イケメンの泣き黒子を持った男子生徒が歩いていていた。

「おはよう木場君」

「やあ、おはよう東崎君」

彼の名前は【木場^{きば} 祐斗^{ゆうと}】

才色兼備文武両道のイケメンであり、彼が通れば女子生徒達は黄色い声を上げ、彼が口を開けば女子生徒達は黄色い声を上げる。

まさにイケメンを体で表したような存在であり男子生徒達の目の敵である。

「今日もいい天気だね」

「へキヤー！東崎クンと木場クンがハナシテルワ!!」

「うん、そうだね。どちらかと言うと僕は晴れている昼よりかは夜の方が好きかな？何という月が照らしてくれる感じがいいんだよね」

「へヨ、夜デスツテ!!?コレハ、ハカドルワ！」

「奇遇だね。僕も夜の方が好きなんだよ」

「へツシヤア!!キマシタワーーー!!」

さつきから外野がうるさいが東崎は敢えて無視するかのようになり、いや存在しないように振る舞う。木場も同じだろう。

二人はクラスが一緒というか訳でも無いので木場は「それじゃあね」と言った後、自分のクラスへ向かって行く。

「いやあ、夜が捗るってよ。こりゃあ夜のオカズは決定されてしまったな」

「くそっとしておけ」

キバットにからかわれながら東崎は自身の教室へと歩いて行く。すると反対方向の廊下から三年生の生徒が歩いてくる。全員女子生徒だ。

一人は赤というより紅の長い髪の毛をたなびかせ歩いている美人。

もう二人は黒い髪をしているが、一人は黒い髪を伸ばしポニーテールにしている大和撫子と呼ぶのに相応しい美人。

片方は黒髪のショートヘアで眼鏡をかけている知的な美人だ。

結果 全員美人である。

「おつ、綺麗なねーちゃん達じゃねえか。いつ見ても飽きねえ容姿してんなあオイ」

「うん、そうだね。それにもはやアレは“人外”レベルだし」

「おまつ、気付いてんのか………!!」

キバットの声から察するに明らかに動揺しているのが分かるだろう。おそらく東崎の人外と言う言葉に反応している。

「うん。全員少なくともAPP20はありそうだし」

APPⅡ容姿

人間の限界APPは18である。

「あー、うん。知っていたよ。お前がかなりの能天気だつて事をな。チクショー……」

東崎はキバットが何やら元気がない事に対し気をかけながら自分の席に座る。すると、遅れてイツセーが来たので挨拶を交わす事にする。

「おはよう。イツセー君」

「ああ、おはよう……………」

「どうしたの？なんか元気無いみたいだけど？」

何故か元気が無い様子のイツセーに対し東崎は心配する。イツセーは苦虫を潰した表情をしながら口を開く。

「あのさ夕麻ちゃん……………って流石にお前も知らねえよな……………」

「……………ああ、そう言えば夕麻ちゃんとのデートどうなったの？」

東崎が質問するとイツセーは目を大きく見開きガツと東崎に詰め寄る。

「覚えてんのか！夕麻ちゃんのこと!!」

「え、ええ？何が？覚えてるも何もついこの間紹介してくれたばかりじゃん」

イツセーはハツと我に返ると「わりい」と東崎に謝る。先程から黙ったり詰め寄ったりなどいつもと様子が違うイツセーに東崎は心配になり、話しかける。

「一体どうしたの？何かあったの？」

「……………実は……………」

とイツセーが話しかけた瞬間、ガララツと教室の扉が開く音が聞こえる。時間を確認するともうHRの時間だという事に東崎は気づく。

そして担任である若い男性の先生が教卓につく。

「お前ら、さっさと席につけ……今日は珍しい事もあるんだな。兵藤のヤツがいつになくクールだとは……明日は隕石でも降るんじゃないのか？」

「門矢先生！マジでやめてください！ソレ洒落になっていません！」

「その通りですよ！明日にもなればイツセーは元の変態に戻ります！」

「成る程な、大体分かった」

「お前ら俺をなんだと思ってるんだ!!!」

東崎は思ったよりもイツセーが元気そうだったので一安心した。



くくく 昼休み

イツセーと東崎は二人で先程の会話の続きをする事になった。

「えつと、つまり夕麻さんに殺されたと思つたら生きてて皆に話を聞いたら夕麻さんの事を誰も知らない……………」

「そうなんだよ!!信じられないかもしれないけど本当だ!!」

東崎はうーむと唸り考える。

にわかに信じられないことだ。しかし皆が知らないと言う事は無いだろう。

イツセーが夕麻と言う彼女ができた日は駒王学園は一時期、世界が終わるくやらアルマゲドンが起こるくやらとんでもない混乱を巻き起こしたのだから。

すると東崎はある一つの結論に至った。

「イツセー君……………大体分かったよ」

「な、なんだよ。門矢先生みたいな台詞言つて……………」

イツセーは汗を掻きながら東崎の言葉に耳を傾ける。

「多分、イツセー君は夕麻ちゃんにフラれたんだと思う」

「は、はあ?何言つて……………」

「……………多分だけどさ夕麻さんにフラれたショックで殺されるイメージの夢でも見たんじゃないの?」

「え？ゆ、夢なのか？で、でも夕麻ちゃんの事を皆が覚えていないのは!?？」

「……………皆、気を遣ってくれてるんだよ。イツセー君のトラウマを扶らない為にも……………」

「……………えつと……………夕麻ちゃんの情報が無いのは……………」

「察しなよ……………皆、イツセー君の為に夕麻さんの事を引きずらないように色々やってくれたんだよ」

すると何故だろうか、イツセーの目元に涙が沢山溢れ出ており、釣られるように泣きそうになった東崎は目頭を押さえている。

「……………」

「……………今度、お菓子の詰め合わせでもプレゼントするよ」

「……………ありがとう」

二人は涙を流しながらこの会話をやめる事にした。これ以上話せば精神的に立ち直れなくなると察したのだった。



「はあ……………本当にアレは夢だったのかな……………」

俺、兵藤一誠は駒王学園から家に帰っているところだ。だが、俺の頭の中はモヤがかかったようにスツキリしなかった。

天野夕麻ちゃん。東崎が言うにはフラれたショックで記憶が曖昧なんだろうと言っていた。

……………本当にそうなのか？夕麻ちゃんに殺されるイメージ、アレは夢でも何でも無い。本当に起こった事なのだと思う。

「……………此処は！」

気付くと俺は見覚えのある場所に足を運んでいた。そこは公園の噴水前。

夕麻ちゃんに殺された場所……………。

「ハハハ、俺いつまで引きずってんだろうなあ……………」

あれ？おかしいなあ。目からなんか熱いものが……………何だろう？俺の性欲が溢れ出てんのかな？

それにしても、なんだか今日は目がハツキリとするな。不思議と力も湧いてくるし……………風の音も不気味に聞き取れる。

………おかしい。

おかしいぞ?どうなっているんだ俺の体。最近何故か夜になると体の奥底から何か湧き上がってくる。

………性欲じゃないよな?

「ほう、これは数奇なものだ。こんな場所で貴殿のような存在と出会うとはな」

——ゾクリ

振り向くとそこには帽子を深く被りコートを見に包んだ男性がいた。

なんだコイツは?いつの間に背後にいたんだ?いや、それよりもなんだこの嫌悪感は

!??

コイツを見てみると、よく分からないけど嫌な予感がする！

「逃げ腰か？主は誰だ？」

やばい

やばい

やばい

やばい

やばい！

やばいッ!!

やばすぎるッ!!!

俺はとにかく逃げる。

アイツと関わってはいけないと俺の体が叫んでいる！俺はとにかく走る。とにかく家まで走らないと！

「逃すと思うか？」

男はカラスのような黒い翼を広げながら俺の前に立つ。だが、それ以上に空中に散っている黒い羽が俺の記憶を刺激する。

「この羽……あの時の夕麻ちゃんと同じ……?!?」

「主の気配も無い。やはり『はぐれ』か。なら殺しても問題はあるまい」
すると男はニヤリと笑う。

「オイオイオイ、この展開どつかで見たことある!ガッツリと最近見たことあるぞ?!?
死ぬがいい」

男はそう言いながら手から光る槍を形成した。

「や、やっぱり槍来たー?!?」

俺はとにかく逃げる。このままじゃあ本当に殺される。そう確信したのだ。

——ドスツ!!!

だが、男が放った槍はそのまま俺の脚に突き刺さった。そして俺の脚に鋭い痛みが走る。

「ぐあああああああああああああああッ!!!」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!

脚の内側から焼くような鋭く熱い痛みが走る。その痛みは脚の感覚と力を奪い、もはや俺は動けない状態になってしまった。

槍を引き抜こうと考えたが、槍に触れた瞬間焼けるような熱さを感じた。

「ぐっ……………何なんだよ……………コレ……………」

「ほう外したか、まあいい。次はひと思いに楽にしてやろう」

俺はこのまま訳も分からず殺されてしまうのだろうか？俺はまだ女性の胸も裸体も見ないまま死んでしまうのだろうか？

東崎からお菓子の詰め合わせを貰わず死んでしまうのだろうか。

ハハハ……………悪いな東崎。

俺、先にあの世で待ってるわ……………。

「どうやら改めて己の死を受け入れたらしいな。ならば——

死ぬg
┆
┆

ドゴオツ
!!!!!!!

「グボオア
!!!?」

ザパアン
!!!

「……………え？」

死にそうになった間際に俺が見たのは謎の赤いバイクに撥ねられ錐揉み回転しながら

ら噴水に突っ込んだ男の姿だった。

「……………え？な、何が」

混乱している俺の目に映ったのは赤いバイクに跨り、血のような赤い胸部と体の至る箇所に拘束具のような鎖と鎧をつけた黄色い複眼の、まるでコウモリのような男だった。

「え？えつと……………」

『忘れて欲しい』

コウモリのような男は仮面越しに喋る。その口調は穏やかであるがどこか危険を感じさせるような声だった。

『先程見たことは忘れてくれ』

そう言うときコウモリのような男はバイクを走らせていく。まるで嵐の如く過ぎ去つ

ていった。ソイツはまるで俺を守ってくれたかのようにも見えた。

すると、俺の背後から謎の赤い光と共に紅い髪の毛をたなびかせた見覚えのある美しい人が現れる。

「怪我をしているようだけど大丈夫かしら？」

俺はその人を見て安堵すると共に全身の力が抜けるように倒れる。そして最後に目にしたものは

「く……黒……」

俺はそのまま意識を手放した。

3話 通り魔の真実

カアカアとカラスが鳴き、日が傾き空がオレンジ色に染まる時間帯。東崎莉紅は学校が終わり帰路についていた。

友人の”祝！失恋”で何故かこちらも色々と精神的に辛かった為か東崎の顔には疲れが見えていた。

「あ、あ、ーただいま……………」

「おう、帰ってきたか。随分と疲れているみたいだな？」

すると出迎えて来てくれたのはライダースーツとジーパン、サングラスと如何にもワイルドそうな男性だ。

「ああ、次狼さん。今日もメイド喫茶？飽きないね」

「違う。今日は桃園モモのグッズを買いに行つて来たただけだ」

「なんだ。いつもの次狼さんか」

東崎は何故か納得したような表情だ。そんな中キバットは二人のやり取りに呆れている。

「つたく、俺達が学校に行つてる間コイツらはマジで何やってんだよ……………」

「まあまあキバット。これくらいは大丈夫だよ」

「靴くらいは運んでやる。お前はやる事をやれ」

「お、ありがとうございます！」

東崎は靴を持ってくれた次狼にお礼を言うとお靴を脱ぎ出し、そのまま走っていくように自分の部屋へと行く。キバットも遅れて東崎の自室へ向かう。

東崎が自室を開けるとそこには大きなテーブルを中心とした作業室が広がっていた。ここが東崎莉紅の部屋であり楽器の修理、製作をする為の作業部屋だ。

「よし……………」

「相変わらず散らかってんな。掃除くらいしておけつての」

キバットはそう言うと、壁に飾つてあるバイオリンのようなオブジェの中に入りコウモリらしくぶら下がる。

「どうやらこのオブジェがキバットの部屋の役割を果たしているらしい。」

東崎はテーブルの上にある工具を使い木材を削る。

バイオリンを製作する為の準備であり、バイオリンの形にしているのだ。

「にしても、全部独学とは莉紅の才能には惚れ惚れするぜ」

キバットはそう一言呟くと「クー」と息を立てながら寝てしまう。本来コウモリというのは夜行性の為なのか、それとも単に疲れていただけなのかキバットはぐつぐつと寝

ている。

東崎はキバットの寝息がまるで聞こえてないかのようにバイオリンを作るのに集中している。

しばらく作業が進むと東崎はふうと息を吐き、「出来上がったばかりのバイオリン」をその場に置く。

「……………なんか駄目だな」

と一言。

東崎は出来上がったばかりのバイオリンをそのまま天井に吊るしてある大量のバイオリンに紛れるように引っかける。

「最高のバイオリンって……………そう簡単に出来るわけ無いんだよなあ……………」

と言うと東崎はガクリと項垂れる。すると丁度良くキバットは目を覚まし、東崎の頭の上にとまる。

「オイオイ、これで何回目だよ。いい加減にしないと木材を切らしちまうぜ?」

「そう言ってもさ……………」

「つたく……………あー、アレだ。一旦気分転換しようぜ? ほらイツセーの奴にお菓子の詰め合わせプレゼントすんだろ? もう決まってるのか?」

とキバットは落ち込んでいる東崎を励ますように言う。

長い付き合いの為、話題を変えればすぐに立ち直るといふ事を知っているキバットはイツセーの事を話した。

「うん勿論だよ。前に搭城さんから教えてもらったお店でさ、あそこ閉店時間が早いから夜になる前に行かないて——」

と、東崎の言葉が途中で止まる。キバットはなんぞや？と東崎の周りをグルグルと飛んでいるが、次の瞬間

——ガタツ!!

東崎は急に立ち上がりその勢いでキバットを吹っ飛ばしてしまう。

「つで!?……何すんだよ!」

「やばい……閉店時間って……もうすぐじゃん!!」

東崎はそう言うと言と玄関へと走り出す。行つてきますと言いなながらガチャリと玄関のドアを開け、そのまま庭へ向かい意図的に隠されているようにシートが被された物の元へ駆け寄る。

シートをバサリと取るとそこには真紅に輝くバイクが設置されていた。

このバイクの名前は「マシキバー」

キバット族の工芸の匠・モトバット16世によって産み出されたという『鋼鉄の騎馬』と呼ばれるキバ専用のオートバイだ。

東崎はバイクと共に置いてあつたヘルメットを被り、エンジンを起動させる。するとキバットが遅れてやってくる。

「ハア!??まさか今から行くのか!??」

「時間が無いんだよ!明日になって『ごめん、お菓子の詰め合わせはまた今度ね☆』なんて絶対に言えないよ!!」

「いや、別に明日でもいいだろ!!」

と東崎はキバットと言い争いながらもバイクのアクセルを回し、発進させる。キバットは苛立ちながらも東崎について行く事となった。

「やばいやばいやばい!これ間に合わないかも!」

「だーかーら!明日でもいいったってんだ「変身!」……………うん?」

「だからキバット、変身だつて!」

キバットは数秒、思考が停止した。

「え、いや莉紅お前何言つてんの?頭おかしくなった?」

「いや改めて考えると高校生が暗い時間帯でバイクに乗ってるのおかしいじゃん」

「うん、それで?」

「正体がバレないように変身しよう」

「ふっざけんじゃねえぞ!!!キバを軽々しく使おうとしてんじゃねえよ!!」

東崎の言葉にキバットはツツコミを入れる。

このままではキバの初変身がまさかの買い物目的という仮面ライダーにあるまじき事態になってしまう。

頑張れキバット、お前だけが頼りだ！

「お願いだよキバット!!好きなもの沢山食べさせてあげるから!!」

「いや、んなこと言われてもだな……………」

「トマト!トマトジュースでどう?」

「え、いや……………」

「1ヶ月分!!1ヶ月分でどう!?」

……………

……………

……………

……………

.....

.....

「ガブツ!!!」

キバットが折れた!!!この人でなし!!!

まさかのトマトジュースで折れてしまったキバット。そんな事を無視するかのよう
に東崎は出現したベルトにキバットを装着する。

「変身!!!」

そして、東崎の姿はみるみる内に仮面ライダーキバへと変身したのだった。

キバとしての、ファンガイアとしての実力が発揮された状態でのバイクアクションを
駆使し狭い道路や路地をスイスイと進んで行く。

「よしっ!!!間に合う!!これなら絶対に間に合う!!」

「あーあ、俺達何やってんだか」

「あ、そうだ。確かこの公園を突っ切ればかなりの近道になるんだっけ？」

「おいおい、誰かいたら危ねえぞ？」

「大丈夫だって。流石にこんな時間に遊んでいる訳無いと思うよ？」

「まっ、確かにな」

ハハハと一人と一匹は笑いながらバイクに乗っていると公園に入った辺りだろうか何処からともなくチラシが飛んでくる。東崎はそれに気付くと体を傾け難なく回避する。

「ナイス回避!!!」

「ありがとう」

とキバットに褒められた東崎は気分を良くする。

しかし調子に乗ってしまった所為なのか、それとも飛んできたチラシを避けバランスを崩してしまった所為なのか一人と一匹は目の前にいた人物に気付かなかつた。

「どうやら改めて己の死を受け入れたらしいな。ならば死ぬg——」

ドゴオツ!!!!

(バイクがおっさんに衝突する音)

「グボオア?!?!?」

「あ」

ザパァン!!!

(おっさんが噴水に突っ込む音)

「あ」

東崎達が目にしたのは謎の中年男性が東崎が運転していたバイクに撥ねられ錐揉み回転しながら美しく噴水に突っ込んでいる姿だった。

そして東崎とキバットは汗をダラダラと流し始める。

(これってヤバイ奴だよね……………)

(ヤバい奴だな……………)

(え、えつととりあえず見ている人はいない見たいd——)

東崎達の目の前には何故か足から血を流し、混乱している状態の兵藤一誠の姿があった。そして、東崎は仮面越しに一誠に話しかける。

「え？えつと……………」

『忘れて欲しい(ものすごい低音)』

『先程見たことは忘れてくれ(念には念を入れて二回目)』

それだけを言うと東崎はバイクを走らせる。公園を抜けた後、東崎はすぐさま携帯電話を取り出し叫ぶ。

「メデイー………ック!!!」

とにかく救急車を呼ぶことにした東崎であった。

4話 変態と聖女と通り魔（犯人）

先日イツセーくんが何やら夜中に自転車を漕いでいるのを見た。

よく分からないけど「ハーレム王に俺はなる!!!」と叫びながらMAXハイテンションになっていた。

夕麻ちゃんにフラれて壊れたのか？と思ったけど、どうやら立ち直れたみたいだ。そういえば、黒い翼の生えたおっさんを轢いてしまった事件だがキバットに聞くとところによるとアレは墮天使らしくあの程度では死ぬ事はない為、大丈夫らしい。

いやあ良かった良かった。

「ねえ、天倉知ってるかしら？」

「え、どうしたの桐生さん」

と思っていると僕の元にクラスメイトの【桐生藍華】きりゆう あいかが来る。彼女は良く色々な情報を持つてくる事が多く、男女問わず仲良くしてくれる良い人格者だ。

今回は何の用だろうか？

この前は翼の生えた人間が出没するくや

白い鎧を着た不審者くやら

魔法少女コスした巨漢とか

光の巨人くなどだった。

あれ？最後のつてM78星雲出身の戦士じゃね？

「知ってるかしら？最近夜中に赤いバイクを乗り回してるコウモリ男が出没するらしいのよ」

へえー、コウモリ男か。そんな迷惑極まる輩がこの町いるのはちよつとやだなー。そんなのが本当にいたら軽蔑するわー。

.....

.....

.....

「どうしたの？頭なんか抱えて？」

「いや、なんでもないよ.....（僕だそれーっ!!）」

え、何？見ていた人いたの!?？てかヤバかった！変身していなかったら確実にアウト

だった！

いや、見られている時点でアウトだよ！

「ふーん？まあいいけど。最近物騒だからあんたも気を付けなさいな」

「う、うん」

あ、ヤバイ。全身からものすごい量の汗が……。うん。とにかく自分だという事がバレていないけどものすごくドキツとした。次、変身する時は周囲を気にしてからにしておこう。

あ、お菓子の詰め合わせ買っておくの忘れていた。

どうしよう。イツセー君立ち直っているから大丈夫だと思うけど、なんか悪いことした感じがなあ……。よし、次こそ買うとしよう。

そういうえばイツセー君がオカルト研究部に入ったって言うていたし、その記念として贈るのもいいかなあ？

「ナニイイイイイイイイイイイツ！！」

「嘘よ！！あの兵藤が！！」

「リアスお姉さまが汚れてしまうわああああ！！」

「くそう！！またか！またなのか！」

ああ、イツセー君が登校してきた感じだな。この声の反応は。

チラリと窓の外を覗くとそこには駒王学園の有名な二大お姉さまの1人である「リアス・グレモリー」がイツセー君と共に登校してきた光景が広がっていた。

夕麻さんにフラれた後、急に共に登校してきたのだから何が起こったのか良く分からなかった。

しかし、イツセー君のとある言葉によって色々察したのだ。

「なあ、女の生乳つて見たのとあるか？（無駄にイケボ）」

立ち直ったどころか、新しい女性に切り替えた。

おそらくだが先日イツセー君がハイテンションになっていたのはリアス先輩に関する事ではないか？と思っただのだ。

なんと言うか色々と納得ができた。精神的に弱ったところにリアス先輩のオーラが直撃しイツセー君は骨抜きにされてしまったのだろう。うん、僕がその立場だったら確実にリアス先輩にゾッコンになる。

だが、それと同時に噂でオカルト研究部に所属している木場君となんかアレの関係にあると言うのを耳にした事がある……………。

うん、やっぱりこの噂は聞かなかったことにしよう。あり得ない。と言うかあつてほ

しくない。

て言うかバイオリン製作もなんとかしておかないと。そもそもサーゼクスさんもいつまでに作っておけばいいのか言っていないからな。

やる事が多過ぎるんだよなあ。



「はあ……」

兵藤一誠は落ち込んでいた。彼は墮天使という存在に殺された後、悪魔であるリアス・グレモリーに命を救われ転生悪魔として蘇ったのだ。もちろんその事を東崎は知らない。

悪魔としての仕事で何度も契約を取れずにいた一誠は酷く落ち込んでおり、このままでは愛しのリアスグレモリーからの好感度が下がってしまうと思っっているからだ。

「どうすつかなあ。いつそのこと東崎に全部話して契約してもらおう!! ってのはさすがに駄目だな。アイツを巻き込むことはできねえからなあ」

一誠は東崎を悪魔に関する事に巻き込みたくないと思っており、今でも自分が悪魔だという事を黙っているのだ。

「どうかしたんですか?」

「あ、いや何でもないよ」

一誠に話しかけてきたのは金髪のシスターだ。彼女の名前はアーシア・アルジェント。先程ギャルゲーの如く出会いを果たし、目的地である協会に案内しているところだ。

「そうなんですか? 先程、東崎という言葉が出たら顔がその……少し固くなっていたので」

「え?……あ、ああその……」

一誠はアーシアの問いに頭をかきながらポツリポツリと答える。

「東崎ってのは俺の友達でさ、色々と世話になっているんだよ。色々と変わっているとこもあるけどさ」

「そうなんですか?」

一誠は「ああ」と答える。その表情は先程とは打って変わって柔らかく優しい表情だ。「なんていうか、アイツを見ているとこつちまで頑張れるっていうか、自分の力を生かして人を幸せにするようなヤツなんだ」

一誠はニツとアーシアに向かって笑う。

「だからさ、さつき見せたアーシアの癒しの力みたいに東崎も人を幸せにできるすげえ

ヤツなんだぜ！」

「凄いです！そのような素晴らしいお方と是非あつて見たいです！」

一誠とアーシアがお互い笑いながら話していると、ガサガサと何かが揺れる音が聞こえてくる。

なんだろう？と2人が音の聞こえる方へ視線を向けると

「ううむ、カタツムリ………だけじゃなくて他にも何か試してみないのかなあ？あ、カブト虫やクワガタのサナギとかいいかも！いや、待てよう？赤も必要だから………血とか使ってみようかな？あ、でも木材も最近少なくなってきたからなあ。どこかでいらなくなった木材でも無いかなあ？つと、ここら辺のミミズもいい感じだなあ」

「」

一誠は思った。なんでこんなタイミングでコイツと会ってしまったのだろうか。

せつかくいい感じに説明したのにどうしてソレをぶち壊してくるんだろうか？

するとそのガサガサと何かを漁っていた人物はこちらに気づく。

「あれ？ イッセー君こんなところで何してるの？」

「それはコッチの台詞だよ。東崎こそ何やってんだよ」

そう。変な事をしていた不審者の正体は東崎莉紅であったのだ。東崎はバックの中から謎の液体の入った瓶を取り出す。

「僕は新しいニス作りをしているんだよ。現段階よりも質の高いニスを作るために実験してるんだけど中々材料が揃わなくてさ。ところでそっちの……シスター？」

「ん？ ああ。彼女はアーシアって言ってな、教会に案内してるんだよ」

「へえ、そうなんだ。東崎莉紅です。よろしくお願ひします」

『アーシア・アルジェントと申します』

「……………」

「……………」

一誠は東崎がアーシアの言っている事が理解出来ない事と同時にとある事を気づく。悪魔はあらゆる言語を瞬時に翻訳、理解できる力を持っており転生悪魔である一誠もその一人なのだ。

しかし人間である東崎には外国人であるアーシアの言語を理解できていないのだ。

『一誠さんからとても素晴らしい方と聞いていました!』

「……………うんうん。成る程」

「あれ?」

すると一誠は2人のやりとりに違和感を覚える。

『直接会ってみてわかります。あなたは心が清らかな人ですね』

「いやいや、それほどじゃあ」

「え?わかるの? 2人ともお互いに言ってる事わかるの!?!」

一誠は言語の垣根を越えた2人のコミュニケーションに驚愕を露わにする。すると2人は一誠に一言話す。

『「いえ、何言っているのかは分かりません」』

「いや、わかんですねのかよ! え? 逆にすげえんだけど!!」

『はい、東崎さんが言っている事が言葉ではなく心で感じるんですよ』

「何というか、この人が言っている事と同時に身振り手振りするからものすごく分かりやすいんだよね」

「そ、そうなのか……………」

一誠は顔を引攀らせながら苦笑いをする。もしかしたらこの2人は色々と気が合う部分があるのだろうか? と一誠は思った。

東崎を含めた3人が話しながら歩いている内にアーシアの目的地である協会に到着した。

「案内ありがとうございます。もしよければお礼させて欲しいのですが……」

「あ、ああいや大丈夫だよ！もう暗いし！そろそろ帰らないとな東崎！」

「え？僕は大丈夫」「あ、思い出したー!!!これから俺と東崎で大切な用事があったんだった!!!それじゃ俺たちはこれで!!!」え？ちょっ?？」

一誠がここまで帰ろうとしているのは目の前にある教会が原因だ。教会は悪魔と対を成す者達の本拠地であり、もし一步でも教会に踏み込めば光の槍が飛んできてもおかしくはないのだ。

その為、アーシアや東崎に危険が及ばないように一誠は逃げるという選択肢を選んだのだ。

「で、ですがお礼は！」

「じゃあ、俺の事はイツセーって呼んでくれ！それだけでいいさ」

「はい！またお会いしましょう！イツセーさん！東崎さん！」

別れの挨拶をするアーシアに背を向けながら一誠は少々逃げるように帰路に就くのであった。

また彼女と会えるのを願って。

「……………なにこれえ？」

約1名、途中から話についていけなくなっていた。

5話 彼女の為に俺は死ぬる

「……………」

東崎莉紅はファンガイアと人間のハーフである。彼の趣味はバイオリンの製作と共にバイオリンの演奏である。

彼はキバツトバツトⅢ世と共に人間の為、世の中の魑魅魍魎、悪鬼羅刹と戦うのだ!!

「……………違うな……………」

そんな彼は今、バイオリンに塗るためのニスを作っている。グツグツと鍋の中で煮えるナニかを東崎はじっくりと見た後、溜息をつく。

そんな落ち込んだ様子の東崎の元にキバツトがパタパタと飛んでくる。

「おーい、何溜息つい————臭っ?!?——くっせツ?!?お前何を煮込んでんだよ?!?」

「うん? 昨日集めて来たものを全部混ぜて見たんだよ。そしたらいいニスがでるか——?」

「なー? と思ったんだけど……………」

「馬鹿か?!?……………つて、うわっ?!?なんだコレ?!?カタツムリにワームに……………血なのかコレ?!?うおっ! 糞はいくらなんでも駄目だろ?!?」

鍋の中にある出来上がったばかりの暗黒物質ダークマターにキバツトは顔の表情を歪ませる。

「お前アレだぞ……最近、ニス作りがヤバイ方向になりつつあるぞ?」

「……………そうか……………確かに部屋に入ってきた次狼さんも一瞬で気絶したからなあ」

「どうりであの狼が泡を吹きながら痙攣を起こしていたと思っていたらその所為かよ……………」

キバットは家臣の情け無い姿を思い出し、呆れながらバイオリンの形をしたの寝床定位置でいつも通りぐら下がる。

「そういや、聞いたぜ? 昨日は教会に行っただつてな?」

「そうだよ。と言つても教会には入らないですぐに帰っちゃったけど。にしても、なんだつたんだろあのイツセー君の焦り方……………アールシアさんにしっかりと挨拶しておきたかつたんだけどなあ……………」

「やれやれ……………いいか莉紅? 教会はな、墮天使共の住処なんだぞ? 一步でも踏み入れていたらどうなるか分かつたもんじゃねえ。それに加えてお前は一度、墮天使とキバとして接触した。唯一救いなのは後ろ不意打ちしたおかげで顔も見られてない事だな」

すると、東崎はバイオリンにニスを塗る手を止め、キバットと向き合う。

「そう言えばさ、なんでキバってバレちゃ駄目なの? 悪魔にも、墮天使にも」

「そりゃあ、キバは三大勢力に喧嘩を売ったファンガイア族の王の証でもあるからな。もしもファンガイアが生き残っていると知られたら莉紅……………お前、消されるかもしれ

ねえんだぞ?」

とキバットは莉紅を脅迫するかのように強めの口調で言う。コレは彼なりの東崎への気遣いだ。彼は良くも悪くも人を信じやすい。

だからこそ相手を疑わなければいつか彼の身に危険が迫ってしまう。そうキバットは思った。

「うーん、でもなあ………実感が湧かないと言うか何というか………まあ、何とかなるんじゃない?」

「………ハア、とにかくそのクセー物質を何とかしてくれよ?てか、そんなものニスに使うおうとしてんじゃねえよ」

「駄目なの!??!」

「当たり前だ!この馬鹿!!アレか!??!お前はあの魔王様に暗黒物質まみれのバイオリンをプレゼントする気か!??!」



「つて感じにき、上質なニスに良さげな材料を知らない？」

「うん。ていうか、それをニスにしようとしてる時点で頭おかしいんじゃないか？」

「同感つて言うか、まずマトモな材料だけ集める事をオススメするんだが……」

翌日の学校。元浜、松田の2人に相談する東崎だが、逆に頭がおかしいんじゃないか？と指摘されてしまう。

というか至極当然だろう。虫や血、ましてや排泄物を材料に使っているなんておかしいにも程があるだろう。

「そう言えばイツセー君、今日休みっぽいけど……大丈夫かな」

「もしかしたら腰痛めたーとかそういう理由で休んだんじゃないのー？」

と3人が喋っていると、桐生が近づいてくる。

「え？腰？なんで？」

「そりゃあ、綺麗な女性と一緒に登校してくるなんて……どう考えても」朝チュン
でしょ」

「あ、【朝チュン】……だと……!?？」

ガタリと元浜、松田は立ち上がる。彼等に困惑、嫉妬、激情、憎悪、殺意が湧いてく

「ち、近いつて!!え、えつと……ほら!○○番地の!」

「あ、あそこか!ありがとう!」

とウキウキした様子で東崎は自分の席に戻る。それに対して桐生は顔を赤らめ、心臓をバクバクと鳴らせていた。

そんな、目の前でドキツとするような光景を見せられた元浜と松田はと言うと

「——」

真つ白に燃え尽きていた。



「お願いします!!?行かせてください!」

兵藤一誠の声がオカルト研究部の部屋に響き渡る。

これで何度目だろうか、紅い髪の女性に何度も何度も頭を下げる。

「何度言ったら分かるの？ 駄目よ」

だが紅い髪の女性、リアス・グレモリーは何度も却下する。何故、このような事になってしまったのか、それは兵藤一誠が学校を休んでいる時の事であった。

彼はアーシア・アルジェントと再び会った。その出会いは2人にとって喜ばしい事だった。

一昨日の事である。兵藤一誠はいつも通りの悪魔の仕事をしていたのだが一誠の依頼主の家に悪魔の天敵である悪魔祓い^{エグソシスト}がいたのだ。

依頼主はその悪魔祓いに惨殺され、一誠も命の危機に陥れられた。だが、そこには悪魔祓いの神父だけでなく、シスターアーシアも居た。

殺す事に快感を覚えた悪魔祓い。 ”はぐれ悪魔祓い” と癒しの力によって追放されてしまった”異端の聖女”。

どちらも同じ追われる身となった神に仕える存在だが、アーシアは敵《悪魔》である一誠を庇った。

一誠は彼女と約束した。 ”絶対に迎えに行く” と

そして、彼等は再開し束の間の休息を楽しんだ。

だが、それを墮^{天野}天使^{クマ}は許さなかった。

天野夕麻はアーシアの癒しの力の源である神器【聖母の微笑】トワイライト・ヒーリングを求め、アーシアを連れ去ろうとした。

勿論、一誠は抵抗したが成す術無く負け、アーシアは連れ去られた。

彼は彼女を守れなかった。彼は彼女の涙を見たくなかった。

だからこそ！彼は何度も頭を自分の主人に下げる。

「何度言ったら分かるの！貴方の行動が悪魔と墮天使の關係に多大な影響を与えるのよ！」

リアス・グレモリーの言う通りだ。

現在、三大勢力はお互いに冷戦状態にある。仮に一誠が墮天使と争いを起こしてしまえば、ソレが戦争の火種になる可能性がある。

だからこそ。

「お願い……貴方には死んで欲しくないの……イツセー……」

彼女は涙目＋止目づかいで一誠にお願いをする。そして、
「~~~~~ツツ!!?!?!!」

一誠の胸に大きい2つのポヨンポヨンしたモノが押し付けられる。一誠はグググと理性をギリギリと保っている状態だ。

「……………くっ」

ソレを見ている搭城小猫はギリギリと自分の主人の大きな「たわわ」に憎しみの籠った視線を送る。

「~~~~~ツツツツ!!……………お願いします!!もしかしたら今日の儀式とやらでアシアが殺されるかもしれないです!!」

彼は耐えきつた。リアス・グレモリーの涙目、上目づかい、ボインボイン作戦を見事に破つてみせたのだ。

——ポタ…ポタ……………

(鼻から血が垂れ落ちる音)

が、彼にはかなりのダメージが入っていた模様。

「リアス、さっきの”儀式”というのは……………」

「……………ええ、調べてみる価値があるわね。一誠、私と朱乃は大事な用事が出来たから出掛けるわ」

「部長!まだ話g「イツセー、あなたに言っておく事があるわ」

「え?」

「あなたの中にある悪魔の駒の【兵士】は

【騎士】、【戦車】、【僧侶】、【女王】に比べれば弱いように見える。だけど違うわ」

一誠は唐突に悪魔へと転生を果たす為のアイテム悪魔の駒の説明をする。これは初めてはぐれ悪魔狩りをした時にオカルト研究部の部員達の戦いを実際に見て説明を受けた。

騎士は俊敏な機動力によって敵を倒す剣士タイプナイトの役割を持つ。

戦車はその防御力と圧倒的な破壊力によって敵に大きな一撃を食らわせる。

そして次に僧侶ビショップこれはまだ該当する人物を一誠は知らないが魔力に長けるタイプである。

最後に女王クイーンは機動性、攻守、魔力の3つのタイプの特性を合わせ持つ最強の駒。

その中で兵士ポーンは最弱の駒。下つ端の部類なのだと一誠は認識していた。

「兵士には他の駒には無い能力【昇格プロモーション】が存在するわ」

「昇格?」

「ええ。実際のチェスと同様に敵の陣地の最深部に赴いた時、【王キング】以外の駒に変化する事が出来るの。例えばイッサー、あなたが私の認めた敵地である【教会】の重要な所へ辿り着けば王以外の駒に変化する事が出来るのよ」

「……それって!」

「だけど、今のイッサーの力では最強の駒である女王になるのは負担が大きすぎて昇格には耐えられないでしょうね」

「小猫ちゃんと木場の力………」

「そして、もう一つ」

リアスは強調するようにイツセーに告げる。

「神器は想いの力で動き出す。想いが強ければ強いほど比例するように神器は応えてくれるわ。

最後に、ポーン キック 兵士でも王を取れる。チエスの基本よ」

そう言うと、リアスと姫島は魔法陣によって何処かへと移動して行った。

その場に残されたのは一誠、木場、塔城の3人だけだった。

「兵藤君、行くのかい？」

「ああ。止めたって無駄だからな」

「無謀だ。君1人では死ぬよ？」

「それでも、アーシアを逃がすくらい時間は稼いでやる」

木場の言葉に一誠の信念は揺らがなかった。恐らく、今のイツセーには何を言っても止まる事は無いのだろう。

——シャキン

イツセーの首筋に冷たいものが触れる。鋭く長い鉄で出来た剣。いつの間に抜いたのかわからない剣を木場は構えていた。

「感動的な台詞だ。だが、無意味だ。君一人では逃す事も出来ない」

「じゃあ、アジアを見殺しにしろってのによ!!」

激情に駆られたイツセーが剣を押し退け木場に掴み掛かる。そして木場は再び口を開く。

「僕も行こう、仲間を見殺しには出来ない」

「木場……………」

イツセーは思いがけない木場の言葉に驚愕する。

彼ならば強引にでも止めてくるだろうと思っていたが、予想よりも仲間思いの木場にイツセーは感激する。

「お前、結構いい奴だったんだ……………イケメンって顔だけしか取り柄がないただのゴミ屑野郎だと思ってた」

「ハハハ、これくらい当然のこと……………ちよつと待つて?なんか思ったよりデイスられたのは気の所為かな?」

「私も行きます」

スクツと小柄な塔城小猫が立ち上がる。

「小猫ちゃん……………」

「2人だけでは不安です。それに……………」

「それに？」

塔城はその場でボクシングの構えをする。そして

—ブオンツ!!!!

—バアンツ!!!!

—ビシユンツ!!!!

—バシユンツ!!!!

—ドオンツ!!!

音を残して、騎士^{ナイト}顔負けのラツシユを見せる。

「ちよつとだけイラついていきますから……」

「……………」

戦闘する時はなるべく塔城の前には立たないようにしようと思ったイツセーと木場の2人であった。

6話 墮天使達は犠牲になつたのだ……

「ハア〜何でウチが見張り役なんて〜」

ゴシック・アンド・ロリータ縮めてゴスロリの服を見に纏つた墮天使の1人であるミツテルトは退屈していた。

今夜は墮天使レイナーレが大事な儀式を行う日であり、悪魔や人間などの侵入者を入れない為にミツテルトは見張り役を任されていたのだ。

「様子を見に来たが……随分と退屈しているようだな？」

「確かなな。こんな裏口よりかは表口の見張りの方が退屈しないで済むと思うが？」

すると、ミツテルトの背後からコートを着込んだ男性の墮天使「ドーナシック」、ボディコンスーツを見に纏つた女性の墮天使「カラワーナ」

「なーに言つてんのドーナシック。腰痛だけで無く頭までイっちゃつたの？」

「ミツテルト……言葉に気を付けろ！アレは……うッ!?」

するとドーナシックの身体は固まり腰をさする。もの凄く痛そうなのが分かる。

「分らないかなあ……」堂々と正面から乗り込んでくる馬鹿共“なんていないっしょ。悪魔共なら裏口からコソコソと忍び込んでくるに違いないっすよ？」

「成る程。忍び込んで来た所を我々で八つ裂きにするという事か」

「フフフ……その通り。例え悪魔だろうが魔王だろうがドーナシックが言っていた謎のコウモリ男つて奴だろうとウチがこの手で始末してやるっすよ。ハーハッハッハッ!!!
ウチつて頭いいー……!!!」

~~~~~

一方その頃、堂々と正面から乗り込んで来た馬鹿共というと

「なんか蔑まれたような気がしたけど、とにかく一氣に駆け抜けるよ?」

「ああ、それにしてもすげえ悪寒だ……この中に墮天使達が、アーシアが居るのか」

「悪魔祓いもきつと……」

イツセー達は協会の正面入口にいた。そして、木場は手元に剣を呼び出すと一閃。門の鍵を破壊する。門を開けるとすぐさま3人は協会へと侵入する。

「いいかい?一番怪しいのは【聖堂】だ!墮天使や悪魔祓い達は今まで神聖視していた場所を穢す事によって自分達を追放した神を冒瀆し、それに酔いしれるんだ」



「趣味悪いなオイ!!!」

そして3人は大きな扉を開けると、そこは目的の場所である聖堂に辿り着いた。

しかし、そこには堕天使や悪魔祓いの姿は1人も見当たらない。静か過ぎるのがとても不気味だ。

しかし塔城小猫は何かの気配を察知したのかとある一点を指差す。

「あそこに誰かいます……」

——パチパチ……パチパチ……

突如として聖堂内に拍手の音が響き渡る。柱の物陰からイツセイ達が一度会った人物が出てくると全員は顔を顰めた。

神父の格好をした白髪の男。はぐれ悪魔祓いのフリードがそこに居たのだ。

「いやあ、お見事さん。そして感動的な再会だねえ〜〜〜」

「フリード!!!」

「俺としては?二度と会う悪魔はいないって事になってんだけどさ、ほら俺めちやくちや強いんで?悪魔なんて初見でチョンパなわけですよ」

すると、フリードは懐から一丁の拳銃。剣の柄を取り出す。そして見る見る内に不機嫌そうな顔になっていく。口調はアレだが明らかに殺意のある顔だ。

「お前らのおかげで俺のポリシーが傷ついたわけでしょ?ムカつくんだよねえ〜〜〜」

くクソ悪魔共が……死ねと思うわけで!! つか死ねよ!!! クソ雑魚悪魔共がよオ!!!」

「うるせえ!!! アーシアは何処へやった!!!」

「あつ、その祭壇の下に地下祭儀場に続く隠し階段がございますぞ? そこにお求めの悪魔に魅入られたクソシスターちゃんもございま〜〜〜す」

「え? 以外と……親切……なのか?」

3人は呆気なくアーシアの居場所を教えてくれたフリードに対して目を点にしてしまふ。

それに対してフリードは剣の柄から光の刃を形成する。それはまるでジエダイの有名な武器だ。

「まっ、どうせキミたちは此処で死ぬんだから教えたつていいよねえ〜〜〜?」

「随分と余裕だね」

「ふざけやがって! セイグリッド・ギア!!!」

イツセーの呼び掛けに反応したかのように左腕に赤い籠手が出現する。しかしイツセーと木場、2人の背後からゴゴゴという謎の音が聞こえる。

振り向くとそこには聖堂に設置されてある横長の椅子を持ち上げていた小猫が居た。

「潰れて」

「うおおおおおおおおおつ?!?!」

「危ねっ!!」

イツセーは小猫が投げた長椅子を避ける。それに対してフリードは光剣で長椅子を真つ二つに切る。

だが、その椅子の陰から剣を構えた木場がフリードに斬りかかる。

「ハッ!!!」

「ツテメエー!しゃらくせえッ!!!」

「パアン!パアン!パアン!パアン!パアン!」

フリードは木場の剣を防ぐと光の弾丸が込められた銃を木場に向けて発砲する。

木場は弾丸を聖堂内で縦横無尽に駆け回り躲し続ける。しかしフリードは木場の動きに慣れてきたのか徐々に光の弾丸が木場の身体を擦り始めたのだ。

「木場先輩!!!」

「カンカンカンカンカンッ!!!」

「すげえ!!!全く効いてない!これが戦車ルイックの防御力か!!!」

「……痛い」

「無理は駄目だよ?小猫ちゃん」

しかしダメージは少し入っていたのかプルプルと身体を震わせていた。イメージするならデコピンされたくらいのダメージだろう。

「ありやりや？小さい癖して以外と固いんだねえ。特に胸辺りが」  
「……………」

——バキバキバキバキイ!!!

「こ、小猫ちゃん!!!??」

「待って小猫ちゃん!!?ソレヤバイ奴だから!」

小猫は聖堂入口の扉を無理矢理外し、そのままフリードに向けて放り投げる。

だがフリードはソレを軽々と光剣で切り裂く。

「……つとーぎーんねーん！そんなもの俺にとつては——」

——ブンブンブンブンブンブンブンブンブン

長椅子、無造作に転がった像、長椅子、長椅子、扉、剥がした床、何故かそこにあつた岩、そこら中に落ちてゐるモノを小猫はフリードに向けて投げつける。

「うおおおおお!?何コレ千本ノック!?」

「貴様は罠り殺す」

「!?」

彼女から発せられるとは思えない台詞に驚くイツセーとフリードの2人。しかしフリードは途中でもう1人悪魔が足りない事に気付く。

「僕を忘れてもらつちやあ困るよ」

「つと!!!やるねえ!その機動力【騎士】<sup>ナイト</sup>か!」

「君もやるじゃないか…かなり強いよ」

何故か奇妙な友情的なモノが芽生えかけている2人。2人の剣戟はさらに激しさを増していく。

「いいねえ〜久々に心が滾るバトルだよ。んっふっふ〜ぶっ殺す!!!!」  
 「それじゃあ僕も本気を出すとしようか……!!」

すると木場の持つている剣の刀身が黒く染まっていく。そしてフリードの持つ光剣に触れた瞬間、ズルズルと光剣の刀身が木場の剣に飲み込まれていく。

「なっ、なんじゃあこりやあ?!?!」

「ホーリーレイザー光 喰 剣。光を喰らう魔剣さ」

「テメエも神器持ちかよっ!!……っつて、あ。あー……こりや駄目だ動かねえ……結構高かったんだけどナー……」

光剣が機能しなくなった瞬間、イツセーはチャンスが来たのを確信し、自身の神器に力を込める。

「動けええッ!!!」

『BOOST』

「さらに昇格!」プロモーション【戦車】!!」

「テメエ!兵士か!このッこのッ!」

パァン!パァン!

フリードはすかさずイツセーに向けて弾丸を飛ばすが、イツセーの身体は戦車の特性である圧倒的な攻撃力と防御力が追加され、更に神器の力によって2倍されている為、

光の弾丸は通用しない。

「うそーん！祓魔弾を弾くか!?？」

「フリード！テメエに教えてやるぜ！今の俺は昇格によつて力は2倍！更に神器の力によつて4倍!!」

イツセーはそのまま体勢を低くし、脚に力を込める。回転を加えるようにフリードの顎を捉える。

「そして！いつもの倍のジャンプに回転も加えて……！16倍の力だアーーーーーッッ!!!」

「ガッ!?!」

(その理論はおかしい!?!?)

イツセーは東崎に教えてもらったウォー○マン理論アツパーをフリードにおみまいする。そのままフリードは美しい放物線を描きながらガシャンと音を立てながら落下する。

「つてええええええええええッ!!ぎげんなよこのクソ悪魔がああああああッ!!」

「まだ生きていたんですね。今すぐ楽にしてあげましょう」

小猫はフリードがまだピンピンしているのを確認すると祭壇を持ち上げ、トドメを刺そうとしている。





入者が来る気配が無い。

と言うか協会から色々な音が聞こえるが、もしかしたら裏口では無く本当に表から堂々と侵入して来たのかも知れないとミッテルトは思った。

「おい、やつぱり表の方に侵入者が来ているんじゃないのか？」

「そうね、そこら辺はどうなのかしら頭のいいミッテルト？」

「うゝつ…それは………」

ドーナシークとカラワナーの質問に対してミッテルトは返答に詰まる。

ミッテルトは自信に満ちた作戦が見事に失敗した上に『失敗しちゃった♪すんませーん☆』なんて今更言える訳でも無く、もしもアツサリと侵入されたのがレイナーレにバレてしまえば、どうなるかは目に見えている。

（お、落ち着け！落ち着くのをウチー！この窮地を脱する方法は3つ！

①. レイナーレ様が儀式をすぐに終える。

②. 新しい侵入者がやって来る。

③. 現実是非情だ。この後レイナーレ様にお仕置きされる)

「さて、我々も侵入者の始末に当たるとしようか」

「そうね。ついでにミッテルトの所為で侵入を許してしまったとレイナーレ様に報告し

ましようか」

(あつ……ウチ終わった………)

ミッテルトが絶望してぐったりしつつも墮天使達がレイナーレの元へ移動しようとする

——オオオオオオオ………

「!!きつ、来た!侵入者が来たつす!!!」

「ミッテルト、あなた気の所為か喜んでないかしら?」

突如として聞こえて来た謎の音に対して喜びを見せるミッテルト。やれやれと言いつつながら光の槍を構え侵入者の迎撃に当たるカラワーナ。

その中でドーナシックだけは冷汗を掻いていた。

「ま、まさかこの音は………!!まずいッ!!逃げるぞミッテルト!カラワーナ!」

「ハア?一体どうしたって言うの?」

「奴だ………!奴が!あのコウモリ男が!赤い鉄馬を引き連れて!!来てしm——」

——ドゴオツ!!!

「ブツ!!!?!?!?!」

「ゴツ!!!?!?!?!」

「ひでぶツ!!!?!?!?!」

「あ」

墮天使三人組は赤い鉄馬マシシギバに乗ったコウモリ男キバにガツツリと轢かれた。

「……………き、キバツトオオツ!!!」

「だから言っただじゃねえか行くのはやめとけって!!!て言うかなんで変身してるんだよ  
!」

「やっぱり夜中出歩くのは不味いし……………それにもう噂になってるならいつそのこと【キバ】の状態で出歩いて良いかなって……………」

「開き直ってんじゃねえよ!!……………ってコイツら墮天使じゃねえか。あの眼鏡の嬢ちゃんと言ってたのはコイツらの羽の事かよ……………っておい、何してんだ?」

そこら中に落ちてている墮天使の羽を拾い集め始めるキバ東崎にキバットは何をしているのか尋ねる。

「え、だつて見た感じ良い色しているし……ニスの良い材料になりそうだよコレ？」

「……………あー、うんわかった。もういい。それにしてもコイツマシンキバーいきなり、別方向に動き出しやがって……墮天使に恨みでもあんのか……？」

キバットがそう言いながらキバ莉紅は満足気に羽を集め終わるとマシンキバーに跨り、再び動き出す。

次キに通バり魔バが何を仕出かすのか神のみぞ知る。

「キバ……だと……!!? レイナー様……ゴフツ……報告を……!」

## 7話 Wake up Dragon

「アーシアアアツ!!!」

兵藤一誠は叫ぶ。

木場、搭城と共にアーシアを墮天使から救うべく教会へ乗り込んだのだが目の前には磔にされた少女であるアーシアと墮天使レイナーレに大勢のはぐれ悪魔祓いの神父達が居た。

「イツセーさん……あつあああ、いあああああああああああ!!!」

「あら、感動の対面を邪魔してごめんなさいね。安心して、もうすぐで儀式は完成するわ」

アーシアの声は途中から絶叫へと変わり、すぐ隣にいるレイナーレはそれを嘲笑うかのような表情を浮かべる。

アーシアの美しい金髪と翡翠色の眼は生気を失ったかのように悲壮感が漂い、彼女が危険な状態だと言ったことが嫌にでも理解できる。

「フフフ、もうすぐよ……もうすぐでこの子の神器は私の物になるわ」

神器を抜く。

そもそも神器はそれ自体が持ち主の生命力や魂と密接に結びついている。それは即ち、持ち主の死を意味する。

「アーシアを死なせるかよ!!!」

イツセーは迷わずアーシアの元へと走るが、それを神父達が黙っている筈も無くフリードが持つていたものと同じ光剣を振りかぶる。

「邪魔をッ!」

キイン!!

「イツセー君!早く行くんだ!」

しかし、そこへ木場がイツセーを守るように光剣の攻撃を自身の剣で受け止める。

更にそこへ身体の小さな小猫が神父の懐へ飛び込み鳩尾に拳を叩き込むと神父は吹き飛ばされる。

「早く先に行ってください。ここは私達が食い止めます」

「サンキューな!皆!」

イツセーは2人にお礼を言うと、そのまま神父達の間をスルリと抜いて行きレイナーレの前へと辿り着く。

「あら、来たのね。イツセー君」

「イツセー……さん……」

「アーシアを返して貰うぞ……!!!」

『BOOST』

イツセーは左手の神器を構える。

1人の少女を助ける為に優しい悪魔は堕天使へと立ち向かう。

~~~~~

「お、この樹液もいい感じだな。中々のツヤを出せるかも……お、この葉……エキスを使えば中々……お、コツチのものいいかも」

「なあなあ、もう良いか？さっきの堕天使共は縛ったし、羽もあらかた回収し終わった。更に樹液やら落ち葉やらを拾い集めてかれこれ30分近くだ。そろそろ帰ろうぜ？」

「そう言ってもなあ。キバの状態で集めるのと人間の状態で集めるのって全然違うんだよ？キバになると五感がいつもより研ぎ澄まされるから良いニスの材料なんかを集めやすいんだよね。こんなチャンス滅多に無いから——つと！おとおおつ！この木の色合いなんかいい感じ！」

「つたく……こうなると手がつけれねえな」

気絶した墮天使達を縛った後、東崎とキバットは教会の直ぐ隣に生えている木々で材料集めをしていた。

もはや東崎は材料を集めるのが趣味なのでは無いか？と言うほど夢中になっている。更に変身したままの姿で彼は子供のようににはしゃいでいる為、他人から見ればどう見ても変質者だろう。

「さて、次は――」

――ドクン

すると、東崎はピタリと作業を止めると教会の方へと視線を向ける。

「どうした？東崎」

「なんだか……教会から……こう、ビビツと来るような何かがある気がする」

「……！成る程。ようやくお目覚めって所か？」

「お目覚めって……？」

東崎が首を傾げるとキバットはニタリと微笑む。

「まあ、そろそろだぜ【赤い龍】が目覚めるのは………んじやま、帰るとするか！」

「うーん……分かったよ」

——ドクン

そう言うと彼は歩み始める。

だが、彼は気付かない。

無意識だろうが、キバの鎧はまるで龍の目覚めに対して、笑うように、応えるように
【魔皇力】を放っている事を。

~~~~~

「はあーっ……はあーっ……」

「あら？まだ生きているの？しぶといわねえ」

「イツセーさん！」

兵藤一誠は既に満身創痍だった。

全身はズタズタにされ、着ていた服の所々は血によって赤く染まり、足元には血だまりができています。

こんな状態になつても立つていられるのは、アーシアを助けたいと言う一心で立つている。

だが、イツセーの目に光は無くブツブツと何かを呟いているだけであつた。

「アーシアを……助け……ないと……」

「ツ！もういいんです！もうやめてください！イツセーさん！」

アーシアが叫ぶ。イツセーが傷付く姿をこれ以上見たくないのだろう。

そして自分の所為で目の前にいる人が傷付くのが何よりも辛いのだろうアーシアは目に涙を浮かべている。

「どうやら限界みたいね。さて儀式をさっさと済ませましょう。安心しなさい貴方もしっかりとあの世へ送つてあげるわイツセー君」

そう言うときレイナーレはアーシアの胸に手を当てると、翡翠色の光が溢れるとアーシアは苦しそうな表情を見せ、声が漏れる。その様子をレイナーレはニヤリと笑う。

（ああ、いよいよだわ。遂に私は癒しの力を手にする！癒しの力を手に入れた私の地位は盤石となるの！ああ、シエムハザ様、アザゼル様。私はお二人の祝福を受けられるのよ……！）

遂に望んでいた力が手に入るとレイナーレは高揚感に溢れ、頬を赤らめる。

だが、その時レイナーレに連絡用の魔法陣が展開される。

「何か用かしら？ドーナシック。今忙しい所なの後にしてくれるかしら」

『レ、レイナーレ様……気を付けて下さい。ヤツが……キバがすぐそこまで………！』

「どう言う意味かしら？ドーナシック。……？ドーナシック！」

何度も呼ぶが応答が無い。

一体どうしたのだろうか？ドーナシックならミツテルトやカラワーナ達と共にいた筈だ。それなのにやられたのだろうか。

ならば一体誰に？

レイナーレは考える。そして、先程の会話を思い出す。

「そう言えば、キバって………!!!」

瞬間、謎の魔力を感じた。

レイナーレだけでは無い。その場に居た木場、搭城も、イツセーも感じた

圧倒的な魔力。まるで押し潰されるかのようなプレッシャーがその場に居た全員に襲いかかったのだ。

「この魔力は一体……………」

「分かりません。ですがとてもヤバイと言うのは分かります！」

その場の全員はとある感情に支配された。

【恐怖】

動物や人が感じる感情の一種であり、有害な事態や危険な事態に対して有効に対処することが難しいような場合に生じるものであり、生きる体験の中で必ず感じるものだ。

レイナーレは気付く。いや、気付いてしまったのだ。

——何故!?!?

——そんな馬鹿な!!?

——どうして!

— あり得ない！

— 何で!!?

— 嘘だ

— 嘘だ

— 嘘だ

— 嘘だ!!?

— 嘘だ!!?

— 嘘だ!!?

これから命を吸う化物が自分を狙って来たのだとレイナーレは思った。

死神が徐々に自分に近づいて来ているのを感じる。

「何故だ！まさか、あの種族が！ファンガイアの王」が生き残っていると言うのか！

レイナーレはアールシアから神器を抜く儀式を止める、彼女がやる事は一つ。

「悪いけど、貴方達を殺して逃げさせてもらおう」

この悪魔共を殺し、生きる事だ。

幸い、悪魔の数はたった3人。更に目の前の悪魔は満身創痍。容易に殺す事が出来る。

レイナーレは光の槍を形成すると目の前にいるイツセーに目掛けてその槍を放つ。

「バイバイ。イツセー君」

——ドスツ!!

光の槍がイツセーの腹部を貫き、イツセーは血を吐き出す。

だが、彼は倒れなかった。むしろ前へと進んでいる。

「この程度……アールシアの痛みに比べたら……ッ！」

「へえ、思ったより頑丈ね、まあ良いわ。さっさと死んで頂戴」

レイナーレは更に光の槍を放ち、イツセーの身体中に突き刺さる。全身から血が流

れ、それでも尚彼は進むが、限界が来る。

「アーシア……クソ……動けよ……」

「貴方しつこいわね。さっさと死になさいと言ってるでしょ！」

「イツセーさん！やめてください！お願いします！やめてください！」

レイナーレはトドメの一撃を放とうとしている。イツセーは全身に力が入らずもはや指すら動かせない状態だった。

これから死ぬ。その筈なのにイツセーに恐怖と言う感情は不思議と無かった。

(クソ、動かねえよチクシヨウ。せつかくアーシアを助けに来たのに、こんなのもつて……)

——ドクン

(そういや、アーシアに連れて行かないやいけないところ沢山あったな。カラオケに遊園地、ボウリングも。そうだ、ゲーセンでラッチュー君をもつと取つてあげないとなあ)

——ドクン！



（ダチも紹介しなきゃだよな。松田と元浜ってスケベだけど良いヤツなんだよな。それに桐生もからかって来るけどアーシアと良い友達になれそうだな）

——ドクン!!？

（そういや、東崎にもしつかりと紹介しねえとな。アイツってバイオリンの天才なんだ。弾くことも作ることも出来るし、アーシアと気が合うんだよな）

——ドクン!!!

「アーシアもしつかりと貴方の後を追わせてあげる。だから安心して死になさい」

レイナーレの光の槍がイツセーに向けて放たれる。

「イツセーさああああん!!!」

——バギン!!!

「なっ!!!」

だが、光の槍はイツセーには当たらなかつた。いや、イツセーがその光の槍を掴んでいたのだ。

「イツセー……さん!」

「どう言うこと?!? 何で立っていられるの?!? それに下級悪魔が光の槍を掴んでいるなんて……いや、私の光の槍にヒビを入れるなんて!」

「さあな。こつちだつて訳わかんねえよ」

『BOOST』

イツセーはボロボロの身体を無理矢理動かし、一步踏み出す。イツセーから滲み出る威圧感にレイナーレはたじろぐ。

そして虚ろだつた目はだんだんと光を取り戻して行く。

「神様、じゃダメか。やっぱ、悪魔だから魔王か? いるよな。きつと、魔王」

『BOOST』

天井を見上げ独り言のように呟く。

「俺も一応悪魔なんで頼み、聞いてもらえますかね？」

当の昔に限界を迎えた体に力を入れる。

「頼みます」

『BOOST』

少しでも体を動かそうとすれば全身を激痛が襲う。

それでも一誠は前へと進む。

「あとは何もいらない、ですから…」

拳に力を込める。

「だから、あいつを…一発殴らせてください！」

叫ぶ一誠の背中に悪魔の羽が広がった。

その姿が威圧感を放ち、レイナーレに恐怖を与える。

「う、ウソよ！体中を光が内側から焦がしてるのよ？光を緩和する能力を持たない下級悪魔が耐えられるはず…」

「ああ、痛えよ。超痛え。今にも意識がどっかに飛んでつちまいそうだよ……」

『BOOST!!』

「でもそれ以上にテメエがムカつくんだよ!!」

『EXPLOSION!!!』

イツセーの左手の籠手である神器が機械的な音声と共に変形して行く。

神器は肘を越す位までに伸張し、露出していた指も赤い装甲に覆われ、まるで龍の爪のようになる。

そして何よりも神器の宝玉から放たれる輝きが凄まじかった。その輝きは。まるで【何か】と共鳴するかのように強く溢れるような波動。

更に籠手から溢れんばかりの力がイツセーに流れ込む。

「う、嘘よ!…この波動は中級……いえ、それ以上!?? あ、あり得ないわ!…ただの龍トウワイス・クリティカルの手がどうして!??」

レイナーレは咄嗟に光の槍を投擲する。

——バギン!!!

だが、その槍はイツセーの殴りの振り払いによってアツサリと破壊される。

それを見たレイナーレの表情は青ざめる。

「そ、そんな!」

「何だよこの力……負ける気がしねえ!!!」

イツセーは限界を既に迎えている身体を無理矢理動かし、レイナーレとの距離を一気

に縮める。

「この力は……赤い龍!? それだけじゃない! これは「キバ」の——」

「吹っ飛べ!!! クソ天使!!!」

そしてイツセー、いや兵藤一誠は持てる力の全てを込めた左拳をレイナーレに叩き込む。

「ぐあああああああああああああああああッ!!!!」

レイナーレは一誠の拳を受け、斜めの直線を描きながら地下室から教会までも突き抜け、吹っ飛んで行った。

「……へっ、ざまあ見ろ……」

イツセーがそう呟くとフツと身体のがが抜けて行く。もはや限界を超えた身体だ。倒れてしまうのは無理もないだろう。するとイツセーの身体を支える者が現れる。

「お疲れ様イツセー君。まさか一人で墮天使を倒すなんてね」

「遅えよイケメン王子。相変わらず余裕な笑みを浮かべやがって……」

イツセーはいつものスマイルを浮かべる木場に毒づく。木場は苦笑いしながらイツセーをその場に座らせる。

「ごめんね。君の邪魔をするなって部長に言われたんだ」

「部長に？」

「その通りよ。あなたなら倒せると信じていたもの」

声のした方へ向くと部長であるリアスと副部長の姫島の2人がこちらに歩み寄ってくる。

「用事が済んだからここの地下へジャンプしてきたの。そしたら祐斗と小猫が大勢の神父たちと大立ち回りしてるじゃない？」

「部長のおかげで助かりました」

イツセーは部長であるリアス達が来てくれたおかげか、ホッと一息つく。

すると姫島は磔にされていたアジアの拘束を解除し、彼女は自由になる。そしてそのままアジアはイツセーに抱き着く。

「イツセーさん！大丈夫ですか！」

「あ、ああこれくらい大丈夫だって」

とイツセーは元氣そうに振る舞うが実際は既に限界を迎えているので無事ではない事が一目瞭然だ。

アーシアは神器を使いイッサーを回復させる。

「さて……後は墮天使だけ……と言いたい所だけど、皆油断しないで」

リアスの顔が先程までと打って変わって真剣な表情となる。

「上に……何かが居るわ」



教会すぐ近くにレイナーレは居た。ボロボロになりながらも彼女は壁を伝いながら歩いていったのだ。

「ふ……ふ……ふ」

レイナーレは不敵に笑う。気絶してもおかしくない程のダメージを負いながらも彼女は笑っていた。

「ハーツハツハツハ私は生きてる！生きてるわ！」

外へと吹っ飛ばされたレイナーレは口から血が出ているにも関わらず高笑いし続け

る。

これは余裕なのか、はたまた頭が狂ってしまったのか。

「ハーツハツハツ——グツ……だけど【聖母の微笑】が手に入れられなかった事だけは残念だわ。仕方ないけど今は傷をゆつくりと治すしか無いわね」

レイナーレは教会を見つめながらボロボロの翼を広げる。その表情からは喜びと同時に安堵を読み取ることができる。

ドーナシークが寄越した連絡にレイナーレが教会の外から感じた恐ろしい魔力。

「まさかだと思っけど本当にキバが居ると言うの……？いや、今はここを離れる事だけを考えましょう」

そしてドーナシークの連絡の中から出てきた単語である【キバ】。

彼女の推測通りであれば逃げるというか選択肢は正しいだろう。あの場に居れば自分分は確実に殺されていた。

他の仲間達がどうなったのかは予想がつくだろう。

そして笑みを浮かべながら彼女は呟く。

「また会いましょうイツセイ君。次こそは必ず殺してあげr——」



だがレイナーレは気付いていなかった。その恐ろしい魔力の持ち主が今、目の前に迫って来ている事を。

そしてこの世にはこんな言葉がある。

——ガシャアンツ  
!!!!!!!

「あ」

『気をつけよう!!? バイクは急に止まれない!』

## 8話 King of Vampire

俺は駒王学園2年生でハーレム王を目指す男、兵藤一誠。

ある日、天野夕麻ちゃんと言う子に告白され、幼馴染で同級生の東崎莉紅と言ういかにも名前が女っぽ…ゲフンゲフン。親友に喝を入れてもらい、デートする事となった！夕麻ちゃんとデートに夢中になっていた俺は、堕天使である夕麻ちゃん、もといレイナーレに光の槍で貫かれ、目が覚めると俺は悪魔になっていた！

俺はなんやかんやでオカルト研究部の部長であり悪魔でもあるリアス先輩の眷属となり、悪魔の仕事をしていると神器の所為で追放されたシスターのアーシアと運命的な出会いを果たして、そんなもって……ああーっもう！面倒くせえ！

とにかく俺は堕天使に捕まった友達のアーシアを救い出し、レイナーレを一発ブン殴ってやった!!!

そして俺達は外へ飛んで行ったレイナーレを探しに教会の外へ出ていた。もしアイツを逃したらまたアーシアみたいに誰かが襲われるかもしれない！

その為にも早くレイナーレを捕まえなさいけないんだ！それなのだが、アーシア以

外の皆は何やら深刻そうな顔をしている。

「どうしたんですか部長。さっきも言っていましたけど『何かがある』ってどう言う事ですか?」

「イツセー貴方はレイナーレと戦っている最中、何か感じなかったかしら?」

そう言えば、レイナーレと戦っている時なんかこう、ピリピリするようなものを感じたな。

そしてソレを感じた後、何故か不思議と力が湧いたんだよな。何でだ?

すると部長の隣にいる朱乃さんが口を開く。

「先程、他の墮天使が気絶した状態で捕縛されていました。おそらくその『何か』がやったのでしよう。墮天使達の状態を見るからに、ほぼ同時に加え一撃で墮天使達を倒したのでしよう」

な、何だそりや!?? そんなヤバイ奴が居るつてのかわ!?? 俺、墮天使に殺されかけたつてのに……。

もしも戦うとなると、俺とアーシアじゃあ敵わないかもしれない。

クソツ! 俺は足手まといかよ!

「イツセー、貴方今、自分が足手まといと思わなかったかしら? 大丈夫、貴方の左手にはブリスデッド・ギアの神器の内1つの『赤龍帝の籠手』の持ち主なのよ。神や魔王すらも屠るとされる13の神器の内1つ」

もつと自信を持ちなさい」

そ、そうだった！俺は神器はメチャクチャ強い神器を持っていたんだった！

よし！こうなったら腹をくくるしかねえ!!!

この力を使って俺は！ハーレム王になる!!!

——カチャン…カチャン…カチャン…

「「「「「  
「「「「「

俺がそう意気込んで居ると謎の音が響いて来た。金属がぶつかり合うような音に聞こえるが、不気味さを感じさせる。

まるで、死神が歩いてくるような音だ。俺達はその音が聞こえてくる方向に対して戦闘体勢となる。俺は勿論アシアの前に立つ。

その音は徐々に近付き、そして音の正体が現れる。

ソイツは赤と黒と銀の身体をしており、右脚には謎のグリーブが装着されており、満月のように輝くソイツの複眼はまるでこちらの全てが見透かされているような印象を受けてしまう。

俺はソイツを知っている。

だが、それ以上にソイツは見覚えのある長い黒髪の黒い翼を持つ女性を抱きかかえていたのだ。

「お前は……ってレイナーレ!!?」

そう、頭から血を流しているレイナーレだった。どうやら気絶している状態で死んでいるのではないようだ。

部長は俺達の前に立ち、ソイツに話しかける。

「あら、誰だか知らないけれどわざわざ墮天使を運んで来てくれてありがとう」

『……………』

「取り敢えず、その墮天使をこちらに渡して貰えないかしら?」

『……………』

す、すげえ息苦しい……………!

てか、アイツだんまり決め込んでやがる! アイツの圧倒的なプレッシャーがヤバイけど、ソレに屈しない部長もすげえ!!

だけどアイツって……………俺を助けてくれた……………

「あら、いつまでだんまりを決め込むつもりかしら。それとも——」

『この人を渡したとして、貴方達はどうするつもりだ?』

「……………」

!!?

「……………」



『僕は誰かが死ぬ事に対して悲しむ事が出来ない。それは僕自身が化け物だからだろう。命に対して何も思わないんだ』

ど、どう言う事だ？命に対して何も思わないって……何が言いたんだアイツ？

『ハッキリ言えば堕天使の1人や2人、死んだところで何も思わない』

「……………それで、何が言いたいのかしら」

『……………僕のような化け物は誰かが死ぬ事に対して何も思わない。だがその2人はこの堕天使が死んで欲しいか聞きたい』

ソイツが指差したのは俺の背後にいるアーシアと……俺エ!!??

お、俺達がどう思うのかだって!!?そんなの急に言われても……………。

すると部長はこちらに振り向く。

「イツセー、アーシア。貴方達に聞いわ、貴方達はレイナーレを許すのかしら？それとも罰を与えるか。どうするのかしら？」

部長は俺達にレイナーレをどうするか聞いてくる。レイナーレを生かすも殺すも俺達次第って事か。

俺は……………

「……………俺は、アーシアも助けられたし一発殴られたんで気が済みました……………でも、ぶつちやけで言うかと許せないです。もしレイナーレがまた誰かを襲うと思うと、気が気

でなりません」

「そう……………アーシアはどう思うのかしら」

部長は俺の言葉に対して頷くと次はアーシアの方に向き直った。

「私は……………イツセーさんが生きてくれて充分です。それに少しの間ですがお世話になったお礼です。どうかレイナーレさんを殺さないであげてくださいませんか？」

アーシア……………あんな目に遭ったのに……………。

「……………ふふ、分かったわ。朱乃」

「はい。墮天使達は魔王様の方で引き取ってもらいましょう。それに色々な事も聞かなければなりませんし」

魔王様が引き取ってくれるのか。色々あったけどこれで終わりなのかな？

……………ってアレ!?? アイツの姿が見当たらない!?? レイナーレを置いて何処に行きやがった!??

『それは安心した』

するとアイツはいつの間にか教会の屋根の上に立っていた。

アイツ！俺達が見ていない隙にあんな所に移動したのか!??

アイツはそのまま俺達に話しかけてくる。

『シスターの前で誰も殺さずに済んだ』



……アイツ?!?もしかしてアーシアを気遣ったのか?!?やっぱり良い奴なのか?!?  
俺の事も助けてくれたし。

『それに……赤龍帝が初めて恋した女性だったから……』

!!!

そう一言呟くと、アイツ……コウモリ男は何処かへと飛んで行った。

………そうか。言われてみればその通りだったな。

——バイバイ俺の初恋。

~~~~~

東崎宅前

そこにコウモリ男は周囲を見渡しながら歩いていった。そして家の庭へと入ると力が抜けるかのように尻餅をつく。

「……………ああ〜緊張した〜〜〜ツ!!」

そう一言呟くと、キバは変身を解除するの元の人間の姿へと変わる。そしてベルトに装着されていたキバットがキバ、もと東崎の周りを飛びながら話しかけてくる。

「いやあ、相変わらずお前はお人好しだねえ。良いのか？ 墮天使共を生かしたままにしてよ」

「いや、だつてさ。夕麻さん……………じゃなくて、レイナーレさんが飛び出してきたとはいえ、思いつきり轢いちやつたからなあ。て言うかア^{マシンキバー}レ^マって絶対に墮天使に対してなんか恨み持つてるよね!!?」

「ああー、そういう墮天使の総督に色々弄られたからなあ。そのせいだろ」

「組織に改造された復讐って感じ? いつからバイクがライダーの設定を引き継いだんだろ……………」

東崎は頭に手を当てながら呟く。

するとブルブルンと音を立てながら庭に赤いバイクが入ってくる。だが、そのバイクには誰も乗っておらず、1人でに動いていたのだ。

「よしよし良い子だ。もう勝手に墮天使に体当たりするのは駄目だからね」

東崎はそう言うのと、置いてあつた布のシートをマシンキバーに被せる。

「それにしても、わざわざバイクとは別に帰るつて……んな事しなくても良いだろ」

「でもさ、レイナーレさんを轢いた事がバレたらいけないから……」

「……ハア、まあいいか。とにかくもう夜も遅いし飯にしようぜ？家臣共が腹を空かせ

て待ってるぜ？」

「そうだね。今日はシチュユーにでもするかなあ」

月に照らされながら東崎とキバットは玄関へと向かつて行つた。

彼の名前は東崎莉紅。

この物語は駒王学園の生徒にしてファンガイアと人間のハーフであり、King of Vampireでもある存在が悪魔、墮天使、天使達と交わりながらキバつて行く少し変わったお話。

2章 戦闘校舎のフェニックス

9話 プロローグに繋がっているお話

とある一室に音色が響く。

なだらかな弦楽のメロディが風のように律動を生み出す。

高い音と低い音が二度、急に続き響いた。その音楽は身体の芯に突き刺さり聴いた者を魅了させる。

そして、何十分が経過しただろうか？いや、自分自身では数秒の出来事だった。

灯に照らされ、美しく輝く鱈甲色のバイオリンから出る音色はピタリと止め、弦楽器での演奏を終えた僕は「ふう…」と息を吐く。

すると周囲から拍手喝采が嵐のように捲き起こり、僕を褒め称えるいくつもの声が響く。

何故、こうなってしまったのか。

~~~~~

とある日、いつものように僕は鞆の中に入り込んだキバツトと共に学校へ行つて  
た。

だが、その日はいつもの朝とは違った。今日はどうやら転校生が来るようなのだ。ク  
ラスの皆は朝からその話題に夢中で、桐生さんや松田君、元浜君も可愛い女子が来るん  
じゃ無いかと期待しているようだった。

イツセー君と転校生についての話をしていると、門矢先生と共に見覚えのある金髪の  
女の子が教室に入つて来たのだ。

「お前らに勿体無い程、新しいクラスメイトを紹介するぞ」

「アーシア・アルジェントと申します。よろしくお願いします」

なんと、シスターである筈のアーシアさんが転校して来たのだ。

と言うか、いつの間に日本語をマスターしたのだろうか？

すると周りの生徒（主に男子）の歓声が凄かった。つーか物凄くうるさい。オーバ  
リアクション過ぎね？

「歓迎！歓迎しようぜ！」

「歓迎しよう……盛大な！」

「アーシアたあああああん!!!」

「僕と契約して魔法少女になつてよ」

いや、まあこんな二次元みたいな展開、そうそうお目にかからないかなあ。分からないくもないけどさ。

「それじゃあ東崎、お前のバイオリンの演奏で歓迎してやれ」

あれ………!!!??

いつの間にそんな話に?!? 何で僕やんなきゃならないの?!? この先生って自己中の俺様キャラだからなあ……何で教師になつたんだろ。

「どうした? お前の女つぼい名前は伊達なのか?」

ハハハ、よろしいならば戦争だな。

「おい、東崎を取り押えろ!!! 暴れだしたぞ!」

「コイツ。名前の事に関してはスツゴイ繊細なんだよ!」

うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!

HA☆NA☆SE!!! おのれ、ゆるささん!!?

リボルケインで爆発四散させてやる!!!

「東崎の所為で遅れたが授業を始めるぞ。ほらお前ら、さつさと席に着け」









放課後、旧校舎

「東崎さんの演奏素晴らしかったです！」

「そうだろ？アイツあんな才能持つてるのにソツチの道に興味が無いみたいでさ。いつも家でバイオリンばっか作ってたんだよな……」

歓迎会を終えたイツセーとアーシアは2人で廊下を歩いていた。

ちなみに東崎はいつも通り真っ直ぐ家に帰る直前、別れの挨拶の際に「夜は焼肉つしょ!!」と謎のポーズを残しハイテンションで走り去って行った。

「やあ、イツセー君。東崎君の演奏聞かせてもらったよ」

「はい、とても素晴らしかったです」

すると廊下を歩いている途中に、木場と塔城と会う。

「どうやら2人もバイオリンの演奏を聞いていた模様だ。そして扉を開けるとそこにはリアスと姫島の2人が優雅に紅茶を飲んでいた。」

「アーシア。学園生活初日はどうだったかしら？」

「はい！とても楽しめました。東崎さんのバイオリンの演奏も素晴らしかったです！」  
「あらあらフフフ。確かにあのバイオリンの技術はとても素晴らしいと思いましたわ」  
「ええ、とても美しい音色だったわ。あんな音色を出すにはバイオリンそのものを知り尽くし、何年もの鍛錬を積まなければ辿り着けないわ」

「え？？そんなに凄いですか東崎って？？」

「ええ。悪魔側にも数多く存在しない。まさに100年に一度の天才と言っても過言では無いわね」

イツセーは自分の親友がそんな才能の持ち主だとは思わず、驚愕を露わにする。

「ま、マジか……子供の頃からやけに上手だなーとは思ってたがそこまでとは……」  
「ああ、これも神による導きなのですね——ううっ!!」

するとアーシアは突如として頭を抑える。

それもその筈、彼女は既に悪魔なのだから。墮天使の一件からリアスはアーシアの魔力に長けた才能と神器、そして彼女自身の居場所を作る為に自身の眷属にならないかと招き、アーシアはそれを承諾し悪魔へ転生を果たしたのだ。

それからアーシアはイツセーの家に居候する事となったのだが、悪魔へ転生を果たしたと言う事は今まで彼女の馴染み深い聖書や、聖水、神へのお祈りは全てダメージと

なってしまうのだ。

だが、不便ながらも彼女は幸せそうに赤龍帝であるイツセーの隣で毎日を過ごしている事には変わりない。

イツセーはそんなアジアに対して苦笑いする。

(ははは……まあ、確かにアイツは色々と凄いからなあ。バイオリンのニスの為にハイテンションで山奥へ突っ込んだ事もあるし。俺の相談に乗った事もあるし。レイナーレの件だって勿論——)

突如としてイツセーの頭の中に疑問が浮かび上がる。

(あれ、待てよ？今更だけど何でアイツだけ夕麻レイナちゃんレイの事を知ってたんだ？他の皆は記憶を操作された筈なのに何故？！?)

「イツセー先輩……？」

その様子をおかしく思った塔城はイツセーに声をかけるがイツセーはブツブツと何かを呟くだけで何も答えなかつた。

「……イツセー。……イツセー!!!」

「う、うわあ?!は、はい!部長!」

「どうしたのかしら貴方らしく無い」

「え、えつと……実は……」

イツセーは東崎が墮天使の記憶操作に影響されていなかった事をリアスに打ち明けた。

その場の全員は驚愕の表情を露わにする。

「それは本当なのかしら？」

「は、はい。今まで気にも止めてなかったんすけど……」

「成る程……確かめる必要があるわね……」

そうリアスが呟くと魔法陣が展開されそこから一匹の蝙蝠が出現し、窓の外へと飛んで行く。

リアスはその蝙蝠、自身の使い魔を見送るとオカルト研究部メンバーの面々を一通り眺めた後、口を開く。

「さて……皆。はぐれ悪魔の討伐依頼が来ているわ」

そして彼女<sup>悪魔達</sup>達の夜が近づく。



オツス！俺兵藤一誠！俺達は今はぐれ悪魔を退治しにずっと昔から使われていない  
廃工場に来ているんだ。

前の俺は皆のお荷物だったけど今の俺は違う！それにアーシアの前で情け無い姿を  
見せられないからな！

よーし！ハーレム王目指して頑張るぞおおおおお!!!

「そういえばイツセイさん。あの人は誰だったんでしょうか？」

「あの人が……あのコウモリ男の野郎か」

アーシアが言ってるのは俺を窮地から救ってくれたコウモリ男のことだ。

悪魔である俺を助けたり、堕天使であるレイナーレを助けたりと目的は不明の謎の存  
在だ。

本当に何者なんだろうな？部長や木場達もあのコウモリ男見てから妙に様子がおか  
しいんだよな……………。

「さあ、着いたわよ。この工場をはぐれ悪魔が根城にしているとの情報だわ」

部長がそう言うのと俺達はすぐさまフォーメーションを組む。木場、小猫ちゃんを前衛

に、部長、朱乃さん、アーシアを後衛に、俺はサポート役として臨機応変の中衛の役割となっている。

よし、今回は部長達の為に役に立ってやるぞ!!!  
そう俺が意気込んでいると

——ドクン!!!

刹那、謎の魔力を工場内から感じる。

な、何ださっきの魔力は………!!!い、いや俺はこの魔力を知ってる!!!

「ぶ、部長……」

「分かってるわ!!皆、慎重に行きましょう………」

部長の言葉に俺を含めた全員は頷き、工場の中へと侵入する。そして、そこに居たのは蜘蛛のような、鬼のような、額には小さな女の子の顔が出ているはぐれ悪魔だった。

そしてその悪魔に対峙するのは所々に鎖を巻き付け、月のような金色の複眼が輝くコウモリ男だった。

そしてその2体の戦いは一方的なものだった。

コウモリ男は木場のスピードには劣るものの、その俊敏さを生かし飛び膝蹴り、パン

チのラツシユ、回し蹴りなどの高度な技を次々と繰り出しはぐれ悪魔を追い詰めていく。

な、何だよコレ……！あのコウモリ男、強い………!!!

はぐれ悪魔はコウモリ男の攻撃を無理矢理押し退けると攻撃に転じ、鋭い爪をコウモリ男に向かって振りかぶる。

あ、危ない!!!

そう思った俺だったがコウモリ男はその攻撃を軽々と躲し、カウンター気味にはぐれ悪魔の腹部に蹴りをお見舞いしたのだ！

「ハアツ!!!」

ズドン!!!

『グオオオオツ!!??』

まるでバズーカ砲が当たったのではないかという程の音が廃工場内に響く。

コウモリ男の蹴りによって化け物は壁に叩きつけられ、あまりの衝撃だったのか化け物の身体は壁にめり込んでいた。

『あ、が……ゴポツがつ………』

そしてはぐれ悪魔は口から血を吐き出し、そのままガクリと意識を失った。

う、嘘だろ？あんなに強いなんて……。もしもあの時、俺達がヤツと戦っていたらどうなっていたんだ？

部長達なら負けなと思うけど……。もし俺が戦っていたら確実に負けていた。

すると、俺達はコウモリ男は腰に巻き付いているベルトから何かを取り出そうとしているのに気付いた。

すると部長はその場から急に動き始めた。

「……接触して見る必要があるわね」

そう言うのと部長はそのコウモリ男に近付いて行く。

木場達も部長に着いて行くようだ。お、俺だって部長をお守りするんだ!!!

俺は兵士だけど木場だけに騎士役を勤めさせてたまるか!!

部長はコウモリ男に話しかける。

「あなた……。一体何者なの？」

「!」

こ、こつちに気付いた!!!コウモリ男の複眼がキラリと輝く。

うう、やっぱり威圧感がヤバイ!

あ、あれ？だけど何だろう？なんか懐かしいような感覚が……。

一向に喋らないコウモリ男に対して部長は苛立ち始めたのか、部長はもう一度コウモ



り男に話しかける。

「聞こえていないのかしら？もう一度言うわ……あなたは一体何者なの……？」  
「……………」

コウモリ男は黙ったままだ。本当に何を考えているのか分からねえな……。なん  
て言うかハナから俺達が眼中に無いって感じた。

するとコウモリ男は背を向け、歩き出す。

なっ、結局だんまりかよ………ってか逃げる気か!!？

「ツ!!待ちなさい!朱乃!!」

「ええ!!」

部長は朱乃さんに指示を仰ぐと朱乃さんの手から電撃が放たれる!!

流石のコウモリ男も朱乃さんの電撃を避けれまい!

そう思った矢先、コウモリ男は朱乃さんの電撃を振り払ったのだ。

アイツ電撃を防ぎやがった!?

つーか背を向いていたってのにジャストタイミングで電撃を振り払うって……どん

な反応速度したんだよ!!?

振り払われた電撃により火花が飛び散り、その場から煙が発生する。

そして煙が晴れた時にはコウモリ男の姿は消えていた。

マジで何だったんだよアイツ……。俺がそう思っていると木場が部長達に何かを伝えてるのに気付く。

「部長、これを見てください」

「これは!?」

俺達が見たのは先程のコウモリ男が倒したはぐれ悪魔だった。はぐれ悪魔は見事にダウンしており、コウモリ男の攻撃力がどれ程のものか一目瞭然だった。

「すっげえ……。これってアレがやったのか」

「イツセー君、驚くところはソコじゃ無いんだ。はぐれ悪魔じゃなくて、はぐれ悪魔がめり込んでいる壁をよく見てほしい」

ハア? はぐれ悪魔がめり込んでいる壁ってどう言う事だ?

そう思った俺はその壁を良く見ると、木場の言いたいことをすぐ理解した。隣にいるアーシアも俺と同じく驚いているだろう。

「なッ!?」

そう、化け物を中心に”蝙蝠のが翼を広げたような紋章”が壁に刻まれているのだ。

そして、その紋章からは只ならぬ力をおぞましさを感じ、俺は冷汗が止まらなかった。

「間違いない……。やっぱりアレが例の”コウモリ男”なんですよ! 部長!!!」

例のコウモリ男。

それは俺達オカルト研究部でも話題となっており最近、駒王町で都市伝説と化けていると存在であり、何やら紅いバイクを乗り回しているというものであり、俺を助けてくれた、墮天使を助けたコウモリ男と同じなのだと分かる。

部長はそんな俺の言葉を頷くと口を開く。

「ええ、その通りねイツセー。だけどアレの名前はコウモリ男なんかじゃ無いわ」「ええ?」

俺は不意にそんな声が出てしまった。そんな俺を見ながら部長は話を続ける。

「あなたを度々救って来たアレは都市伝説でコウモリ男と呼ばれている。だけど違うアレの名前は【キバ】。ファンガイアの王よ」

「ファ、ファンガイア? キバ? な、何ですかそれ」

「説明するのは難しいけど……そうねファンガイアは【滅びた筈の種族】いえ【命を喰らう化物】。【吸血鬼の真祖】でもあるかしら? でも分かりやすく言うと……【人類の天敵】ね」

人類の天敵……!!!

そう言われた俺はゴクリと唾を飲み込む。先程、俺達の前にその人類の天敵が居たと

思うとゾツとしてしまう。

「そして【キバ】と言うのはそのファンガイアの頂点に君臨する存在。L O R D<sup>君</sup><sub>主</sub>よ」

## 10話　この後、滅茶苦茶（ry）

うーん、今更ながら金貰った所為でハイテンションになったのは良くなかったよね。何というか、転生を果たして既に精神年齢は30歳を超えている筈なのに何でだろうな？ やっぱり肉体に精神年齢が引つ張られてるくるとか？

……もしかして前世ではロクに友人がいなかったからとか？  
ハツハツハツ。いやいやまさかそんな事有るはず無いよなあ。

だつて前世じゃあ友人の1人や2人……あ、あれ？ おかしいな？ 僕の記憶に該当する人物が居ない……。

「……………」

「おい、項垂れてるところ悪いがさつきと起きてくれねえか？」

「あ、うん。さつきまで辛い現実と直面していき……」

「ハア？ よく分からねえが、確かに辛い現実つてのは否定出来ねえな」

「確かに……いつの間に僕達つて此処に来ていたんだっけ？」

僕達ご歩いているこの知らない道、謎の街灯、そして廃棄されたであろう工場が目の前にあつた。

確か僕はハイテンションで家に帰ってた筈なんだけどなあ。いやあその場のノリに身を任せるってのは怖いもんだな。

「ふうん……こりやあ俺達は無意識に誘い込まれたのかも知れないな」

「無意識？」

「何らかの微弱な魔力影響され、此処に来るように自分達の足で来ちまったんだよ。つたく……金に目が眩むってのはこの事か？お得意様からのお金は受け取らないって言つてた癖に」

「しょうがないでしょうが。僕はアレだぞ？数万円とかならいざ知らず数十万円とかスケールが大き過ぎるんだよ。」

「そもそも、高校生が数十万円持つ事自体がおかしいと思うんだよ。」

「話が逸れたけどその微弱な魔力の正体って何だろうか？」

「異世界って感じだからもしかするとクトゥルフ神話系のモンスターじゃないよね（震え声）」

「いきなりシヨゴスとか出て来たら嫌なんだけど。」

「あ、でもニヤル様には会ってみたいかm——あ、やっぱりやめておこう。SAN値ピッチになる。」

「取り敢えず、その魔力？の正体を突き止めてみる？」

「おつ、乗り気か莉紅？悪くないな。俺達を誘ったていう愚者の姿を拝見させてもらおうとするか」

……なんかキバットって相変わらず僕や自分以外の種族見下してるな。

まあ、人だって人種差別するし前世で見た仮面ライダーキバだって、ファンガイアは人間を見下していたからな。

生物が他の種族を見下すって言うのは言っちゃ悪いけど当たり前的事かも知れないな……。

「んお？おい、莉紅。あそこに誰かいるぜ？」

キバットに言われ、視線を移すとそこには小さな女の子が居た。

何処にでも居そうな女の子。だがそれが逆に不気味、異常だった。普通の女の子がこんな所に居るのだろうか？更にあの女の子から魔力を感じる。

「おい莉紅、どうやらあの嬢ちゃんが俺達を此処に誘い込んだらしいぜ？」

キバットもその魔力を感じたのだろう。あの女の子が只者では無い事をすぐに理解した。

でも今は、そんな事はどうでもいいんだ。重要な事じゃない。キバットは無意識に誘い込まれたと言っていた。

僕はあの小さな女の子に魔力によってホイホイ着いて来てしまった。

何が言いたいのかと言うと――

「ああー……………成る程。僕って意識してなかったけどロリコンだったんだなあ……………」

「え？お前いきなり何言ってるの？」

「いやだつてさ、微弱な魔力を感じてあんな小さな女の子の所に行くなんて天性のロリコンだよ？ははは……………コレで僕も元浜君と同士……………いや、エロ三人組改めエロ四人組か……………」

「おいおい、元氣出せつて……………お前は誇り高きファンガイアの王！キバなんだぜ？別にお前がそんな幼女愛好家のペドフェリア変態ロリコン野郎だったとしても俺は別に気にしねえよ」

「絶対フォローするつもりないでしょソレエ!!!」

あーあ、マジでショックだよ……………。僕自身ロリコンって自覚無いんだけど……………ハッ!!  
?ま、まさか塔城さんと色々甘い物たべて行く内にロリコンと化していったと言うのか……………!!??

……………もういいや。どうにでもなあゝくれ。

俺はその小さな女の子の元へ歩いて行く。

天井のあちこちが壊れている為なのか月の光が漏れ出し神秘的な光景となっている。



ちなみにキバットにはそこら辺で待機してもらおう事にした。

だって急に喋るコウモリなんて現れたら確実に怖がるじゃん？

とりあえず、小さな女の子の元に来たものの……。

「……………」

どうしよう。どうやって女の子に声をかければ良いんだろなあ……。

——お嬢ちゃん、こんな所でどうしたんだい？こんな所にいたら危ないよ？

……なんか声を掛けているこっちの方が危ない気がする。

それじゃあ、

——グへへ、お兄さんと一緒に遊ばないか？

ハイ、アウトー。完璧に事案ですよコレ。

それじゃあ……これはどうだろうか？

——ンフツフ、お菓子好きかい？

——うん、大好きSA！

あ、頭の中に爆弾があるなコレ。ダメだ、話しかけた瞬間人生が破綻しそうだ。あー、どうしようかな……。

僕がそう悩んでいると、女の子がこちらを振り返る。

『お兄ちゃん……どうしたの……？』

女の子の方がこちらへと歩み寄ってくる。

うわあ、凄いなこの子。見ず知らずの人にすっかり話し掛けてくるなんて……。

『こんなところにいると危ないよお兄ちゃん……』

え？もしかして逆に心配されてるの？

……ええー、マジか。物凄くシヨックだ……。見た目は高校生だけど精神年齢は大人だから尚更シヨックなんだけど……。

『こんなところにいたら危ないよ……危ないよ』

あー、うん。分かった。分かったからもうやめてくれ。その言葉は傷口に塩を塗る行為と同じなんだよ。

やめて、そんな目で僕を見るのはやめて!!!

『危ないよ 危ないよ危ない』

アレ？なんか……おかしく無い？

凄くイヤーな予感がするんだけど……気の所為？

くくbgm【旧支配者のキャロル】



なんかS A N チェックされたんですけど？

と言うか何なの？こんなとんでもない神話生物（幼女）を目撃したのに、イツセー君に彼女が出来た時と同じって……………。

そう思っていると目の前の幼女（神話生物）が巨大な爪を振り回してくる。ええー、まさかの戦闘に入るパターン!?？これって”逃げる”を選択できないの？

そう僕が呑気に思っていると何処からともなくスタンバっていたコウモリのキバットがやって来る。

「オラオラツーーー!!!勝手に食おうとしてんじやねーっ!!!」

キバットは幼女（神話生物）に体当たり、キック、噛みつきをお見舞いする。アレ、結構怯んでるな？もしかして見かけによらず弱いパターン？

あれ？そう言えばキバットバットⅢ世のスペックって爪の握力は500kg、顎の力は1tだったような……………。

今更だけどキバットだけで倒せるんじゃない？この神話生物。だってキバットの顎の力って1tだよ？クウガやG3のパンチ力並だよ？

「可愛い顔して化け物とは、綺麗な花にはトゲがあるってか!?？」

うん、まあ確かにそこは否定しないよ。その化物を倒せそうなコウモリが今日の前でパタパタと飛んでるんだよなあ……………。

「まあ、いいか」

まあ、いいか。

とにかくこの幼女（神話生物）を何とかしないとだよね。  
とりあえず

「キバって行くぜ!!」

——キバって行こうか！

僕はキバットの1t顎の力によって手が噛みちぎられるんじゃないかとヒヤヒヤさせられながら、キバットの牙を手に食い込ませる。

「ガブツ!!」

——ドクン!!

キバットから起爆剤である魔皇力『アクティブフォース』が注入される。そして僕の身体の奥底から「ファンガイアとしての力」が沸々と湧き出てくる。

恐らく僕の身体中にはビキビキと植物の様な、ステンドグラスのような紋様が浮き

出て来ているだろう。

——ジャララララララララッ!!!

更に僕の腰に鎖がまかれ、メタリックレッドカラーのベルトへと変化する。

…さて化け物、見せてやる。

これが僕のファンガイアとしての姿だ。

「変身ッ!!!」

キバットをベルトに装着し、全身が異形の姿へと変貌を遂げる。

黄色いつり上がった複眼に血のような真っ赤な胸部、そして肩、右足に付けられている鎖がジャラリと音を立てる。

これが僕の姿。これがキバだ。

——さあ、絶滅タイムと行こうか。

「ハアッ!!」

僕は化け物に駆け足で近づくと飛び膝蹴りを食らわせる。

……以外と柔らかいな。

怯んだ化け物の隙を見逃さずそのまま腹部にパンチのラッシュを浴びせる。

『グッ……アアア』

……弱い。弱すぎる。ああ一方的だなつまらない。

これじゃあただ苦しませるだけで味気ない。可哀想だからちよつとだけ手を抜いてあげるか……。

『グ、グアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

ああ、大振り過ぎるな。これじゃあカウンターをしてくれと言っているようなものじゃないか。

つまらな過ぎるなコイツ……。

もう良いや、終わりにしてあげよう。

ズドン!!

『グオオオオツ!!??』

化け物の大振り過ぎる攻撃を避け僕は蹴りを入れる。すると化け物は後ろの壁に叩きつけられる。

どうやら僕の蹴りの威力がアレだったのか壁にめり込んでいる。

『あ、が……ゴポツがつ……』

しばらくして化け物は口から血を吐き出し、ガクリと意識を失う。

何だこの程度か。

こんな実力で戦いを挑んでくるなんて呆れて言葉も出ないな。

……あー……やり過ぎたかな？

何というか化け物になる前が女の子だと思うとなんか罪悪感みたいなのが……。  
て言うかヤバいな。キバの状態で戦闘になるとファンガイアの側面って言うか、ファンガイア特有の残虐性とか凶暴性が湧き出てくるんだよね。

あーあ、どうしよう。しかも月夜に照らされている所為か、なんか化け物が吐いた血が無駄に美しい赤色を醸し出しているし…。

……あ。キバツトちよつと良いかな？

（あ？どうしたよ。莉紅いきなり話しかけてくるなんてよ）

（いやさ、この化け物の血ってき……バイオリンのニスに使えそうじゃない？）

（……ハア……）



（え？何？思いつき溜息を吐かれたんだけど？！）

（お前さ、よくこんなヤバそうなヤツの血をバイオリンの材料に使おうと思ったな……）  
ええー？なんか不服なのかなあ。バイオリンのニスにはキリン血が使われているからいける筈なんだけどなあ……。

（まさかコイツ、キリン血を動物のキリンの血と思ってるのか？それは麒麟きりんけつだつての！竜血樹から取れる貴重な樹脂なんだよ！！血じゃねえんだよ！）

キバットが何か言ってるみたいだけど気にしない。気にしない。

とにかくこんな時の為に日頃から常備している”注射器型のスポイト”の出番だな。

えーと？確かフエツスのホルダーに空きがあったからそこにセットしていた筈なんだけど……。

「あなた……一体何者なの？」

「！」

え？誰？どちら様？

声を掛けられた僕は後ろを振り向く。そこには紅の髪をしたAPPが20あるんじゃないかぐらいの美貌を持つリアス・グレモリー先輩、そして黒髪の大和撫子である

2人揃って2大お姉様と言われている姫島朱乃先輩。

そしてその後ろに木場君、塔城さん、アーシアさん、イツセー君が居たのだ。

(やべっ！悪魔共とまた鉢合わせる事になるとは……………！)

(え？悪魔……………あの人達全員悪魔なの！？)

(前から言ってたろ!!全員悪魔だつてよお!!教会の時でも分かるだろそれくらい!!)

(え、ええ……………あの時はてつきりリアス先輩がイツセー達を引き連れて夕麻さんをポコポコにしに来たと思つてたんだけど……………)

(この……………能天気バカが……………ツ!!)

「聞こえていないのかしら？もう一度言うわ……………あなたは一体何者なの……………？」

あ、ヤバイ。リアス先輩の事忘れてた。ここは『はい、いつもニコニコ貴方の隣で命を喰らう化け物。ファンガイア東崎莉紅です！』なんて今更言えないからなあ……………つて、何か忘れてるような。

……………あ!!こんな事してる場合じゃ無い!!あの幼女(神話生物)の血イ!!アレ早く回収しなきゃ(使命感)！早く！早くしないと早く！

俺は振り向き、幼女(神話生物)

つて言うか幼女の体液(血)を回収するつて……………どう見ても危ないヤツじゃ無いですかやだー。

……つと、まだ乾いてないな。良かった良かった。

バチバチッ!!!

え? 何このバチバチ? なんか嫌な予感がするんですけど……。

(莉紅——後ろ——後ろ——ッ!!!)

(え? 後ろって何g)

すると僕の眼前に電撃が迫っていた。

え? なんで電撃? what? 何故? why?

………いやいやいやいや!!?!?!?! 危ないイイイイツ??!

俺は咄嗟に腕で電撃を振り払うとそこに火花が飛び散り、煙が発生する。

て言うか、危ない?!? 確かに名乗らずに別の事に夢中になつた僕も悪いけどイキナリ過ぎるよ?!? 危ないよ?!?!

つーか腕が滅茶苦茶ビリビリするんだけど!!?!?!

もうやだ!! こんな所にいられるか!! 僕は帰らせてもらおう!! (死亡フラグ)

逃げるんだよおおおおおおおおおおおおおおッ!!! スモーク—————ッ!!!!!!



〃〃東崎宅 玄関

「ハア……疲れた。キバの状態で家まで全力疾走するのって久しぶりだなあ」

「お疲れさん、いやあ今日は濃い一日だったねえ」

変身を解いた東崎はその場で尻餅をつく。それもその筈、今日はアーシアの為のバイオリンの演奏会だった筈が大規模な演奏会となり、幼女（はぐれ悪魔？）に遭遇し、悪魔（本物）と再び鉢合わせたのだから仕方ないだろう。

東崎はヨロヨロと自宅のリビングへと足を運ぶ。

するとリビングから芳しい匂いがしてくるのに気付く。何だろうとリビングを覗くとそこには人間態の次狼<sup>ガール</sup>、ラモン<sup>バッシュャー</sup>、力が鍋<sup>ドツガ</sup>を囲んでいる姿があつた。

「やつと帰って来たか莉紅。もう少しで食っちゃまう所だったぞ？」

「これで皆食べれるね！」

「いただき——もs」

バツ!!ドゴツ!!ガツ!!

力が鍋ごと持ち上げ食べようとするのを次狼とラモンは防ぐ。

東崎はしばらくポカーンとしていたが「やれやれ」と一言呟くとテーブル席に着く。

「あー、ハイハイ。それじゃあちゃんと分けてあげるから喧嘩しないの。えっーと……とここで鍋の材料は何なの?」

「今から投入する所だ」

次狼がそう言うのと足元から一匹の“コウモリ”を取り出した。

「……………」

「家の周りをウロチョロ飛んでいたからなあ……食っちゃまおうと思つてな」

この後、滅茶苦茶止めるのに苦労した。

## 11話 プライドの高いもの同士

いやあ、昨日は危なかつたなあ。次狼さん、何で鍋にコウモリ入れようとするかな…。一応コウモリって病原菌とか運んでくるから半分人間の僕にとつて毒を入れるような物だぞ？

キバットも同じコウモリとしてかなり複雑な心境だった筈だろうに。

一応、あのコウモリは逃しておいたから後は無事を祈るだけだろう。

さて、今日は吹奏楽部に頼んで音楽室借りれるかな？

やつとバイオリンの製作が終わったけど、音の確認とかしておかないといけないし…。

すると、廊下の方から黄色い歓声が聞こえてくる。

あ、うん。誰が来るか大体予想がつく。

「キヤアアアーーーーッ!!木場くうううん!!」

「こつちよ!!こつち向いたわ!!」

「ハア…ハア…木場きゆうううん……」

やっぱり木場君だ。

最近イツセー君となんかアレな噂が立っている為、距離を置こうと考えている。と言うか僕もその内、木場君とイツセー君と関わっていく内にヤバイ噂が立ってしまう可能性がある。

とにかく、木場君は無視して吹奏楽部に行ってみようかな？

「東崎君。ちよつと良いかな？」

oh……。

帰ろうとした矢先に肩を掴まれてしまった。と言うか顔近くない？

「ちよつと、僕と一緒に来て欲しいんだけど良いかな？」

「!?？」ガタツ

おーい、その女子ー。

反応しないでー、頼むから変な噂が立つような事はやめてくださいお願いします。

「大丈夫だよ。イツセー君も一緒だからさ」

「漫画部との連絡は!?？」

「ええ！勿論よ！これで東崎君を含めた新シリーズの製作は完璧よ！」

「気を付けて！生徒会に気付かれたら一巻の終わりよ!!？」

「うっ！……ふう……」

あ、駄目だ。逃げられない。

と言うか、イツセー君も一緒なのか……。仕方がない。尻は何としてでも死守しよう。ついでに生徒会の方に色々報告もしておかないとな。

そしてホイホイとイケメンに着いて行くと、そこは旧校舎だった。

目の前には古そうな豪華な扉があり、オカルト研究部と書かれていた。

そして木場君が扉を開けるとそこにはリアス先輩、姫島先輩、イツセー君、アーシアさん、塔城さんと言ったうちの学園の有名人が集まっていた。

て言うか、塔城さんってオカルト研究部だったんだ…。

「ようこそ東崎莉紅君、歓迎するわ。さあ、適当に腰掛けて」

「あ、はい」

そう言いながら僕がソファに座ると、目の前に紅茶が置かれる。

隣に姫島先輩がニコニコしながら紅茶を出してくれたのだ。しかし何故だろうか、その笑みがその……女王様って感じの……サディストのアレだ。怖い。

「ミルクと砂糖、どちらが良いですか？」

「砂糖で（即答）」

「先輩、砂糖なら……に」

すると塔城さんが角砂糖の入ったポットを渡してくれた。お、気がきくなあ……。それ



じゃあ遠慮無く。

(ねえイツセー。気のせいかしら？彼、紅茶にあり得ない量の角砂糖を投入してるのだから？)

(部長……。コイツ極度の甘党なんですよ。多分ファンガイアだからとかそういうのじゃなくて……)

んぐんぐ……あー……糖分が身体中に染み渡る……。

「で……僕を呼んだ理由って何なんですか？」ムグムグ……

あ、このクッキーおいしいな。もう一枚もらおう。

「え、ええ。貴方に確認したい事があったね……」

確認したい事って何だろう……あ、チョコチップ入りのクッキーも美味しい。

「東崎君。昨日、私達と会わなかったかしら？」

「ムグムグ……会いましたよ……」

アーモンド入りも中々……。

「そ、そう……よく夜は出歩くのかしら？」

「ムグムグ……はい、バイオリンのニスの材料を集めに良く外に出ますよ」

バナナ風味も……美味すぎる!!!

「あらあらくクッキーはいかがですか？」

「美味しいです。もつと甘くても良いくらいですよムグムグ……」

さて、もう一枚……。

「ね、ねえ？ 話聞いているかs——」

バシン!!

痛ッ!!?? え？ 何？ 叩かれた!!? ?

すぐ隣を見ると塔城さんがクツキーに手を伸ばしていた。

「先輩……食べ過ぎです……私の分も……」

「ちよ、ちよつと……聞いているかs——」「あらあら……、小猫ちゃん大丈夫よ。こんな時の為にクツキーを沢山焼いて来たのよ。アーシアちゃんもどうかしら？」

「い、良いんですか？」

アーシアさんが目をキラキラさせている。

あ、何だろう。見ていてかなりホッコリする。

「イツセー君もご一緒にどうかしら？」

「い、いいんですか!!? ?ご一緒にさせていただいても!!? ?」

「ええ、イツセー君には是非、私が作ったクツキーをいただいで欲しいの」

「いやっほおほおほおほおほおほお!!! 兵藤一誠！ 朱乃さんのクツキーを全身全霊で食べさせてもらいます!!」

イツセー君がハイテンションでクッキーに食いつこうとすると、塔城さんがイツセー君にグーパンを叩き込む。

そこへアーシアさんと木場君が駆け寄り「野郎の介抱は要らねえんだよ！」と言いなから起き上がる。

何と言うか……有名人が集まると残念な感じになるんだなあ……。

さてと、とりあえずソレは放っておいて、目の前の先輩をどうするか何だよなあ……。

「うっ……うっ……どうせ私なんて……どうせ私なんて王のくせに役に立たない無能姫よ……うっ……」

ああ、可哀想に……。何と言うかアレだ。身勝手な家臣に振り回される王って感じだ。

「先輩も苦労してるんですね。あの、クッキーどうぞ」

「うう……ありがとう。優しいのね」

あ、何だろう。ギャップ萌えて言うのかな？なんかキユンと来た。

「あ、リアス。食べるなら東崎君との話を済ませてからにしてね」

「もう、いやこの女王……」

バタン!!!

リアス先輩イイイイイイイイイイイイイイイイイイツ  
!!??

~~~~~

「単刀直入に言わせてもらおうけど……貴方、何者なのかしら？」

立ち直ったリアス先輩は険しい目つきで話しかけて来た。すみません、リアス先輩。涙痕がクツキリと残ってます……。

何と言うか、アレです。不憫過ぎで笑えないです。とりあえず、さっさと話を済ませてリアス先輩がクツキーにありつけるようにしてあげよう。

「ファンガイアです」

「……すんなりと正直に言うのね」

「えつと、まあ……今更隠すものじゃ無いですし……」

うん。今更何だよなあ。別に隠していてもいつかバレるんじゃないかなあーとは思っていたし。

「ふうん……貴方。ファンガイアが一体どのような存在か知ってるかしら？」

「……………」

「知らないの？……いえ、そもそもファンガイアがどんな種族か知る機会が無かったのかしら？」

……ああ、成る程。

確かに、前世ではファンガイアはどんなキャラクターなのかは知っていたけど、こちらの世界でのファンガイアってどう言う存在なのか知らなかったわ。

そもそもキバットに聞いても同盟の種族としか言ってなかったからなあ……。

「いい機会ね。イツセー、貴方も良く聞いておきなさいファンガイアがどのような種族なのかを」

「は、はい！」

「えつと……よろしくお願いします」

「ええ、とりあえず悪魔、天使、墮天使の三大勢力による戦争から話すわ」

あ、コレ絶対長くなるパターンだ。とにかく頑張つて聞くとしよう

「私達悪魔、墮天使、天使は大昔から長い間争つて来たわ。その争いは三大勢力や他の種族、人間果てにはドラゴンを巻き込んだ戦争となつていった。だけど、それに乗じて全ての種族を滅ぼし我等こそが頂点だと言ひ張る種族が現れたわ。それがファンガイア。ファンガイアは命そのものを糧とし、三大勢力だけでなく他の種族の命も喰らつていっ

たの。その中でも一際目立った出来事がファンガイアの王“キバ”と二大龍の争い。その争いでキバは死に、龍は封印されたわ。三大勢力はこのような危険な種族を生かしてはおけない。そう考え、ファンガイアは全滅した……こんな感じね」

あ、ああー。成る程。うんそう言うことね。はい……うん。

「えつと……東崎……大丈夫か？さっきの話聞いてて？」

「確かに……昔の事とは言え自分の種族が殺された話なんて気分が悪いわよね……」

「あ、いや別に気にしてないんですけど」

「その、ごめんなs——ゑ？」

何故かリアス先輩が固まった。というか周りの皆もポカンとしてる。

えーとつまりさっきの話をまとめるところでしょ？

「つまり……調子に乗って周りに喧嘩売って返り討ちにあつた残念な種族……つて事ですよね？」

「ゑ……あ……そうなる……わね……」

なんか滅茶苦茶戸惑ってる。アレ？なんかおかしい事言つた？

すると、僕のバックからキバットが顔面に飛びついて来た。

「馬ツ……鹿！じゃねえのお前!!」

「え、何？いきなり何!!？」

「そりゃあ、相手側も困るに決まってるんだろ！少しは空気読みやがれこのポケツ!!とりあえず死ぬツ!!」

「死ぬ?!?」

「キバツト族……!」

「おや?誰かと思えば忌々しい悪魔のグレモリー家次期当主じゃありませんか。わざわざ監視してご苦労なこつた」

なんか、キバツトが猛烈に嫌味つたらしい喋り方をしてるんだけど。

あ、リアス先輩が怒ってる。なんか赤いオーラのものが溢れてる。

「あら?一匹じゃ何も出来ないキバツト族が偉そうな口を叩くじゃない……!」

「へっ、お前のような無能姫よりかはマシだがな……!」

「イ、イツセーさん!怖いです!部長さん怖いです!」

（アーシア!その気持ち分かる!スツゲエ分かるけど我慢するんだ!ほら、東崎を見る!アイツあんな近くに居るのに微動だにしてないぞ?!?)

あー、成る程。なんか2人がいみ合っている理由が分かった気がする。多分だけど、2人（正確には1人と1匹）はお互いにプライドが高いんだ。

簡単に言うと同族嫌悪って感じた。とにかく喧嘩を止めよう。後ろの2人が震えているんだよなあ。

「やめて下さいよ。こんな所で喧嘩なんて」

「止めんなよ莉紅。コイツのプライドは1度折ってやらねえと気が済まねえ」

「その通りよ。自分以外の者を見下すような輩にはキツイお仕置が必要なのよ」

あー、もう。面倒臭いなプライドの高い奴らって……。

「あーもう。やめて下さいよ喧嘩なんて同レベルじゃないと起きない物ですし、それにそんなだから仲間達に舐められるんですよ」

「グツッ?」

アレ?なんか2人共、よろけたんだけど。え?まさか凶星?

「くっ……ま、まあ良いわ。貴方とはいずれ決着を付けさせてもらうわ」

「ハッ、やってみやがれ」

「フフフ……東崎君。やはり貴方は私と同じ……」

アレ?何だろう。姫島先輩の目が異様に怖いんだけど……と言うか何故か悪寒が……。

「……もしかして貴方が”今のキバの鎧”を体内に封じてるキバツト族なのかしら?」

「ご察しの通りだ。俺が今のキバの装着の最終決定権を持つてる」

「と言う事は東崎君。やっぱり君は……」

すると皆がこちらに注目してくる。まあ、既にファンガイアってバレてるから隠して

も意味無いな。

「はい。キバです」

「なんて言うか当たり前のように言う辺り、相変わらず素直だよなお前」

アレ？これって褒められてるのかな？それとも罵られているのかな？僕の中ではとりあえず褒められたって事にしておこう。

「それじゃあ聞くけど、貴方の目的は何？」

「いえ、特にありませんけど」

「イツセー、これって嘘ついてるかしら？」

「いえ、付いてませんね。嘘ついてるとコイツ異様にパニックになりますから」

うっさい。正直者で何が悪いんだコラ。

「……ハア……困ったわね」

「アレ？これつてもしかすると馬鹿にされてるんですか？」

「部長。溜息を吐くと不幸になりますよ」

「分かってるわ小猫……東崎君。貴方の行動は軽率過ぎるわ。もつと己の立場を理解してくれないかしら」

己の立場って……あー、ファンガイアとかキバとかそこら辺の話かな？

「東崎君。貴方は独断とは言え、墮天使達に危害を加えた。一応生かしたとは言え、キバ

が存在している事を三大勢力の上層部に知られたら……」

「え、どうなるんですか?」

「貴方は悪魔であるイツセーに墮天使であるレイナーレの命を守ったから、大丈夫だと思うけど……下手をすれば殺されるわ」

まじかあ……それは勘弁して欲しいなあ……。

「でも他の勢力に刺激を与えない、もしくは有効な関係を結ぶ。これなら貴方の身は保証出来るわ」

「えっと……つまり?」

「どうかしら? 悪魔に転生してみる気は無いかしら?」

「あ、すみません。そう言うのはちよつと……」

「即答かよ?」

「うーん、悪くないと思うわよ?」と言うか、天使は基本的に魔の存在として認識しているファンガイアを目の敵にしてるし、墮天使の場合は色々と危険な研究していると聞いているし、実験材料として扱われる可能性があるの。でも、悪魔なら三大勢力の中でもマシな類に入るわ。それに、私の眷属となれば墮天使、天使は悪魔側こちらに容易に手を出せなくなるから安全だと思おうわ」

「そうだけ、東崎。悪魔は良いぞ? 夜は快適だし身体能力は高くなるし、まさに超人にな

れるんだぜ！」

うーん、でもなあ……。悪魔の契約って怖いし、それに悪魔になるってデビ○マン連想させられるし。アレってヒロインが生首になるヤバイ奴だよな。

そもそも人じゃなくて悪魔なんだよなあ。

「えつと……。すみません。上半身だけにはなりたくないなので勘弁してください」

「なんで、そんな考えに行きたくのか理解できないけど分かったわ」

「え？それじゃあ、東崎……。お前俺達と敵対……」

え？もしかしてそういう流れになるの？マジで？？

「それじゃあ、オカルト研究部に入るのはどうかしら？そうすれば一応、悪魔側と証明出来ると思うからちよつとは安全になると思うけどどうかしら？」

「あ、じゃあそれをお願いします」

とりあえず断る理由も無いので、承諾する。旧校舎の一部、貸してもらおうこと出来な
いかなあ……。バイオリン用の木材に利用できそうなんだよね。

「フフフ……。それじゃあ、ようこそ。こちら側の世界へ」

すると、全員がバサリと黒い翼を広げた。

.....

.....

.....

.....

.....

.....

「いだだだだっ!!羽引つ張んな!何すんだよ!」

「イツセー君。片方で良いからソレ貸して。悪魔の羽それなら絶対に良いニスが作れるから」

東崎はおもむろにイツセーの悪魔の羽を掴む。

「ふざんけんな!シャレになってねえよ!」

12話 ウンメイノー

「俺、昨日部長に夜這いされたんだ……!」

「……え?何だつて?」

東崎はイツセーの言葉を疑った。

——夜這い

それは夜中に性交を目的に他人の寝ている場所を訪れる事であり国文学関係の研究の間では、一般には夜這いは古代に男が女の家へ通つたと言われ語源は、男性が女性に呼びかけ、求婚することであるとと言われる。

「と言うわけで……どう思う?」

「とりあえず、チエーンソーでバラバラにされれば良いんじゃないかな?」

「最近俺の親友が冷たくて辛い……」

「そりゃあ……アーシアさんが居るって言うのに浮気つて……」

「え、っ——!!??
!!?べ、べべべつに、あ、アア、アーシアとはそそそ、そう言う関係じゃねえねねね」

「いや、戸惑い過ぎだよ」

イツセーの反応を見るからにアーシアの事もちゃんと思ってるらしいがリアスの事はどう思っているのだろうと考えた。

とりあえず東崎は今、一番気になってる事を聞くことにした。

「まあ、とにかく……童貞は卒業できたの？」

「それ聞くか?!?…銀髪のメイドさんが乱入して来たので出来ませんでした」

「うん。……うん?……銀髪?……メイド?」

「……それにしても部長の様子おかしかったなあ」

「話題すら変えんなコラ」

イツセーの一言に東崎は疑問を持ちながら旧校舎へと足を運んだ。

~~~~~

「部長のお悩みならグレモリー家に関わる事じゃないかな?」

「朱乃さんなら何か知ってるよな?」

「朱乃さんは部長の懐刀だからね。もちろん知ってると思うよ?」

「家柄の悩みかー……結婚とか?」

木場、東崎、イツセー、アーシアの4人はと言う順で並び廊下を歩いていった。

そこにキバットが無理矢理話題に入ってくる。

「おお、あの悪魔が結婚か。ありやあ性格の悪い奴と結婚してその後、性的な酷い仕打ちを受ける。パターンだな」

「せい………てき………?」

「テメエエエエエ!! キバットオオオオオオオオ!! そんな事あるわけねえだろうがああああああ!! 部長の処女は俺のもんなんだよおおおおお!!!」

「しよ………じよ………?」

「ああ、うん。アーシアさんはまだ知らなくて良いよ」

「んだよ興奮出来るシチュエーションだろ? 笑えよ」

「興奮するけど笑えねえよ!!!」

取っ組み合いを始めたキバットとイツセーを尻目に3人はオカルト研究部に入ろうとする。

すると木場が扉を開けようとする直前、動きが止まる。

「………僕が………まで来て初めて気配に気付くなんて………」

——ガチャリ



扉を開けるとそこには豪華なオカルト研究部の部屋なのだが、見知らぬ銀髪の女性が立っていた。

「……誰？」

「あの人は昨日の……！」

東崎はイツセーの反応から察し、昨日の銀髪のメイドと特徴が一致している事に気付く。

東崎は銀髪のメイドを「あ、弾幕シューティングの時止めナイフ使いのメイドにそっくり」くらいにしか思っていた。

すると、銀髪のメイドが東崎に挨拶をしてくる。

「こうして会うのは初めてですね私の名前はグレイフィア。グレモリー家に仕える者です。よろしくお願ひしますね」

「あ、えつと？はい。こちらこそよろしくお願ひします」

東崎はメイドの「こうして会うのは」と言う言葉に引っかかりながらも礼を返す。そもそも東崎はこうして生のメイドを見るのは初めてなので戸惑っている節がある。

「…全員揃ったわね。部活をする前に少し話があるの」

「お嬢様。私が」

グレイフィアの言葉をリアスは手を向けて制止させる。必要ないという意味表示だ

ろう。リアスはそのまま口を開く。

「実は——」

彼女が喋ろうとした瞬間、床に書かれた魔法陣が輝く。

もしかして転移魔法だろうか？

そう思った東崎だが、グレモリーの魔法陣の形が違う紋様へと変わったのだ。

そして魔法陣が一層輝きを増すと次の瞬間、部屋の温度が急激に上昇する。魔法陣からはゴオ!!?と炎が溢れ、熱気が室内に溢れる。

そして、その炎の中から人影が姿を現す。炎の中で佇む人影は己の腕を薙ぎ払い炎を掻き消す。

そこに現れたのはパツと見チャライ格好をした男。赤いスーツを来て、胸元を着崩している金髪の男性だ。

(うわあ、カッコいい演出……)

「人間界は久しぶりだ……会いに来たぜ、愛しのリアス」

(……子安ボイスだと!??)

その男は口元をニヤリと吊り上げる。それに対してリアスは愛しと言っている男性に対し半目で見つめていた。

「さあて、リアス。早速だが式場を見に行こう、日取りも決まってる早いほうがいいだろ

う

男はリアスの腕を掴むが、リアスは腕を振り解く。

「――離してちょうだいライザー」

彼女にしては珍しく、低い声音で完全にキレている事が目に見えて分かる。ライザーと呼ばれた男は特に気にする様子もなく苦笑いするだけである。

「おい、あんた部長に対して失礼だぞ。女の子に、その態度はどうよ」

するとイツセーがその様子を見るのに耐え兼ねなかつたのか、口を開いていた。しかし男はイツセーを軽く一瞥すると

「……お前誰?」

そう言つて来た。まさしく興味が無い顔と声だ。

「俺はリアス・グレモリー様の【兵士】兵藤一誠だ!」

「あつそ」

完全にスルー。

全く興味のなさそうな顔であり、イツセーはその態度に対して完全に怒っている様子だ。

「あの野郎……ツ!!無視するなんて……例え男でもやっていい事とやって悪い事があるんだよお……ツ!!」

「イツセー君。それブーメランだから」

はつきり言うとお前が言うな発言だった。イツセーも男に全く興味が無い一人である。

東崎は溜息をついてから男に向けて口を開く。

「すみません。えつと……どちら様でしょうか?」

「なんでこんな所に人間がいる?……いや、待て半分人間では無いなお前」

すると東崎と金髪の男の間に先ほどの銀髪のメイドであるグレイフィアが介入する。

「この方はライザー・フェニックスさま。純潔の上級悪魔であり、古い家柄を持つフェニックス家のご三男であらせられます」

東崎は「フェニックス……鳳凰幻魔拳使えるかな?」と呟き驚いている様子ではなかった。

だが、イツセーはフェニックスと言う単語よりも、その後の発言に酷く驚かせられる事となる。

「そして、グレモリー家次期当主の、婿殿にあらせられます」

「…婿?」

「リアスお嬢様とご婚約されているのです」

「…え?」



「余計なお世話よ！ 私も次期当主である以上、相手は自分で決めたいの。父も兄も一族も皆性急過ぎる！ 当初では、私が人間の大学を出るまでは自由にさせてくれると！」

「ああその通りだ。君は基本的に自由だ。大学に行っても構わないし、下僕も好きにするといい。だが君の父親もサーゼクス様も心配なんだよ。家が途絶えるのが怖いんだ。先の戦争で大勢の純潔悪魔が亡くなったし、墮天使、神のとの両陣営とも拮抗状態。純潔の悪魔同士がくつつくのは、これからのことを考えてなんだ。純潔悪魔、その新生児が貴重なことを君だつて理解してないわけじゃないだろう」

東崎はまるつきり話が頭の中に入つてこなかった。

要約すると『七十二柱の悪魔達がほぼ居ないのでさつきと結婚して子供作ろうぜ』と  
言う感じだろう。

「なんか、面倒臭い話になって来たね」

「そうですね。部長の兄様が既に家を出ているので残っている部長が必然的に家を継ぐ事になってるんです」

「政略結婚つてヤツか……」

塔城とお菓子を食べながらその様子を見ている東崎。

その様子を睨みながらもイツセーも少しは冷静になつていようだ。

「私は家を潰さない。婿養子だって迎え入れるわ」

「なら話は早い。早速俺と——」

「けどそれを決めるのは私よ！ 私は私が良いと思った者と結婚する。古い家柄の悪魔にも、相手を選ぶ権利はあるわ」

「チツ」

(うわっ舌打ち……)

見るからに機嫌が悪そうなライザー。東崎は胃に穴が空きそうな状況から抜け出したい気分だった。

「…俺もな、フェニックス家の看板を背負ってるんだ。この名前に泥をかけるわけにもいかないんだ。こんな狭くて汚い人間界の建物になんて来たくなかったしな。…この世界の炎と風は汚い、炎と風を司る悪魔としては、耐え難いんだ！」

ボウツ！とライザーの周囲に炎が巻き起こり、周辺をチリリ、と火の粉が舞った。

さらに、部屋の所々から炎が発生する。

「——俺は君の下僕全てを燃やし尽くしても、君を冥界に連れて帰るぞ」

殺意と敵意が部屋全体に広がり、更なる炎とライザーから放たれた敵意が、部員全員を包み込む。

全員はいつでも対応できるように戦闘態勢に入る。

そして

——ブワアアアアアアアアアアッ!!!

白い煙が部屋の中を包み込んだ。それはまるで吹雪が襲い掛かってきたのではないか?と言うほどの煙の量だ。

煙が晴れる頃には、1人の人物が何かを構え立っていた。

「すみません……流石に室内では火気厳禁なので勘弁してもらえませんか?」

と消火器を構えた東崎が真っ白になったライザーに向けて喋った。

その様子にリアス達は笑いを必死に堪えている様子だった。もちろんライザーはそれに対して完全にキレている。

「ライザー様。落ち着いてください。……これ以上やるのでしたら、私も黙っているわけに参りませんが」

静かだが、迫力のある声色だったその声を聞いたライザーはわずかに表情を強ばらせる。

「……最強の“女王”と呼ばれる貴女にそんなこと言われたら、さすがに俺も怖いよ。化物揃いと評判のサーゼクス様の眷属とは絶対相対したくない」



と、真つ白なライザーは落ち着きを取り戻す。

「…こうなることは重々承知でした。正直に言いますと、これが最後の話し合いの場だったのです。…この結果を予測されていた旦那様たちは、最終手段を用いることにしました」

「最終手段？」

「お嬢様、意見を押し通すのなら、ライザー様と「レーディングゲーム」で決着をつけるのはいかがでしょうか」

「——!?？」

レーディングゲームと言う聞き慣れない単語に東崎は首を傾げる。

「レーディングと言うのは爵位持ちの悪魔が下僕同士を戦わせ競うゲームの事です。公式なゲームは成人した悪魔でなければできないという制限がありますが非公式な純潔悪魔同士のゲームなら、半人前の悪魔同士でも参加が可能です」

「へえ、知らなかった。ありがとう塔城さん」

「…つまり、お父様たちは私が拒否した場合を考えて、最終的にゲームで娘の人生を決めようというの。…まったく、どこまで私の生き方を弄れば気が済むのかしら」

完全にリアスは怒っている。いや、怒りを通り越して呆れているのだろう。それもその筈、自分の人生がゲームで左右されてしまうのだから、本人としてはたまったもので

はないだろう。

「では、お嬢様はこのゲームを拒否すると?」

「まさか。絶好の機会よ。いいわ、ゲームでケリをつけましょう」

「ほう……受けるのか。構わないが俺は既に成熟しているし、公式なゲームもいくつかこなしている。今のところは勝ち星の方が多い。…それでもやるのか?」

「やるわ。貴方を消し飛ばしてあげる」

「いいさ。そっちが勝てば好きにすればいい。しかし俺が勝てば、リアスは俺と即結婚してもらうぞ」

(ゲームなのに凄い物騒……)

東崎はゲームの話から消し飛ばすやら結婚くやらの展開に若干引いていた。

「承知しました。お二人のご意志、このグレイフィアが確認させていただきませぬ。両家の立会人として、私が指揮を取らせていただきますが、構いませんね?」

「ええ」

「ああ」

グレイフィアの言葉に二人が同意する

「承知しました。両家には、私からお伝えします」

そう言つて彼女はペこりと頭を下げる。

「ところでリアス…ソイツは別として、そいつ以外のメンツが君の下僕なのか？」

その一言にリアスは片眉を吊り上げた

「だつたらんなの？」

「話にならないぜ？ 君の女王くらいしか、俺の可愛い下僕たちに対抗できそうにないな」

そう言つてライザーはパチンと指を鳴らした

すると部室の魔法陣が光り出し、フェニックスの魔法陣が映し出され、ライザーの眷属であろうモノ達が出てくる。

その数おおよそ15名。

しかし、全員女性だった。

(うわあ、ハーレムなんて初めて見た……)

すると隣で見ていたイツセーが涙を流し始めた。その涙は感動か嫉妬なやどちらか、いや恐らく両方なのだろう。

「…おい、リアス。どうしたんだコイツは」

「あー、すみません。イツセー君の夢はハーレムなんです。…ぶつちやけ羨ましいんじゃないかと思えます」

額を抑えて困っているリアスに代わつて東崎が返答する。その様子にライザーの眷

属達はクスクスと笑う。

「ライザー様ーこの人、気味悪いですー」

「えーマジ、ハーレム？」

「キモーい」

「ハーレムが許されるのは上級悪魔だよねー」

「「キャハハハハハハ」

イツセーはその場で膝から崩れ落ちる。

ライフは既に0であるイツセーに対して追い討ちをかける眷属達。

東崎はその様子を見て思った。

(それはひょっとしてギャグで言ってるのか!?!?)

「そう言うな。上流階級のものに羨望の眼差しを向けてくるのは、下賤な輩の常だ。俺たちがアツアツな所を見せつけてやろう」

そう言うライザーは眷属の一人と唇を重ね――

「あーあーあーあー……ッ!! 2人には何も見えないし聞こえませんが……ッ!!」  
 「先輩：前が見えませんが」

「えつと東崎さん、何が起こってるのでしょうか？」

「まだ早いから!!! 2人にはまだッ!! 早いからッ!!」

まだ綺麗な小猫とアーシアを穢さないよう東崎は2人の目元を手で隠し、声を張り上げ、聞こえないようにする。

ちなみにイツセーはその様子を見て股間を抑え始めた。

「お前じゃあこんなことできまい、下級悪魔くん」

「俺が思ってることそのまま言うんじゃねえ! ちくしょう、【ブーステッド・ギア】!」

イツセーはライザーに向けて手を突き出し、己の神器である【赤龍帝の籠手】ブーステッド・ギアを発動

させる。

「お前みたいな女つたらし、部長には不釣り合いだ!」

「その女たらしにイツセー君は憧れているんだけどネー」

「うっせえ!!! そんな事あるわけねえだろ東崎!」

「本当は?」

「滅茶苦茶羨ましいぞこの焼き鳥野郎!!!」

本音をブチまけると同時にライザーを侮辱するような事を喋るイツセー。

とてもくだらないが、『焼き鳥』と言う単語に反応するライザー。

「なツ！焼き鳥だとお!!?調子こきやがって！リアス下僕の教育はどうなってやがる!!」

「ゲームなんか必要ない！ここで全員倒してやる！」

『BOOST』

イツセーが神器の能力を発動させ、ライザーに向かって走り出す。

——そのとき不思議な事が起こった。

♪♪【LORD OF THE SPEED】

(この歌は???)

イツセーが走り出した瞬間、謎の曲が流れ始めたのだ。

しかも東崎はその曲がどのような曲か知っている。そしてその曲が流れるとどうなるのかもだ。

「ミラ、やれ」

「はい、ライザーさま」

「マズイ！ イッセー君ダメだぁー！！！！」

小猫位の小さな女の子が棍を手にし、構える。

そして、2人が激突する。

結果は——

〈ウンメイノー

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「…うん。知ってた」

イッセーが耐えた時間、およそ3秒弱。

爆死用BGMが流れてきた時からこの予想はできていた東崎。  
爆死しなかっただけでも充分である。

「弱いなお前」

はつきりとその事実を告げる

「ミラは俺の『兵士』。下僕の中では一番弱いが実戦経験も悪魔の質も上だ。ブーステッド・ギア？ ハッ」

ライザーはわざわざイッセーの近くへ歩き、その神器を軽く足で小突いた。

「確かにコイツは凶悪無比、無敵の神器だ。使い方じゃあ神も悪魔も倒せるさ。過去にも使い手はいたが、未だに神も魔王も退治されてない。ソレは何故か？」

ライザーは嘲笑い、イッセーを見下す。

「この神セイクリッド・ギア器が不完全だからだよ。使い手も弱者ばかりだったて事だ、お前も例外じゃない。人間界の言葉で例えるなら『豚に真珠』、『宝の持ち腐れ』。そうだお前だよりアスの兵士くん？」

言い返したいのだろう、しかし残念だがライザーの言っている言葉は正論であり、言い返せないのだ。

そこで、ふとライザーの視線が東崎へ向かう。



「……ところで、お前は一体何なんだ？」

「東崎莉紅と言います」

「名前じゃない。お前の種族だ。人間以外にも不思議な魔力を感じる。お前は何者だ？」

質問するライザーだが、グレイファイアが東崎の代わりに答える。

「彼は人間とファンガイアのハーフ。そして今代のキバでもあります」

「何ッ!? コイツがああ【キバ】だど!?」

ライザーは驚愕の表情を露わにする。そして、何やら考え事をしているらしく、しばらくしてライザーは東崎に詰め寄る。

「おい、リアス。どうせ非公式のゲームだ。コイツの参加も認めても良いぜ？」

「ふざけないで！彼は関係無いわ!!」

リアスはライザーの発言に怒りを露わにするが、ライザーは気に留めず喋り続ける。

「関係？関係ならあるぜ？そもそも俺達が結婚するハメになったのは元々【ファンガイア】が俺達、純血の悪魔をほとんど殺したからだろう？」

ライザーは自身の顔を東崎の顔に近づけ、その鋭い眼光で睨みつける。

「つまりだ……お前の責任でもあるんだよ。ファンガイア……」

「……ええ……マジですかその話」

「……ええ、七十二柱の悪魔達は戦争によってその命を落とした。だけど、その大半の悪魔はファンガイアによって殺されたのよ」

リアスは複雑そうな気持ちで東崎の問いに答える。

「でも、東崎。貴方には関係の無い事よ！貴方はそもそもファンガイアと三大勢力の関係を知らなかった！だから！」

「ああ、ハイ。分かりました。それじゃあ参加します」

「ねえ！人の話聞いてた？！」

リアスはレーディングゲームの参加を即答する東崎に思わずツツコミを入れる。

そしてそのまま東崎に詰め寄る。

「良い？！？貴方は関係無いのよ！！もしレーディングゲームに参加したら、真っ白焼き鳥野郎のライザーの事よ！事故と見せかけてわざと貴方を殺す可能性もあるのよ！！」

「おい、リアス。サラツと俺を馬鹿にするんじゃない。それに安心しろ最強の女王の前でそんな事はしない」

ライザーはこめかみに青筋を立てながらリアスに言う。

「でも、あっちの眷属は15人、それに対してコツチはリアス先輩を含めて6人ですよ？ハツキリ言つて現時点では勝ち目無いと思うんですけど……」

「ぐぐぐぐ……」

「確かにソイツの言う通りこのままでは俺の圧勝は間違いない。リアス、このゲームは十日後でどうだ？」

「!?…私にハンデをくれるというの?」

「感情だけで勝てるほどレーティングゲームは甘くないぞ。下僕の力を引き出してやらねば敗北は確実だ。才能があってもなくても、初戦で実力を出せず負けた奴らを俺は何人も見てきた」

ライザーはコチヲを真剣な表情で見つめてくる。

「十日もあれば君なら下僕をなんとかできるだろう」

ライザーの視線がそのままイツセーに映る。

そしてイツセーに対して一言添える。

「彼女に恥をかかせるなよ。お前の一撃はそのまま、彼女の一撃になるんだ」

その言葉が、確実にライザーの実力が見た目だけではないということを表していた。嫌味つたらしい彼だが、彼なりにリアスを想つての言葉なのだろう。

「じゃあな。次はゲームで会おう」

そう言うのと、彼等は魔法陣の中へ消えて行く。

その場にはオカルト研究部の全員とグレイフィアが残された。



「何を考えているの!!」

部屋の中でリアスの声が響く。

「全く……良いかしら？非公式と言ってもこのレーディングゲームが誰かに見られたら貴方は命を狙われる可能性が高くなるのよ!」

「え？そんなんですか」

東崎の腑抜けた声にリアスは額を抑える。

「ああ……もう。これじゃあ胃薬がいくつあっても足りないわ……」

「あ、あのー、部長。コイツ昔からこんな性格なんすよ。気にしたら負けと言うか……」  
リアスは東崎の親友であるイツセーの苦勞を知り、ある意味で尊敬した。恐らく昔から大変だったのだろう。あとで膝枕をしてあげようと思った。

「つたく……おい莉紅。グレモリーの嬢ちゃんと言ってたんだから別に参加しなくても良いだろ」

「うーん、でも僕もオカルト研究部の1人だから……」

「……………ハア、分かったわ。参加を認めるわ」

諦めたかのようにリアスは溜息をつきながら喋る。

このままだと話は平行したままだと察したのだろう。それに、自身の政略結婚を防ぐ事ができる為、良かったとリアスはプラス面に考える。

「まあ、でも。無理矢理参加する事になったのだから私ができる事なら何でもするわよ」  
「ん？今何でもするって言いましたよね」

「え？」

「え？」

「……え？」

東崎がそう言うといッセーはハツとなり東崎の胸倉を掴む。

「……て、テメエもかああああああ!! テメエも焼き鳥野郎と同じく部長の処女狙つてんのかあああああああッ!!」

「いや、別にソレは興味無いです」

「あれ？何故かしら？紳士的な言葉の筈なのに複雑な気持ち……」  
「で、何を要求するんですか？」

騒いでいるメンバーを尻目に小猫は東崎に質問する。小猫の一言に周りの皆は真剣な表情となる。

もしかしたら彼かりアスの代わりに王となる……的な事を言うのでは無いか？と心配なのだろう。

そして東崎の口が開かれる。

「旧校舎の一部をください」

「……うん？」

リアスは首を傾げた。一部をくださいとはどういう事なのだろうか？もしかすると、部屋を貸して欲しいと言う意味なのだろうか？

「……まあ、良いわよ？そらくらいなら」

「ありがとうございます！それじゃあ僕はこの辺d——」

「東崎様」

グレイフィアは東崎を呼び止める。

「？……どうかしたんですか？」

「リアス様の為にありがとうございます」

彼女はそう言うのとペコリとお辞儀し、魔法陣の上へと立つ。

そして魔法陣が輝きを帯び始める。

「あと、部屋の掃除をお願いしますね」

「……え？マジですか」

そう一言だけ喋るとグレイフィアの姿は消えていた。

そして東崎は真っ白になり所々焦げ付いている部屋をグルリと見渡す。すると、背後から小猫が箒を持ちながら話しかけてくる。

「それじゃあ先輩。お願いします」

「そうね。汚したのは東崎だけですものね」

「あはは、頑張つてね」

そして、気付くとオカルト研究部に残ったのは東崎だけどなって居た。

「……おのれディケイドオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

そして意味もない八つ当たりの声が旧校舎内に虚しく響き渡っていった。

## 13話 合・宿・修・行

「ひーっ…ひーっ…ひーっ…」

お、おつす俺、い、イツセー……。は、ハーレム王になる…男だ……。

今俺は、いや俺達は打倒ライザーの為に強化合宿しに来てるんだが…。

い、一体どれくらい登ったんだ？

別荘に行く為、登山しに来ているが坂がキツくてキツくて…。しかも部長達の分の荷物を何故か運ぶ羽目になってるし……。

そりゃあ、修行の一環って事は分かりますけど、つ、辛い…。

すると先にいるアーシアがこちらを見つめ喋りかけてくる。

「あ、あの、私も——」

「大丈夫よアーシア。これくらいこなきないとイツセーは強くないわ」

お、鬼だ…あ、いや違った悪魔だ……。

でも、確かに部長の言う事にも一理ある。俺は皆と比べて弱っちい。

だからこそ、鍛えて鍛えて鍛えまくって強くならなきゃダメだ。

よおーしッ!! やってやるぞ! 打倒ライザー! そして目指せハーレム王!!



「お先にイツセー君」

ケツ!!イケメンは常にスマイルってか!

しかも汗一っ掻かずにスイスイ登るなんて……!!クツソ!あいつだけには負けてらんねえ!!

つて、アレ?そーういや小猫ちゃんはどうしたんだ?

俺が後ろを向こうとした瞬間、横に巨大な何かが通り過ぎる。

「失礼します」

」

小猫ちゃんは木場や俺以上の荷物を持ち、余裕のある表情で登っていく。

……クソオ……目から熱い何かが溢れ出て来やがるツ!!

「イツセー君大丈夫?」

「お、おう。なんとかな」

東崎はマイペースで歩いてるって感じか。

小猫ちゃんを見た後だからなんかインパクトに欠けるな……。

でも東崎も余裕そうに歩いてんな。

「ング……ふう……で、おっと空孫悟のドラゴン波が炸裂した。やっぱり空孫は強いなあ」

しかもお茶飲みながら漫画を読みつつ後ろ歩きなんてするなんて…俺も負けてられねえな。

………

………

………

………

………

………

いや、マイペースってレベルじゃねーぞコレエ!!??

え？なんで漫画？なんでお茶？なんでわざわざ後ろ歩きしてんだよ!!？

凄いインパクトとあつたわ!!っーかつツコミどころあり過ぎだろ!!

しかも読んでるのドラグソボールかよ!!？

あれ？ちよつと待て

……………その巻、俺が貸してるヤツじゃねえか!!

「あ、イツセー君お構いなく。僕は次の巻を見ながら行くよ……………お、やつぱり空孫悟とデルの戦闘シーンはいつ見ても燃えるな……………本家とはまた違う熱さがあるんだよなあ……………」

……………

「うおおおおおおおおおおおおおおおッ!!!」

コイツだけには負けらんねえ!!!

負けて、たまるかあああああッ!!!

~~~~~

「さて皆が着替えたところで早速修行を始めるわ。……イツセーどうしたのかしら?」

「はははは……いやあ、お茶を悠々と飲みながら漫画を読みつつ後ろ歩きをしているヤツに負けるなんて流石に心が折れかけているって言うか……」

「あらそうなの? (東崎にイツセーのやる気を出させる為に刺激して欲しいと頼んだのだけれど……やり過ぎたかしら)」

リアスはやや反省しながら、朱乃、アーシアと共に別荘へと戻って行く。彼女らは他の特訓の為の準備をするべく別行動となる。

そして残ったイツセー達でそれぞれ2組に分かれ組手をする事となった。

イツセーと木場は互いに木刀を手に剣術のトレーニングを行う。

戦う度にイツセーは木刀を喉元に突きつけられる。木刀を叩き落される等で負け続けている。

騎士としての特性による速さもあるが、経験、剣術と言ったあらゆる要素がイツセーを上回っている事がわかる。

「痛ッ!」

「ほらほら! 気を抜かない! まだまだ行くよ!」

「くっそ！全く勝てそうにねえよ…」

「何言ってるんだい。アツチを見てみなよ」

「えい！」

「！」

ブオンツ！

「ハツ！」

「ツ！」

ドツ！！

「たあっ!!!」

「よつとツ！」

シュンツ!!!

「東崎先輩、普通に防ぎますね」

「小猫ちゃんの攻撃をまともに受けたらヤバイからね。あくまでもいなしているだけ」

先程から小猫の方が優勢であり、怒涛のラッシュで攻めているが小猫の攻撃は全ていなされダメージは全く無いようだ。

「バい！ヤバいから！」

「情け無い……」

一発一発の攻撃が木を破壊する程の威力を持つ戦車の特性を持つ小猫との相手だが、まともに喰らえば吹っ飛ばされ、攻撃されれば、反撃で関節技を喰らう。

小さい女の子に手も足も出ない状況にイツセーは心が折れかけそうになっていた。

「うう……東崎はこんな攻撃を難なく受けていたのかよ……悪魔になってもアイツに勝つなんて無理なのか……?」

「そんな事ありません」

「小猫ちゃん?」

落ち込んでいるイツセーに小猫は声をかけ、タオルを手渡して来る。

小猫もタオルで汗を拭きながらイツセーに話しかける。

「確かにイツセー先輩はこの中でも最弱です。ですが将来性、成長力、爆発力に関しては群を抜いています」

「えっ!?? そうなのか!??」

「さあ? 東崎先輩がそう言ったので」

「えっ!??」

イツセーは木場と東崎の方へ視線を向ける。

そこには人間離れたした動きをする東崎と驚異の機動力で翻弄する木場の姿があった。

「——シャツ!!」

「——ハツ!!」

ガツ!!ゴツ!!ガンツ!!

互いの得物がぶつかり合う。

木と木がぶつかり合う音が響き、折れてしまうのではないかと尋ねるほどの衝撃だ。

そして東崎が木場の振り下ろした木刀を踏みつけ、喉元に木刀を突き付ける。

「——ハア——……やつとこれで3対1か……やつと1勝かあ」

「いや、だけど驚いたね。あんな戦い方をするなんて。まるで獣の如くの勢いだっただ。

剣を使うのは本当に初めてかい?」

「僕自身が使うのは初めてだけどね。一応知り合いの戦い方を真似ただけだよ」

ハハハと愛想笑いしながら木場は落ちている木刀を拾い上げる。

「成る程ね、だけど次は負けないよ。そう言えばイツセー君の実力どう思う?」

「うーん……多分だけど、すぐに追いついて来るのかな?」

「へえ、思った以上に彼を期待してるんだね」

東崎「うーん」と頭を掻きながら喋り出す。

「期待とかじゃなくて……イツセー君は必ず強くなる。絶対にね……それじゃあ続きよろしく。僕も負けてられないから」

それは人間やファンガイアなど関係無く、ただ負けられないライバルとして言葉だった。東崎は木刀を改めて構える。

木場もその思いが伝わって来たのか、応えるように木刀を構え直す。

イツセーはその光景を見た後、すぐに小猫と向き合い構える。

どうやら再び熱が入ったようだ。そして小猫とイツセーの組手は再開した。

~~~~~

「うおりやあああああああああああああああああッ!!」

「気合いがあるのは良いけど、入れ過ぎは空振りするよ!!」

——ドッ!!

「うッ!?!」

水平チョップが首に命中し、イツセーから苦しそうな声が漏れる。

「隙を見せると、容赦無く攻撃されるからね。ほら顎ツ！喉元ガラ空き！そして膝カッ  
クンからの鳩尾ツ!!」

ガツ！ドンツ！ズンツ!!

「ほら、とりあえずこうやって……」

「」

「あ……流石にやり過ぎだった？」

気を失っているイツセーに東崎は反省の意思を見せる。木場も思わず苦笑いをして  
しまふ。

「と、東崎君……、流石に人体の急所を続けて狙うのは……」

「うん、流石にやり過ぎたと思う……」

「先輩方お疲れ様です。……どうぞ」

すると、そこへ小猫が水分補給用の水を持ってくる。イツセーの方をチラリと見た  
後、何も見えていないような表情を見せる。

「お、ありがとう」

「先輩は……どうして私達の為に特訓に付き合ってくれたんですか？」

「確かに。何か理由でもあるのかい？」

小猫と木場が東崎に質問をする。

本来、彼はこの合宿に参加する予定は無かったのだが、東崎本人が自分から特訓に付き合うと志願した為、それが不思議だったのだろう。

「ん？あー……最初はね、イツセー君が頼んで来たんだよね。強くなりたいてさ」  
「イツセー君がかい？」

「んーとさ、イツセー君は昔からああでさ。曲がった事が大嫌いと言うか……主人公気質なんだよね。だから断るにも断れないと言うか……」

木場は東崎とイツセーの間に存在する確かな友情に驚く。

目の前にいるのは人間だが、ファンガイアでもある。自分達が知っているファンガイアのイメージとは全く違う。

いや、そもそも先入観のみで誤った認識をしていた自分達が間違っていたのだろう。

「成る程。君とイツセー君は……」

「あ、でもさ……それ以上に先輩がライザーさんみたいな、他の女性とイチャついている人と結婚するのは……」

ポリポリと頭を掻きながら東崎は間を置いてから喋り始める。

「まあ、アレだよ。イツセー君と同じ考えって事だよ」

「……………ふいふ」

「え？何か笑われたんだけど。もしかしてバカにされた？」

「いえ、先輩はファンガイアでも先輩なんだなって」

「…………？」

塔城は自分達と変わらない目の前の人物に不思議と笑いが込み上げて来る。

警戒していた自分達がバカバカしく思えてきたのだろう。

小猫は滅多に露わにしない顔を東崎に見せていた。

「……………ハッ!? い、今、東崎の親父を名乗る謎のいけ好かない野郎が!?」

「あ、起きた」

~~~~~

「魔力は体全体を覆うオーラから流れるように集めるのですよ」

「~~~~~ツ!!クツソ!これ難しいな。なあ、アーシアはどうだ」

「あ、できました!」

「——ま、まあ、アーシアなら出来て当然だよな(震え声)」

「そうですね……魔力の源流はイメージの具現化。得意なもの、いつも想像しているものなら比較的簡単に出来る筈ですよ？」

続いて、姫島による魔力のトレーニング。

東崎も隣で魔力操作に長けたキバットと共にトレーニングをしている。

「成る程。イメージか……」

言われた通りに頭の中でイメージを思い浮かべながら集中してみるが、集まった魔力は精々ビー玉程度の大きさだった。

その隣でアーシアは魔力の性質を変化させる特訓に入っており、再び落胆してしま
う。

~~~~~

続いて修行と思いきや、リアスに厨房へと連れられて行き魔力を使った夕飯作りとなった。

「りよ、料理……?？」

「ええ。日常生活の中で魔力を扱うことによつて、次第と魔力の集め方も覚えることも

できるし、応用の仕方にも身に付いていくのよ」

アーシアは言われた通りに鍋の中に入った水に魔力を送ると、ものの数秒で沸騰を始めた。

「魔力、便利すぎやしませんか……？」

「とにかく、今日の夕食は貴方達にお願ひするわね」

リアス部長にそう言われ、残ったイツセー、アーシア、東崎の3人はそれぞれ準備に取り掛かる。

東崎が慣れた手つきで野菜の皮を剥いていると、イツセーが野菜の皮を一瞬で剥くという光景を目にする。

「なんだよ……結構出来んじゃないか」

「止まるんじゃないぞ……」

するとイツセーは調子に乗り始め、片っ端から野菜の皮を魔力で剥き始めた。

そして、気付くと厨房はジャガイモと玉ねぎの皮だらけの空間と化していた……。

「げっ!!? やり過ぎた!?」

「何やってんだミカア!!? じゃなかった。イツセエ!!」

「と、とりあえず、皮の処理をしますね……」

「あ、それじゃあ夕飯は僕が作っておくからイツセー君はアーシアさんと一緒に後片付

けお願いね。これイツセー君がやったから拒否権は無いからね」

東崎の言葉にイツセーはげんなりとするが、アシアの笑顔に元気を貰いながら皮の処理を始める。

東崎はそんなイツセーの様子を苦笑しながら夕食を作り始める。

~~~~~

「まあ、美味しい」

「ああ、マジで美味しい！ うお、美味えええっ！」

「…美味しい」

その日の晩。

その日の修行を終えた一行はテーブルで夕食を頂いていた。

目の前にあるのはコロツケ、ポテトサラダ、肉じゃが、オニオンスープ、e t c、e t c……

ジャガイモ、玉ねぎを中心とした料理ばかりだが、どれも全員の舌を納得させる程の

美味しさであり、家事をこなす姫島にも美味しいと言わせる程、東崎の料理のスキルが高い事を証明している。

「まさかこれ程とは思わなかったわ東崎。いつも料理を作ってるのかしら？」

「はい。大体の家事は僕が」

「成る程ね……ところで、イツセー。今日特訓してみてどうだった？」

イツセーはその言葉を聞くと、箸を止め複雑な気分であつむき答える。

「…俺が一番弱かったです」

「……そうね。それは今、确实ね。特にイツセーとアーシアは経験が足りないわ。せめて、最低限でも相手から逃げきれる力をつけて欲しいわ」

「逃げる……ですか……」

イツセーは自身の弱さを改めて実感し、逃げる力もない事を知り落胆してしまふ。

すると、料理をパクパクと口に運んでいるキバツトが喋り出す。

「おいおい、そんな顔すんなって。それに逃げきれると逃げるは同じように見えて全く違うんだぜ？」

「どういう事だよ」

「相手から逃げられるつてのは、格上を相手にして生き延びるつて意味だ。無闇に背を向けてやられる逃げる事とは全然違うんだ。逃げるつていうのも戦術の一つ。だが、一

度相手に背を向けて逃げるといふことは倒してくださいつて言っているようなもの。実力が拮抗しているならともかく、力の差がはつきりしてるなら尚更な。ムグムグ……」

イツセーはキバットの言葉に感心する。

いつも東崎と共にいるキバットからまさかこんな助言を貰えるとは思ってもなかったのだろう。

「フフ、そういう事よ。もちろん戦う術もしっかり教えるから覚悟しなさい」

「了解すす！」

「はい！」

（良かったね。イツセー君、アーシアさん）

料理を頬張りながら東崎は元気そうな2人を見て東崎は負けてられないと心の中で思った。

「——さて真面目な話はここまでにして、ご飯を食べたらお風呂に入りましょう。ここは温泉だから素敵なのよ」

「へえー温泉か、いいなあ」

東崎はこう見えて温泉や風呂が好きであり合宿の間、毎日温泉に入れる事に嬉々とする。

それに対してイツセーは見るからにだらしない顔をしており、どう見てもエロい事を

考えている事が分かる。

「あ、ちなみに僕は覗かないからねイツセー君」

「僕も東崎君と同意見だね」

「ばっ!? 馬鹿! お前ら!!」

すると、女性陣達の視線が一斉にイツセーへ突き刺さる。

ちなみにイツセーと一斉をかけたギャグでは無い。

いや、マジで。

「あら、イツセー。私達の裸を見たいのかしら? なら、一緒に入るかしら?」

「マジで!?」

(マジで!??)

リアスの言葉に驚くイツセーと東崎。

「うふふ…殿方のお背中を流してみたいですわ」

「わ、私も……」

そしてイツセー共に入る事に抵抗が無い女性陣に東崎は啞然とする。

「私は嫌です」

「じゃあ、一緒に入るのは無しね」

期待していたのか、その言葉にバタリと倒れるイツセー。

そもそも男性に裸体を晒らすリアス達がおかしいだろう。

「そ、そんなあ……」

「イツセー君。僕の体でよければ好きなのだけ——」

「殴るぞテメエー！！！！」

取っ組み合う木場とイツセー。それを微笑みながら観戦しているリアスと姫島。

東崎はそんな光景を尻目に皿を片付け、呟く。

「…さて、温泉行くかな」

「それじゃあ、私も行きます」

「うん？……ああ、いいよ塔城さん」

こんな感じで1日は過ぎていく——。

『感じるぞ——俺の力を——返しても貰うぞ——キバ——!!?』

14話 狂気

ポタ……ポタ……

これで何度目だろう。殺しても殺しても無数に湧いてくる。

嗚呼、鬱陶しい。

手を赤く染め、首を飛ばし、四肢を引き裂いても、終わらない。

何回、何十回、何百回、この世界で人を殺したのだろう。

いや、目の前いる存在は人と言うにはあまりにも禍々しい存在だ。

『ファンガイア……殺す……』

『殺せ……コイツは生きてはいけない存在だ……』

『貴様は忌むべき存在……!!?』

血のような赤い鎧を纏った存在が襲い掛かってくる。

——ブチャッ

手を振り払うとそこに新たな血溜まりが出来る。

いい加減慣れた。

命を奪う事に躊躇が無くなった。

勿論、最初は命を奪ったと言う事実に関頭の中がグチャグチャになるような感覚に襲われた。

だが、その感覚もすぐに消えた。

前世では人間だった僕だが、今ではファンガイアとしての精神と成り果て、人間としての思考が残っているに過ぎない。

そんな僕の目の前には次々と自分を殺しにかかる生き物が無数に湧いて出てくる。

『こ……ろす……ああ……』

『ファンガイア……は……敵……！』

『憎め……全てを壊せ……！』

さらにゾンビの如く赤い鎧を纏う存在は蘇り性懲りも無く襲い掛かってくる。いくら砕いても、八つ裂きにしても、肉塊にしてもコイツ等は挑んでくる。

すると背後からコツコツと足音が聞こえて来る。

ソレは先程と同じく赤い鎧を纏った存在だ。

『ファンガイアは全て倒した……お前が最後だ、キバ!!』

……………誰だろうか、聞き覚えのある声だ。

いや、そんな事はどうでもいい。どうせいつもと同じく目の前に移るモノは全て殺せば夢が覚める。

僕とその存在は互いに殴り合う。

血反吐を吐き、身体中からボキリと嫌な音を出しながら殺し合う。

そして僕の拳が目の前の存在の鳩尾に深々と突き刺さり

——ボキヤツ!!

自分の手が相手の腹から背にかけての内臓、肉、骨を砕きながら貫通した。

カラン……………

『ガフツ……………どう……………して……………』

目の前にいる相手の頭部装甲が外れる。

そこに居たのは茶髪の見覚えのある顔だった。

……………

何故だろうか。

——グチャツ!!ブチブチブチツ!

『ガツ……!ゴブオツ!……ガハツ……とう……ぎ……き』

親友と同じ顔のヤツを殺す事に躊躇いが無くなっているのは。
おそらく、僕自身がファンガイアに染まって来たのだろう。

……だが、なんだろうこの虚無感は

親友と同じ顔なのに何も感じる事が出来ないなんて、嫌だ。
僕は人間の筈なのに。

これじゃあまるで化け物じゃないか

《ほう、これは驚いた。怨霊と化した歴代の魂の呪縛に囚われながらも精神を保つていられるとはな》

……？誰だ？

《ふむ、これは厄介だな。今の相棒ではとてもじゃないが正気を保ってられないな。貴様には悪いがしばらく、その魂を留めてもらおうか》

……まあ、いいか。簡単に言えば、コイツ等と気が済むまで殺し合えばいいだけの話だ。

《……忠告しておこう。アイツ等と殺し合うのはやめておけ。人間としての魂を削る事になるぞ？》

決めるのは僕だ。

《そうか。それじゃあな今代のキバよ。また会う機会があれば話し合おうしよう》

最終的に誰だったのだろうか。

まあ、いい。

それじゃあ、殺し合いの続きを始めようか。

『だめ……………て……………』

「……………誰？」

『駄目……………莉紅……………それ以上はやめて……………』

「……………母さん？」

~~~~~

………眩しい

カーテンの隙間から漏れ出す光が顔に射すのを感じる。  
重い瞼を擦りながら上体を起き上がらせる。

「ん……ふあわ……よく寝た」

のそのそのりと布団から抜け出し、カーテンをシャツと開ける。  
そこから一気に日光が僕の身体を照らし脳を覚醒させる。

「ん——っ！今日も良いてん……き………」

外を見ると、そこはまさに楽園だった。

緑豊かな自然が生い茂り、透き通った湖が日に照らされ輝き美しい光景を醸し出して



ぐつすりと寝ているキバットを起こさないよう、こつそりと台所へと向かって行った。

~~~~~

「えーと？冷蔵庫に入ってるのは……じゃがいも、玉ねぎばつか……」

そういえば最初の夕飯の支度でイツセー君がじゃがいも玉ねぎの皮を剥きまくったんだっけ。

それにしてもあの時は何故、団長ネタが出て来たのだろうか。

確かに始めて全話見た機動戦士だったけども。

そう言えばこの世界で機動騎士ダンガムと言うドール・アーマーと呼ばれるロボットを操って戦う有名ロボットアニメをイツセー君に勧められたっけか……。

本家もそうだけどOVAが面白かったな。

そう言えば、新シリーズで鉄骨のドルフィンズが出るんだっけか……。

よし、絶対にリアルタイムで見よう（断言）

そんな事を思いながらも冷蔵庫からじゃがいも、玉ねぎ、そして卵や肉と言った材料

を取り出していく。

「お、ミックスチーズやほうれん草もあるな……ふむ、スパニツシユオムレツでいいかな。あと朝はコーヒーにすべきか……それともお茶を出すべきか……」

「何をしているんですか？」

背後から声が聞こえてくる。この声の感じは塔城さんだろう。

とりあえず手を動かしながら塔城さんに飲み物のリクエストを聞いておくとしよう。

「あ、塔城さん。塔城さんって、朝はコーヒー派？それともお茶派？」

「……ミルクです」

成る程、確かにカルシウムは大事だよな。

待てよ？ホットが良いか、それとも冷たいままが良いのだろうか？

……まあ、そのままでも良いかな？

「そっか。それじゃあさ、これから朝食作るからちよつと待ってて——」

「……………」

……………

——ピヨコン

(。 ㇿ) ……………

(つ ㇿ) ゴシゴシ

あつ、あれえ？

き、気の所為かな？何故か塔城さんの頭から猫耳で生えているように見えたぞー？多分幻覚だろう。そうだ。きっとそうに違いない。まさかそんな異世界お馴染みケモミミ萌えパーツが装着されている訳無いよね。ハハハハハ

——ピヨコピヨコ

(; ㇿ) ……

(つㇿㇿ) ゴシゴシゴシ

(; ㇿ) ……!?

え？何これ。確かにここは異世界だけでも何？学園のマスコットって本物の猫耳が生えるもんなの？

て言うか既に耳が2つあるのにさらに増えて耳が4つっておかしく無い？

どんな構造になってんの？なんで頭頂部から耳生えてんの？どんな骨格してんの？内耳神経とか蝸牛神経とかどうなってるの？

まで、落ち着け。クールになれ、東崎莉紅。

『萌えの伝導師・K』のように冷静になれツ!!? いや、待てウツデイは流石にダメだ。しかもあの作品の登場人物達ほぼ死ぬやんけ。

「……………どうしました?」

……………

このまま猫耳の事をストレートに質問するか、それとも別の言い方で猫耳の事を気付けさせるか?と僕は考えるが

ぶつちやけ、悪魔とか墮天使とか天使がいる世界だから気にしなくて良くね?と結論に至った為

「……………ミルクはホット?それともそのまま?」

——僕はそのまま考えるのをやめた。

「……………ホットでお願いします」

「うん。それじゃあお皿用意して、それからポッドも一応……………えつとそれから……………ん？」
僕の背中に何かが寄りかかってくるようなものを感じる。

後ろの方へと視線を移すとそこには僕に寄りかかっただた寝している塔城さんが居た。

「すう……………すう……………」

……………

「……………不覚にもキウンとしてしまった……………」

あー、ヤバい。本格的にロリコンと化して来たよ……………マジか。

まあ確かに何というか塔城さんは小動物って感じの可愛さだけど、見た目は小学生ぐらいの見た目だからね？

うわあ……………イツセー君に毒されたのかな……………。

とにかくこのままでは色々と危ないので移動させる事にした。

「ん……………先輩……………」

「……………せめて、ソファで寝かせてあげよう」

そう一言呟き、ソファに寝かせ風邪をひかせないように布団をかけてあげた。

「……………ハア……………こりやロリコン確定だなー。コレで僕もイツセー君と同じく犯罪者予備軍の仲間入りかあ……………」

今の僕はきつと死んだ魚の目をしているのだろう。

だが、きつと修行の疲れが抜けていないのだろう。塔城さんが寝てしまうのも無理もないと思う。

しかもまだ朝早い為、眠いのも仕方ない事かもしれない。

とりあえず、全員分の朝食が出来上がりそうなところでそろそろ起こしに行くとしよう。

ちなみに最初に行くのはイツセーの部屋だ。

なんだかんだで女性の部屋へ行く事に抵抗があるので一番の友達の部屋から行く事にしたのだ。

木場君は……………入った瞬間、尻がやばい事になる気がするのは何故だろう。

「さてと……イツセー君。おは y——」

僕の言葉はそこで止まってしまった。

そこは僕の親友が使っている部屋だった。別にそこら辺にガチガチになったティッシュが落ちていた訳ではなかった。

ただ、イツセー君の部屋には別の部屋に居るはずのアーシアさんがイツセー君と同じベッドで寝ているのだ。

しかも、アーシアさんの服が別の物に変わっている。

しばらくするとイツセー君とアーシアさんは目を覚まし、こちらに気がつく。

「ん？……東崎か。お前はぐっすり眠れたか？」

「——」

「ん？東崎一体どうして……！」

イツセーは君は僕の視線を辿り自分の状況を瞬時に理解した。

「ち、違ッ！こ、コレは！秘密の特訓で……！」

すると、イツセー君の大きな声で起きたのか、アーシアさんが目を覚ます。

そして、僕とイツセー君を交互に見てニコリと挨拶。

「おはようございます」

「う、うん。おはようアーシアさん。ところで服はどうしたの？」

「じ、実は……夜中、イツセーさんの特訓で服が破けてしまい……」

僕はそのまま部屋を出て行こうとするとイツセー君が僕の服を掴んでくる。

「ちっ、ちげーよ!! えっ、えーと、アレだ! 外で! 夜中の外でやったから!!」

「青姦!!? え、マジで?!? やつたの?!? ちよつと引くわ……」

まさか幼馴染（悪魔）が居候のシスター（悪魔）が一線を越すなんて……赤飯の用意をした方が良いかな?

「イツセーさん、青姦って……?」

「良い加減にしろよテメエエエエエツ!!」

朝早くからイツセー君の絶叫が響き渡る。

ちなみに、この後、部長にめちやくちや説教された。

合宿も終わりに近づき、いよいよライザーさんとの決戦の日が迫って来たのだ。

~~~~~

「ブーステッド・ギアを使いなさい、イツセー」

本日の修業を始める前にリアスが一誠に言った。

「え？でも、この合宿中は使っちゃダメだって、部長が…」

「私の許可無しでは、ね。相手は…：東崎お願いしていいかしら？」

すると戦う相手が東崎と聞き、イツセーは一層と気を引き締める。

東崎も少し驚きはしたが、すぐに返事をしてイツセーの前に立つ。

「いいですよ」

「ええ。神器の発動から2分後に戦闘開始よ」

リアスに促され、東崎が一誠と対峙する。

「へっ、最初の方はボロ負けだったけどな、あん時と一緒にすんなよ！」

「勿論。そのつもりだよ」

構える東崎の答える形でイツセーが自身の神器であるブーステッド・ギアを発動させる。

「ブーステッド・ギア！」

【BOOST】

一誠の言葉に反応した神器が音声を発することで力が倍になる。

「もう一度よ。イツセー」

「ブースト！」

## 【BOOST】

何回も何回もリアスに言われるまま倍加を繰り返し、すでに10回目の倍加を迎えようとしていた。倍加を繰り返すといえは聞こえはいいが、実際は能力の増大に限界が存在する。

増大する力と、宿主にかかる負荷が比例するためだ。

簡単に言えばトラックが許容量を遥かに超える荷物を運べない事と同じである。

そして何回も何回も倍加を続け、リアスは目を見開く。

「ど、どういう事イツセー！これで20回目の倍加よ!?」

「へへっ……実は部長には内緒で特訓してたんすよね。やっぱり東崎には負けてらんないっすから」

「……予想以上の修行の成果ね……」

リアスはイツセーの神器を見つつも東崎に声をかける。

「東崎。キバとしてイツセーと戦ってくれないかしら?」

「……いいんですか?」

「ええ。それにイツセーもそれを望んでいると思うわ」

イツセーは無言で東崎を見据えている。

「どうやら覚悟は出来ているようだ。」

「キバット！」

「つしやあ！久々にキバって行くぜ！」

それに応えるように東崎は手元にキバットを呼び寄せる。

そしてイツセーはブースデッド・ギアを前に突き出す。

「変身!!」

「ブースデッド・ギアア!!」

【EXPLOSION!!】

初めて聞くその音声を引き金に、ブーステッド・ギアの宝玉が光を放つ。

直後に一層強い輝きが一誠を包み、東崎の身体は異形の姿へ変貌を遂げる。

「あれは…?」

初めて目撃する光景にアーシアは疑問を抱いた。

「あの音声によつて、イツセーは一定時間、強化された力を保つたままで戦えるのよ……」

「それじゃあ始め！」

ヒュンツ!!

「がつ!!?」



合図と共に東崎は飛び膝蹴りをイツセーに喰らわす。

騎士である木場と比べて劣るが、素早い攻撃を腹部にダメージを受けたイツセーはすぐに体勢を整える。

「つてえな！」

「…さっきのを受けてピンピンしてるとは……」

「お返しだ!!」

ドンツ!!!

そう言うといツセーは物凄い勢いで走り出す。

まるで大砲の弾のようなスピードで一直線に進むイツセーに東崎は防御の構えをする。

が、

「ちよつ、速ツッ?」

ズテンツ!!ズザザツ!!

イツセーは東崎の横を通り過ぎ転んでしまうが、すぐさまスライディングの要領で止まる。

「隙ありツ!!」

イツセーの背後に回りチョップを喰らわそうとする東崎。

だが、イツセーは左腕の籠手を盾代わりにして防御。そのまま東崎の足を掴み、

「オツラア!!!」

ブオンツ!!!

投げ飛ばす。

軽々と投げ飛ばされた東崎はそのまま着地の体勢を取るが、着地点を読んだかのようにイツセーは着地するタイミングと共に殴りかかる。

「オラアツ!!!」

ブンツ!!

「なんのツ!!」

「——ツととつ っ?」

だが東崎は着地する瞬間、身体を捻りイツセーの攻撃は虚しく空を切る。

すると攻撃を空振りしたイツセーの体勢が崩れてしまう。

それを見ていた小猫は呟く。

「イツセー先輩の身体がパワーに振り回されています」

「うん。イツセー君は僕達の予想以上の成長を見せた。だけどイツセー君自身、倍加されたパワーに慣れていないみたいだ」

先程から何度も何度も攻撃を外しては腹パンをされ、攻撃を外しては腹パンをされている。

「ツクそ……おい東崎！ちまちまやるんじやねえ！正々堂々と戦いやがれ!!!」

「ええー、そんな事言われても……しようがないなあ」

そう言うのと東崎は地面に手をつける。

そしてそのまま地面に魔力を流し紋章の形へと変化させる。

「ハアツ！」

「な、なんだこれ——」

バチバチバチツ!!!

「がああつ!!?」

するとイツセーの背に紋章が触れるとイツセーは縛り付けられたように動きが止まる。

そして東崎は

「ハツ!!」

ズドツ!!

「グアツ!!?」

サイコキネシスのようにイツセーを引き寄せるとタイミング良く蹴りつける。

そのままイツセーは背後の紋章に衝突する。

バチバチバチツ

「ぐああッ！」

またもや紋章のダメージを喰らったイツセーは謎パワーによって東崎の元に引き寄せられ

「ハッ!!」

ズドツ!!

「グアッ!!?」

紋章にぶつかり

バチバチバチツ

「ぐああッ！」

謎パワー+蹴り

「ハッ!!」

ズドツ!!

「グアッ!!?」

紋章にぶつかり

バチバチバチツ

「ぐああッ！」

謎。パワー＋蹴り

「ハッ!!」

ズドツ!!

「グアッ!!?」

これぞ東崎が魔力の特訓によって開発してしまったキメ技ならぬHAME技。  
もはやイジメである。

「やめて下さい東崎さん!!? イッセーさんのライフはゼロです!!」

「東崎君!!? 流石にやめてあげて!!? イッセー君が某究極生物のように考えるのをやめた状態になってるから!!」

「酷いハメ技を見ました」

「あらあらウフフ（流石、東崎君。やはり貴方と私は同類……!）」

上から順にアーシア、木場、小猫、姫島がそれぞれの感想を述べる。最後に至つては感想かどうか分からないが東崎はハッと我に返り、ハメ技を中止すると、イッセーがバ

タリとその場で倒れてしまう。

「し、死ぬかと……思った……」

だが、数分も経たずにイツセーは立ち上がる。

全員は東崎の強さに驚いていたが、それ以上にイツセーのタフネス、根性っぷりに驚愕を露わにする。

「へへっ……仕方ねえ。こうなったらとっておきのアレを使うしかねえようだな……  
!!」

「い、イツセーさん！もしかして服を破くあの——！」

「いや、違うから！それじゃ無くてもう一つの方だから！」

「もう一つ？と言うか服を破くって何？」

「何でもねえよ！とにかく！俺の特訓の成果の1つ見せてやるぜ!!」

するとイツセーは神器を真上に掲げて目を瞑り集中する。

「集まれ！俺の全身に存在する煩惱くじや無かった魔力——ツ!!」

そして手の平からビー玉程度の魔力の塊が出現する。

「ちっさ!?？無理無理!!？こんなんじや必殺技無理！」

「大丈夫よイツセー！ブースデッド・ギアは倍加の能力を持つ神器！小さな魔力でも大きなものへと変化するわ！」



爆音が止み、イツセーは恐る恐る顔を上げるとその光景に言葉を失った。

「わお……」

「あらあら……」

「山が……」

「なくなつてしまいました……」

彼らの目に、イツセーの一撃で大きく抉られた山の全容が飛び込んできた。

「ま、まじかこれが俺の……ちか……ら……」

ドサリ

呆気にとられるイツセーだったが、一秒もしない内に全身にかつてないほどの脱力感を覚えると同時に彼はその場で倒れていた。

「イツセーさん!」

すぐアーシアが死んでしまったように地面に倒れるイツセーの元に駆け寄る。

「……さすがに力を使い切ったみたいね。東崎。彼はどうだった?」

「流石に死ぬかと思いましたが……」

「い、生きた心地がしなかつたぜ……」

変身を解いた東崎はぐったりとした表情を見せ、キバットも予想外のパワーに驚いたのか東崎同様に疲れた表情を見せている。



その様子にリアスは安心したかのように微笑むとそのままイツセーの元へと歩いて行く。

「イツセー。貴方は私の予想を遥かに超える成長を見せたわ。先程の攻撃はまさに上位悪魔クラス、いえ、下手をすると魔王クラスに匹敵するかもしれないわね」

リアスはそのままだイツセーに肩に手を乗せる。

「あなたはゲームの要。恐らくイツセーの攻撃は状況を大きく左右するわ。私たちを、そして何より自分を信じなさい」

「みんなを…。自分を…」

一誠は言葉を噛みしめながら、自分の中に自信が満ちていくのが分かった。

「あなたをバカにした者に見せつけてやりましょう。相手がフェニックスだろうと関係ないわ。私達がどれだけ強いか、奴らに思い知らせてあげましょう！」

「『はー！』」

「東崎。今更言うのも何だけど……こんな私達に手を貸してくれないかしら。悪魔やキバは関係無く、オカルト研究部の1人として、駒王学園の生徒リアス・グレモリーとして私達に力を貸して欲しいの！」

「……勿論ですよ。当たり前じゃないですか！」

東崎はリアスの言葉に笑い返すようにグッとサムズアップをする。

その場の全員の気持ちが一つになるのを感じる。

決意を新たに結束を深め合った山籠もり修行は順調に進んで行き、ライザーとのレーディングゲーム決戦当日を迎えたのだった。

~~~~~

「はあー……久しぶりの我が家だ……」

「何て言うかアレだな。安心感があるな」

自宅に帰って来た東崎とキバツト。

手元には山で採って来た山菜が沢山詰められたタツパーが入っている袋を持っている。
る。

ドアに手を掛けようとした東崎だったが彼はとある違和感を感じる。

「そういえば……何か忘れてない？」

「……確かに……まあ、いいじゃねえか。さつさと部屋に戻ってゲームまでゆつくりしようじゃねえか」

「それもそうだね。それじゃ、ただいまー皆！お土産買って来t

アームズモンスター

ガルル、バツシヤー、ドツガ。

特にバツシヤーが狂気となった為、レーディングゲームに不参加決定。

15話 開戦

レーディングゲーム当日。

ゲームは異空間で作られた駒王学園のダミーで行う。

そして修行を終えたメンバー達は各々レーディングゲームの準備をしていた。

だが、開始時刻の10分前になっても東崎は現れなかった。

「何やってんだ東崎のヤツ……」

リアスの未来がかかっている一戦だと言うのに東崎が来ていない事に内心不安になるイツセー。

すると部室の魔方阵が光りだし、グレイフィアが現れる。

「皆様、準備はよろしいですか？」

「ええ、いつでもいいわ」

「え？でも、部長！まだ東崎のヤツが来てないんですけど……？」

「大丈夫よ」

慌てる一誠に対しリアスは余裕の笑みで返した。

しかし、グレイフィアが冷静に告げる。

「ですがゲーム開始の時間は変更できません。残念ですが、現時点で東崎様は失——」

ガツシヤアアアンツ!!!

「「「「「?」」」」」

「すいませーん！遅れましたッ！」

失格と言いかけたグレイフィアの言葉を遮る声が聞こえた。

いや、声と言うよりも窓ガラスを壊す音に遮られた。

最後のガラスをぶち破れ〜とと言う感じに東崎が窓から突入してきたのだ。

「あ、いや東崎?なんで窓から?」

「すみません。ちよつと、家にいるペット?達の世話をしている遅れてしまいました……あれ?なんか頭から熱いナニカが……」

リアスが頭にガラスの破片が突き刺さりドクドクと血を流しながらも呑気な東崎の行動に呆れ額を抑える。

グレイフィアは少々驚きながらも淡々とレーディングゲームの説明をする。

「部長のお兄さんは魔王様だよ」

戸惑うイツセーに裕斗がさりりと答えた。

それに対してリアスの表情は複雑そうに見える。

「魔王!?! ホントですか、部長!?!」

「…ええ」

「キバツト、知っていた?」

「知ってた」

「教えてくれても良かったのに……」

東崎はそんな事実を隠していたキバツトに対しむつと口を尖らせる。

「紅髪クリムゾン・サタンの魔王こと、サーゼクス・ルシファー」

それが今の部長のお兄さんさ。サーゼクス様は大戦で亡くなられた前魔王、ルシファー様の後を引き継いだんだ」

祐斗の説明で、魔王の名前は現在では個人名ではなく役職として機能していると理解した。

「それでリアスさんはグレモリー家の跡継ぎに……」

「そうだったんだ……」

「……………」

イツセーが納得している隣で東崎の表情が先程と比べて引き締まっている事が分か

る。

東崎はおそらく四大魔王がリアスの身内と言う事実には納得出来ないのだとイッ
セー達は考える。

それもその筈、本人は気にしていないと言っていたが魔王と言えば悪魔の頂点。
同族を殺した仇なのだ。

グレイフィアもその事を察知したのか東崎を見つめている。

そんな風に思われている東崎本人と言うと

（サーゼクスってあれ……？どつかで聞いた事のあるレベルじゃないんですけど。なん
て言うか、すっごい聞き覚えのある名前なんですけど……確かに部長と同じ髪の色して
ますし……まさかね……）

当たらずとも遠からずだった。

しばらくして彼らの目の前に新たな魔方陣が現れた。

それを見て全員が一層気を引き締める。

「そろそろ時間です」

グレイフィアに促され、リアスが立ち上がる。

「行きましょう」

リアスを先頭に全員が魔方陣に集結する。

そして光が彼女たちを包み込む。

「東崎」

リアスが東崎に呼びかける。

「好きなように動いて頂戴」

レーディングゲーム開始。

~~~~~

転移した先は駒王学園を模した疑似空間だった。

そして、リアス達の拠点となる旧校舎の森の中に4つの人影が現れた。

ライザーの「兵士」、シュリヤー、マリオン、ピュレントの3人だ。

「ふふふ、まさか誰もいないなんてね」

「これはチャンスね。一気に攻め落とすわよ」

彼女達の目に旧校舎が映り始める。

レーティング・ゲームのルールでは“兵士”が敵本陣に到着すると“昇格”することが可能になる。

攻め込むチャンスだと思った彼女達は足を進める。

「ん？何かしらアレ？」

すると“兵士”の1人マリオンが視界の端に何かが落ちている事に気づく。

彼女は勝手にその落ちているモノを探りに足を進める。

「ッ!? コレはッツ!!」

彼女はソレに目を離すことができなかつた。いや、どうやれば目を逸らす事が可能だろうか？

だが、彼女は気付かなかつた。

背後から近づいて来る人影に——

「——羽を出せ」

「へ？」

~~~~~

その頃、体育館にてイツセーと小猫はライザー眷属の”兵士”3名、”戦車”1名と激闘を繰り広げていたツツ!!

「先輩は”兵士”をお願いします。私は”戦車”を」

「ああ!」【ブースデッド・ギア】スタンバイ!」

【BOOST】

「解体しまーす!」

「行きます!」

チエーンソーを構える双子のイル、ネルと棍使いのミラの“兵士”達がイツセーの前に立ち塞がり、小猫の前には同じ“戦車”の雪蘭が対峙する。

イツセーは敵を前にしてニヤリと笑う。

「それじゃリベンジも兼ねて、行くとするか!」

「バラバラになっちゃえーッ!」

「よつと!」

「このーッ!」

「危なっ!」

イツセーは危なげに2人のチエーンソーによる攻撃を避ける。

そして、ミラがイツセーの背後から襲いかかる。

「貰った——!」

「よっ!」

ガシッ

しかしミラの攻撃は楽々と防がれる。

「なっ!?」

「東崎と比べれば大した事ねえな!!!」

【BOOST】

二段階目の強化によってイツセーは搦んだ棍を手刀で折り、そのまま掌底をミラに叩き込む。

「ぐっ！」

「このーッ生意気！」

「次はお前等!!」

イツセーは2人の攻撃を楽々と躲しながら2人の身体に触れる。

イツセーがチラリと小猫の方へ視線を向けると小猫はマウントを取り雪蘭を拘束していた。

どうやら、既に決着がついたようだ。

イツセーも自身の勝負に決着をつける事にした。

「さて、こつちもフィニッシュと行くか！」

イツセーは左腕を上に掲げる。ニヤリと悪い顔をしながら叫ぶ。

「喰らえ俺の新必殺技! 『洋服崩壊』ドレス・ブレイク ツ!!」

——パァンツ!!!

刹那、彼女達の服が破け裸体が露わとなる。

小猫も少々驚いている中、イツセーはニヤリと笑みを浮かべる。

(お前ならやってくれると信じてたぜ! 東崎!!)

イツセーと小猫は動けないライザーの眷属を放置して体育館から出る。

そして

——ドガガガガガガガッ!!!

雷撃が体育館に襲いかかる。

雷撃が止むとそこには見るも無残な体育館の姿があつた。イツセーが上空を見上げるとそこには姫島が飛んでおり、彼女の雷撃による攻撃だと分かる。

ちなみにイツセーは心の中で姫島を怒らせないように誓つたの言うまでもない。

「やったな小猫ちゃん」

「……触れないで下さい」サッ

ハイタッチしようとしたイツセーだったが先程の洋服崩壊を見た所為か、小猫は一瞬でイツセーから遠ざかる。

「な、なんでそんな態度取るんだよ!?」

「最低な技を使われたら困ります」

「んな訳無いだろ!!」

イツセーがそう言っていると、リアスから全員に配られたイヤホン型の通信機から連絡が入る。

その瞬間

イツセーがリアスからの連絡によって気を取られた一瞬、小猫から目を離したその一瞬、イツセー達は小猫に迫る攻撃を気付く事が出来なかった。

——ドオオンッ!!!

「ッ!??:小猫ちゃんッ!!?:」

小猫が居た場所に爆発が起きた。

イツセーは何が起きたか理解できなかったが、上空にライザーの“女王”がいる事を確認し、攻撃を受けてしまった事を一瞬で理解した。

「撃破^{テイク}。フフフ、足掻いても無駄。貴方達にライザー様を倒す事は不可能よ」

「テメエッ!!降りて来やがれ!!俺が相手だ!!」

「威勢のいいボウヤね。貴方もさっきのお嬢ちゃんのように爆発してみる?」

「上等だ!! 返り討ちにして――

「大丈夫だ」

「!!」

爆煙が晴れていくとそこには、コウモリを模した甲冑を纏った仮面の戦士が小猫を抱きかかえていた。

「せん……ぱい……」

「僕が居る」

「東崎! お前いつの間に!!」

「……キバか!」

キバ改め東崎は小猫をその場で降ろすと、ファイティングポーズを取る。

東崎を加えて、三対一と言う状況となった。

”女王”のユーベルーナは苛つきながらも東崎へ言葉を投げかける。

”兵士”達を倒したのはキバ……貴方なのかしら

「ええ、勿論ですよ。話にもなりませんでしたが……」

「ツ！貴様……！」

2人の間に互いのオーラがぶつかり合う。

一触即発の雰囲気にはイツセーは圧倒されるが、その間に姫島が割って入る。

「東崎君、イツセー君、小猫ちゃん。貴方達は木場君と合流を！」

「朱乃さん……分かりました。行こうイツセー君」

「お、おう。分かった……あれ？小猫ちゃん？」

その場から離れようとしたイツセー達だったが、小猫は手にグローブをはめ直しながら姫島の隣に立ち、ファイティングポーズを取る。

「私も戦います……先程の仕返しです」

「あらあら、フフフ……しようがないですね。後でリアスに説明しておかないですわね」

「……東崎先輩、いえ莉紅先輩」

「？」

小猫は東崎に背を向けながら話しかける。

「私の名前は小猫です。いつまでも塔城は嫌です……」

「……負けないでね小猫さん」

「む……」

小猫は東崎の名前の呼び方が気に入らなかつたのか頬を膨らます。

そんな事を知る由も無く東崎とイツセーはグラウンドへと向かつて行った。

16話 仇

「ここは体育用具倉庫。そこに3人の男達が居た。

「ここに居れば……ひとまず安全なのか？」

「2人ともお疲れ様。特に東崎君は兵士達を相手に1人で良く頑張ったね」

イツセー、東崎、木場の3人だった。いや、正確にはキバットを含め十一匹なのだろう。

彼等はりアス・グレモリーの指示の元、合流し倉庫の中で身を潜めていた。

「ま、あの程度……俺達の敵じゃ無いって所だな……で？グレモリーの騎士様よ、この状況
どう見る？」

「……………犠サクリフアイス牲」

木場がポツリと呟く。

イツセーは聞き慣れない木場の一言に疑問を抱き、キバットが答える。

「自身の駒を犠牲にして状況を有利にする戦術さ。簡単に言えば自身の眷属を捨て駒にしているのさ」

「チツ……：気に入らないね、僕の最も嫌う戦術だ……」

（……え？舌打ち……？コイツがつつり舌打ちしなかったか？！？）

木場の舌打ちにイツセーは冷汗を掻きながら思う。

そしてイツセーは雰囲気を変える為、東崎に話題を投げかける。

「そ、そう言えば兵士達を簡単に倒すなんて流石だな東崎！」

「……え？あ、うん」

「ああ、そうだね。兵士達を倒したにも関わらず王が挑発ライザに乗ってこないのは残念だけどね」

「おつ、なんだ？さつきまでの腹黒そうな面はどうしたんだよ？」

「えっ？僕、そんな顔していたかい？」

「んだよ、気付いてなかったのかよ！」

イツセーと木場がじゃれ合っている中、東崎は黙っていた。

と、言うよりも先程、質問された兵士達との戦いの内容について彼は何も言えなかった。

~~~~~

——今から数十分前。

”兵士”の1人マリオン。

彼女は旧校舎の裏側に存在する森で1冊の本を見つけた。

「ここ、これは……!??人間界のジャパニーズカルチャーから発祥され、その中でも禁忌の領域に存在すると言う、伝説の……ウゝス異本!??」

【ウゝス異本】



それは独立した多くの書物の総称である。

近代技術を駆使する事で急速に広まり、読み続ける事で少しずつ正気を失い混沌に引きずり込まれてしまう禁忌の書物。

悪魔、天使、墮天使達の中でもその書物の存在は知られている。

今も尚、常が増え続けており彼女の主人であるライザー・フェニックスもその書物に魅了されてしまった者の一人だ。

しかもその書物の表紙には半裸の2人の男性が写っている事に加え

彼女の。パトス的なナニカを刺激する——ッ！

「おおおお、落ち着きなさい！わわ、私！しし深呼吸……フーツフーツフーツフーツ  
フー……ッ！状況を見る限り、これは罠……！くっ！おのれファンガイアめッ！（歯  
ギリイッ）」

戸惑ったと思えば急に冷静になり、何故か東崎に逆恨みもとい、敵意を抱く。  
しばらくして彼女は書物を手に取り、呟く。

「ウゝス異本なんかに負けたりしない」キツ!!?

~~~~~そして数分後

「……………（ウゝス異本には勝てなかったよ…）」

ペラッ

黙々と本を読み続けるマリオン。

先程までの威勢はどうしたのだろうか、びーえる時空混沌に引きずり込まれてしまい、彼女はレーディングゲームそっちのけで次のページをめくる。

「……………」

そんな腐った女性を仮面の下で悲しい者を見るような目をする【仮面ライダーキバ】

こと東崎莉紅。

彼の手には数枚の悪魔の羽が握られていた。

(ああ、この人”も”なのか……………)

東崎は心の中でそう呟くと彼女の背後に立つ。

彼はこのような女悪魔を2人見てきた。

……………ついさっきの事だが。

彼は合掌を行い、ガシリと悪魔の羽を掴む。

「——羽を出せ」

「へ？」

——ブチッ!!!

——あああああああああああああッ!!?

~~~~~

~~~~~  
酷い回想だった。
~~~~~  
回想終了。

「恐るべき敵だったなあ（遠い目）」

「ああ、俺達の敵じゃなかったがな（遠い目）」

東崎達が酷い回想にややや逃避し、その後ろでイツセーは「流石、東崎！」と言っている。

真実と言うのは時に辛いモノだ。

「それにしてもあの本、まだ絶版にされていなかったのか……」

前に漫画部が作り出し、生徒会に没収された筈の本。

まさかあんな所旧校舎辺りに隠されていたとは思ってもいなかった。

まあ、結果的に勝てたので東崎は何言わない事にした。

後ついでにレーディングゲームが終わったら生徒会に漫画部を廃部してもらえよう申請しようと思った。

「……イツセイ君、東崎君。僕は歓喜と共に恐怖を感じている。僕はこの手の震えを忘れたくない。この緊張も張り詰めた空気も全て感じ取って自分の糧にする……お互いに強くなろう」

「木場君……」

東崎は改めて木場の強くなりたいたいと言う確かな思いを認識させられる。

リアス・グレモリーの騎士として恥じぬよう彼はこの戦いをも自身の経験値にしようとしているのだ。

「……ああ、そうだな」

イツセーも東崎の思いに便乗するように肯定する。

「んじゃ、女子が見て興奮するようなコンピネーションでも展開すつか」

「……!?」

「ハハハ！僕が『攻め』でいいのかな？」

「!?!」

だが、東崎の目の前でとんでもない光景が広がる。

しかも木場自身、無意識なのだろう。イツセーと距離がもの凄く近い。東崎に謎の悪寒と共に尻がキュツとするような謎の感覚が襲いかかる。

「それじゃあ……東崎君は……」

「やだッ!!絶対嫌だねッ!!僕にそういう趣味は無いからッ!!」

東崎はブンブンと激しく首を横に振りながら後退りを行う。

その様子に木場は目を見開いた後、目を閉じ口を開く。

「そうか…そうだよね……。僕は、いや僕達、悪魔はファンガイアを敵視していた」  
「うん……………うん？」

「それに加えて僕の主人は君の同胞を殺した仇である魔王様と血縁関係だ。今更僕達を信用しきれないのは分かっているさ」

木場は東崎の言葉を尻目に口調を強くしていく。その場に居たキバットもその様子に引き気味だ。

「その気持ち理解できる……………なんて言っても信じてくれないかもしれない。だけど、僕と君は同じなんだ。同じ復讐鬼なんだ」

「……………え？あ、うん」

「だからこそ、僕は君の信頼における友人として戦うよ」

「……………へっ、水臭いじゃねえか木場。俺もだぜ」

「イツセー君……………！」

いつの間にか凄く盛り上がっているイツセーと木場。

それに対して東崎は「ええ…」と困惑の声を口から出すしかなかった。

「なんか色々と勘違いされて無いか？」

「これ以上言ったら更に面倒臭そうな事になると思うから黙っていいようか」

東崎とキバットが黙り込み、しばらくして倉庫の中がなんとも言えない雰囲気となりつつあるこの状況をぶち壊す者が現れる。

「私はライザー様に使える”騎士<sup>ナイト</sup>”カーラマイン！」

「……見つかったみたいだね」

3人と1匹が扉の隙間から外を見ると剣を携えた女性がグランドの真ん中で堂々と名乗りを上げていた。

彼女は騎士道精神が高いのだろう。

近くに仲間らしき人影も見えるが戦闘態勢では無いように見える。

すると、木場が「ふっ」と笑みを浮かべる。

「な、なあどうする？コレって罠じゃねえのか？」



「仕方ない……キバット。毒を塗った吹き矢でも使つて眠つて貰おうか」

「莉紅つて時々、怖い事言うよな」

「コソコソと腹の探り合いをするのも飽きた！リアス・グレモリーの騎士よ！いざ尋常に剣を交えようではないか！」

敵側の騎士、カーラマインの言葉に木場は嬉しそうに頷くと扉に手を掛ける。すると彼はガラツと言う扉を開ける音と共に外へ出て行つてしまふ。

「……名乗られてしまったら隠れているわけにもいかないか……騎士として」

「お、おい!?？」

「ありや駄目だな騎士道精神が……立派な事で」

イツセーの制止を振り切り敵の前へ向かう木場。

そんな彼を止めても無駄だと言うキバットに東崎は苦笑いをする。

「僕の”騎士”の木場祐斗」

「俺は”兵士”の兵藤一誠だ！」

「誇り高きキバツト族の名門、キバツトバツト家の3代目。キバツトバツト三世！」  
「えつと……以下省略。東崎莉紅」

それぞれ自己紹介を行うメンバーに対してカーラマインは「ハハハ」と急に笑い出す。  
「堂々と真正面から出て来るとはな、お前達のような戦士がいてくれて嬉しく思うぞ。  
私はそう言う馬鹿が大好きだ！」

「…お前が言うかよ」

カーラマインの言葉にイツセーがツツコミを入れる。すると東崎はポンと手を叩く。

「あつ、さては貴女……馬鹿だな!!!」

（ストレートに言った!??）

「ハハハ！よく言われる!!」

（こっちは誇らしげ!??）

堂々と笑いながらカーラマインは腰に携えた剣を手に取り切っ先をこちらに向ける。

それに対し木場も剣を構え、切っ先を向ける。

「騎士同士の戦いを僕も待ち望んでいた。尋常じゃない斬り合いを演じてみたいものだね」

「よく言ったりアス・グレモリーの騎士よ！」

——ギインツ!!!

2人は駆け出し、剣と剣がぶつかり合い火花を散らす。

騎士達は激しい剣戟を繰り広げ、イツセー達はあまりの迫力に近づけない様子だった。

すると、後ろから2人の女性が近づいて来る。

顔の右半分には仮面を付けた女性と金髪縦ロールの女性だ。

「暇そうだな」

「全く…泥臭くて堪りませんわ。剣の事しか頭に無いんですもの」

「残りの奴等か！ブースデッド・ギアスタンバイ!!？」

「あら、私はやりませんわよ。イザベラお相手してあげたら?」  
「と言う事で彼女は観戦するだけだ。私が相手をしよう」

金髪縦ロールの言葉にイザベラと呼ばれた女性は前に出て来る。  
するとイツセーは彼女の傲慢そうな態度に怒りを覚える。

「なんだそりや! 大事なゲームなのに!」

「あの方はレイヴェル・フェニックス。ライザー様の実の妹君で特別に観戦している」  
「……え? 妹?」

「は、はああああああああああああああああああ!!?! 妹を眷属にするとかアリかよ?!」

東崎とイツセーはライザーの妹が下僕に属していると言う事実には驚愕を隠せなかった。

するとイザベラが口を開き説明をする。

「ライザー様曰く、『妹をハーレムに入れる事は世間的に義務がある。ほら? 近親相姦つ

ての？憧れたり羨ましがる者は多いじゃん？まあ俺は妹萌えじゃないからカタチとして眷属悪魔って事で』…だそうだ」

「いや、普通にクズじゃん！特に妹萌えじゃ無いって所!!？」

「あの鳥は本当の変態で馬鹿だったか!!俺も欲しいぞ！」

「イツセー君、本音漏れてるから」

イツセーの言葉に東崎はツッコミを入れる。  
するとイザベラは拳をこちらに向け構える。

「話は終わりだ……では行くぞ！」

「くっ！やってやるよ!!」

そのままイツセーもイザベラとの戦闘を始める。そしてその場には東崎とキバツトだけがポツンと残されていた。

「さて……どうしよう」

「貴方は戦わないのですか？」

すると、上空で炎の翼をはためかせ優雅に飛んでいるレイヴェルが話しかけて来る。

「フアンガイアは危険だから野蛮で危険な種族——と聞いていましたが……実際に見るとそうとは思えませんか」

「いや、まあ……そう言われてもなあ。レイヴェルさんは参加しないの?」

「先程も申しましたように私はあくまでお兄様のレーディングゲームを観戦するだけ。それに私が居なくとも結果は既に見えておりますわ」

レイヴェルの高圧的な態度に気が触ったのか、キバットが言い返す。

「これはこれは既に勝ったつもりか? フェニックスの妹君」

「ええ、性格はアレですがお兄様の実力は本物。それに……貴方は既に囲まれていますわ」

ザザツ

すると、東崎とキバットの周りには残り全ての眷属達が揃っていた。これはおそらくレイヴェルを使った罠だったのだろう。

レイヴェルに気を取られ、他の眷属の気配に気付けなかったのだ。

「やべっ！ 莉紅囲まれた！」

「見れば分かるよ……キバット！」

東崎はキバットを掴むと自身の手に噛ませベルト出現させる。

「変身ッ！」

そして仮面ライダーキバへ変身を遂げ、前後左右の敵に警戒するように構える。

「くそっ！ 最初からヤツの狙いは東崎かよ！」

「今更知った所でもう遅いッ！」

イツセーが東崎の加勢に入ろうとするがそれをイザベラが阻止する。

木場も敵である騎士と戦い、助けに入れない状態だ。

「実質、僕1人でこの人数を相手か……」

「おい、俺もいるぜ！」

「安心してください。先程も申し上げた通り私はあくまでも観戦するだけ……ですが」

瞬間、前後左右4人の眷属が東崎に襲いかかる——ッ！

「どこまで耐えられますかね？」

「くっ」

東崎はその場で転がり込むようにして回避。

だが、そこに猫耳を付けたセーラー服の女の子2人が追撃をして来る。

「にゃー！」

「にゃあつー！」

「っー！」



2人の蹴りを腕をクロスして防ぐが、背後から他の女性が攻撃を仕掛けて来る。

それを回避してもまた別の者の攻撃を喰らってしまう。

1人を相手にするならば苦戦する事は無いが、流石のキバも1対4では防戦一方、反撃に転じるのが困難だった。

「おい莉紅、こりゃキツい！戦い方を変えるぞ！」

「分かった」

東崎がそう言うのとベルトに装着されているホルダーから手の平サイズの青い笛を取り出す。

そのまま青い笛《フェッスル》をキバットに啜えさせる。

「次狼さん、月光の力…お借りします!!」

「行くぜ……『ガルルセイバーッ！』」

「ッ！何ですの!?？」

笛の音色がレーディングゲームの空間内で響き渡る。

空高くまでその音色は届く。

そして、しばらくしてからキバは空に向けて手を掲げる。

.....

.....

.....

.....

「あ、あれ？」

「ありや？どうしたんだ？『ガルルセイバー！』『ガルルセイバー！』『ガルルセイバー！』『おいどうして来ないんだ！アホ狼！』」

東崎達がガールルを呼んだ筈なのに全く変化が無いことに対して混乱し焦り始めていると、東崎の耳元でふと誰かの声が聴こえて来る。

その声の主は今、呼んでいる次狼ガールルの声だった。

——莉紅、すまないがラモンの空腹による発狂が未だ治っていない。悪いがそつちに行くのは無理だ。

「ええ！無理なの!!?」

「ふざけんじゃねえよ！さっさと来い！クソ狼！」

——良いのか？俺が抑えていないとラモンが何を仕出かすか分からん、ちよつと待てるラモン何をやってる！何？『大いなる闇』の召喚？馬鹿やめろ！おいリキ！ラモンを止め

「え？何、どうしたの!!?なんか物騒な単語が出てきたんだけど！家で何やってんの!!?ねえ！」

——グッ、悪いが莉紅、そっちは任せた！こっちはなんとかラモンを止めてみせるッ！うおおおおおおおおおッ！！

そのまま次狼の声は一切聴こえなくなってしまった。

東崎は「ええ…」困惑した声を漏らす、敵は待つてもくれず攻撃を仕掛けて来る。

「くそっ！あの3バカは使えねえ！とにかく何でもいい！連携を崩せ！」

「えっと……！」

「ファンガイア！討ち取ったり!!」

「くっ！どうにでもなれッ！」

ライザーの騎士が東崎に向かって剣を振りかぶる。

東崎は咄嗟にホルダーから1つのフェッスルを取り出すとキバットに吹かせる。

「くそっ！『ブロンブースターッ!!』」

「何をしようとしても——」

……ヒュウウウウウウウウウ

「無駄d——ぎゃふっ!?」

ズドンツ!!!

すると、目の前に居た眷属の1人が空高くから降って来た金色のモアイのような像によって押し潰される。

「……………え?」

「ふ、不覚……………」



「いくぜ必殺！弾けるッ！『洋服崩壊』ッ!!」

——パァンッ!!!

瞬間、イザベラが羽織っていた服が一瞬の内に弾け飛ぶ。

突然の出来事に彼女は自身の身体を腕で隠す事しか出来なかった。

「なっ、なんだコレは!?？」

「更にッ！新必殺技！（脳内保存完了！）馳走さまでしたッー！」

イツセーはそのまま目の前に魔力の塊を形成すると、それを左手で殴りつける。

「ドラゴンショットオツ!!!」

すると魔力の塊はみるみる内に大きくなっていき、そのままイザベラを飲み込んでいった。

『ライザー・フェニックス様の戦車一名リタイア』

「つしやあ！見たか東崎！俺の新・必・殺・技ツ！！」

「……………うわあ……………」

「な、なんて破廉恥な技！」

「あの…………ウチのイツセー君が本当にすみません…………」

「何でお前が謝ったんだよ！つーか新必殺技の方の感想を言えよ！」

周囲のリアクションにイツセーは文句を言う。

と言うか当然、文句を言われる必殺技を使っていた。

——ドゴオオオツツツ！！！！

すると、ライザーの拠点である本校舎の屋上から爆発音が響いて来る。

その場に居た全員は爆発が起きた場所へ視線を向ける。

そこには倒すべき王であるライザー・フェニックスとリアス・グレモリーが対峙していた。



「一騎打ち……！」

「お兄様つたら私達の勝利は確実なのに、情けをかけたのかしら？」

「ぎっけんな!!部長は強い!今すぐにお前等を倒して加勢しに行く!!」

するとイツセーの左腕に装着されている神器が眩しい光を放つ。その光はレイナーレを倒した時と同じ大きさだ。

イツセーは更に叫ぶ。

【Dragon Booster!!?】

「もつとだ!もつと寄越せ!!!あの時はアーシアだったが、今度は部長だ!もう負けたくない!俺の想いに応えてやがれ!!!」

『——いいだろう』

左腕の籠手は更にパーツが展開され刺々しいフォルムへと変化していく。

そして、宝玉から溢れ出るかのように緑色の波動が強く放たれる。

【Dragon Booster Second Liberation!!?】

「す、すげえ！形状が変わった……！木場ア！お前の神器を解放しろ！」

「え………分かった！」

「東崎！そこから離れろ！すげえのいくぞ！」

「！」

東崎はキバの身体能力を生かした跳躍を行う。

その場から東崎が退くのを確認した2人は一斉に神器の力を解放する。

ブーステッド・ギア・ギフト  
「赤龍帝からの贈り物!!?」

【Transfer】

ソード・パース  
「魔剣創造!!?」

——キイイイイイインツ!!!

瞬間、眷属達の足元から無数の剣が創造される。

木場の神器《魔剣創造》は所有者の思い描く魔剣を創造すると言う強力な神器だ。

その力をイッセーの神器《赤龍帝の籠手》の倍加能力で木場の魔剣を創造する範囲、量

を一瞬の内に倍加させたのだ。

そしてアナウンズと共にその場に居た眷属達はレーディングゲームの空間内から消えていった。

その様子を見ていたレイヴエルは驚愕を露わにする。

『ライザー・フェニックス様の兵士二名、騎士一名、僧侶一名、リタイア』

「これもドラゴンの力だと言うの……!?？」

「よしっ！」

イツセーと木場は互いに拳を拳を合わせる。

そして、東崎もタイミング良くその場で着地を行う。

「2人共、さっきのは一体……」

「へっ！籠手の力で木場の神器を強化したのさ！どうよ俺の！新・能・力!!!」

「ハハハ……でもコレは凄いよイツセー君。流星はドラゴンの力……」

戦いを乗り切った3人は一息つく。

が、それを壊すかの如くアナウンスが鳴り響く。

『リアス・グレモリー様の女王リタイア』

「なっ!」

「そんな!朱乃さんがッ!?!」

「待てよ……塔城さんは——」

——ドオンッ!!!

瞬間、イツセーの隣で爆破が起きる。いや、正確には先程まで東崎が居た場所が爆破されたのだ。

その光景を見た事のあるイツセーはその威力を知っていた。

「と、東崎イイイイイ!!!」

「…え? イツセー君?」

「……ありや?」

しかし、爆破されたと思われた東崎はイツセーのすぐ隣で尻を地に付け、傷も負っていない様子だった。

そして、爆煙が晴れるとそこにはボロボロになって倒れていた木場の姿があった。

「木場ア!!!」

「まさか…僕を助ける為に……」

そして、木場は東崎の方へ視線を向けながら「フツ…」と笑みを浮かべながら消えていく。

『リアス・グレモリー様の騎士一名リタイア』

「……女王と騎士撃破<sup>テイク</sup>」

上空には手をこちらに向けた状態で悠々と飛んでいるライザーの女王ユーベルーナが存在した。

「テメエエエツ!!! よくも木場と朱乃さんを良くもツ!!! 降りて来やがれ!! 今すぐぶん殴つてやる!!!」

「フツ……そう怒らないの。それに騎士の方はただの事故なのよ」

「事故……? どう言う事だテメエ!」

「分からないのかしら? 私はファンガイアを狙ったのに騎士が庇ったのよ。元から眼中に無いわ」

イツセーはユーベルーナの挑発じみた発言に対して更なる怒りを覚える。

だが、怒りで我を忘れかけているイツセーを東崎は手で制する。

「ぎっけんな!!!木場を!!!」

「やめるんだイツセー君……塔城さんはどうした?」

「トウジヨウ……?ああ、あの生意気なガキなら……」

すると、ユーベルナの目の前に魔法陣が現れると同時に、魔法によって作られた鎖によって縛られている塔城が出現した。

「小猫ちゃん!?」

「ほら、返してあげるわ」

ユーベルナは小猫をそのまま放り投げる。

東崎は地面に激突する前に彼女を優しくキヤツチする。

「塔城さん!」

「うう、すみません。東崎先輩……勝てませんでした」

「もう喋らないで、大丈夫、もう大丈夫だから」

小猫は虚な目で東崎に視線を向ける。だが、小猫は役に立たなかったと言う事実からなのか、涙が流れる。

「ごめん……なさい……」

そう呟くと小猫はその場から消え、アナウンスが鳴り響く。

『リアス・グレモリー様の戦車一名リタイア』

「……」

東崎はマスク越しで顔を伏せる。

ユーベルーナはそのままライザーの元へ飛んで行く。

「待てよ!!逃げる気かテメエ!!!」

「あら、貴方の相手なんてしてられないわ兵士君」

「待ちやがれ!」

「フツ……」



「臆したのか……残念だ」

「……何ですって？」

東崎の一言にピタリとユーベルーナはその場で停止する。

イツセーは東崎の様子に少しだけ　ビビる。

「所詮は口だけか……上級悪魔も大した事無いな……僕をまともに倒す事も出来ず、逃げ  
てばかりとは……」

「……気が変わったわ。貴方と遊んであげる」

「イツセー君、僕はコイツを倒す。今の内にライザーの元に」

「け、けど………わかった！」

イツセーは一瞬、躊躇うが東崎を信じてそのまま校舎の屋上へ向かって行く。その様子を悠々と眺め東崎に挑発を行う。

「あら……友情ごっこはもう良いのかしら？そうすればもっと楽しめたのにね……」

「御託は良いからさっさとかかって来い。今の僕はかなり苛ついている」

——ドクン!!!

「!?」

ユーベルーナは東崎から発せられる強大な魔皇力に目を見開き驚愕する。

そして仮面の下で沸々と怒りを燃やす東崎は目の前の悪魔に向け口を開く。

「仇を取らせてもらう……木場君、姫島さん、塔城さんの仇をな!!」

## 17話 Double Action

「私を倒せると思って？」

ユーベルーナは手から球状の魔力を撃ち出す。

仮面ライダーキバ、東崎はその場からバックステップするように飛び退く。

——ダウンツ!!!

瞬間、魔力が着弾した場所で爆発が起きる。

「フフフ……私は炎の魔力の扱いに長けてるの。少し工夫をすれば爆破だって可能なのよ？」

不敵な笑みを浮かべながら次々と魔力の弾丸を放つ。

東崎はそれを淡々と躲していく。

——ドドドドドドドドドドドドツ!!!

反撃に転じ無い東崎、いや反撃する事が出来ないのが正確だろう。キバの鎧は身体能力と共に跳躍力も優れている。

だが、飛行能力を一切持つておらず触れれば爆発する魔力が雨のように降り注いでいる為、反撃に転じる事が出来ないのだ。

(厄介だな…)

「ハハハ!!!ファンガイアと言うのも大した事無いわね!あの小娘が言つてた割には逃げてばかりじゃない」

「…?」

東崎はユーベルナの台詞に疑問を覚える。彼女の言う小娘というのは恐らく小猫の事なのだろう。

だが、言つてた割という意味が特に分からなかった。

「あら、知りたそうな顔をしているわね、良いわ教えてあげる。あの小娘はね『あの人は私と同じだけ強い人』と言ってたのよ」

「同じだけ強い……？」

「けど、これじゃあ拍子抜けね。これじゃあ何度も何度も私に挑んで来ては返り討ちにされた小娘の方が良いサンドバックをしていたわ」

「……………」

東崎はユーベルーナの言葉に不快感を覚えた。

別に自分がどうと言われても構わない。ライザーも自分に嫌悪の眼差しを向けて来たが、アレはそれ相応の理由があったからこそであり自分は憎まれて当然なのだろう。

だが、後輩であり友人でもある塔城小猫をサンドバッグと言われる事はどうしても許せなかった。

東崎は友人が悪く言われるとすぐに激怒するイツセーの気持ちを理解する。

「言いたい事はそれだけなのか？」

「あら、随分と冷たいわね。ファンガイアというのは全部そうなのかしら？」

そんな事は無い。東崎の腹の奥底は沸々と怒りで煮えたぎっている。だが、東崎は確実に相手を倒す為に堪える。

「さつきから魔力を1発も当てられない癖によく言う……」  
「何ですって?」

すると、東崎はピタリとその場で停止すると両腕を大きく広げる。

「……何のつもり?」

「撃つて来い。まさか止まっている的に当てられないと言う事は無いだろう?それとも……ご自慢の爆破はその程度の威力なのか?」

「……ッ!!良いわ……!そんなに私の爆破を受けたいのなら味あわせてあげる……!」

東崎の挑発により激昂したユーベルーナは巨大な魔力を形成する。

そして笑みを浮かべたままその魔力を東崎に向けて放つ。

「後悔する時間も与えないわ……ハアッ!!」

——ドオンツ!!!

上空から地上に向かつて強大な魔力が放たれる。

その魔力の強さは恐らく、姫島と同等……いやそれ以上だろう。

それに対して東崎は何もせずただ魔力を見てるだけだった。

「おい莉紅！流石の強固なキバの鎧でもこりゃ不味い！」

「分かってる……挑発に乗りやすい人で本当に良かった」

東崎はそう言うと、その場で屈み、大きく跳躍する。

——バツ!!!

キバの鎧には様々な形態が存在するが、現時点で変身しているこの姿の名称はキバフォームキバの鎧の基本形態であり、力を抑え込んだ形態だ。

キバフォームの長所はオールマイティな戦いと、その驚異の跳躍力だ。

東崎はキバフォームの跳躍力を生かし、魔力が着弾する直前にユーベルーナの元へと

ジャンプをする。

「あら、コッチよコッチ、届いていないわよ？」

う。  
だが、ユーベルーナはその場から上昇しキバの跳躍では届かない距離まで離れてしま

う。  
ユーベルーナはしてやったりと言う愉悦に近い表情を顔に浮かべる。

——ドゴオオオツツツ!!!

刹那、彼女が放った強大な魔力が着弾し大爆発が起こると同時に爆風が吹き荒れる。  
すると、東崎は爆風によって背を押される形で加速し一気にユーベルーナとの距離を詰める。

「しまっ!!？」

「ハッ!!？」



——ガツ…ドゴツ!!

「ぐっ…っ?」

そして顎にアッパーを叩き込んだ後、そのまま拳を振り下ろしユーベルーナを地面へと叩きつける。

だが、彼女も負けじと無数の魔力弾を撃ち込み、東崎は爆炎に包まれる。

——ボウツ!!!

ニヤリと笑うユーベルーナだが次の瞬間、その表情は一気に崩れ去った。

「羽……寄越せえッ——!!!」

炎に包まれても尚怯まない姿はまるで不死身のゾンビの如く、効いているようには見えなかった。

彼女がその姿を見て動揺している隙に東崎は羽を掴み、ユーベルーナの背に足を当て

る。

——ズウンツ!!!

そのまま2人は地面に激突し煙が舞う。

しばらくして、砂の煙が晴れる頃には東崎が羽をユーベルーナを踏み付けながら羽を掴んだ状態となっていた。

——ブチイッ!!!

「ぐあああああああッ!!?」

「羽寄せ……………」

(ぐっ…………機動力を削いだ!!? ヤツの狙いは最初からコレか…………!!)

ユーベルーナは手だけを東崎に向け、魔力弾を連発する。

それを察知した東崎はすぐさま飛び退き、回避を行う。

ボタバタと背から血を流しながらユーベルーナは立ち上がり、怒りを露わにする。

「くっ……！この生意気な小僧が!!!」

「ハアア………ツ!!!」

すると東崎は足元に紋章を象った魔力を形成する。そのままユーベルーナにぶつけると電撃が彼女を襲う。

「ぐああああああ!!!?」

そして、そのままこちらに引き寄せると東崎は蹴りを叩き込み魔力で出来た紋章にぶつける。

すると紋章にぶつかったユーベルーナはそのままこちらに跳ね返り↓蹴りを叩き込む↓紋章にぶつける↓跳ね返る↓蹴りを叩き込む↓紋章にぶつける↓跳ね返る↓蹴りを叩き込む↓紋章にぶつける↓跳ね返る。

永遠にループするかなようなH A M E技がユーベルーナを襲う。

(……………え?コレいつまで続くの……………)

ユーベルーナがそう思っていた頃には既に彼女はレーディングゲームの空間から消え失せていた。

『ライザー・フェニックス様の女王一名リタイア』

アナウンスが鳴り響く中、東崎は作られた空間の偽の空を見ながらポツリと呟く。

「……仇は取ったよ皆」

そう言うと、東崎はそのまま校舎へと足を運ぼうとする。  
すると彼の目の前に1人の少女が立ち塞がる様に現れる。

「ユーベルーナを倒すとは…流石キバと言ったところ。ですが、貴方行った所で負けは  
確実ですわ」

「………あ、居たの忘れてた」

「な、何ですって!」

東崎の前にライザーと同じ金髪の縦ロールの髪型をしたお嬢様風の女の子、レイヴェル・フェニックスが現れる。

だが、東崎自身は彼女が居ると言う事をすっかり忘れていたらしい。

「なんだ？フェニックスの妹君。今度はアンタが戦うのか？やめとけ、やめとけ。コイツは容赦無く相手の羽を筆る妖怪ニス（の材料）寄越せだぞ？」

「フン、私とて不死身のフェニックス。あの程度ではやられませんわ。それに……」

するとレイヴェルは中に液体が入った瓶を取り出す。それを見た東崎はポツリと眩く。

「フェニックスの涙……」

「よくご存知で。如何なる傷も癒す力を持つアイテム。コレを私とユーベルーナが持つていましたの」

「どうりで姫島さんと塔城さんに勝てた訳だ」

「ええ、それに最早、リアス様の滅殺の力もドラゴンの神器の力も残り僅か。お兄様の勝

利は既に決まったも同然、それなら私とお喋りしていた方が良いのではなくて？」

悠々と勝ち誇った表情を見せるレイヴェル。ベルトでぶら下がって居るキバットは東崎に話し掛ける。

「よし、それじゃあコイツを人質にライザーを叩きのめすとするか」

「な、何ですって?!? 人質なんて卑怯と思わないのですの?!?」

「はっ！ 知るか卑怯もラツキョウも俺の好物さ。ついでに莉紅の作るラツキョウは絶品だ」

互いに言い争うキバットとレイヴェル。東崎は「ハア……」とため息を吐いた後スツとレイヴェルに手を伸ばす。

すると「ひっ」とレイヴェルは眩き後退りをする。

「わ、私に乱暴しますの?!? お兄様が読んでいた本みたいに！ やっぱりファンガイアは穢らわしい野蛮な——」

「それじゃあ、僕はそろそろ行くから」

「お、おいおい良いのかよ無視して……?」

ポンとレイヴェルの肩に手を置いた後、そのまま屋上に向かって進む東崎。すると「待ちなさい!」と、後ろに居たレイヴェルが叫ぶ。

「どうして貴方は平気なのですか! 貴方は散々罵られ、種族の誇りを踏み躪られたのでしよう! なのにどうして怒らないのですか!」

「……なんで? それくらいで怒る理由なんてあるの?」

「それくらい……!?」

レイヴェルはそのまま顔を伏せ、呟く。

「分かりませんわ……何故、貴方は種族を誇りに思わないのですか……何故、馬鹿にされても平気なのですか……」

「……………」

東崎はそのまま何も言わず、屋上に続く階段を駆け上がって行った。

~~~~~

「部長オオオオオオオオオ!! 兵藤一誠、只今到着しました！」

「イツセー!!」

「イツセーさん！」

イツセーは屋上の扉を思い切り開く。

そこには我が主人であるリアス・グレモリーとアーシア・アルジェント、そして倒すべき王であるライザー・フェニックスが居た。

ライザーはイツセーの姿を確認すると同時に眉をひそめる。

「ドラゴンの小僧か……その感じからすると女王に昇格したのか」

「ハア…」とため息を吐くとやれやれと言うようなポーズを取る。

「いい加減にして欲しい所だ。たかが眷属の1人や2人……増えた所で何かが変わると言う訳では無いのn——

——ボシユウンツ!!!

瞬間、リアスの手から放たれた魔力がライザーの首から上を消し飛ばす。

「いい加減にするのはそつちよ。私は諦めないわ」

「——リアス……投了するんだ。^{ライザー}これ以上は観戦されている君の父上にもサーゼクス様にも格好がつかないだろう」

だが、首から上が炎に包まれたと思つた直後、ライザーの顔は元通りとなつていた。

怒る……と言うよりはそれを通り越して呆れた様子のライザーは淡々とリアスに告げるが、イツセーがリアス達の前に出る。

「まだ終わりじゃねえ！俺が居る！治療が終わったらアーシアは下がってくれ」
「え……分かりました」

やや寂しそうな表情を見せるアーシアだったが、神器を使いイツセーの怪我を治そうと試みる。

が、アーシアの周りを囲むように炎で出来た柵が現れる。

「コレはッ!?？」

「悪いな、あんまり長引いてもキミらが可哀想だからな回復を封じさせてもらった」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるライザー。だがイツセーはそのままライザーに殴りかかる。

「だからどうした!!!回復出来なくてもッ！俺がぶっ飛ばしてやる!!!」

【BOOST】

「フン、その程度か？」

——ドツ!!!

「かはツッ?」

強化した拳を軽々と受け止めるとライザーはそのままイツセーの腹を殴り飛ばす。

——ボシユウンツ!!!

「チツ、リアス……いい加減にしてくれないか?」

「言ったでしょ……諦めないって」

「ツ! まだまだア!!!」

【BOOST】

「まだ起き上がって来るか……!」

ライザーは再び立ち向かって来るイツセーに苛立ちながらも、リアスの魔力を躲しなからイツセーを返り打ちにする。

だが、それでも尚立ち向かって来るイツセーの姿に驚きを隠せなかった。

「まだ……終わってねえぞ!!!」

【BOOST】

「コイツ……まだ……!?？」

「俺はッ!!!」

——ガッ!!!

「まだッ!!!」

——ドッ!!!

「戦えるッ!!!」

——ゴッ!!!

「部長の為なら俺はッ!!!」

【BOOST】

何度もライザーを殴り付け、更なる強化を果たし徐々にライザーを押し始めるイツセー。

「……ッ!!いい加減にしろ!!!」

——ゴオオオオオツ!!

「ぐあああああああッ!!?」

「イツセー!!今助けるわ!!」

だが、反撃に転じたライザーはイツセーを炎で出来た竜巻に閉じ込める。

強大な炎に飲み込まれたイツセーの身を案じたリアスは自身の魔力でライザーの炎だけを消そうと試みる。

「無駄ア!!!」

「キャツ!!!」

「イツセーさん!部長さん!!」

だが、ライザーはそんな隙を与えないようにリアスに攻撃を加える。

その様子に思わずアーシアは叫ぶ。

「無駄なんだよ!!お前達は既に詰チエックメイトみなんだよ!!潔く負けを認めろリアス、そうすればお

前の眷属をあまり傷付けずに済む」

「ッ!!……私は」

リアスは拳を握り締めた後、力が抜けるように膝から崩れ落ちる。そして、そのまま口を開き「投了」の一言を呟こうとする。

「——まだ終わってねえッ!!!」

【BOOST】

「何イツ!!!?グオツ!!」

——ドゴオツ!!!

だが、炎の竜巻の中から突き破るようにイツセーがライザーに1発、拳を打ち込んだ。すると先程とは比べ物にならない威力だったのか大きく吹き飛ばされる。

「ぐっ……馬鹿な……!アレを打ち破るとは……!」

「へへ……1発ぶちかましてやったぜ。まだ終わってないっすよ部長」

「イツセー……どうしてそこまで……!」

リアスはイツセーがそうまでしても戦う理由が分からなかった。するとイツセーは無意識なのか笑みを浮かべながら口を開く。

「ンなもん……アイツも今でも戦ってるからつすよ。それにダチを馬鹿にされて黙ってるほど俺は頭良く無いですから……」

フラフラとしながらもイツセーは間を置いて、ライザーに向かって叫ぶ。

「だけど……1番の理由はこんな変態に部長を渡せるかって事だよコンチクシヨオウがああああああああッ!!!」

【BOOST】

「貴様も変態だろうがッ!!!」

イツセーとライザーは互いに殴り合う。口から血を流しながらも2人は殴り合う。

「オッラアッ!!!」

【BOOST】

——ドゴオッ！

優勢に見えるのは徐々に力を増していくイツセーの方だろう。

「無駄ア!!!」

——ボウッ!!!

しかし、神器の強化をも超える再生能力を持つライザーの方が一枚上手だ。

最初は押していたイツセーは逆に押され始めている。

「さっきまでの威勢はどうしたッ!!!」

「ぐっ?!」

「所詮、ドラゴンの力はその程度！最後の最後で勝利を収めるのはこの、ライザー・フェニックスだッ!!!」

——ゴオオウッ!!!

「イツセー!!!」

「イツセーさん危ないッ！」

体勢を崩された無防備なイツセーに炎を纏った拳を叩き込もうとするライザー。その光景に2人は思わず叫んでしまう。

絶体絶命——と思われた瞬間アナウンスが鳴り響く。

『ライザー・フェニックス様の女王一名リタイア』

「何ッ??? ユーベルーナがッ!まさかキバの……!!?」

【EXPLOSION!!?】

アナウンスによって気が逸れてしまったライザーはイツセーに最大の際を与えてしまふ。

イツセーは自身の拳をライザーの胸に当て、力を込める。

「感謝するぜ、東崎ッ!!喰らいやがれ必殺!!」

「しまっ——」

「ドラクローファイヤー
昇龍突破ッ!!!」

〔STRIKE VENT〕

——ドゴオオオオオオオッ
!!!!!!!

「ぐあああああああああッ?!?!」

大爆発がライザー・フェニックスを呑み込む。

強大な魔力による爆発の為かイツセーは反動で後方へ大きく吹き飛ばされる。
だが吹き飛ばされたイツセーをリアスは受け止める。

「へ、へへ部長やりましたよ」

「ええ、良くやったわ……本当に……良く……」

「さっきのは危なかった……………」

「「!?」」

「まさか、この俺にここまで傷を負わせるとはな……………」

突如として、聞こえてきた声に3人は驚愕のあまり目を見開く。

そこにはボロボロになりながらもライザー・フェニックスは立っていたのだ。

しかし再生が間に合っていないのだろうか所々に傷を負っており着ていた服もボロ

ボロになっている。

「く……そつ!!まだ立つのかテメエツ!!」

「それはお前も同じだろう……」 赤龍帝」

ライザーがイツセーの事を赤龍帝と呼んだ。

それは即ち彼は目の前にいる下級悪魔をそれに値する程の相手と認めたと言う事となる。

だが、そんな意味も知らずイツセーもフラフラと立ち上がり構える。

「だったら……もう1回ぶちのめして——

【BURST】

「え………?ガフツ!!?」

——ブシヤツ!!!

「やはりか………」

瞬間、イツセーは口から多量の血を吐き出し倒れる。そこにリアスが駆け寄るが、ライザーはまるで予想していたかのように眩く。

「先程の魔力は魔王級のものだ。フェニックス再生能力が追いつかない程のな……だが、神器が発現したばかりの低級悪魔が耐えられると思っていたのか？」

「イツセーしつかりして！」

「リアス、もう一度言う投了しろ。そうすればソイツは助かる」

「たす……かる……」

リアスの頭の中には激しい後悔の念でいっぱいだった。

自分の身勝手な行動によって仲間達が次々と傷付いていった。

——自分が結婚を拒まなければ

——じゃあ、どうすれば良い？

——簡単だ。今この場で投了すれば良いだけだ。

「ありがとう……皆……不甲斐無い私の為に……」

リアス・グレモリーの頬に涙が伝う。

それは悔しさから来る涙では無く、戦ってくれた皆への感謝、そして自身の無力さへの涙だった。

「ようやく投了する気になったかリアス——」

——ガチャン

甲高い音を鳴らし1人の人物が遅れて屋上にやって来る。

その人物を見たライザーは不快を示すように眉をひそめた。

「…今更何しに来たファンガイア。いや…キバ」

「東崎さん……！」

「東崎……」

今ここに、仮面ライダーキバ東崎莉紅は拳を握り締めライザー・フェニックスと対峙する。

18話 Time of Victory

……勝てなかった。悔しい……。

あと、少いでライザーを倒せたと思ったのに……。

俺、兵藤一誠は後悔の念に押し潰されるかのような感覚に陥っている。

「ありがとう……皆……不甲斐無い私の為に……」

部長の声だ……違います部長……部長は不甲斐なくなんか……ありません……。
お願いします。まだ、俺は戦う事が出来ます……。

だから、泣かないで下さい……。

——ガチャン

甲高い扉が開く音と共に霞む視界に親友である姿が映り込む。

……は、やっぱり女王を倒して来たのか……。

流石だよ、お前は。

『……………なんだ？悔しくないのか？』

あれ？なんだろう幻聴かな？何処からか声が……。

『どうした？お前はそのままが良いのか？あの不死鳥に勝てないままで良いのか？』

誰だ？……………もしかして天国から来た可愛いおっぱいのデカイ天使様……………？

『誰が天使だ！……………俺はお前の側に常に居た。もつとだ、もつと力を求めろ……………』

力……………？

『そうだ。戦え……………！あの不死鳥に勝ってみせろ。そして貴様が求めるものを手にしてみせろ……………!!』

俺が求めるもの……………それは……………!!

~~~~~

「さて……………莉紅、まだ行けるよな」

「うん……………リアス先輩、後は僕達がやります」

「……………何故だ」

「?」

ライザーは東崎に向け語りかける。その表情は初めて会った頃の下等生物を見下すような顔では無く、ただ純粹に何かの答えを求めるような表情を見せていた。

「お前は何故、そこまでしてリアス達に肩入れする? 何故ファンガイアであるお前が悪魔の為に戦おうとする? 理解出来ない……………何故だ? 何故なんだキバ……………」

「……………なんだ、そう言う事か……………」

東崎はマスク越しに何か落胆するような、安堵したような表情をする。しばらく間を置いてから東崎は答える。

「友達……だからですよ」

「何？」

頬をポリポリと搔くような仕草を見せながらも東崎は答え続ける。

「なんか、くさい台詞なんですけど……ただ純粋に僕はイツセー君、リアス先輩、塔城さん、木場君、姫島先輩、アーシアさん……皆の助けになりたかったから……ただそれだけです」

「なんだ、その理由は……？」

くだらない。

ライザーはそう思った。だが、それと同時に彼から強い信念を感じた。

「くだらない……かもしれないと思います。だけど、僕はイツセー君と出会ってから、誰かの為に戦う事を誇りに思ってます。だから……」

東崎は構える。

「貴方をここで倒す……ファンガイアでも、人間としてでも無く……キバとしてでも無く……僕は僕としてライザーさん、貴方を倒す!!?」

「……そうか。そう言う事か……赤龍帝のあの力……少しは理解出来た気がするな」

対するライザーの背中から激しい炎が噴出する。

その炎は先程とは比べ物にならない熱量だ。ライザーは高らかに声を発する。

——ゴウツ!!

「だがツ!!?最後の最後に勝つのはこのライザー・フェニックスだ!上級悪魔として!!  
?キバ!貴様に負ける訳にはいかんだ!!」

「お兄様!」

すると、遅れてレイヴェルが炎の翼をはためかせやって来る。  
するとライザーは彼女の姿を見ずに手で制す。

「レイヴェル手を出すな。ここからはこの俺、1人で戦う。お前はそこで見ている」  
「お兄様!?!」

レイヴェルは自分の知っているいつものライザーと比べて熱血化している姿に困惑を隠せなかった。

そしてジリジリと互いを睨み、一触即発の空気が流れる。

——そして

「——待ってくれよ……」

「！」

その空気はイツセーによつて壊される。

なんとイツセーは立ち上がつていた。ボロボロになりながら、血を吐きながらも、産まれたての子鹿のような足取りになりながらも彼は立ち上がり、東崎の肩を掴んだのだ。

「イツセー!? 何をやってるの!」

「すみません部長……だけど……コイツにだけいい格好はさせたく無いです」

今にも倒れそうになるイツセーを東崎は支え、声をかける。

「イツセー君、大丈夫。ここからは僕が……」

「なあ、頼むよダチ公。俺、悔しいんだよ。あんだだけ部長を守るつて言ったのに……泣かせちまつたんだよ」

イツセーは東崎の手を払いのけるように前へと出る。

「俺は……ハーレム王になるって言ったのにさ……情けねえよ。そう思うと俺自身への怒りが込み上げてくんだよ……だから……頼むよ」

イツセーは虚ろな目で東崎を見つめる。

「今は俺を信じてくれ……」

「……」

東崎はグツと拳を握り締めるとそのまま――

「えっ?」

――ドゴツ!!!

イツセーの顔面を殴りつけた。

「……………ごめん」

東崎がそう呟くと共にイツセーはバタリと言う音と共に倒れる。  
親友を殴った彼はリアスの方へ向く。

「ごめんなさい……………勝手な真似をしてしまつて」

「いえ、東崎……………ありがとう」

リアスは東崎を許す。

「イツセーをこれ以上、苦しませない為にわざと……………ごめんなさい。私が不甲斐無いばかりに……………」

「……………」

東崎は何も言わず、イツセーの側で地に膝を付ける。





元気な姿を見せるイツセーにリアスとアーシアは驚愕と共に歓喜の声を上げる。

「テメー!いきなり何すんだコラア!!」

「いや、手加減したし……」

「嘘つくなツ!!絶対悪意のある拳でしたー!まじでふざけんよ!!」

「ええ……」

先程の思い雰囲気が嘘のようにイツセーと東崎のやり取りがされる。

そんなやり取りにレイヴェルはポカンと口が開いたまま啞然としていた。

だが、ライザーはとある事に気付く。

イツセーの身体にあつた筈の傷が無くなっている。

しかも、ライザーと戦う前と比べて疲労が回復している。まるで、最初と戦う以前の、フェニックスの涙を使ったような。

「ツ!!?まさか!フェニックスの涙か!!?」

「……え?あ、あああああああああツ!!?有りませんわ!!?まさかあの時

に掠め取ったと言いますの!!?」

「うん。使わなそうだから…勿体無いなあと思って…」

「だからって殴った瞬間にソレを飲ませたって事かよ!!? つーか俺を殴った意味は!!?  
?」

「キバットがやれって…」

「このクソ蝙蝠イイイイイイイイッ!!」

レイヴェルとイツセーはナチュラルに犯罪めいた行為をした東崎に詰め寄る。

さらにイツセーの怒りの矛先はキバットへ向く。

しかも東崎自身、悪気が無いのが恐ろしい。

「それじゃあ…後は頼むよ」

「…ああ!」

イツセーは東崎とすれ違いざまにバトンタッチをし終えるとライザーと対峙する。

それに対するライザーは腕を組みながら冷静に告げる。

「何故、キバと共に戦わない？キバ、お前も分かっている筈だ。今の赤龍帝では俺に勝つ事は不可能に近いとな……」

「確かにそうかもしれない。だけど、イツセー君を甘く見ないでください。イツセー君は……誰かの為に馬鹿になれる人……いや、悪魔だから」

東崎がそう言うといツセーは目を瞑り、自身の左手に語りかける。

「なあ、俺の中に居るドラゴンさんよ……、聞こえてるんだろ？聞こえてるならもつと寄せ、部長をこれ以上泣かせない為に……力を貸してくれッ!!」

するとイツセーの頭の中に炎に包まれた赤い龍のイメージが浮かび上がる。

その赤い龍はまるでこちらに語りかけてるかのように喋る。

『力を求めるか……代償はそれなりのモノになるぞ?』

「構わねえよ……ただ俺は……アイツを、部長を泣かせたあの野郎をブン殴るだけだッ!!」

『ハハハハッ!!!女の為に戦うか!今代のキバも変わっているがお前も変わっているな

「いいだろう——くれてやる」

瞬間、イツセーの左手の籠手《ブーステッド・ギア》から尋常の無い眩い光が溢れ出す。

「うおおおおおおおおおッ!!見ていて下さい!部長!これが俺の……!」

——変身ッ!!!

〔Welsh Dragon Over Booster!!!〕

イツセーの身体が赤い龍を模した鎧に包まれる。

だが、変わったのは容姿だけでは無い。イツセーから発せられる力が先程とは比べ物にならない位に強さを増している。

彼がそこに居るだけで周囲の者がピリピリとその強さが伝わってくる程だ。

「馬鹿なッ!!? バランス・ブレイク 禁 手だどッ!!? コイツの成長力は化け物か!!?」

ライザーの顔から驚愕が露わとなる。  
すると、イツセーに神器から聞こえる声が語りかけて来る。

『相棒、この状態を維持できるのは10秒が限界だ』

「上等ツ!!10秒間だけ相手をしてやる……!!?」

「ほざけツ!!!フェニックスの力を舐めるなアツ!!!」

【X<sup>テン</sup>】

2つの影がぶつかり合う。

炎が舞い、赤き光が交差する。

——ドオンツ!!!

——ドオンツ!!!

——ドオンツ!!!

——ドオンッ!!!

凄まじい轟音が鳴り響く。不死鳥と赤い龍は空を駆けながら激闘を繰り広げる。

「ぐっ……！馬鹿なッ！フェニックスの再生能力が追いつかないッ!? いや、この力が抜けるような感覚は………聖なるカッ!」

「ご名答だッ!! 十字架を使って、ジワジワダメージを蓄積させた!」

「だとしても貴様も無事では………待てよ、まさかお前……! 自身の腕を!?」

【IX】<sup>サイン</sup>

驚愕の表情を見せるライザーに対してイツセーは更なる攻撃を加える。

「その通りだ!! 俺の左手は真正正銘のドラゴンになってる! これで聖なる力は効かない!」

「2度と元に戻らないのかッ!!」

——ドゴオッ!!!

【VIII<sup>エイト</sup>】

それぞれの拳が相手の顔を捉える。だが、2人は一步も譲らない。

「腕一本で部長を守るなら……ッ！本望だ!!」

「イカレてる……だからこそその迷いのない一撃か。キバと同等、いやそれ以上の純粹さ……怖いな。初めて俺は貴様に畏怖した。だがッ!!!」

——ボゴウツツ  
!!!!!!!

「ぐおおおッ!!!」  
【VII<sup>セブン</sup>】

ライザーの炎を纏った拳がイツセーを吹き飛ばす。

その際に、顔を覆っていた外装が割れる。

「最後に勝つのはこのライザー・フェニックスだ!!そしてリアスを貫き受けるッ!!!」



「ンな事……させるかよおおおおおおおッ!!」

【BOOSTBOOSTBOOSTBOOSTBOOSTBOOSTBOOSTBOOST  
シックス  
VI】

音声と共に輝きを増し、イツセーは更なる力を見せる。

そして一瞬でライザーの背後へ回るとそのまま拳のラッシュをお見舞いする。

——ガガガガガガガガガッ!!!

「ぐあああああああ!!?ば、馬鹿なツ!!?更に力を上昇させただど!!?」

【V  
ファイブ

「まだまだあああああアッ!!!」

——ドガアアアアアアアアアッ!!!

そのままイツセーはライザーと共に校庭に激突し、砂塵が舞い上がる。

その中からイツセーは飛び出すとゴソゴソと中に透明な液体の入った瓶を取り出す。

「ぐっ……この俺が手も足も出ない……だどっ！」

「まだまだいくぞオラアツ!!」

【Ⅳ<sup>フォー</sup>】

イツセーは自身の左手に収められた十字架に聖水を振りかける。

「アーシアが言っていたッ！悪魔は十字架や聖水が苦手だつて！」

イツセーは左手にある聖水で濡れた十字架を握り締める。

「木場が言っていた！視野を広げて周囲を見ろと！」

イツセーはライザーに向かって駆け出す。ライザーの手から放たれる炎を躲しながら腕を大きく振りかぶる。

「朱乃さんが言っていた！魔力は体全体から漂うオーラから流れるように集める！」

【Transfer】

イツセーは聖水によって濡れた十字架の聖なる効力を高める。

「小猫ちゃんが言っていた！打撃は身体を中心線を狙つて的確かつ決り込むように打つ

！」

【Ⅲ<sup>スリー</sup>】

イツセーは身体を捻りながら腰に重心を乗せ腕に力を込める。  
ライザーは叫びながらも手から炎を撃ち出す。

「ぐっ！おのれおのれおのれおのれえッ！！」

——ダウン！

——ダウン！

——ダウン！



イツセーの拳がライザー・フェニックスの鳩尾を捉える。  
そのままライザーは膝から崩れ落ち、ドサリと倒れ込む。

【Time Out】

「……っハア……ハア……そして、てめーの敗因は……たった一つだけ……たったひとつの単純な答えだ……」

「てめーは俺のダチを馬鹿にした……!」

瞬間、イツセーの全身を覆っていた赤い鎧である赤ブリステッド・ギア・スケイルメイル龍帝の鎧は音も無く消え去って行く。

『まさか、ここまでやるとはな……今代はやはり面白そうだ。それじゃあ今後ともよろしく頼むぞ相棒』

「ああ、よろしく……な……」

——ドサリ

イツセーはそのまま前へと倒れ込む。そこにリアス達が駆け付ける。

「イツセー！しつかりして！イツセー！」

「イツセーさん！今すぐ回復を！」

リアスとアーシアはイツセーの側で声を上げる。必死に声をかけるがイツセーは何の反応も示さない。

東崎は変身を解除した後、イツセーの顔を覗き込むと安堵したような表情を見せ、口を開く。

「リアス先輩、アーシアさん今はそつとしておきましょう。こんなに気持ち良さそうな顔で寝ていますから……」

イツセーはまるで母親の夢でも見ているかのような顔で眠っていた。

親友である東崎はそんな彼を起こす事は出来なかった。  
そして彼等を祝福するようにアナウンスが鳴り響く。

『ライザー・フェニックス様の脱落を確認。よってこのゲーム、リアス・グレモリー様の  
勝利です』

## 19話 戦いの末に

「…………つ、疲れた…………」

レーディングゲームでの勝利を飾り、部室に戻ったりアス達は押し寄せる疲労感を感じていた。

先程までぐっすりと眠っていた筈のイツセーまでも疲労に悩まされている程だ。

「ハハハ…………イツセー君お疲れ様」

「イケメンに言われても…………つて、もう良いか。サンキューな木場」

イツセーは木場に返答すると、木場自身予想外の返事だったのかやや驚いた後、すぐにいつもの笑顔となる。

その隣で東崎がソファに座っていると小猫が目の前に饅頭とお茶を出して来た。

「…………あれ?これって塔城さんのだよね…………」



「私なりの先輩へのお礼です……嫌ですか？」

「ううん、嬉しいよ。それじゃあ有り難く頂きます」

饅頭を頬張る東崎の横で小猫は微笑む。

それを見ながら姫島は頬に手を当てながらフッフフと笑う。

「あらあら、まあまあ小猫ちゃんつたら……フッフ」

「っ！そ、その……そういうのでは……」

姫島の言葉にモジモジとしながら顔を赤らめる小猫。

だが、その態度から小猫が東崎に対してどんな感情を抱いているのかは既に明白だった。

それを見ていたキバットはお茶を飲んでいる東崎に面白半分で告げる。

「なあなあ莉紅、莉紅」

「どうしたのキバット？」（お茶ズズズツ

「とりあえず、お前ロリコン確定な」

「……………え？」

すると、突如として全員の居る部屋に魔法陣が出現し、そこから2人の人物が現れる。

「皆様、レーディングゲームお疲れ様でした」

1人は銀髪のメイドであるグレイフィア。彼女は労いの言葉を送りながらお辞儀をする。

そしてもう1人はリアスと同じ紅の髪をなびかせる男性であり姫島達はすぐさま膝をつく。

イツセー達は姫島達の行動に疑問を持ち、その姿を確認したりリアスは困惑を隠せずにした。

「お兄様!?？」

「お兄様って……………もしかして!?？」

「この人が、魔王サーゼクス・ルシファー様!?？」

「ブーーーーーッ?!?!」

イツセー達が困惑している中、東崎はお茶を吹き出してしまった。

それもその筈、目の前にいる男性はリアスの実兄であり、現四大魔王の一人、サーゼクス・ルシファーなのだから。

「お、お兄様どうして……?!?!」

「妹の勝利を祝いに来た以外に何かがあると思う? リアス、レーディングゲーム初勝利おめでとう」

「い、いえ…そんな」

にこやかな微笑みを浮かべるサーゼクスに対しリアスは珍しく動揺している姿を晒している。

「私の父も、フェニックス卿も反省していたよ。当然この縁談は破談が確定した。これも全て君達のおかげだ。兄として礼を言わせてもらいたい。本当に、ありがとう」

そして、魔王であるサーゼクスはリアス達に頭を下げる。その行為に対してリアス達が対応に困るのは必然だった。

「あ、頭を上げてください、お兄様！魔王であらせられるあなたがこんなことで頭を下げられたらー！」

「ハハハ、私は魔王としてではなく、ひとりの兄として今私はここにいる。兄が妹の幸せを喜んで何か問題でもあるのかな？あ、それとも昔みたい『リーアたん』とも呼ん

d——」

「お、に、い、さ、ま？」

「——と、とにかく皆、良くやってくれた。心から感謝するよ」

一瞬、リアスの顔が般若のような顔になった気がするが、おそらく気の所為だろう。サーゼクスは改めてイツセー達に感謝の言葉を送る。

（え、リーアたん…？）（部長がリーアたん…？）

（…リーアたん）（リーアたんか…）（あらあらリーアたん…ふふふ）

だが、彼等の頭の中は既に『リーアたん』と言う言葉で一杯だったのは言うまでも無かった。

そして、サーゼクスはとある人物に視線を向ける。

「……………」

「……………」

「……………これは不味いね」

「ああ、お前の言う通りだな木場」

魔王サーゼクスとファンガイア東崎莉紅、互いの視線がぶつかる。

その場の全員はただならぬ雰囲気圧倒されてしまう。

木場の言葉にイツセーが肯定する。

それもその筈、東崎にとってサーゼクスは同族の仇だ。

これから何が起きても不思議では無い。

「……………」

「……………フフ」

— スッ

「「「「「!!?」」」」」

サーゼクスは東崎に手を伸ばし、肩に手を置いた。

「ファンガイアの王の証を持つキバ……いや東崎莉紅君。今回は元々と言えば私達、悪魔が引き起こした事だ。それを関係の無い君を巻き込む形になって済まなかった……」

「お兄様が……」

「ま、魔王様が東崎さんに……!」

サーゼクスの行動にその場にいた殆どの者達が驚愕を露わとなり、イツセー、アーシアの順に声上がる。

それに対する東崎は笑みを浮かべた後、手を差し出して来る。

「大丈夫ですよ、これは僕が決めた事です。後悔なんてしてません。だから顔を上

「ふ……そうか。いや、君だからこそか……ありがとう」

応じるようにサーゼクスは東崎が差し出して来た手を握る。その光景にオカルト研究部の面々はホツと肩をなで下ろした。

すると、隣にいるグレイフィアは口を開く。

「サーゼクス様、そろそろ……」

「おっと、もう時間か……済まない。これから私は行かなくてはならない所がある。それじゃアリアス、そして皆……レーディングゲーム実に見事なものだった。いずれ近いうちに会おう」

サーゼクスはそう言い残すとグレイフィアと共に魔法陣の中へと消えていった。







「いや、そつちイ?!?もつと驚く所あるだろ! 知人が魔王だった事!」

東崎の言葉にツツコミを入れるキバット。

「いや別にそれはいいよ!ただ、バイオリン職人?としてのプライドが許さないんだよ!バイオリンの為のニスの材料集めはしていたねど、目的と手段が入れ替わってる事に気付かなかつたちくしよー!ー!ー!ー!ツ!!」

「ああ……そう言う事か……忘れてた、莉紅ってこう言う奴だったよなあ」

キバットが哀愁漂うオーラを出しながら遠目に夜空を眺める。

何でコイツがキバの鎧を継いで閉まったのだろうかとキバットは時々思う。

そんなやり取りをしている内に彼等は自宅へと到着する。

家の中は家臣であるアームズモンスター達が何やら激闘を繰り広げている事以外は比較的平和だった。

そして、東崎がいつも通り風呂に入る準備をしていると家の中に見覚えのある魔法陣が出現する。

そして――

「やあ、東崎君。来たよ」

「げえツ！魔王!?」

東崎のすぐ目の前に魔王が現れた。

それも、馴れ馴れしい感じの友人が「あ、おはよー」って位のテンションでだ。しかも、側にいるメイドのグレイフィアも額を抑え困惑している様子だ。

そんな彼女を尻目に魔王サーゼクスは話し続ける。

「ハハハ、なあに今回のレーディングゲームでリアス達が世話になったんだ。ちゃんとお礼をしなければ駄目だろう?」

「……と、言うわけでコチラに好きな金額を書いてください」

と、グレイフィアは小切手を無理矢理。押し付けるように渡してくる。だが、東崎も負けじと小切手を受け取るのを拒否する。

「いいですって……！なんか悪魔と契約してる感じで後が怖いんですよ」

「いいえ、最低でも今までのサーゼクス様から依頼されたバイオリンの修繕、製作費の正式な金額を受け取って欲しいだけです、そもそも私達は悪魔です」

「あ、そうなんですか……いやいやいや！僕、バイオリンに關してはあまりお金は取らないって言うか……！ウチは『安くて質も高い』って言うのがモットーですから！」

そんな光景をハハハと笑いながら眺めるサーゼクス。

そして、その後ろから3体の影が現れる。

「………何しに来た？ルシファー」

「………久しぶりに会うねウルフェン族の生き残り。ガルル」

「ふん、いつも俺達が居ない時を狙ってここに来ていた事は知ってる………何しに来た？返答次第では………」

そう言うと、ガルルを中心にアームズモンスター達はそれぞれ、本来の姿を露わにする。

そこにグレイファイアがサーゼクスを守るように前へ出るが、サーゼクスはそれを手で制す。

「身構えなくても大丈夫だよ。東崎君には手を出したりしないさ」

「……………その言葉に嘘偽りら無いな？」

「勿論さ、それに……………東崎とうざき 緋彩ひいろの实の息子に手をかける事なんて私には出来ない……………君もそうだろうか？」

「……………チツ」

サーゼクスの言葉を聞いたガルルは舌打ちをするとその場でドカツと座り込む。その様子をバツシャーとドツガは不思議に思う。

「ねえねえ？どう言う事？実の息子ってなんの事？」

「次狼、説明を……………」

「うるさい、今はそんな気分では無い」

不機嫌となったガルルはバツシャー達の言葉を無視してピイツと明後日の方向へ向

く。

それはまるで飼い主の言う事を聞かない犬、そのものだろう。

サーゼクスは懐かしい友人を見ているような表情を見せながら口を開く。

「それで、今日来たのは他でも無い。久しぶりに東崎君のバイオリンの演奏を聴きたい  
と思っただよ」

「え？」

東崎はサーゼクスの意外な言葉に呆気に取られる。

彼はてつきり、バイオリンに関して「いつになったら完成するのかな（ニツコリ）」と  
庄のかかった笑顔を向けて来ると想像していたからだ。

なんだかんだでそういつた上司オーラが吹き出ている人が苦手な彼はサーゼクスに  
返事をする。

「えつと……、サーゼクスさんは魔王……なんですすよね？ だったら凄い腕前のバイオリニ  
ストでも雇えば良いんじゃないですか？」

「君だからだよ。確かに君以上の腕前の持ち主は探せばいくらでもいるだろう……だけ

ど、君のバイオリンの……いや音楽に対する熱意に勝る者はそうはいないだろう」

サーゼクスの言葉に東崎は考え込んだ後、部屋を出て行く。

そしてしばらくすると東崎は白のバイオリンと弓を持ってくる。

「それは……?」

「これは、サーゼクスさんに頼まれて制作している息子さんへのバイオリンでまだホワイトバイオリン（塗装前）なんです……もし宜しければ試奏を聴いてみてくださいませんか?」

グレイフィアの言葉に出来るように東崎はバイオリンを構える。

それを見たサーゼクスは何も言わずコクリと頷いた。

「それじゃあ……こんな見窄らしい部屋ですみませんが、聴いてください」

月が輝く夜の下、ホワイトバイオリンから奏でられる高く鋭いエチュードが響き渡

る。

その腕前はプロのバイオリニストと比べれば粗い部分もあり未熟だろう。

だがサーゼクス、グレイフィア、アームズモンスター達は癒されるような感覚を覚える。

——不思議と心が安らぐ音楽だ。

彼の演奏はまだまだ続く。

## 20話 e x. 使い魔って?↑ああ!

「……うん、と言うわけで……そうそう、次狼さんお願いね」

ピツと言う音と共に電話を切る東崎。

彼は今、オカルト研究部として使われている旧校舎の一室にあるソファに座り寛いでいる所だ。

ライザー・フェニックスとのレーディングゲームが終わったが10日間も学校を休んでいたのも、それを補う為の勉強会を先程まで行っており丁度終わった所だ。

「あらあら、皆お疲れ様」

そこに、副部長である姫島が粗茶を全員に行き渡るように出してくる。

「あ、朱乃さん。ありがとうございます!」



「フッフ、勉強頑張っていますね」

「はい！少し大変ですけど、皆さんとご一緒に勉強が出来て嬉しいです！」

イツセーが姫島に礼を言った後、眩しい笑顔を浮かべたアーシアが答える。

「ハハハ…そう言えば東崎君、さつき誰かと電話していたみたいけど…？」

「ん、うちの…居候的な…ペット？」

「え？」

「ま、まあ、とにかく気にしなくて良いよそんな大した事じゃないからさ」

東崎はこれ以上言うとは色々誤解されると思ったのか、話を有耶無耶にしつつ話題をすり替える事にした。

「ところで、木場君の方は勉強はどうなの？」

「うん、特に問題はないかな。小猫ちゃんの方はどうかかな？」

「はい、私も特には…お菓子を用意しますね」

小猫がソファから立ち上がり、お菓子を用意しようとするが、東崎の目の前にコトリと羊羹が乗った皿が差し出される。

「お、ありがとうございます……って、どちら様?」

『(ニコツ)』

そこにはリアスとは違った赤髪長髪の頭と背に羽を生やした白いシャツに黒のベストを着用した女性が居た。

その女性は笑顔で東崎にお辞儀をした後、そのままイツセー達の目の前にも羊羹が乗った皿を置いていく。

「……………誰?」

「さ、さあ…私にも分かりません」

「……………いいおっぱいだ」

「彼女は私の使い魔よ」

東崎達が疑問に思っていると部屋に入ってきた部長のリアスが答える。

イツセーはリアスの言葉に大層驚く。

「えっ、ええ!?? 使い魔!?? あんなに可愛い娘が!??」

「その通りよ、彼女は私の使い魔の1体だね。基本的に彼女は身の回りの世話をしてくれるのよ」

「とても助かっていますわフフフ」

リアスと姫島の反応に東崎は深く関心する。

「へえ、ウチの居候アーラムズモンスター達的なサムシングに見習わせたいな……あ、粗茶のお代わりつて貰えませんか?」

「先輩、それなら私——」

私がやりますと言う直前にリアスの使い魔が素早く新しい粗茶を用意する。

「おっ、ありがとうございます。流石リアスさんの使い魔だなあ」

『♪♪』

「……」

リアスの使い魔は頭の羽をピコピコと動かし喜びの感情を表現する。  
それをジツと見る小猫。

すると、リアスの使い魔は小猫の方を向いたかと思うと

『……フツ（見下すような目）』

「ツ!!?」

ニヤリと小猫に不敵の笑みを浮かべた。そして小猫は目の前の使い魔の意図を直感した。

『ねえねえ、今どんな気持ち?ねえねえ、今どんな気持ち?好意を持っている人を目の前にして無能を曝し出すのってどんな気持ち?』

「……………ツ!!!」

「こ、小猫ちゃんの顔が凄い形相になっている……!!?」

小猫はまるでプライドを貶された獅子の如く、使い魔を睨み付ける。

そんな彼女の迫力に押されながらもリアスは咳払いをした後、イツセー達に話しかける。

「と、とにかくイツセーとアーシアはまだ持っていなかったわよね」

すると、リアスの手元にポンと手品のような音を出しながら赤いコウモリが出現する。

「これが私の使い魔の1体よ。東崎、そっちの使い魔なら見た事があるんじゃないのかしらっ」

「そっち……っ」

東崎が怪訝に思っていると、隣に居た使い魔もポンと音を出しながらコウモリの姿へと変化する。

すると、その姿を見た東崎の記憶が刺激される。

「あ!あの時の次狼さん達に食べられかけたコウモリ!!?」

そう、彼は一度この使い魔と会った事がある。

その時は「こら!コウモリは病気を移すんですよ!狂犬病になつても知りませんよ!」と言った感じに逃がし、無事できるといいなあ。と思っていたが、まさかこんな所で再開するとは思ってもみなかったのだろう。

そして、その使い魔が種族の垣根を越え東崎に好意を向けられている事も彼は知らない。

「フッフ、私はこの子ですわ」

「……シロです」

すると姫島の足元には小鬼が、小猫は白い子猫を抱いていた。  
何故か小猫の機嫌が悪そうに見えるのは気の所為だろう。

「僕のは――」

「あ、お前のはいいや」

「つれないなあ」

即刻否定するイツセーの反応に苦笑する木場だが彼の肩に1匹の小鳥が止まっていた。

おそらく木場の使い魔なのだろう。東崎は物珍しそうにジッと小鳥を見つめる。

「どうしたんだい東崎君。もしかして君も使い魔が欲し――」

「ニス」

「「「!?!?」」」

「あらあら、フフフ」





「此処は……」

「まさしくなんでも出てきそうな森って感じだね……ん？」

『——』ギョッ

「ツッ!?」

イツセーと東崎が喋っていると、いつの間にかついて来たりアスの使い魔が東崎の腕にしがみついていた。

その光景を目の当たりにした小猫はギリツと奥歯を噛み締めながら睨みつける。それに対して使い魔は勝ち誇ったような表情を小猫に見せつける。

もし、現在のお互いの心情を簡単に表現するならば……

——『勝ったと思うなよ……』

——『もう勝負ついてるから』

こんな感じだろう。

「ゲットだぜイ!!!」

「「!?」」

そんなやり取りをしている突然の大声にイツセー達は驚いてしまう。

すると木の陰から帽子を深く被り、ラフな格好をした男性が現れる。

……と言うよりは虫取り少年の格好をしたおっさんと言う、どう見ても不審者だった。

おそらく彼が先程の声の主なのだろう。

だが、東崎は別の意味で驚いている様子だった。

「俺の名前はマダラタウンのザドウージ! 使い魔マスターを目指して修行中の悪魔だ!」

「彼は使い魔のプロフェッショナルの悪魔さ。使い魔の事なら彼が一番なんだよ」

「アウ……え? せ、セーフ……? い、いや……セウト!」

「お、おいどうしたんだよ莉紅!?!」

色々と危ない事を悟ったのか東崎は混乱している様子だった。キバツトは彼を落ち着かせようとする。そんな東崎達を尻目にザドウィージは話を続ける。

「さて、どんな使い魔がご所望かな？強いのか？速いのか？それとも毒持ち？俺のオススメは龍王の一角天魔テイヤマツトの業龍！伝説のドラゴンだけ！龍王唯一のメスでもある！」

「へえ、良いじゃない。ドラゴンなんて……イッサー」

「無理無理無理無理!!部長！無理っすよ！どうのつるぎを装備した状態でデスタ〇ーア倒すくらい無理っすよ！」

断固として拒否するイッサーの態度にリアスは頬を膨らませる。

「情けないわよイッサー、そんなのじゃあ王を目指すなんて夢のまた夢よ？」  
「で、ですけど部長……東崎の奴が……」

リアスの言葉に対してイッサーは後ろへと指を指す。

そこには虚ろな目でブツブツと何かを呟いている東崎が居た。

「伝説のドラゴン……龍王……鱗……翼……ニス……ニス……ニス……上質なニス……いや、伝説の……ニス……フフフ」

「こんな感じなんで、合わすのがとても怖いんですけど……」

「そうね、やめておきましょう。東崎と龍王を合わせたらどうなるか分からないわ、と言うより合わせてはいけないわね」

冷汗を掻きながらリアスは先程の発言を取り消す。

その後、リアス達はザドゥージと共に使い魔の森の中を歩いて行く。

すると彼等の眼前に透き通る様に綺麗な泉が広がっていた。キラキラと輝き、まるで女神がいてもおかしくない程の神聖な光景だ。

「この泉には精霊が集まるんだ。特にこの泉に住み着く水の精霊『ウンディーネ』はあまり人前には姿を現さないんだぜ」

「ウンディーネ……」

「東崎君? 多分ウンディーネは君が求めている材料なんて落とさないよ?」

ゴゴゴと目を光らせる東崎の肩をガツシリと掴む木場。  
いつでも拘束できるように剣を既に創っているのは言うまでもない。  
すると、イツセーが鼻の下を伸ばしながらリアスに問う。

「部長！ 使い魔なんですから俺の好き勝手にしていいんですよね!!？」

「ええ、好き勝手にしなさい。あなたの使い魔なのだから」

「ですが部長の使い魔が主人よりも東崎君に懐いているのは……」

木場が今も尚、東崎の腕にしがみ付いている使い魔を指で指す。  
するとリアスはハイライトが失った目で呟く。

「アラ？ ナニヲイツテルカワカラナイワネ……」

「あ、いえ……なんでもありません」

これ以上詮索するのはヤバイと思ったのか木場は口を塞ぐ。

そんなやり取りをしていると目の前に広がる泉が輝き始める。その様子を興奮した

様子のザドウージが口を開く。

「おおっ！泉が輝きだした、ウンディーネが姿を現わすぞ！」

そして泉から現れたのはキラキラと輝く水色の髪、透明な羽衣を身に纏った………筋骨隆々な存在だった。

その上腕と脚は丸太の如くの筋肉量、鉄板を何枚も重ねたような胸板、歴戦の格闘士の如く顔中に無数の傷を負っていた。

そう——その精霊は、筋肉マッスルだった

「な、なんじゃありやあああああああああああッツツ！！??」

イツセーの叫びが森の中を木霊する。

それもその筈、目の前にいるのは精霊と言うにはあまりにも体格がおかしかった。

いつからこの世界は『オーガ』Ⅱ『水の精霊』と定義されるようになったのだろうか

?

そんな目の前の出来事にイツセーはつい叫んでしまう。

「ああ……成る程ね……あれがウンディーネか……」

「東崎イイイイイイ！何納得してんだよ！考えるのをやめるな！どう見てもアレは

「アレはウンディーネだぜい」

残酷な言葉がイツセーに告げられる。

イツセーはその場で膝をつきガクリと項垂れる。

「う、嘘だ……ウンディーネってのはもつとこう……回復とか水とか……癒しの力に優れた美しい女性だろうがああああッ！どう見ても水を浴びに来た修行中の格闘家だろ！どう考えても人間の肉体を破壊する為に鍛え込んだ腕回しじゃねえか！」

「ウンディーネも縄張り争いが絶えないからなあ……精霊の世界は実力主義なんだよ。しかし、アレは強そうなウンディーネだ。アレはなかなかレア度が高いぜ？打撃力に秀でた水の精霊も悪くない」

「悪いわ!癒し系じゃねえよ!殺し系だよ!打撃力の高い癒し系精霊なんていらねえよ!」

「だが、アレは女性型だぞ?」

「知りたくない事実でしたあああああああッ!!」

ザドウジの言葉にイツセーが悔しがっていると姫島が何かに気付く。

「あ、もう1体現れましたわ」

「今度こそ——」

やせいの ウンディーネ(物理特化)が あらわれた!

「うう、うおおおおおおおおおおん」

「イツセー君……」

「東崎い……頼むからその可愛い使い魔で俺を慰めてくれえ……」

『——』

「あ、なんか本人が嫌がつてるっぽい」



「殺せよチクシヨウツ!!」

イツセーは地拳から血が滲み出る程の勢いで地面を殴る。東崎はそんな哀れな親友を見守るしかなかった。

「どうしよう……塔城さん……」

「そうですね、まず先輩の腕にしがみ付いている邪魔な使い魔を始末しましょう……!」

「え?どうしたの塔城さん!?」

リアスの使い魔に敵意を向ける小猫に東崎は驚く。

そんな中、ザドウージは「見ろ!」と指を向けた先には水の精霊(物理特化)が2人、睨み合い両者の間の空間が闘気によって歪んでいた。

そして――

2人の水の精霊(物理特化)の壮絶な殴り合いが始まる。

「え?何アレ?何やってんの?キバット状況説明お願い」

「あ?どう見たって……縄張り争いだろ?」

「所詮、腕力と言う事です……」

イツセーの言葉にキバット、小猫が返す。そして本日2回目の項垂れ。

「もうやだ……お家帰りしたい……」

徐々に幼児退行をしていくイツセーの肩に東崎は手を乗せると優しく語りかける。

「大丈夫、イツセー君。確かに目の前で起きている事は君にとってショックだ。だけれど大丈夫、まだ使い魔探しは始まったばかりだよ。ほら見て、目の前にいるウンディーネだって慣れれば——」

そう東崎が視線を戻すと、そこには3体目のウンディーネ（物理特化）が存在していた。

しかも、その水の精霊は漆黒の体長2m程の馬に跨りマントを羽織り猛牛のように前へ突き出した鋭い角が付いた兜を被っていた。

□ □

東崎とイツセーはソレを見て固まった。

だが、ザドウジはその水の精霊？を見て驚愕の表情を見せた。

「な、なんてこった……アイツは使い魔の森の主とも言える水の精霊！まさかこの目で拝める日が来るとは……！」

「どこがたあああああああ!!!いい加減にしろよ！どう見ても精霊じゃねえよ！どう見ても世紀末の覇者って感じだろうがア!!!」

イツセーの叫びも虚しく、2体の水の精霊は互いを見るとコクリと頷く。

先程まで激闘を繰り広げていた精霊達は目の前の困難な壁を越える為、精霊はその力を目の前の存在に知らしめる。

が——

——ゴオツ!!!

水の精霊（覇者）はウンディーネ達に触れずに吹き飛ばす。そして2体はイツセー達の眼前を凄いい勢いで通り過ぎた。

イツセー達は今、何が起こったのか理解出来なかつた。

だが、その場にいた小さな存在は何が起こったのか見ていた。

「あ、あれは……仙術!? い、いや……正確には気を手から放出して吹き飛ばした……?!」

「え? そ、それだけ……?」

「はい。それだけの事をあの精霊はノーモーションかつ短時間で強力なウンディーネ2体を吹き飛ばしました。ただ純粋シンプルな気の放出であそこまで……!」

「塔城さん? おーい戻って来てー!」

何かのスイッチが入ってしまったのか小猫は先程までの事を解説し始める。

そして気がつくくと、圧倒的な力を見せつけた精霊は巨大な馬の足跡を残し姿を消して

いた。

「……先程の精霊、凄まじい強さだったわね」

「部長、さっきのを使い魔にするんですか？」

「それだけは勘弁して」

~~~~~

「コワクナイヨー、コワクナイヨー。だから良い素材落とせー」

気を取り直し、俺達は森の奥へと足を運んでいた。

そんな中、東崎が斧を担いで棒読み気味に何か喋っているのは気にしない事にしよう。

……いや、気にするわ！なんで片手に斧持ってたんだよ！どう見てもコイツ、なんか見

つけたら素材を剥ぎ取る気だぞ?!?

コイツのバイオリン製作に対する執念ってなんなんだよ!

怖えよ!!

「おおっ!見ろ!」

ザドウージさんが声を荒げる。今度はなんだ?!?また精霊なのか?!?

俺がそんな風に怯えていると、木の上に蒼い輝きを放つ鱗を持つ小さな竜が佇んでいた。

「アレは……蒼 スフライト・ドラゴン 雷 龍の幼体だね」

「ドラゴン族の中でも上位クラスの筆頭だ。ゲットするなら今がチャンスだ」

アレがドラゴンか!リアルに見た!小さいけどカッコいいな!

可愛い使い魔もいいけど、レアなドラゴンでも十分だ!

よし、スフライト・ドラゴン!君に決めた!

……と決意を胸に秘めると同時に、東崎が斧を片手にスプライト・ドラゴンへと突っ込んで行く。

「つて、待て待て待て————ッ??」

何やってんだアイツ!

あんな可愛い生き物を生き物も思わない行動に俺は驚愕する。
すると、木場は己の神器で剣を創造する。

そしてグサリと東崎に剣を突き立てた————!!??

つて、おおおおおおいッ!!? お前も何やってんの!!?!

再び俺が驚愕していると刺された東崎はその場で倒れ込んでしまう。

「大丈夫さ、これは斬った相手を殺さず眠らせる『いざないの剣』。東崎君が暴走した時に使おうと思ったんだけど、意外と出番が早くてびつくりしたよ」

あー、うん、成る程ね。分かった、うん分かった。

つつこまないぞ。

俺は絶対につつこまないからな!!!

~~~~~

それから俺はそのままスプライト・ドラゴンを捕まえようとしたが、部長達がとある生き物に襲われた。

そう、服を溶かすスライムと女性の分泌液を養分とする触手だ!!!

コイツ等は俺が使い魔にするしか無い。

いや、コイツ等以外にありえるだろうか？

早速部長達の姿を堪能しながらスライムと触手を捕まえようとするが、そこにスプライト・ドラゴンがスライム達を蒼い雷で焼き払ってしまったのだ!

スラ太郎オオオオオ!!触手丸ウウウ!!

何故だ!何故コイツ等を!!?ふざけるなあああああッ!!!



「落ち着きなさいイツセー」

「うう、ですけど……」

「スライム達はしようがなかったけれども、貴方の使い魔はこれからよ？」

た、確かに……。もしかしたらスラ太郎達よりもいい使い魔に巡り会える可能性もある。

ちなみにアーシアはスプライト・ドラゴンに懐かれ『ラッセー』と名付け自身の使い魔とした。

そう思った俺はその場に立ち上がる。

そうだ！俺だけの使い魔！次は可愛い女の子がいいなツ！！

「急に元気になったね……」

「はい、そうですね」

「……………zzzzzz」

「……………か東崎の奴、まだ寝てんのかよ」





部も奴等によって改造されてしまったからな』

「か、改造されたってどう言う——」

「おい、お前等。こんな場所で何をしている?」

すると、俺達の前にそれぞれ青い狼、緑の半魚人、紫のツギハギだらけの大男と言ったモンスター達が現れる。

「な、なんだコイツ等!?!」

「なっ!?!? ウルフエンにマーマン、そしてフランケン!?!? どれも絶滅した筈の種族じゃない!」

「どうしてこんな場所に……!?!?」

部長達が驚く。

「そんなに驚くと言う事はそれほど珍しいって事なのか? すると目の前の3体は戦闘態勢を取る。」

「キャツスル・ドランを見てタダで返すワケにはいかん」

「ちよつと大人しくしてもらおうよ？」

「お前達を捕まえる」

「私達とやる気なのかしら……？」

その3体に対して部長は強気だ。

……ま、マジか、この流れから察するに俺も戦わないといけないよな！  
俺はそのままブーステッド・ギアを構えいつでも戦えるようにする。

「——ん？なに？なんか新しい素材見つかった？」

あ！東崎の奴、このタイミングで目を覚ましやがった？！？

て言うか今の今まで寝てたのかよ！

あのグレート・ワイバーンの咆哮でよく寝ていられるな？！？

「……………ツ？！？莉紅！」

「あれ?次狼さん。何やってんの?」

え?.....。

まさかの知り合い?!?お前、あいつ等と知り合いなのか?!?

恥ずかしそうにしながらも東崎は小猫ちゃんから降りる。

まあ、女の子に背負って貰うなんて、そりや恥ずかしいよな。

「.....あ、あー。成る程ねキャッスル・ドランの住処って使い魔の森だったのか。どおりで見た事あると思ったよ」

「どう言う事?もしかしてあのキャッスル・ドランは貴方の使い魔なの?!?」

「え?.....あ、はい」

「それじゃあ、目の前の3体も?」

「あ、あれは.....穀潰しのナニカ」

「「?」」

酷え!!?さすがに酷くないか?!?

あいつ等、凄いショック受けてんぞ!!

「い、いや莉紅！俺達は誇り高き種族の生き残り……」

「だって次狼さん、仕送りのお金をメイド喫茶で使う癖に働かないニートだしラモン君は美味しいもの食べさせないとすぐに暴れだすし、力さんは飯を沢山食べる癖に外に出かけているだけで……居候の癖してよく大層な事言えるよね」

すると次狼と呼ばれたウルフエンは黙り込む。

それにつられるようにマーマン、フランケンも気まずそうにしている。

「……………東崎。私、貴方が製作したバイオリンを高値で買い取るわね」

「すみません……………本当にすみません……………」

部長が東崎を慰めるように声を掛ける。やべえ、俺も可哀想に見えてきた。

「まあ、いいや。キャツスル・ドランの世話はちゃんとしているみたいだし」

「あ、ああ。勿論だ」

「でも、キャツスル・ドランが改造される前は凶暴性の高いグレート・ワイバーンだった

筈……大丈夫なんですか?」

小猫ちゃんが東崎に尋ねる。

あ、確かに。こんなところでコイツを飼っていて大丈夫なのか? 暴れ出したらとんでもない事になると思うけどな。

「大丈夫。改造された後、すつごい大人しくなってるから。それに定期的に身体の掃除しておかないとストレスが溜まるから次狼さんに頼んでいるんだよ」

「まあ、使えないこいつ等にはピツタリな仕事だな」

「なあキバット。お前は俺達に辛辣過ぎないか?……まあいい。ところで掃除している時、こんなモノを見つけたんだが」

するとウルフェンは何かを取り出した。

緑色のブヨブヨとしたモノとウネウネとしているモノだった。

俺はそれを見て目を大きく見開く。

「そ、それは……!」



スライムに触手じゃないか!!! いやっほう!! 天はまだ俺を見捨ててなかった!  
是非、スラ次郎と触手丸2号を俺の使い魔に!!!

「イツセー! まだ諦めてなかったの?」

「諦めきれませんよ部長! スラ次郎! 触手丸2号! ゲットだぜ!」

俺はそのまま2体に手を伸ばし——

「お、次狼さん良いの持ってんじゃん」

が、俺の手は虚しく空を切った。

って、東崎? スライムと触手を持って何を——

——グシヤリ

刹那、東崎はスライムを潰した。

「あ、あああああああああああああああッ!!??」

「よし、次に……」

すると、次なる標的を触手丸に変えた東崎は触手を手に持つと絞るように捻り始める。

や、やめろおおおおおおおおお!!!

俺はそのまま東崎に向かって駆け出す。

——ミチミチブチブチブチイツ!ブチユルルツ!!?

「うわあああああああああああああああッ!!」

俺の目の前に雑巾絞りの如く体液を滝のように垂れ流す触手丸の姿があった。

やめてくれえ!!!触手丸をそれ以上虐めないでくれえッ!!!

「ふう……スライムと触手の素材ゲットだぜ……つと」

「うわあ…コレは酷いね」

「悪魔以上の悪魔の所業……まあ別にスライムと触手ですから構いませんが」

「あらあらフフフ、さすが東崎君」

……ふざけるな。

ふざけんじゃねえぞ、東崎……ッ!!ぜつてえ許さねえッ!

「東崎イイツ!今ここで強靱!無敵!最強!のドラゴンの力でテメエをブツ飛ばすッ!!」

「イッセー……」

「イッセーさん……」

「イッセー君……」

なんか周りが可哀想なものを見るような目なのは気の所為だろう。

俺は東崎と対峙し、ブーステッド・ギアを構える。

「今の俺は負ける気がしねえッ!例えドラゴン相手でも俺はテメエに勝つッ!」

「分かったよ。やつちやえキャツスル・ドラン！」

「え？」

すると静かに佇んでいたキャツスル・ドランは前足を振り上げそのまま俺に向かって振り下ろして来る。

「つて！それはさすがにズルツ——！！??」

——ズシン!!

「ほお……キャツスル・ドランを従えるとは…流石はキバといったところだぜい」

「いやあ、それほどでも無いですよ」

『♪♪♪』

「え? 『東崎さん素敵です。憧れちゃいます?』いや、それ程じゃあ……」

「東崎先輩ツ!!その悪魔は危険です！」

俺の目の前には部長の使い魔、小猫ちゃんが東崎とイチャイチャしている光景が広がっていた。

俺はキャツスル・ドランに踏まれながら拳を握り歯を噛みしめる。

ふざけるなツふざけるなツ！馬鹿野郎ツ！！

だけどそれ以上に使い魔が……

「くそお……スラ次郎……触手丸2号オオオオオオオオオオオオオオツ！！」

俺の悲痛な叫びは虚しく使い魔の森に響き渡っていった。

## 月光校庭のエクスカリバー

21話 おい、テニヌしろ……じゃなかった。サッカーしようぜ!

リアス先輩の婚約が白紙に戻ってから数日、リアス先輩はイツセー君の家に住む事になった。

だが、それ以来リアス先輩はファッション雑誌を読んだりイツセー君へのスキンシップが多くなったり、イツセー君の性癖について相談されたり……。

要するにアレだ。

先輩、イツセー君に惚れました。

なんだろう。友人としては喜ぶべき場面なんだろうけど……。

イツセー君自身、アーシアさんとリアス先輩の好意に鈍感らしく、見ているこっちがイライラして来る。

お願いだからどつちかと付き合ってくれないかなあ。



「あら？…これって東崎かしら？」

「ん？…そうですね……お、懐かしいなあイリちゃんの写真も残っているのか」

イリちゃん今頃どうしてるかな？

小さい頃はよくモケポンで通信対戦しまくっていたな。

………できればあの頃よりも女の子らしい格好になると良いんだけどな。

「………東崎君、イツセー君。これ」

すると、木場君は小さい頃の僕、イツセー君、幼馴染だった友達イリちゃんがヒーローのようなポーズをとっている写真を見せて来た。

そう言えば小学生に上がる前に外国へ行ったんだっけか……。

「これに見覚えは？」

すると木場君は小さい頃の僕達の後ろに設置されていた剣を指差し——





僕は覚えている。

そう、アレは僕達がまだ子供だった頃の話だ。

~~~~~

『わーっ！本物の剣だ！かっこいい！』

『……………触つてもいいよね？』キヨロキヨロ

東崎は周りに誰も居ない事を確認すると鞘から剣を引き抜く。すると刀身が銀色にキラリと輝きまるで鏡のように自分の顔を映し出していた。

『お、おおおおお！凄く綺麗だ！…………ふ、振るだけなら許されるよね？』

東崎は誰も居ない部屋で言い訳しながら剣を上段に構える。

『ひっさーっ！あ、重…』

——ゴトン、パキンツ！

『……………あ』

~~~~~

そう、イリちゃんの家にあつた剣にヒビを入れてしまった出来事は今でも覚えてい  
る。

その後、すぐに剣は鞘に収めたのでバレていないと思う。

……………バレてないよね？（震え声）

でも、その剣が一体どうしたのだろうか？

すると木場君は目付きを鋭くしながら口を開く。

「思いもかけない場所で見かけるなんて、これは——聖剣だよ」

.....

.....

.....

聖剣が簡単に————ツ!!



球技大会が迫って来ている中、オカルト研究部に見慣れない姿があった。眼鏡をかけた知的な女とそれに付き添う男だ。だが、東崎達はその人物達に見覚えが

あった。

リアスは彼女の隣に立ち紹介を始める。

「改めて紹介するわ、こちらは支取しとり 蒼那知そうなつての通りこの学園の生徒会長よ」

「よろしく、兵藤君、アーシアさん、東崎君」

「あ、ご親切にどうも」

「そ、それで会長さんがどうしてここに？」

イツセーは悪魔の関係者である者しか立ち入らないオカルト研究部に学園の生徒会長が居る事に疑問に思う。

すると、後ろの方で待機していた男子学生が口を開く。

「なんだリアス先輩、もしかして兵藤達に俺達の事を話してないんですか？」

「支取蒼那様の本当の名前はソーナ・シトリー上級悪魔シトリー家の次期当主ですわ」

生徒会長がリアス達と同じ悪魔と言う事実にイツセー達は驚く。

それもその筈、男女問わず全生徒達からの人気が高い彼女が悪魔なのだ。驚くのも無

理はないだろう。

「この学校は実質グレモリー家が実権を握っていますが、『表』の生活では生徒会つまりシトリー家に支配を一任し、昼と夜で学園の分担を分けてます」

「会長と俺達シトリー眷属の悪魔が日中動きまくっているからこそ平和な学園生活を送れているんだ。それだけは覚えてもバチは当たらないぜ？」

彼女の言う事に対してイツセイ達は更に驚き、生徒会長の支取は眼鏡の縁をクイッと上げた後、側にいる男子生徒を紹介し始める。

「彼は生徒会書記の2年、匙 元士郎《さじ げんしろ》。シトリー眷属の”兵士”よ」  
「って、事は生徒会メンバー全員……」

「シトリーの眷属悪魔よ」

「(……………うちの学園って悪魔に支配されてるんだなあ)」

東崎は学園での知り合いの大半が悪魔と言う事実顔に顔を引攣らせる。

そして彼の頭の中にこの学園を支配するシスコン魔王のイメージが浮かび上がって

くるが、すぐに掻き消す。

するとイツセーは同じ兵士である匙に握手を求める。

「同学年に同じ”兵士”がいるのは嬉しいな、よろしくな」

「…俺としては変態3人組の1人であるお前と同じなんて酷くプライドが傷付くんだけどな……………」

「んだとテメエツ!!」

「……………当たり前前の反応なんだよなあ」

喧嘩腰になる2人の”兵士”をまるで子供の成長を見守る保護者の如く東崎は呑気に眺める。

ちなみに今現在までに覗きを繰り返している変態のイツセーと同じにされたくないと言う匙の言う事には一理ある。と言うか東崎は彼の気持ちが良く分かる。

そんな2人は更なる口論を繰り広げる。

「やるかこのエビフライ頭!」

「エビフライのどこが悪いんだよこの野郎!」

「悪くねえけどお前、ソースぶっかけんぞこの野郎。こう見えて俺は駒四つ消費した士だけぞ?最近悪魔になったばかりだがお前に負けるかよ!」

「おお、兵藤君の丁度半分なんだ」

「は、半分!?」

自信満々な匙に東崎の言葉が突き刺さる。

東崎の言葉が信じられないのか彼は自身の主人である支取に顔を向ける。

支取は眼鏡を押し上げた後、匙に説明をする。

「東崎君の言う通り。フェニックス家の三男を倒したのは彼なのよ。駒を八つ消費したのは伊達では無いと言う事です」

「そ、そうなんですか?俺はてつきりキバがやったものだ……」

困惑する匙を横目に支取は東崎にチラリと視線を移す。

「彼が……今代のキバ」

「ええ、その通りよ。だけど貴方が思っている程では無いわ」



「そう……改めてよろしくね、東崎君。ソーナ・シトリーよ」

「あ、いや。人間の時の名前がいいですよ。僕は別にファンガイアとか人間とかそういう言  
うの気にしてないですし」

すると東崎の言葉に少し驚いたのか彼女は目を見開いた後、微笑みを見せる。

「確かに……リアスの言う通りね」

「今更なんですけど、僕を何だと思ってるんですか……」

東崎はリアス達を含め、彼女達の自身へのイメージがどうなっているか気になって仕  
方がなかった。

「イツセー君、アーシアさん。うちの眷属はあなた方よりも実績が少ないので失礼な部  
分が多いですが新人の悪魔同士、仲良くしてあげてください」

「はい！よろしく願います！」

「アーシアさんなら大歓迎だよ！」

アーシアの手をギユツと握りしめる匙。

東崎は「あ、イツセー君と似てる」と心の中で思った。

すると、イツセーはアーシアと匙の間を割って入り匙の手を目一杯の力で握る。

「ハハハ！匙君！俺の事もよろしくね！つかアーシアに手を出したらぶつ殺すからね  
！」

「うん、よろしくね兵藤君！独り占めかい？本当にエロエロ鬼畜だね！天罰に遭って死  
んでしまえ！」

表では笑顔を保つ2人だが、言葉は本心を隠しきれていない事に彼等の主人はハアと溜息をつく。

互いの下僕がこれ以上仲を悪くしないよう支取は声を掛ける。

「私はこの学園を愛しています。1人の生徒として、悪魔としても。ですから学園の平和を乱した者は誰であろうと絶対に許しません」

「うう……」

「それと東崎君、伝えておきたいことが」

すると支取は東崎の方へ向き直る。

「球技大会、荒れますよ」

「……はい？」

そう一言呟くと、彼女は部屋を出て行った。そして遅れるように匙も部屋を出て行く。

「………もしかして、支取さんって痛い人？」

「東崎、それ以上駄目よ」

~~~~~

球技大会当日

支取が打つボールに急激な回転が加わる！

その螺旋エネルギーは多大なパワーを生み出し、黄金回転の如く！リアスのラケットを破壊したツ!!!

「え？……あれ、魔力使わなかった？」

「使いましたね」

東崎の言葉に小猫が頷く。試合に熱くなってしまったのか支取は生徒達の前で魔力を使ってしまったのだ。

生徒達は勿論、会長の力に対して——

「ま、魔球だ！」

「すげえ！初めて見た！」

「やべえよ！コレ！」

「……あるえー？」

——何も思っていなかった。

生徒達のリアクションに東崎は呆気にとられる。

「え? あ、あのー桐生さん? さっきのどう思う?」

「は、はあ……? まあ、会長だからおかしくないんじゃないの?」

「あ、そうですか」

会長達に対する生徒達のイメージがどのようなものか気になってしまいがグツと堪える。

「そ、ソーナ! さっきのはズルくないかしら!」

「あら? どうしたのかしらリアス。負け惜しみはあなたらしくないわね」

フフフと悪い笑みを浮かべる支取。

「……会長つてあんなキャラでしたっけ?」

「フフフ、この学園には良くも悪くも問題を抱える生徒が多いですわ。だいぶストレスが溜まっているみたいですよわ」

「あー、漫画研究部の事もたまに報告する時『絶版にしてやる』って呟いていたなあ……」

色々と納得した東崎を他所に再びリアス達の試合が再開される。

しばらくラリーが続いた後、次はリアスが仕掛ける。

「魔動球ツ!!!」

——ドオンツ!!!

轟音と共にリアスの球が放たれる。シユウウウウと煙が新しいラケットから出ていく。リアスの方に得点が入る。

「す、すげえ！魔動球だ！」

「あれがリアスお姉さまの奥義“魔動球”！」

「だけど、会長にはかなわないわ！」

「何を言ってるやがる！リアスお姉さまの魔動球は百八式もあるんだぜ！」

何故リアスの打つ球が百八式もある事を知っているのかはどうでも良いが、いよいよリアスまでも魔力を使ってしまう。

心配になってきたイツセーはリアスに声を掛ける。

「ぶ、部長!流石にそれは……!」

「馬鹿野郎!イツセー!あの人達の勝負にケチをつける気か!」

「あの領域には俺達について行けない!俺達はただ見守るしかないんだよ!」

どこからともなく現れた松田、元浜はガツシリとイツセーの腕を掴んで離さない。

悪魔以上の力を見せる2人にイツセーが驚く中、部長と会長の戦いは激しさを増して行く。

「フッフ、やるわねゾーナ!流石は私のライバル!」

「ええ、負けた方が小西屋のトツピング全部乗せたうどんを奢る約束、忘れてないわよね」

「勿論よ!喰らいなさい!獄炎魔動球ツ!!」

「甘いわね!支取ゾーンに入った球は全てを打ち返すわ!」

賭けの対象がシヨボ過ぎるお嬢様方のテニスは更に激しさを増し、挙げ句の果てには空を飛び、竜巻が発生し、召喚獣が出現し殴り合いが始まるという事態となつて行つた。それを観ている生徒達も盛り上がりテニスコート内の熱がどんどん上がつて行く。無数の歓声の中、東崎は心の奥底から叫ぶ。

「おい、テニスしろよ!!!」

テニスでは無くテニスと化した試合は続いていく。

~~~~~

球技大会、部活対抗戦。

テニスでは結果的にリアスと支取の同時優勝となつた。しかし、彼女等の試合の影響は一般生徒達のハートに火をつけてしまった。

「いくぜ! 『突風ダツシュ』!!!」

「行かせるかツ!!! 『the・障壁』ツ!!」

「必殺ツ!! 『フレイムタイフーン』!!!」

「止めてみせる! 『バーニングキャツ』——ぐあああああああ!」

「部長オ!!! 大変です! グラウンドで超次元サッカーが起きてます!」

「どうしてこうなったの!?!」

「十中八九、部長達がノリノリでテニスやったからだと思います!」

あらゆる種目で物理法則を無視した出来事が発生する。

テンションが上がってしまった人は本当に恐ろしいものだ。

そして、いよいよオカルト研究部vs吹奏楽部の試合。種目はドツジボールだ。

試合前た互いの部長達は握手を交わす。

「いい試合にしましょう」

「ええ、ですが……リアス・グレモリー貴女には負けられません。私には負けられない理由が3つあるのですから」

「何ですって?」

吹奏楽部の女部長の言葉にリアスは眉をひそめる。  
そんなリアスに対して彼女は不敵な笑みを浮かべる。

「1つ、前回の球技大会では貴女に負けてしまった。2つ、私はそのリベンジを必ず果たす!」

そして、ためるように彼女は最後の理由を口から出す。

「3つ、東崎莉紅を取り戻す為!」

「……え? 僕?」

「東崎を? 何故かしら?」

「覚えてないかしら? あの時の東崎君の演奏を!」

あの時とは恐らく、アジアが転校して来た際に東崎の意思とは別に始まってしまった演奏会の事だろう。彼女はさらに喋り続ける。

「彼の才能は貴女達オカルト研究部では発揮出来ませんが私達、吹奏楽部でなら貴女の才能を十二分に発揮できる!この勝負に勝ったら東崎君を私達の部に転部して貰います!」

ΩΩΩへな、なんだってー!ー!ー!!!

観客達がざわつき始める。

東崎自身、いつの間にか賭けの対象になっている事に驚きを隠せない様子だった。

「えっ、あの?」

「いいわ、受けて立ちましょう!」

「僕の意味は!!」

「勝てば良いのよそんなもの!」

ドンドン話が進んでいく部長達。

そして話置いてけぼりにされている東崎を他所にドッジボールは始まった。いや、

始まってしまった。

ボールを投げる東崎。

吹奏楽部からの集中砲火のボールを避けるイツセー。

試合中ボーつとしている木場。

「先輩は渡しません」と眩きながら鬼神の如く圧倒的強さを見せる小猫。

ボールが来ない為、ほぼ観戦となっているアーシアと姫島。

意気込んでいるもののボールが全く飛んで来ない為、涙目になるリアス。

ボールを避けるイツセー。

ボールを更に避けるイツセー。

木場にボールが当たりそうになった為、庇おうとするイツセー。

股間にボールが命中し、生々しい音が響くイツセー。

そのまま更衣室に連れて行かれるイツセー。

以上、ドッジボールの様子。

結果的に犠牲は出たがオカルト研究部の勝利となった。



球技大会から数日。

木場の様子がいつもと比べて違うのが東崎は分かった。

力になれないだろうか?と思っただがりアス達から木場は聖剣を憎んでいると聞いた東崎は無闇に人の過去を詮索するのはやめようと、そつとして置くことにした。

今日もいつもの通り学校に登校しているのだが、東崎の目の前に謎の光景が広がっていた。

「だから、何度も言ってるだろう!私達にはとある目的で動いていると!それについては何も言えない!」

「ほーう……つまりはだ、やましい事だらけで言えないって事か」

「私達にやましい事なんて神に誓ってあるわけ無いわ!!そうよ、これはきつと神からの試験に違いないわ!これを乗り越えて真の教徒になれるのね!」

「成る程な……とにかくお前等が不審者って事は分かった」

「違う！神に誓ってそんな訳無いだろう！」

「それじゃあお前等が持っている布の中身を見せてもらおうか」

「ぐっ……こうなればこの男を斬り捨てても……！」

ローブを羽織った2人組に煽るような言動で言い争っている担任の門矢先生。

東崎は放っておいたら絶対に口クナ事が起きないと判断したのか、仲介する事にした。

「何やってるんですか先生。お願いですからそんな挑発するような言い方はやめてくれませんか？」

「お前は相変わらず女々しい言い方だな。女らしい名前は伊達じゃないって事k」

「それ以上言ってみろ……俺は貴様をムッコロスッ！」

『おい、バカやめろ』

仲介する側の東崎が逆にされる側に回ってしまふ時間、およそ3秒弱。

バックの中からキバットが隠れながら声を掛けるが彼の耳には全く届いていない。

「……あれ? ねえもしかして」

「あ?」

そんな中、ローブを羽織った2人組の内1人が東崎に声を掛けて来た。荒れている東崎に向かってその人物はフードを外す。

するとオレンジがかかった茶色の髪の毛がパサリと露わとなり、その人物が女性だと言  
う事が分かる。

「あー! やっぱリリツ君だ!」

「……あれ? イリちゃん?」

これが『残念系幼馴染』と『妖怪ニス寄越せ』の再開だった。



## 22話 約束された勝利の剣（笑）

放課後、いつも通り僕は旧校舎のオカ研に来ていたが今回はいつもと違い校門付近で先生と言ひ争いをしていた長いオレンジがかつた茶色、栗毛をツインテールにしている娘と肩まで伸びた青い髪に緑のメツシユを入れた娘が居た。

更に生徒会長である支取まで居る為、只事では無いと直感できる。

「……………」ギリギリ

「ほら落ち着けて。なあ、東崎。イリナが女の子って……知ってたか？」  
「知ってた」

彼女達を怨念のこもった目で睨み付ける木場をイッセー君が抑える。

と言うかやっぱイッセー君って紫藤<sup>しどう</sup>イリナ<sup>いりな</sup>こと、イリちゃんの事男だと思つてたのか……。

それにしても昔別れた幼馴染の女の子が悪魔と敵対関係にある教会の戦士になつて

るなんて……運命って凄いなー。

さて……どんなタイムミングで小さい頃に聖剣を誤ってヒビを入れてしまった事を謝ればいいのだろうか。

と言うか聖剣って簡単に壊れるもんなの？脆すぎない？

そんな事を考えていふと青髪の女の子は口を開く。

「先日、『神の子を見張る者』にカトリック教会本部ヴァチカン及び、プロテスタント側、正教会側に保管、管理されていた聖剣エクスカリバーが奪われた」

その言葉にその場に居た全員は目を見開く。

………ん？ちよつと待って。

今、凄い単語が出てこなかった？

「墮天使の組織に聖剣を奪われたの？失態どころの騒ぎではないわね。でも、確かに奪うとしたら墮天使ぐらいなものかしら。悪魔わたしたちにとって、聖剣は興味の薄いものだもの」

「あ、あの？ちよつと！今、エクスカリバーって言いませんでしたか？」

「?……ああ、そう言うこと。キバット、貴方説明してないの?」

「元々、俺達はお前等悪魔に接触するつもりが無かったんだ。そんな情報、普通は教えねーよ」

リアス先輩はキバットの言葉に額を抑える。

まあ、確かに。リアス先輩達と本格的に知り合う前までは普通の生活を送ろうとしてたからなあ……。

するとリアス先輩は僕の心の中を察したのかイリちゃんに声を掛ける。

「ごめんなさいね。彼らの中には悪魔に成りたての子がいるから、エクスカリバーの説明込みで話を進めてもらってもかまわないかしら?」

「イツセー君、リッ君。エクスカリバーはね大昔の戦争に使われたの」

ベデイヴィエー……ルツツ  
!!!???

ちよつと!ベデイヴィエールが湖に返還したのに酷くない!?

型月世界では円卓の中でも常識人だったのに！

いや、確かにあの神造兵装は戦争に持ってこいだけどさあ……。

「そして、戦争の最中にバラバラに砕け散ってしまったの」

約束エされた勝利スの剣カ————ツ??

なんで聖剣ってそんな簡単に折れるの!!?? 脆すぎない!!?? 耐久E——どころじゃないよ

！  
ヒロインXさんに刺されても文句言えないんだけど!!??

「しかも、エクスカリバーを折ったのがファンガイアの頂点に立っていた初代キバナの」

何やってんだ初代イ————ツ!!!

セイバー!! スレイヤーの標的が僕になったじゃないか!!  
ふざけんなよ初代!!!

「大昔の戦争で砕け散ったエクスカリバーだが、折れた刃の破片を拾い集め、錬金術で新たに7本の聖剣を作り出したのさ」

すると青髪の女の子が呪術らしき文字が綴られた布が何重にも巻きつけられている得物を取り、彼女はそれをスルスルと解きはじめた。

そして隠されていたそれが姿を現す。

それは鈍い黒をした大剣だった。

その美しくも冷たい存在に目を奪われると同時に何かゾワゾワするものを感じる。

……え? ナニコレ。

「コレは『破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣』7つに分かれた聖剣のひとつだ。カトリックが管理している」

……は??

「私のは『擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣』。こんな風にカタチを自由自在にできるから、持ち運びにすごく便利なんだから。このようにエクスカリバーはそれぞれ特殊な力を有しているの。こちらはプロテスタントが管理しているわ」

「イリナ…悪魔にわざわざエクスカリバーの能力をしゃべる必要はないだろう？」

「『ゼノヴィア』。いくら悪魔だからと言っても信頼関係を築かなければ、この場ではしようがないでしょう？それに私の聖剣は能力を知られたからといって、悪魔の皆さんに後れを取ることはないわ」

……成る程。

まあ、別に形とかはどうでもいい、重要な事じゃない。

それにしても青髪の女の子はゼノヴィアって言うのか。

……よし。とりあえず確認しておこう。

「あのさ、2人とも。ちよつと確認したいんだけどいいかな？」

「……………なんだファンガイア。気安く私に話しかけるとはいいい度胸だ」

「ほら、落ちて着いてゼノヴィア。一応、私の幼馴染の1人なんだし。それに私達2人なら

キバなんか簡単に倒す事なんて朝飯前「ビームは？」……………うん？」

これだけは譲れない。

これだけは確認しておきたいツ!!

「ビームは出るの!? 風で剣を透明にしたり、魔力放出でブツパは?!!?」

「……………な、なあイリナ。エクスカリバーはビームなんか出るのか? 破壊の聖剣ではそんな事をできないぞ?」

「うーん、風じゃないけど透エクスカリバー・トランスベアレンシー明の聖剣なら……………」

「なんだ……………ただの劣化品か。期待して損した……………」

「よし、イリナ。コイツを今すぐに斬り捨てる!!」

「ま、待ちなさいってゼノヴィア!」

~~~~~

「それで、奪われたエクスカリバーがこんな極東の国にある地方都市にあるのかしら？」

リアスは真摯な態度で敵対組織と会話を再開させた。

「現状、聖剣はカトリック、プロテスタント、正教会に2本ずつ管理し、残る一本は大昔の戦争も折に行方不明となった。そのうち、各陣営にあるエクスカリバーが一本ずつ奪われた。奪った連中はこの国に逃れ、この地に持ち運んだって話なのさ」

やっと落ち着いたゼノヴィアは額を抑えながらリアスに説明を行う。

だがそんな彼女達を憎悪、嫌悪、殺意といった悪感情で睨む木場がプレッシャーを放つ。

そんなピリピリした空間で臆する事もなくゼノヴィアとリアスは話を続ける。

「なんともまあ、私の縄張りは出来事が豊富ね。それで、エクスカリバーを奪った連中に心当たりは？」

「奪った連中は『神の子を見張る者』その主犯格は墮天使幹部、コカビエルだ」
「コカビエル…。古の戦いから生き残る墮天使の幹部。まさかこんなところで聖書にも記される者の名前が出てくるとはね…」

コカビエルと言えば墮天使の幹部と言っても過言ではない者だ。

そんな相手に協力の要請だろうか？とイツセーは予想するがゼノヴィアはハッキリと述べる。

「私たちの依頼、いや要求とは私たちと墮天使のエクスカリバー争奪の戦いにお前たちは一切介入しないこと。つまり、今回の事件に関わるなど言いに来た」

的外れな内容にその場のほとんどが驚くがリアスは眉をひそめ言葉を投げかける。

「ずいぶん言い方ね。それは牽制かしら？もしかして、私たちがその墮天使と関わってもつかもせれないと思っっているの？」

「生憎、本部は可能性がないわけではないと思っっているのね。上は悪魔と墮天使を信用していない。神側から聖剣を取り払うことができればそちらも万々歳だろう？だから

「先に牽制球を放つことにした」

確かに彼女達の言うことは一理ある。いや、そもそも三すくみとなっている現状では当たり前なのだろう。彼女は淡々と述べる。

「もしもコカビエルと手を組むようなことがあれば、たとえ魔王の妹君であつても我々はあなたたちを徹底的に殲滅する。…これが私たちの上司からの言伝だ」

「私が魔王の妹だと知っているとすることは、あなたたち自身も相当上に通じているよ
うね。ならば、こちらとも言わせてもらうわ。私は墮天使と手を組んだりはしない。グレ
モリーの名に懸けて、魔王の顔に泥を塗るようなマネは絶対にしないわ」

しばらく両者の間に拮抗状態が続いたが、ゼノヴィアがフツとニヒルな笑みを浮かべ
る。

「その言葉が聞けただけでもいいさ。一応、コカビエルが盗んだエクスカリバーを持つ
てこの町に潜んでいるという事実をそちらに伝えておかなければと思つてね。でない
と何か起こった時に教会本部わたしたちがさまざまなものに恨まれることになるから

な。まあ、協力は仰がない。仮にそちらも神側と手を組んだとしたら、三すくみの均衡状態に影響が出るだろうからな。それが魔王の妹なら尚更だ」

ゼノヴィアの言葉にリアスはハアと息を吐いた。おそらく彼女達なりの優しさなのだろう。

「正教会からの派遣は？」

「上は今回の話を保留にした。それどころか私とイリナが奪還に失敗した場合を想定して、最後に残った一本を死守する魂胆なのだろうさ。せめて教官も来てくれればよかったのだが……」

ゼノヴィアの言葉にとにかく呆れた様子でリアスが問う。

「2人だけで奴らからエクスカリバーを奪還するつもりなの？無謀ね。死ぬわよ？」
「でしようね」

「私もイリナと同意見だが、できるなら死にたくはないな」

イリナとゼノヴィアの両名は真剣な眼差しで平然と言いつつた。
リアスは頭を抱えながら彼女達に再び問う。

「まさか死ぬ覚悟で日本に来たというの？あなた達の信仰は常軌を逸しているわね」
「私たちの信仰をバカにしないでちょうだいリアス・グレモリー。ね？ゼノヴィア」
「まあね。それに教会は墮天使に利用されるぐらいなら、エクスカリバーがすべて消滅してもかまわないと結論を出した。私たちの役目は最低でもエクスカリバーを墮天使の手からなくすことだ。そのためなら、この命など惜しくはない」

2人の覚悟を目の当たりにした東崎は内心で彼女達の信仰心が未恐ろしいと思った。
何故、こう言った信仰するキャラクターは頭がおかしい者ばかりなのだろうか。

東崎は信仰心を理解したくないと心の奥底でそう思う。

そして、イリナとゼノヴィアが目で合図を送りあうとおもむろに立ち上がる。

「それでは、そろそろお暇させてもらうかな。イリナ帰ろう」

「そうね。それじゃ、おじゃましました」

そのまま部室を去ろうとした2人だが、ふとゼノヴィアの視線が一ヶ所に止まる。そこにはイツセーの隣にいるアーシアが居たのだ。

「兵藤一誠の家で見かけた時、もしやと思ったが『魔女』アーシア・アルジェントか。まさか、この地で会おうとはな」

彼女が口にした『魔女』という言葉にアーシアはビクツと体を震わせる。それに気付いたのか、イリナもまじまじとアーシアを見つめ始めた。

「へえ〜。あなたが一時期噂になっていた『魔女』になった『聖女』さん？ 悪魔や墮天使を癒す力のせいで教会から追放されたと聞いていたけれど、悪魔になつていたとは思わなかったわ」

「…あ、あの…私は…」

2人に言い寄られ、対応に困ってしまうアーシア。そしてニコリとイリナは彼女に向けて笑顔を見せる。

「大丈夫よ。ここで見たことは上には伝えないから。聖女さまの周囲にいた方々が今のあなたのことを聞いたらショックを受けるでしょうからね」

「…」

イリナの言葉にアーシアは、今度は複雑極まりない表情を浮かべた。

「しかし、悪魔か。聖女と呼ばれていた者が堕ちるところまで堕ちたものだな。まだわれらの神を信じているのか？」

「ゼノヴィア、悪魔になった彼女が主を信仰しているはずないでしょう？」

呆れた様子でイリナは言うが、ゼノヴィアは即座に否定した。

「いや、彼女から信仰の匂いを感じ取れる。抽象的な言い方かもしれないが、私はそういうのに敏感でね。背信行為をする輩でも罪の意識から信仰心を忘れない者もいる。それと同じものが彼女から伝わってくるんだよ」

ゼノヴィアが目を細めると、イリナは興味深そうにまじまじとアーシアを見つめる。

「そうなの？アーシアさんは悪魔になった今でも主を信じているのかしら？」

イリナの問いかけに、アーシアは暗い表情でぽつりぽつりと呟き始めた。

「…ただ、捨てきれないだけです。ずっと、信じてきたものですから…」

それを聞いたゼノヴィアは布に包まれた聖剣を突き出し、見下すような視線で言った。

「そうか。ならば今すぐ私たちに斬られるといい。今なら神の名のもとに断罪しよう。罪深くとも、我らの神は救いの手を差し伸べてくださるはずだ」

彼女の目はもはや人を見る目では無い。そこら辺に居る虫でも見るような目でアーシアを見つめているのだ。

そのままアーシアに近づこうとするゼノヴィアだが、そこに東崎は呟く。

「うわあ、引くわ。信仰してるからって何でもしていいって感じに勘違いしているの引くどころか痛すぎる……」

「……なんだと？」

東崎の言葉にピクリとゼノヴィアが反応する。

そしてイツセーは東崎の言葉に便乗するようにアーシアの前に立つと怒気を含んだ口調で告げる。

「あんた、さっきアーシアのことを『魔女』だといったな？」

「ああ。少なくとも今の彼女は『魔女』と呼ばれるだけの存在ではあると思うが？」

平然と言つてのけるゼノヴィアへの怒りでイツセーは奥歯をギリギリと噛み鳴らすと彼女達に向かって叫ぶ。

「ふざけんな！自分たちで勝手に『聖女』に祭り上げておいて、少しでも求めていた結果が違つたら今度は『魔女』呼ばわりして見捨てんのかよ？そんなのおかしいだろッ!？」

激高するイツセーは腹からこみあげてくる感情を吐き出すかのようにさらに続ける。

「アーシアの苦しみを！アーシアの優しさを！誰もわからなかったくせに何が神様だ！現にその神様だってアーシアが助けを求めた時に何もしてくれなかったんだぞ!!」

「神は愛してくれていたよ。それでも何も起こらなかったとすれば、彼女の信仰が足りなかったか、もしくはそれが偽りだったというだけだ」

だが怒りを露わにするイツセーに、ゼノヴィアは悪びれることはなく、冷静に、淡々と、さも当然だと言わんばかりに返答した。

その態度がさらに彼の沸点を上げる。

「君はアーシア・アルジェントのなんだ？」

今度は向こうが聞いて来ると、正面から鋭い目つきを睨み返しハッキリと告げた。

「家族で、仲間で、友達だ！だからアーシアは俺が守る。もしお前たちがアーシアに手を出すって言うなら、俺はお前ら全員を敵に回してでも戦うぜ!!!」

「それは我ら教会への挑戦か？一介の悪魔に過ぎなくせにずいぶん大きな口を叩く。まるでしつけがなっていないな。教育不足もいいところだ。良いだろう相手をしてやる」

「ちよ、ちよつと？イツセー君、落ち着いー——」

「ちようどいい。なら僕も相手になろう」

今にも一触即発しそうな両者を東崎は落ち着かせようとしたのだが遮るように祐斗が前に出て来る。

「誰だ、キミは？」

問いかけるゼノヴィアに、祐斗は特大の殺気を放ちながら不敵に笑った。

「キミたちの先輩だよ。最も、*“失敗作”* だけどね」

その瞬間、部室全体に無数の魔剣が出現した。その様子を危険と感じたのか東崎は木場を後ろから組み付く。

「ちよつと、落ち着きなつて！こんな所で争つても危ないだけだよ！」

「それじゃあ別の場所でエクスカリバーを破壊する事にしよう」

「そう言う問題じゃないから！」

落ち着かせようとする東崎にゼノヴィアは布がまかれた聖剣を突き付ける。

「丁度いい。ファンガイア……いや、キバ。貴様をここで殺しておくのも悪くないだろう」

「あ、そう言うのいいですから」

「何！貴様、バカにしてるのか！」

ゼノヴィアは挑発的な言葉を東崎に投げ掛けるが東崎はすぐに断る。

ゼノヴィア自身、彼の言葉に『貴様は眼中に無い。失せろ』と勝手に解釈して勘違いしているが勿論、東崎にそんなつもりは無い。

普通に拒否しただけである。

東崎莉紅は寛大な心を持っている心優しい（は？）少年だ。

そんな挑発に易々と乗る訳ないだろう。

「ゼノヴィアやめときなさい。リツ君は名前が女の子っぽいように女々しい性格だからそんな事を言っても意味は——」

「よろしい、ならば戦争だ。ジワジワと鬨り殺しにしてやる！」

訂正。易々と挑発に乗る東崎であつた。

23話 蒼き狼牙

気がついたらイリちゃん達と戦う事になった。

な、何を言ってるのかわからねーと思うが（以下略、と言うか前回参照）

イツセー君達の話によるとどうやら怒りで我を忘れていたらしい。

マジか、テンションが高くなる事が怖いのは球技大会で身をもって味わった筈なのに。

とりあえず今、僕達は旧校舎裏の空き地に居る。

リアス先輩の話によると僕を含めたこれから戦う木場君、イリちゃん達は一般人には中の様子が見えない結界の中で戦うらしい。

チラリと横にいる木場君を見るとイケメンがしてはいけない顔になっている。

そんな木場君に対してゼノヴィアさんは顔色一つ変えない。

すっげえ。

「笑っているのか?」

「うん。倒したくて、壊したくて仕方なかったものが目の前にあるんだ。嬉しくてさ」

ククク、と漫画で言う復讐系主人公の如く悪そうな笑みを浮かべている。まるで悪魔だ……いやそう言えば既に悪魔だった。

そして目の前にいるイリちゃんに視線を向けると彼女はこちらに声を掛けてくる。

「リツ君……………」

イリちゃんは悲しそうな表情を浮かべる。

それもそうだ。小さい頃の幼馴染とこんな形で戦う事になるなんて僕だって納得出来ない。

せめて、彼女とはモケポンで戦いたかった。僕もイリちゃんに声を掛けようとする。

「イリちゃん——」ああ、なんて運命のイタズラ！ 聖剣に適正があつてイギリスに渡り久々の故郷の地で昔のお友達を斬らねばならない。なんて過酷な運命♪——さあ、リツ君！このエクスカリバーであなたの罪を裁いてあげるわ！アーメン！」……………？

あ、あれ？なんか予想と違って凄い開き直ってる？

なんか声が踊ってるし、身体くねらせてるし……。

……あるえー？

「東崎さん来てます!!」

「東崎……っ！前前前……！」

アーシアさんとイツセイ君の声により眼前に白銀の刃が迫って来てる事に気付く。

あ、やば。

このまま上半身と下半身が真っ二つになるのは御免なので人間離れした（ファンガイア）柔軟さでブリッジを行なった後、その場から飛び退く。

「気持ち悪い?？」

「人に気持ち悪いと言ってはいけません！すぐく傷つくから！キバット！」

「よっしや！出番だな！」

イリちゃんの斬撃による攻撃を躲しながらキバットを呼び出す。

呼ぶと大体3秒足らずで来るのはいつも不思議に思うが、とにかく変身するとしよ

う。

乗り気はしないがこのままでは確実にやられてしまう。

危なっ!? 白刃どりい!

「おお! あん時の幼馴染の女の子か。『ないすばでい』なネーチャンになりやがって……」

「キバットオ(怒)！」

ドスの効いた声でキバットを呼ぶ。

早く来い! こっちは幼馴染に斬られそうなんだよ!

なんで教会側のキャラってこう頭のおかしい奴等ばっかりなの!??

「わーったよ! キバって行くか! ガブリッ!」

「変身!!」

みるみる内に僕の身体が変化していく。よし、これで一先ず斬撃は大丈夫だろう。

とりあえず殴る蹴るは控えて先ずは動きを抑えよう。

奥義——HAME技！

波動結界

「ハッ！」

「なんの！」

——ザシユン

「!!？」

な!!？HAME技を切り裂いた!!？

波動結界

現時点での最強技をこうもアツサリと

!!!??

「いや、違うぞ莉紅！聖剣だ！邪な力を退ける聖なる力で魔皇力が掻き消されたんだ。分裂したエクスカリバーだとしてもその力は普通の聖剣と比べて並みじゃないからな！」

マジで
!!??

「むううう……！避けなくてよリッ君！」

つまりソレは自分に死ねと言いたいのか!
イギリスで何があった
!!??

「これでどうかな！」

するとイリちゃんは居合の構えをした後、大振りでエクスカリバー（刀）を振るって来る。

その程度の斬撃は難無く避けられ——!!??

——ガギイン！

「ぐ!!??」

一体何が起きた!?? エクスカリバー（刀）の間合いからはかなりの距離があつた筈!!
?

するとイリちゃんは続けて攻撃を仕掛けて来る。

「まだまだ行くよー!」

「くっ……!」

「そこっ!」

——ガギン!

再び命中。

イリちゃんは僕達のような人外とは違い、れつきとした人間だが普通の人間とは比べ物にならない身体能力で次第にこちらの動きに追いついて来る。

だが、攻撃が当たり始めている理由は恐らくそこじゃない。

7本に分裂したエクスカリバー固有の能力だ。確かイリちゃんの持つエクスカリバー・ミミックだっけ?

エクスカリバーの形を使い手のイメージで変幻自在に変えられる能力だった筈。

だとするなら考えられるのはエクスカリバーを振った直後、瞬時にエクスカリバーの刀身を更に伸ばす事によって遠心力としなりの力で鞭のように瞬間的な威力を上げているのだろう。

それだけなら良いんだけど……、身体が次第に重くなっているのを感じる。

ファンガイアの血を継ぐ僕も恐らく邪な存在なのだろうか？ いや、もしかしたらキバの鎧自体が邪な存在なのだろう。

エクスカリバーの斬撃を喰らう度に身体がだるくなっていく……。

「悪魔程では無いがファンガイアもエクスカリバーの聖なる力には弱いか……」
「余所見している暇あるのかい？」

アツチはアツチで激しい剣戟を繰り広げている。

なんか僕だけ素手で戦っているからか浮いている気がする。

………よし、それじゃあコツチも『剣』を使わせて貰うとしよう。

先ずはイリちゃんの斬撃を……。

「アーメン!!!」

——受け止めるッ!!

——ガッ!

「——! そんな!??」

「すげえ! 膝と手首の鎧を纏った部分で挟み込むように受け止めやがった!」
「イツセー先輩にはとてもできない芸当です」

「小猫ちゃあん!??」

イツセー君お願いだから静かにしてくれないかな……。

一応、幼馴染相手だから手加減はしているけど、力を調節しながら攻撃躲したり防いだりするのって結構疲れるんだよ!

とにかく、ホルダーからフェッスルを取り出しキバットに噛ませる!

「ガルルさん、月光の力お借りします!」

「よっしや『ガールセイバーッ』!!!」

~~~~~

「……………呼ばれたか……………」

男は頭の中から響いて来る声に眉をひそめる。

何時もならば彼の呼びかけに応じすぐさま駆けつけるのだが、男はその場から一歩も動かない。

いや、動けないと言った方が正しいだろう。

「さて……………困った。どうするべきか……………」

男は人の皮の裏側で獲物を定める。早く喉を潤したい。早く腹を満たしたい。

その欲求に耐え続けた男はギラリと目を光らせる。

……来た。獲物だ。

「ご主人様、メニューはお決まりでしょうかにゃん♪」

「コーヒード。美味しいコーヒーをーっ」

男、もとい次狼は現在、猫耳メイド喫茶でメニューを頼んでいた。

次郎はふらりと行きつけの店（メイド喫茶）でコーヒーを味わいに足を運んだのだが、後数分早く呼び出していれば『お帰りなさいだにゃん♪ご主人様』と言わせておいて何も頼まずそのまま出て行くというアウエーな感じにならないようにその場で留まる事は無かつただろう。

とにかく莉紅の呼び出しに応じなければ。

そう思った次狼は頼んだコーヒーが来るまでの時間に苛立ちを覚える。

「ご主人様。ご一緒に『にゃん♪にゃん♪オムライス（ハートマーク付き）』はいかがですかにゃん♪」

「いや……悪いが——」

「お願いだにやん……（上目遣い＋涙目のあざといコンボ）」

「……………」

この後、オムライスも頼んだ。

~~~~~

〜その頃

「ほらほら！この程度なの？リツ君！」

「ぐっ、本当に容赦無いなこの幼馴染！」

「次郎さーん！早くさーん！」


~~~~~

「お待ちどうさまですにゃん♪コーヒートにゃんにゃんオムライスですにゃん♪これからご主人様のオムライスにケチャップで愛を込めてハートマークを付けちゃうにゃん♪」

「ああ、たつぷりと頼む」

~~~~~

~~~~~  
その頃

「いつくよ~~~~!」

——ズガガガガガガガツ!!

「くそっ!木の陰に隠れて何とか攻撃を凌いちゃいるがこのままじゃマズイぞ!」

「次郎さああああああああああん!!! 何やってんだあああああああッ!!!」

~~~~~

「行つてらしゃいだにゃんご主人様!」

「さて……………」

支払いを済ませると次狼の姿はみるみる内に蒼の獣人へと変貌したと思うと今度は彫像へと姿を変え、その場から消えてしまう。

そして場所は変わり、旧校舎裏にて――

「……………来た!」

「やっとかよ、来るのが遅いんだよ!」

「何を言つ――!?」

イリナは驚愕する。

東崎、キバの手元には青い狼を模した一振りの剣が握られていた。

更にキバの左手、胸部が鎖に隠されたと思うと流線形の青の鎧へ変化していき、複眼も黄色から海のような深い青へ変わっていく。

そして、彼女の見間違いだろうか蒼の獣人がキバに重なるようなイメージが見える。

「これは……!?」

イリナだけでは無い。周りに居たイツセー達、木場やゼノヴィアまでもその変化に驚いた。

だが変化したのは姿だけでは無かった。

「ヴオ、オ、オオオオオオオオオオオオオオオオオツンツ!!」

さつきまでとは打って変わって、動きまでもが変わっていた。

先程までイリナを冷静に対処していた動きとは全く異なり、それは獣の如く荒々しい

動きをしていた。

腰を深く落とし剣を担ぎ吼えるその姿は彼等の知っているキバでは無かった。

「このッ！」

イリナはすぐに我に返ると自身の得物をキバに向かって振るう。

——ガギイン！

だが、キバは自身の剣『ガルルセイバー』でエクスカリバーを難無く受け止める。

「な!?？」

「ハアッ!!」

——ギイン！ギイン！ギイン！ガギイン!!

そしてお返しと言わんばかりにキバの反撃が始まる。

荒々しいその斬撃は力強く、的確な攻撃だ。イリナはなんとか防御するのが精一杯だった。

お互い罅迫り合いになるとキバがイリナに声をかける。

「ほう……いい女だ。しかも身体付きがとても良い。安産型だ」

「り、リツ君?!?まさか悪魔に乗っ取られてちゃったと言うの?!? って言うか私の事そんな目で見て居たの!!?」

キバの言葉にイリナは思わず後退りしながら自分の身体を隠そうとする。

「はっ……!そんな格好で誘っておいて何を言っている?」

「違うわよ!これは由緒正しき協会の戦士に送られるスーツなのよ!上層部がちゃんと考えて作ったものなんだから!」

「ありがとうございます!教会の方アツ!!」

後ろの方でイッセーが叫ぶがそこに小猫が無言の腹パンを入れる。

ちなみに感動的な台詞では無いので悪しからず。

顔を赤らめたイリナは居合の要領でエクスカリバーを振るう。

キバは彼女の間合いに入っている為、避けるのは至難の技だろう。

「いの……！」

——ブオン!!

先程までのキバならば。

「………!? いないですって!?」

「遅いぞ」

青のキバは一瞬でイリナの背後に回り、剣を振りかぶる。

「弱い女は要らん。死ね」

「あ………」

青のキバに一言告げられたイリナはこのままだと斬られてしまう事に気付く。

「防衛も回避も反撃もできない状況で彼女は、

ならばどうする？」

いや、突破口があるはずだ。

ダメだ避けれない。

このままだと死んでしまう。

ああ、私死んじゃうんだ。

彼女は素直に目の前の現実を受け入れる事にした。

「危なツ!?」

——ガシユツ!!!

瞬間、東崎は剣を持っていない方の手で振りかぶった剣を止めていた。鮮血が飛び散るがギリギリのところまでイリナに剣が当たらずに止まった。

そのまま剣を端々を持つとグググと力を込め始める。

『ぐおおおおお!??な、何をする! 莉紅! やめろ折れる! 折れる!』

「それはコツチの台詞なんだけど何人の幼馴染をサラツと殺そうとしてんのさ」

『……何? 幼馴染の女だと? ククク、莉紅。お前も隅に置けな——あ、すまない。謝るか
ら力を強くするなああああああああああああああアツツ?!?!』

目の前で起こっている事態にイリナは何がどうなっているのか理解できていない状態だった。

「え？えつと…」

「あ、この勝負イリちゃんの勝ちでいいよ」

「えつ？？？そんなアツサリと？？」

東崎の言葉にイリナは驚くが、それ以上にアツサリと相手に勝ちを譲る東崎の考えにイッセーは詰め寄ってくる。

「おい！いいのかよ？？あのままならお前の勝ちだったのによー」

「うーむ…いや別に負けても勝っても、これは『手合わせ』だからね。勝敗は関係ないでしょ？」

「そ、そりゃあ…まあ、確かに」

イッセーは東崎の言葉に納得してしまう。

いや、そもそも考えてみれば彼女達は天使側の者だ。もしも彼女達に危害を加えてしまったならば戦争の火種になる可能性もある。

頭を冷やしイッセーは彼はそこまで考えて結果的に勝ちを譲ったのだろうかと言う考

えに行き着く。

「つーか、なんか青くなってるけど大丈夫か？」

「大丈夫。ただ武器に宿っている魂に身体を乗っ取られていただけだから」

「いや、本当に大丈夫か!?!」

知らない間に幼馴染が可愛い女の子で教会の戦士になっていたと思ったら親友の方は色々とアウトな事になっていた。

自分も大概だがコイツ等はどうしてこうなった?とイツセーは心の中で呆気に取られる。

「随分と余裕だな。私達は眼中に無いと?」

気がつくくと木場とゼノヴィアとの戦いも終わりを迎えていた。

ゼノヴィアの持つエクスカリバーが木場の喉元に突きつけられており、この状況から察するにゼノヴィアの勝ちなのだろう。勝負が付いたと確信したゼノヴィアは得物を収め木場に背を向ける。

「ま、待てツまだ勝負は……!」

「ステイステイ、木場君。勝負はついたから……」

「まだだ……まだ僕は負けて……!」

「いや、キバの言う通りだよ」

未だに戦おうとする木場と彼を抑える東崎にゼノヴィアは声を掛ける。

「先程戦って分かったが君の本来のスタイルはスピードを生かした戦い方だろうか？だが君はあえて私のエクスカリバー・デストラクションと同じパワータイプの魔剣で挑んで来た。それが敗因だ。もし君がスピードを生かした戦いをしていれば私に勝てたかもしれない……まあ頭に血が上った状態で私に勝てるとは思えないが」

「……だまれ」

挑発を混ぜたであろうその言葉は反論する事が出来ないくらい正しかった。

だが今の木場にとって、それは火に油を注ぐ事と同じであり彼の耳にゼノヴィアの言葉は届かず、ただエクスカリバーの破壊しか頭になかった。

ゼノヴィアはそんな彼の心情を見抜いたのか溜息をついた後、イリナと共にその後、イリナと共にその場を後にしようとする。

だが、何かを思い出したのか彼女はこちらに振り向く。

「ひとつだけ言っておこう。『パニング・ドラゴン白い龍』はすでに目覚めているぞ」

「白い龍……?」

「それじゃあな赤龍帝に私達の先輩、そしてキバ。もう2度と会う事はないだろう」

「そう言うところを纏った彼女達はそれ以上は何も語らず彼等の前から立ち去って行く。」

イツセー達はそんな彼女達の後ろ姿をただ茫然と見るだけであった。

『あの女達……将来は有望だな』

「あ、これから一週間、次狼さんの飯は犬の餌だからね」

『
!!
?』

24話 くっころ

あれから木場はオカルト研究部に顔を出していなかった。

詳しい事は知らないがリアスが言うには主人である自分の言う事も聞かず去っていったらしい。

友達が真剣に悩み出した結果を咎める事は気が引く為、何も言わなかったが、もしかしたらバツタリと会うんじゃないかと思いつながら街中を歩く。

流石の東崎も改めて今までの事を考えてみる事にした。

『聖剣』『エクスカリバー』『失敗作』

東崎は木場とこのワードに必ず関係があると確信する。

まず『聖剣』『エクスカリバー』の構図で合っているだろう。木場は聖剣の中でも特にエクスカリバーを憎んでいる。

だが、分からないのは『失敗作』だ。
イリナ達に向けたこの言葉。

失敗作とは一体なんなのだろうか？

「……あ、やな予感がする」

緊張感の無い声がふと、口から漏れ出す。

異世界で聖剣、エクスカリバー、失敗作。それ等が頭の中でピースが合わさるように組み上がっていく。

そもそも何故、現代を生きる人間にエクスカリバーを使いこなすことが出来るのだろうか？

伝承ではエクスカリバーは湖の乙女がアーサー王の為に渡した剣であり、アーサー王の為に作られた聖剣なのだ。

つまりエクスカリバーはアーサー王専用ウエポンである為、現代を生きる一般ピーポーが使える物とは思えない。

ならば何故、イリナ達にはエクスカリバーを使いこなせたのか？そして何故、木場は

自身を失敗作を称したのか？

「まあ、木場君に聞けば分かるか」

東崎はそれ以上考えるのをやめた。おそらく近いうちに会えるだろう友達に全てを丸投げして彼は歩き続ける。

話は変わるが東崎が街中を歩いているのには理由がある。

と言つてもニスを求めて歩いている訳ではなく、前回の戦いで遅刻した上に大惨事を引き起こそうとした犬用のドックフード（夕飯）を買いに来たのだ。

現在、それを買い終え来た道を歩いていると……

「えー、迷える子羊にお恵みをー」

「天の父に変わって哀れな私達にお慈悲をオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「うわあ……」

哀れな子羊達が路銭を求めメーメー鳴いている光景が視界に映り込んで来たのだっ

た。

とりあえず東崎はしばらくその様子を眺める事にした。

「ええい！こうなつたのもイリナ！君が怪しい絵画なんて買うからだぞ！」

「怪しくなんてないわよっ！いいゼノヴィア！これは聖ペトロの絵画でとてもありがたーい物なのよ！」

「こんなムンクの叫びのような阿鼻叫喚な絵画のどこがペトロだ！君の目は節穴か!!」
「何ですって！この異教徒！」

「なんだと異教徒!!！」

「……フフツ」

不思議と笑いが込み上げて来る東崎だが、吹き出すのをなんとか抑える。
すると彼女達の腹から不意にグウ〜と腑抜けた音が聞こえる。

「……なあ、いつそこの地の神社や寺を襲つて金品を奪うと言うのはどうだ？」

「いいわね。手段は選んでいられないわ」

「……よし、警察呼ぶか」

すると何を血迷ったのか青髪の娘ゼノヴィアは茶髪のイリナの両足を脇で挟みジャイアントスイングをし始めた。

しかしそんな事で金が入ってくる筈もなく、それどころか周りにいた人達が離れていく。

「…もうちよつと見ていきたいんだけどなあ」

流石にこのままだとマズイと思つたのか東崎は後ろ髪が引かれる思いをぐつと抑えながら彼女達の元へ行く。

そして東崎は手に持っていたソレを投げ、ドサリと彼女達の足元に重い音が響く。

「おお！ 本当に来た！ 流石はJAPAN！ 《お・も・て・な・し》精神は伊達では無いのだな……！！？ き、貴様は！」

「ぐえっ！！？」

すると、ゼノヴィアは東崎の存在に気付くとイリナを放り投げその場から飛び退き布に包まれた剣を手取る。

「フフフ、私達が弱っている所を狙ってくるか。まあ野蛮なファンガイアが考えそうな手だな」

「弱っているのは自業自得だと思うんですけど。まあいいやソレはこの前のお詫びって感じで」

「だ、黙れ！お、お前の慈悲など……う、受け取る訳……な、ないだろう！」

ガッツリと足元にある重厚な袋に視線をチラチラと向けるゼノヴィア。

その様子を見た東崎はハアと溜息をつく。

「そっか、じゃあ受け取らないって事で——「あ、いや……ソレはソレで受け取っておこう」あ、そう？」

野蛮なファンガイアの慈悲を受け取るゼノヴィア。

するとどうしたのか、彼女が袋の中を覗き込むとプルプルと身体を震わせるながら彼に問いかける。

「おい……、なんだコレは？」

「何が？」

「袋の中には金の代わりに茶色の小さい物体が大量に入っているんだが？」

「え？そりやそうでしょ。ドックフードなんだから」

ドックフードだった。お金では無く、犬用の餌を目の前のファンガイアは与えて来たのだ。

そんな彼の慈悲（笑）に対して彼女はプルプルと肩を震わせながら額に青筋を立てながら呟く。

「フッフ、よし殺す」

至極当然の反応だった。

金色の瞳を輝かせながら布に包まれた剣を構えるゼノヴィア。

一触即発の雰囲気か辺りを包み込み始める。

ナチュラルに馬鹿にして怒らせたという事実を理解していないこの男は「え？なんで怒ってるの？牛乳飲んでる？」と呟き戸惑うばかりである。

まさか先程の言動で相手の癩に触らないと思っていたのか？コイツは……。

「私達への侮辱、天使側への宣戦布告とみなしていいんだな。イリナ殺るぞ……」

「……………」

「……………おい、イリナ。何を黙ってドックフードなんかを見つめている。目の前にいるのはファンガイアだぞ？しかもその頂点に君臨するキバの鎧を受け継ぎし者だ！」

ハイライトの消えた瞳でドックフードを見つめるイリナにゼノヴィアは喝を入れるが、反応が無い。

どうしたのだろうか？とゼノヴィアがしばらくイリナの様子を眺めているとおもむろに袋の中に手をつ込みドックフードを一掴み。

「ねえ知ってるかしら？…………ドックフードって人間でも食べられる物もあるのよ」

そのままイリナはドックフードを自身の口へ運ぼうとする。

「待てイリナ！早まるな考え直せ！それはそれとしてちゃんと食べられるかどうかは私

が確認しよう、ソレを寄越せ！」

「渡すもんですかこの異教徒！」

「なんだと異教徒!!」

今度はドックフードの為に争い始める2人。

そんな彼女達を前に彼の中きら沸き立つ感情は呆れでも哀れみでもなければ怒りでも無い。喜悅の感情だった。

もし手元に白飯があれば余裕で5杯はいけるなあと言う感情がフツフツと東崎の中から溢れ出て来ようとする。

と言うか、未知の領域に足を突っ込もうとしている感じだった。

いいぞ！その娘達。もつとやれ。

「いや、お前は何やってんだよ」

東崎が視線を後方に向けると、見慣れたオカルト研究部の仲間であり友達でもあるイツセーと後輩の小猫、そしてそんな2人とは関係が無さそうな生徒会の一員でもある匙元士郎が呆れた表情でこちらを見ていた。

~~~~~

「うまい！うまいぞコレは!!!」

「やっぱり私にとつての日本のソウルフードはファミレスの料理よね!!」

目の前に並べられた料理が次々と彼女達の口の中に消えていく。

余程空腹だったのか料理を完食したと思っただけの料理に手を付けるの繰り返しであり、ゴリゴリとイツセー達の財布の中身が減っていく。

「あ、チョコレートマウンテンパフェのクリームマシマシお願いします」

「頼むのかよ!? つたく……あ、すみません。ササミお願いしますーす」

「お前も食うのかよ!?」

「私も東崎先輩のと同じで」

「小猫ちゃん!?」



上から東崎、イツセー、小猫の順でオカルト研究部の面々も料理を頼む様子に匙は唾然とする。

「くつ……悪魔達に飯を食べさせてもらうなんて、何という屈辱……ッ！」

「ああ、私達は悪魔に魂を売ってしまったのね……」

「コイツらいけしやあしやあと……」と呟くイツセーを他所に東崎は彼女達が手を付けている料理の皿をおもむろにこちら側に引き寄せる。

「あ、それじゃあいらないんだね。まあ屈辱なら仕方ないよね」

「——だが料理には罪は無い。うん罪は無いぞ」

「その通りね！だからハンバーグを食べさせてください。お願いしますリツ君ッ！」  
「なあ、お前この2人の扱い上手くなってないか？」

頭を下げる2人の姿に匙は呆れたような表情を見せる。

東崎は何やら不満そうな表情で皿を戻すと2人はすぐさま料理にがつつき始める。

するとゼノヴィアは満足したのか手を付けていた料理を食べ終えるとこちらに質問をして来た。

「……それで？ 私達に接触して来た理由はなんだ？」

「ああ、エクスカリバーの破壊に協力したい」

イツセーが言う事を要約すると木場はエクスカリバーに復讐する為にグレモリー眷属から離れたらしく彼を連れ戻す為に否、彼を助ける為にエクスカリバーの破壊に協力したいという事だ。

「破壊するのかエクスカリバー……ヒロインXに『人様の宝具をぶち壊そうとしてんじゃねえカリバアアアアツ!!』されても知らないよ?」

「いや、ヒロインXってなんだよ!!?」

「……成る程。言いたい事は分かった」

「それじゃあ!」

「その話は難しいな」

ゼノヴィアはイツセーの言葉を遮るように呟く。

「元々、この使命は私達に与えられたものだ。先日言った通り悪魔が介入すべき事では無い」

「なっ!? お前! 死ぬかもしれないんだぞ!」

「それでもだ。私達はエクスカリバーを回収する、それだけだ」

ゼノヴィアは自身の意思の固さを見せつけるように腕を組みながらそう告げる。

イツセーは納得できずにゼノヴィアに対して口を開こうとすると東崎が手で制する。

「まあ、しようがない潔く諦めようか」

「東崎! お前木場の事がどうでも良いってのか!?」

「うーん、まあ。人の過去を散策するのは決して良い事じゃないからなあ。それにイリちゃん達も僕達と協力するのは嫌なんですよ?」

「当然よ、だって三大勢力間は未だに緊張状態が続いているんだもの。勝手にそんな事をしたらダメに決まっているじゃない……あ、ストロベリーパフェお願いまーす」

「と言う感じだよイツセー君」

「ぐっ……」

東崎の言葉に押されるイツセー。確かに彼の言う事も最もだろう。

しかし納得できなかつた、いや納得できるはずがない。

すると先程まで静かにしていた小猫が口を開く。

「東崎先輩は……祐斗先輩が心配じゃないんですか?」

「いや?心配だよ勿論。だけど木場君自身が僕達に協力する姿勢を見せない限りはなあ

……。無理矢理お世話を焼くのは本人に失礼だからね」

「……そう……ですか」

東崎の言葉にどこか悲しそうな表情を見せる小猫。

この件に乗り気じゃない態度を見せる彼はゼノヴィアに話しかける。

「と、言うわけだよ」

「成る程。思つたより話が分かるじゃないか」

「まあね。と言うわけで引き止めてごめんなさい。僕達はもう帰るよ」

「なっ!?? おい勝手に決めんなよ! まだ話は終わって……!」

「と言うわけで支払いよろしく」

「……え?」

ゼノヴィア達の目の前に一枚の紙を出す。

イツセー達は東崎の行動に疑問を持つがそのまま東崎の話は続く。

「いや、支払いだよ支払い。オムライス、ハンバーグ、ミートソーススパゲティ、グラタン、その他諸々でざっと〇〇万円人には言えない額だね」

「……え?」

ゼノヴィアとイリナは東崎の言葉の意味が分からなかった。

その横でイツセー達は嫌な予感を察知する。

「もしかして僕達が払うと思った? え? 何言ってるの? 馬鹿なの? そう簡単にお金をポ

ンと渡してくれると思ってたの？え？金が無い？自業自得でしょ？僕達には関係無いんだから。で？お金が無い貴女達はどようなの？あーあー、もしもこの事が教会の方に知られたらどうなるのかなー？」

——もしかしてコイツ……

「……で協力してくれるよね」ニッコリ

——ハメやがった!!？

悪魔の目の前で悪魔的所業が行われた瞬間であった。



公園の噴水近くにイツセー達とゼノヴィア、イリナ。そして木場祐斗が集まっていた。

「……まさかエクスカリバーの破壊をエクスカリバー使いに承認されるとは癪だね」

「ふん、そう言う貴様こそ今は主人の元を離れているそうじゃないか。別に今ここではぐれ悪魔として貴様を排除する事も可能だぞ？」

一触即発の雰囲気にはイツセーは内心ハラハラするが、東崎がポケットからとある物を突きつける。

つ 『伝票』

「——と思ったが仲良くしようじゃないか。よろしく頼むぞ先輩」

弱みを握られた教会の戦士が手のひら返しする様子に木場は可哀想な者を見るような目をゼノヴィア向ける。

「……ああ……うん。よろしく頼むよ」

そして、何かを察したのかいつもの爽やかな笑顔を向ける。

そんな悪魔からの優しさに気付いたのか、屈辱的な思いに囚われたゼノヴィアは膝をつく。

「くっ……殺せえッ!!」

この光景を見たイツセーが「くっころ」を本当に言う女性がいて驚愕すると同時に歓喜しているの言うまでもなかった。



## 25話 聖・剣・破・壊

あれから数日が経ち、東崎達は悪魔側と教会側の二手に分かれ、エクスカリバーの捜索を行っていた。

そして現在、東崎達はと言うとローブを羽織り謎の集団神父の格好をしていた！

「迷える仔羊にオメガミラー迷える仔羊にオメガミラー」

「先輩、途中から飽きてませんか？」

「そうだぜ？もうちよつと真剣にやろうぜ？」

「えー……我らは神の代理人。神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らう愚者を、その肉の最後の一片までも絶滅する事……AMENツ!!!」

「怖えええええ!!? 何なのお前の神父に対するイメージ！殺伐とし過ぎてねえか!!?」

早速、東崎の口から悪魔と異教徒ぶつ殺す宣言を聞いた匙はイツセーの背後に隠れる。どうやらイツセーと匙はどこか気が合ったらしく、東崎に対し仲が良い事を見せつ

けて来る。

「とう言うかさ、本当にこんな作戦で来るの？その……フリードって人は？」

「ああ、多分来ると思うよ……とところで、東崎君ちよつといいかい？」

東崎の問いに木場が答えるとお返しと言わんばかりに今度は木場が問いかける。

「どうして君は何も言わずに手伝ってくれるんだい？」

「？」

「あの時、君は皆と違ってファンガイアとしての立場がある。何故関係の無い君が手を貸してくれるんだい？君には他にも目的があるって言うのかい？」

「ええ……、そう言われてもなあ」

東崎は苦虫を噛み潰したような表情を見せる。

「えつと……ハッキリ言うとな僕はに関係無い事だしぶつちやけどうでもいい事だよ」

「……………」

「でもさ、別に僕は復讐が悪い事って言いたいわけじゃないよ。過去の自分と向き合う事でもあるし……それに復讐を果たすんなら他人の力もあつた方が効率的でしょ」

そう言うのと東崎はフードを深く被りブツブツと「オメガミラー」と呟き始める。そんな様子を見ていた木場の顔にフツと笑みがこぼれる。

「やれやれ……素直じゃないんだね」

「東崎ってさ、意外とツンデレな所があるんだぜ？」

「へえ、それは意外だね」

「神よ黙れこの悪魔達十字架に祝福打ちを与えたまえ!!」

「頭がアツ!?」

イラツと来たのか東崎がお祈り十字架（手作り）を投げつけるコンボによってイツセーと木場の2人は頭を抑えながら悶絶する。

「……バカばっか」

そんな様子を呆れるように見る小猫だがすぐにその表情は笑みへと変わる。先日までのギクシヤクした関係が嘘のように見せるその光景は小猫にとって喜ばしいものであった。

「……あ、あれ？もしかして笑ってる？」

「……………！ 来ます」

匙が無自覚に笑みを浮かべていた小猫に問い掛けるがそれを遮るようにとある人物が彼等の前に訪れる。

「上から来るぞ気を付けろ!!」

その人物から殺気を感じ取ったのか東崎が叫ぶとその場の全員は戦闘態勢に入る。すると上空から白髪の男が歪んだ笑みを浮かべながら剣を振るって来る。

「神父の一団にご加護があれってネ!!」

そこに木場が魔剣を創造しその者の初撃を防ぐ。その男の正体にグレモリー眷属であるイツセー、木場、小猫が目を見開く。

「フリードッ！」

この男の正体はフリード。はぐれ神父であり、ある意味イツセー達の因縁深い相手である。

「おんやあ？その声はもしかするとイツセー君かい？よくよく見るといつぞやのイケメン君にチビのペチャパイ——

瞬間、小猫から怒りのオーラが溢れ出す。

——じゃなかったお嬢さん！……つたく今夜も楽しく神父狩りだと思つたのに……いや、ソイツは本物か？まあ首チョンパしちやえばどいつもこいつもおんなじだけどねえッ！」

するとフリードは後方にいる東崎に向かって剣を振りかぶる。

「東崎！変身前のお前でも直撃を喰らえばタダじゃすまねえ！避けるオ！」

「松岡さん……？？」

「お前何言ってるの？？」

うわ言のように何かを呟きながらポーっとしている東崎に対しイツセーはツツコミを入れる。

するとギリギリのところ東崎は白刃取りでフリードの剣を受け止める。

「……………あれ？」

するとどうしたのだろうか、ガクリと東崎はその場で膝をついてしまう。

そこに木場が創造して魔剣でフリードを攻撃するが軽い身のこなしでその場から飛び退き斬撃を難無く躲してしまう。

「これはイリちゃんと戦った時と同じ力が抜ける感覚……聖剣？」

「だとするとアレは……!!」

「その通りでござんす! こちらの聖剣ちゃんエクスカリバー・ラビッドは天閃の聖剣! その能力は

———  
速さを向上させる力!」

———  
ザシユツ!

「……ツツ?」

「東崎君!」

一瞬の内に東崎の肩が斬られ鮮血が空に舞う。「ぐっ」と苦しそうな声を漏らしながら東崎はその場で膝をつき、木場が駆け寄るがそんな隙を見逃してくれないだろうフ  
リードは更なる追撃を行う為、聖剣を振りかぶる。

「ハツハツハー……人脱落ウー……!!」

「伸びろラインよ……そして——」

すると匙の手元から謎の黒いラインが伸び、フリードの脚に絡みつく。そのままグツと力を込めてラインを引っ張るとフリードは弧を描くように地面に叩きつけられる。

「——らあッ!!」

「ガッ……!?くそっ……ウゼエなコレっ!」

フリードは脚に絡みつくラインを斬ろうとするがまるで実体が無いように聖剣による斬撃はすり抜けてしまう。

「どうだ兵藤!これが俺の神セイグリッド・ギア器『黒い龍脈』だ!この神器は拘束した相手のパワーを吸い取る事が可能だ!」

ニツと笑いながらイツセーに自身の黒いトカゲを模した籠手を見せつける。



「クッソ！ぎけんじやねえぞこのクソ雑魚悪魔が！テメエらの自主規制（ビリー）を引き裂いて自主規制（ビリー）してから自主規制（バギューン）してやるツ！！」

「あのさ、なんでこう教会の戦士って頭がバグっているような人材ばかりなの？」

怒りに我を忘れているフリードの様子に東崎は呆然とする。

この短期間で出会った教会キャラが色々とネジが紛失している性格をしている為、そう思うのも仕方ないだろう。

すると東崎はハッとある事に気付く。

「って事はアーシアさんも……」

「東崎イ！何言ってるんだアーシアがそんないけない娘になる訳ないだろうが！と言うかそんなの俺が許さねえ！」

「性欲の権化イツセー君が一番危なつかしいんだよ！」

「なんだとこの野郎！」

「やるか？この性犯罪者予備軍！」

「先輩達、今は喧嘩しないでください」

——ドツ×2（腹パン）

ギヤーギヤーと口論をし始める東崎とイツセーに小猫が物理で仲裁を行う。「おごご……」と腹を抑えその場に崩れる赤龍帝とキバ。とても哀れな姿である。

「テメエら仲良く漫才ですか？アハハウケる————と言うわけでさっさと死んでちよーだい！」

とフリードはこの中で最も弱いと判断したのだろう。再び東崎に狙いを定め聖剣を振りかぶる。

それに対して東崎はフリードが迫り来るなか空に向かって叫ぶ。

「キバツトオ!!!」

「おう！キバって——（ガシツ）」

「コウモリガード!!!」

「えっ、何g——危ねえッ!?!?」

——ガギンツ!!

東崎いつものようにキバットを呼び出し、それに応じたキバットを驚掴みにすると盾代わりにする。

驚愕するキバットは自前の顎の力でフリードが振りかぶる聖剣を受け止める。

そこへ小猫が蹴りを繰り出す。天閃の聖剣によつてスピードが向上したフリードに命中することは無かつた。

「——何しやがる莉紅！いきなり盾代わりつてそりやねえだろ！つーかどんな状況だよコレ！」

「エクスカリバーを破壊する為に戦つてる」

「成る程、単純明快で分かりやすい——つて馬鹿！お前、俺の知らない所で何やつてんだよ！」

キバットが自分の待遇に対して莉紅に申し立てるが、本人はそれを尻目にフリードと木場の戦いに視線を向けている。

騎士の特性によりスピーディーな戦いを行える木場だがフリードも天閃の聖剣によ

り木場以上のスピードで戦っている。

更に悪魔は聖なる力に弱い為、フリードが優勢となっている事が分かる。匙が先程から神器によりフリードの力を吸い取っているがそれを含めて優勢となっている事からフリードの実力がどれ程のものかを語っている。

「……行くよキバット変身だ」

「〜〜と言うわけで俺は——つておい！俺の話ちゃんと聞いてたか？……つて聞いてる風には見えねえなチクショウ！」

半ば諦めたようにキバットは東崎の手にガブリと噛み付くと、紅のベルトにぶら下がる。

「変身」

すると東崎の姿は紅と銀の異形の姿へと変身を遂げる。それを間近で見た匙はギョツと驚き目を見開く。

「そ、それが……キバの姿か？」

「キバ……へえー……っ？お前が噂のファンガイアの生き残りってヤツ？」

するとフリードは聖剣をペロリと舐め、新たな獲物の登場に対して笑みを浮かべる。新たな獲物に定められたキバは接近戦を行う為、フリードに向かって駆け出す。

「それじゃあ第2ラウンド開始といきますかねえ！」

「僕も忘れるな」「邪魔なんだよ悪魔君!!」

隙を見せたフリードに木場は魔剣を振りかぶるが、フリードは懐に隠していた銃を取り出し木場に向かって発砲する。

光の弾丸を魔剣で防ぐ木場を尻目にフリードはキバに向かって聖剣を振るう。

「莉紅！エクスカリバーを直で触るのは避けるよ！力が抜けていくから面倒くせえぞ！」

「分かった」

キバットの言葉にキバはそう返すと器用に聖剣による攻撃を腕輪、肩当て、膝といった鎧の部分で防いでいく。

ガギン！ガギン！と剣と鎧が激しくぶつかり合い火花を散らす。

そしてキバはフリードの攻撃のを防ぎながら反撃を加えていくが――

――ブオン！

「どこ狙ってんだあ……つとおおおっ！」

キバの攻撃はフリードに当たる事はなかった。フリードの持つ天閃の聖剣は持ち主のスピードを格段に上げる能力を持つ。

フリードは人間だが、聖剣の能力によって木場と同等、もしくはそれ以上のスピードで戦闘を行う事が可能となっている。

キバの鎧キバフォームの基本形態はスピードよりのスペックとなっているがそれすらをフリードは上回っている事となる。

「先輩！」

——ブオン!

すると小猫はコチラに向かって何かを投げて来る。おそらく援護のつもりなのだろう。

東崎はそれを確認した後、すぐさま飛び退こうと——

「……………あああああああああああッ!!?」

「!?」

以外ッ!それは人!と言うかイツセー!

それはまさしく南斗人間砲弾の如く、真っ直ぐコチラに向かって叫びながら突っ込ん  
で来るその姿を思わず二度見してしまう。

このままではイツセーはフリードへと成す術なく聖剣で斬られるのがオチだろう。

ここは親友として東崎は彼を助け——

「あ、無理だコレ受け止められないや」





すると溢れんばかりのオーラを放ちながら沢山の魔剣が生きているかのようから生える。更にその魔剣は徐々にフリードが居る場所へと範囲を広げていく。

フリードは手に持つ聖剣で生えてくる魔剣をガラス細工のように粉々にするが地面から次々と新たな魔剣が生え、いや創造されていく。

「チツ、鬱陶しいなコレッ!!」

舌打ちしながら聖剣を振るう。例えばフリードが持つ聖剣が自身の素早さを大幅に飛躍させたとしても人間には限界がある。

それに加えて匙の神器によって力を徐々に吸い取る事によってフリードの身体能力は最初の方と比べて落ちてきている事が分かる。

「東崎君、僕が足止めをしている内にフリードを倒してくれ。ただし聖剣は傷つけないでくれよ。それは僕の役目だからね」  
聖剣の破壊

「——やれやれ、注文が多いな……ガールさん！獣人の力お借りします！」

「よし、『ガールセイバー——ッ』!!!」

肩をすくめながらキバは青のフェッスルをキバットに吹かせる。  
すると空の彼方から落ちて来た狼を模した彫像が青い剣『魔獣剣ガルルセイバー』へ変形する。

ガルルセイバーを掴んだキバの身体は青を基調とした姿へと変わり、スピードを特化させた形態『ガルルフォーム』へとフォームチェンジを行った。

「……………今回はちゃんと遅れずに来たね」

『……………』（ドキドキ）

「それじゃあ、この活躍次第でドックフード生活を免除する事にしようか」

『FOOOOOOOOOOOOOOOO!!!』

雄叫び（狼郎側）を上げながらフォームチェンジを終えたキバ。月光に照らされながらキバはガルルセイバーの刀身をキバットに噛ませる。

「キバット、いきなりだけどドメと行こうか」

「つしやあッ！『ガルルバイト』!!!」

刹那、辺りが赤き霧に包まれる。一瞬何が起きてるのか分からなかったイツセー達だが、その中で匙はとある事に違和感を覚える。

「……？（あれ？今日って三日月だったけか？）」

そんな匙を尻目にキバは手に持っていたガルルセイバーを自身の口に運ぶと腰を低くしながら構える。

キバは獲物を見据えるとそのまま駆け出し始め――

「何をしているフリード」

キバの動きが止まった。

不意に聞こえて来た声に反応してしまい、足を止めてしまったのだ。その場にいた全員もその声が聞こえて来た所へ視線を向ける。

そこには神父の格好をした初老の男性が居た。見覚えの無い人物の登場に困惑するイツセー達だったがその中で木場だけは憎悪を抱いた表情でその者の名を呟く。

「——バルパー・ガリレイツ!!」

「いかにも私がバルパー・ガリレイだ」

その者、バルパーは木場の言葉に肯定するように頷くとフリードに視線を向ける。

「何をしている、貴様に渡した因子をもつと有効に活用したまえ。体に流れる因子をで  
きるだけ剣に込めろ。さすればさらに聖剣の切れ味は増していく」

「なっほど……そらよおッ!」

フリードはバルパーの言う通りにすると匙の籠手から伸ばされていたラインがブツ  
リと断ち切られてしまい、拘束から抜け出されてしまう。

『チツ……莉紅!このまま決めるぞ』

「逃したらエクスカリバーの破壊も全部アか……仕方ない。エクスカリバーごとフ  
リードを斬るッ!!」

おそらく聖剣も折ってしまうだろうが、逃しては元も子もないと判断したキバはフリードとバルパーに向かつて口に咥えたガルルセイバーを振り下ろす。振り下ろされた刃は確実にフリードの首を捉えた。

—— 筈だった。

—— ブオンツ!!!

「!??!」

「外れた!??!」

「い、いや、当たった筈だ!でもフリード達が突然消えやがった!??!」

振り下ろされた刃は空を切っただけで、そこには誰も居なかった。先程までフリードとバルパーが居たのをその場の全員は目撃している。それならば何故か?

「ぎんねーん!答えはもう一つのエクスカリバーちゃんでしたあ!」

離れた場所からフリードの声が聞こえて来る。全員が声の聞こえてきた方向へ視線を向けると、そこには、2本の聖剣を手に持ったフリードとバルパーの姿があった。

『エクスカリバー・ナイトメア  
夢幻の聖剣!』

「次狼さん知ってるのか?」

『ああ、アレは幻覚を生み出す聖剣でな、どうやら俺達はまんまと奴等の幻影によつて惑わされていたという言うワケか……!』

「そう言う事!もつと遊びたいんだけどー、そろそろ行かなきゃならないんでバイチャ

フリードは懐から手の平サイズの球体を取り出し、そのまま地面に叩きつけようとす  
る。

が、フリードに向かって影が飛び出し月の光によつてキラリと輝く刃が振り下ろされ  
る。

「チツ……仕留め損なつたか」

「ぐつ、テメエ等何もんだ……?」

間一髪のところ、フリードは振り下ろされた刃を聖剣で防いでいた。そこに現れた影の正体は東崎達が良く知っている聖剣を構えたゼノヴィアだった。

「やつほー、イツセイ君。私も来たわよ!」

「えっ!??イ、イリナ!お前等どうして此処に……!」

「元々、彼女達と協力する手筈でしたから」

そう言う小猫の手元にはケータイが収められており、彼女がフリードと遭遇した時にゼノヴィア達に連絡したのだろう。

「反逆の徒め、神の名の元に断罪してくれる……!」

「ハッ!俺の前で神の名前なんて出すんじゃねえよ!」

そう言うフリードは二本の聖剣を振るい、ゼノヴィアを払い除けた直後手元にあつた球体、閃光玉を使用する。

すると目の前の視界が真っ白に染め上げられ、気がつくのとフリードとバルパーの姿は何処にも無かった。

「くっ、追うぞ、イリナ！」

「ええ、行きましょう！」

「ちよつと!!? 深追いは危険——」

「大丈夫よりッ君！神の名の元に絶対に失敗はしないわ！」

「いや、何言っ——」

「逃すが聖剣！」

「君もか!!?」

止めようとする東崎の言葉を振り切り、2人はそのままフリード達を追いかける。木場も2人の後を追うような形で走り去ってしまう。

「くそっ！何やってんだよ木場の奴！俺達も追うぞ！」

舌打ちしながらイツセーも走り出そうとするが、変身を解除した東崎は彼の襟首を掴



み走り出すのを抑える。

「何すんだよ！木場の奴を放っておくのかよ！」

「うん、それも大事だけどさ。まずはアッチにどんな言い訳をするか考えたらどう？あと匙君も」

「はあ？何を言つて——」

「イツセーこれはどう言う事かしら？」

「匙。状況を説明しなさい」

ギギギギと首を動かしながら後方の聞き覚えのある声へと視線を向ける。  
そこにはオーラを放出させながらコチラを見る主人達が居た。



それから匙君とイツセー君のダブル土下座を見た後、僕達は別の所へ移動した。さつきから匙君は土下座したままプルプルと震えており、その姿がとても面白——  
「いや、見てて哀しくなってくる。」

「匙、貴方がこんな勝手な真似をするなんて困った子ですね……絶版にしますよ?」  
「ヒエツ」

そんな匙君の横でリアス先輩はイツセー君に事件の顛末を聞き出しているようだ。

「ようするに、祐斗はそのバルパーを追って行ったのね?」

「はい、多分イリナとゼノヴィアも一緒だと思います。何かあつたら連絡をよこしてくれると思うんですが……」

「復讐の事で頭がいっぱいになっている祐斗が悠長に連絡をよこすかしら」

確かにリアス先輩の言う通りだ。あの木場君の様子じゃバルパーとエクスカリバーの事しか考えてないんだろう。

……折角、和解出来たと思っただけだな……。

「小猫」

「…はい」

「どうしてこんなことを？」

「…祐斗先輩がいなくなるのは嫌です」

搭城さんは静かに彼女の思いを口にした。それについても同感だ。僕だって友人がいなくなるのは嫌だ。

するとリアス先輩の表情が困惑の色に変わる。

「過ぎたことをあれこれ言うつもりはないけれど、ただ、あなたたちがやったことは大きく見れば悪魔の世界に影響を与えるかもしれないよ？それはわかるわね？」

「すみません、部長」

「…ゴメンなさい、部長」

……この人、いや悪魔はやっぱり非情になりきれないんだよな。

迷惑をかけちゃったな……。

「ごめんなさいリアス先輩。エクスカリバーの破壊に便乗した僕にも責任があります」  
「……………えっ？」

「少なからず調子に乗っていたんだと思います。心の中で何処か『どうにかなるだろう』と他人事のつもりで手伝っていたんだと思います」

僕にはファンガイアの血が流れている。その影響なのか他種族を見下してしまい、まるでテレビの外側から覗いているような感覚で他人と接してしまう。

だからこそ、エクスカリバーをすぐに破壊できなかつた。

——いや、しなかつたのだ。

「だから、大半の責任は僕が受けます。どうぞ煮るなり焼くなり好きにしてください」  
「……………そう、それじゃあ“アレ”と同じ事をさせて貰うわ」

リアス先輩が視線を横に移す、僕もリアス先輩と同じ方向へ視線を向けると

——バシンッ！バシンッ！

「あなたには反省が必要ですねッ！」

「うわあああんツ?!ごめんなさいイツ！許してください、会長オオツ！アヒンツ!!?」  
イツタイ尻ガアアアアアアアアアツ!!」

匙君が支取会長に尻を叩かれていた。よく見る手には青い魔力がこもっている。

……………マジか。

「すみません。せめて他のヤツは……………」

「ダメよ尻叩き1000回は絶対よ」

「……………分かりました」

仕方ない……………か。甘んじてリアス先輩の罰を受けるとしよう。

ああ、嫌だなあ……………。あんな辱めを受けるのは色々な意味で傷が残るだろうな……………。

と云うかりアス先輩の魔力って滅びの力宿ってんだよなあ。尻が消滅しなきゃいいけど。

「待つてくださいい部長！そもそもその責任は俺にもあります！」

「……私もイツセー先輩と同じ考えです。だから罰の半分は私が受けます。だから……」

イツセー君、搭城さん……。

「……分かったわ。小猫お尻を突き出しなさい。東崎もよ」

「ツ！部長！コレは俺が考えた計画なんです！せめて小猫ちゃんだけは……！」

「いくわよ2人共」

さて……そろそろ覚悟決めないとな。これから1ヶ月はまともに座れる生活は送れないだろうなあ。

「ごめん、搭城さん」

「大丈夫です東崎先輩。それに……私、嬉しかったです」

「え？」

それってどう言う……。

そう言うおうとした直後、リアス先輩の手が上から下へと搭城さんの尻に向かっていくのが視界に映る。

そして――

「……んっ!」

「終わりよ小猫。さて、東崎キバっていきなさい」

あ、あれ? 思ったより痛くなさそう? と言うか搭城さん一瞬だけど感じていなかった

――バシンツ!!!

「あッ――――!!?」

なんで!!? なんか搭城さんと僕の差おかしくなかった!!? 物凄く痛いよ! 尻叩きで出しちゃダメな音が出ただけど!!?!



なんかアレだ。ガ○使の罰ゲームを思い出した！人間って恐ろしい事思いつくなあツ!!

「あらあらフッフ、リアスったら優しいのね」

優しいの!!?アレで!!?

.....

.....

.....

「つて言うか居たんですか姫島先輩……!」

「ええ、とても面白s——皆が心配で来てしまいました」

あれ?なんだろう。一瞬変な言葉が聞こえたような気がする。

「小猫、東崎。貴方達の自分の行いに反省する態度に免じてこれくらいで勘弁するわ」

「部長………なんか僕だけおかしくなかったですか？」

「あら？東崎。貴方だって男でしょ？女の子の前で弱音吐いちやダメじゃない」

ええー………そうなると横で現在進行形の形で弱音吐いている匙君はどうなるんだろう。

「ふふ、でも自分のやった事に責任を感じ反省する事はとても立派な事なのよ」

「部長、ありがとうございます……」

「さすがリアス部長だ。厳しくて優しいお方だ」

「さて、イツセー。次は貴方の番よ」

「うっす！それじゃあお願いしまーす！」

なんか喜んで尻を叩かれに行ってるのってどう見てもマゾのそれしか見えない。

でも………なんだろう。自ら尻を突き出してるイツセー君を見ているとなんか心の底から変なものが湧き出てくるような……。

「それじゃあ残り998回、全部受けて貰うわね」

「えっ」

「あら？そもそもその責任は貴方にあるんでしょう？それに——男の子が弱音を吐いちやダメでしょ？」

イツセー君の顔がみるみる内に青ざめていく。

するとコチラに顔を向けて助けを求めような表情を見せてくる。

はそれに対してニツコリとサムズアップ。イツセー君はキラキラとした表情で笑みを浮かべる。

……直後、僕は親指を下に向け首を切るような動作をする。

「おい東崎この野郎!!なんか反省して好感度アップさせるような事言つて、どう言うう見だテメエツ!!」

ごめんイツセー君。やっぱり人の本質って言うのは変えられないものなんだよ（笑）

……だ、ただど少なくとも今回の事件、僕は真面目に取り組むつもりだよ。

キバの鎧、そしてキバツト……これは僕の本来の力では無い。ただど神様、リアス先輩達の為に使わせて貰います。

「それじゃあ行くわよイツセー」

「えっいや、あの、ちよつ、待つ——」

この後、無茶苦茶イツセー君の尻が腫れた。

## 26話

## 愚者

「痛ッ~~~~!!まだ尻がいてえ……!」

「いやあ、部長の尻叩きつて本当に怖いね。一回叩かれただけでも尻が破裂しそうな勢いだっただし」

「……俺としてはお前と朱乃さんの絡みが物凄く怖かったよ」

現在、お仕置きが終了し、オカルト研究部のメンバー全員はイツセー宅へ向かっている。これはエクスカリバーをどのように対処するかの意味合いも含めての事だ。

「フッフ、イツセー君つたら……私はただ、悪魔らしく欲望に忠実に……ね?」

「何が欲望に忠実よ……、いいかしら東崎。貴方はこのオカルト研究部において比較的、良識のあるキャラクターを保つて欲しいの」

「……? 部長、自分で言うのもなんですけど僕は悪魔問わずニスになりそうなモノがあればホイホイ着いて行くような……アレですよ?」

「よく理解してるじゃない。それじゃあそれを治すように努力して欲しいのだけだ」

リアスがそう言うと、背後にいる姫島が不敵な笑みを浮かべる。

「あらあらフフフ。ところで東崎君、ニスの材料になりそうなモノに心当たりがありませんか？……一緒に鞭を振るってくれればソレをお譲り致します——」

「やめなさいって言うてるでしょうが！これ以上、問題児私の心労を増やす訳にはいかないわ！」

「部長、もしかしてその問題児って俺カウントされてます？」

「イツセー君。逆に何故、君はカウントされてないと思つた？」

そんなこんなで会話をしながらイツセー宅に到着したリアス一行。イツセーがただいまと口にしながら玄関の扉に手を掛ける。

「あ、お帰りなさいイツセーさん！」

そこに明るい表情で皆を幸せにするようなアジアが全員を出迎える。

——ただし裸エプロンだ。

それを見た東崎はすかさずイツセーにチョークスリーパーを掛ける。

「ぐう——!? な、何を……!? ?」

「何をじゃないから。なに純粋な娘に悪影響与えてんだコラ。なにを吹き込んだら裸工プロンで出迎えるのが常識みたいになってんだ?」

「ち、違——あ、アーシアが勝手に……!」

「……ほら、東崎そろそろやめなさい(どうしよう、私がアーシアに吹き込んだって言えない……)」

リアスの心の中のカミングアウトを東崎達は知るよしも無く、エプロンだけを羽織っているアーシアをそのままにする訳にもいかなかったのでその場にいた全員はイツセーの家へ上がる事となった。

(……裸エプロン。そう言うのもあるのか——! )  
「……あれ、何故か悪寒が?」

背後で獲物東崎を狙うハンター小は目を鋭くさせる。謎の悪寒の正体に気付かないまま東崎はイツセーの家へ足を運んでいく。





イドが高い分、シヨックが凄まじかったのだろう。シユンと大人しくなる。

「ハハハ、まあ料理に関しては女性陣に任せて私達はここで見守っておこうじゃないか」  
「そうよ。アーシアちゃん達が料理を手伝ってくれるんだからね」

「うーん……まあ、それじゃあ御言葉に甘えて」

東崎はそう言うのと渋々とテーブル席に着く。

「……でもなあ、やっぱり駄目だと思っただけどなあ」

「まだ言うのかよ。ここは母さんの言う通りにおこうぜ？」

「あー、いやそうじゃなくてね。イツセー君の母さんを除く女性陣が何故、裸エプロンなの？」

東崎達の目の前には裸エプロンを着用した女の子達がキャツキャツフフと楽しそうに料理を作っているのだ。

「なあ一誠……私はアーシアちゃんを引き取って本当に良いと思った」

「俺もそう思う。けど、アーシアだけでなく部長や小猫ちゃんも着てくれるとは……ッ！クソッ！朱乃さんは報告（エクスカリバーの件）の為に帰っちゃったからなあ。もし居てくれたら最高だったのになあ！……とところで東崎はこの光景どう思う？」

「今すぐに尻を引つ叩いて服を着せた後、説教したい」

東崎は「比較的、良識のあるキャラクターを保って欲しいの」と言っていた数分前のリアスにこの光景を見せてやりたいなあ……と考えながらテーブルに突っ伏す。

何故、こうもイッサーに関わった者は変態に染まってしまうのか。コレガワカラナイ。

「すみません、ちょっと前通りますね」

「……………」

特に、エロに関して厳しい筈の小猫まで裸エプロンを着ている事が分からない。

「すみません、また通ります」

「……………」

先程から小猫が東崎の前を数分置きに横切っている事に対し、まさか狙ってやっているのか？と一瞬考え込むが「…そうか既に僕はイツセー君に毒されていたのか」と自分が自覚無しのロリコンと一方的に思い込み、軽い絶望感を味わう。

スツと席を立ち上がった東崎は小猫の肩にポンと手を乗せる。ビクツと小猫は驚いた後、少し期待したような恥じらっているような表情を見せる。

「え、えつと…せんば「ごめん搭城さん。僕ちよつと横になつてくる」………あ？」

ソファにドサアと崩れ落ちるように東崎は倒れ込む。その様子に小猫はガクリとその場で項垂れ、アーシア、リアス、イツセー母達に慰められる事となった。



「……ばい……ばい………先輩！」

「……ん？何……？」

目を覚ますと搭城さんが視界に映って来た。と言うか身体中が痛いしお腹も空いた。どうやらあのまま眠っていたらしい。すると急いで来たかのようにキバットも飛んで来る。

「おい、やべーぞ莉紅！」

「ん？どうしたの穀潰し」

「やめろ莉紅。その言葉は俺に効く」

「ハイハイ…で、どうしたの？こっちは微妙な時間に起きたから凄く眠いんだけど」

いやあ、眠い。凄く眠い。フカフカのお布団に入っすぐさま夢の中へGOしたい。

「コカビエルがやって来たんだよ！」

「……コカビエル？」

コカビエルつてあの……あの……？あれ？コカビエルつて誰だっけ？眠気で頭が回らないんだけど。

「おら、いいから早く来い！ここで対処出来るのはお前くらいしかないんだよ！」

「先輩、行きますよ」

「あだだだだだ！分かった、分かったから襟首持つて引つ張るのやめて！千切れる！首が千切れるから！」

そのまま Bannon！と玄関のドアを塔城さんが開けるとそこには大きな黒い翼を生やした男が宙に浮いていた。よくよく見るとすぐ近くにフリードも佇んでいるのが分かる。

そんな謎の男達の前にイツセー君達が立ちはだかつて、イツセー君の腕の中には服がビリビリに破け、どう見ても事後（意味深）にしか見えない格好のイリちゃんが――

「……あ！東崎か！よく来てくれ……あ、あれ？おい東崎。なんでお前は俺んちの自転車を担いでこつちに向かつて来るんだ？……おい黙ってないで何か言ってく——うおつ!!?危ねえツ!何すんだお前！」

「君の腕の中を見ればすぐ分かる」

「こ、これは誤解だ東崎！弁明を！」

「女の衣服をひん剥く事を考えている君からどんな弁明を聞けと……?ま、とりあえず殴る」

よく分からないけどなんかムシヤクシヤするので一発殴っておかないと気が済まない。

……いや、もう何発かは殴っておこう。

「落ち着きなさい東崎！」

「リアス先輩どいて、ソイツ殴れない！」

「いや、ホントに落ち着きなさい!!?」

とにかく、イツセー君がこれ以上罪を重ねない内に抹消しておいた方が色々な意味で

彼の為になると思う。とにかく死ねえやイツセエエエエ——ッ

「先輩落ち着いて下さい」

——ズドン!! (凄まじい衝撃が腹部に響く音)

「おぶ」

「落ち着きましたか?」

「うごごごごごご……お、落ち着きました……」

「ああ、コレが今代のキバなんて悲しくなつて来るぜ……」

おい、穀潰しコウモリ。自分がキバだと言う事に不満があるなら聞こうじゃないか。

「……キバだと?」

あれ、どうしたんだろう? キバと言う単語に反応を示す……コ、コカビエルさんだっけ?  
?

なんかこつちをジツと見つめてるんだけど……。

こう言うのは男女が見つめ合つて恋に落ちると言うありがちな少女漫画パターンだけど相手は墮天使で男。すみませんが野郎はお引き取りください。

「そうか……クク、お前が！お前がツ！キバが！！クククハハハハ！！ハーハッハッハッハッハ！！会いたかつたぞ！！会いたかつたぞキバア！！俺は新たなキバの誕生を待つていた！！さあ殺し合おう！すぐに殺し合おう！！いや待て！魔王共も呼んで戦争を始めよう！！グハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！どうする！どうやって殺し合う？そうだ！舞台を用意しよう！！舞台はこの町だ！！お前はどうかやって俺を殺してくれる？？翼を千切るのか？？それとも肉を引き裂くのか？？ああ、楽しみだ！凄く楽しみだ！！サーゼクスウ！！セラフォルウウ！！そしてキバア！！早く早く早く！早く！早く！早く！殺し合おう！！キバ！キバ！今代のキバよ！！俺はお前を愛しているぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

「！！！！！！！！！！」



その場にいたコカビエルを除く全員（フリードも含める）はコカビエルの告白に驚愕を隠せなかった。

……え？告白？

え？え？え？

「えつと……ごめんなさい！タイプじゃないんです!!」

「無理矢理でも押し通るツ!!!」

「お前ホモかよ!!?」

「ホモでも一向に構わんツ!!」

「ヒエツ」

や、やばい!!こいつ<sup>コカビエル</sup>ガチホモだ!!え？マジで？嘘だろ!!?嘘だと言ってよバーニイ!!

「先輩どいて下さい。アイツ殺して来ます」

「落ち着いて小猫ちゃん!!?」

「いやあ、ウチのボスの告白されるとは羨ましいねえ……ドンマイ」

敵である外道神父からも同情される始末だよチクシヨウ。

……あ、あれ？おかしいな。足が言う事を聞かないぞ？こつ、この！動けこの足め！

「ヤベエ、あのサディストに目覚めかけた東崎が産まれたて子鹿のように小猫ちゃんの背後でガグブルしてる……」

「あ、アレがコカビエルの本性だと言うの……！」

「部長、墮天使の幹部の本性がヤンホモって……」

「言わないでイツセー！」

うるさいぞココオ!!

「フフフ……首を長くして待っているぞキバア!!!」

「んじゃ、そゆことで！……まじかあ。ウチのボスってホモかあ……」

そう言うとかカビエルは翼を羽ばたかせ、漆黒の空へ消えていく。そしてフリードは手に持っていた閃光弾を使い、視界が白く塗り潰された後、姿を消していた。

……あ、これチャンスじゃね？

「クソツ！コカビエルの野郎……部長！」

「ええ！好きにさせるワケには行かないわ。東崎、貴方の力を貸してくれるかしら……あれ？小猫、東崎はどこに行ったのかしら？」

「……？先輩なら私の後ろに……あれ、居ない？」

「どこに行きやがった……って、なんだこれ？手紙か？」

『ちよつと木場くんとゼノヴィアさんを探しに行つてきます。ついでに僕の事は探さないで下さい　by東崎莉紅』

「……………アイツ逃げやがった!？」

## 27話 自分らしくない事を

「あー、知らない！知らない！あんな所なんか居られるか！」

そう叫びながら自宅の庭で耳を塞ぎながら座り込む東崎。

「おい、莉紅！なんか前までは友達のために頑張る〜とか意気込んでたじゃねえか！」

「えー、何のことー!?？全く覚えが無いんですけどオ！」

元々、自分には関係の無い事だ。自分が居ても居なくても世界は回る。

そうだ、自分のやっている事は正しい。自分は間違っていない。そう自分に言い聞かせる。

それに、仮にも自分が助けに行ったとして、

「……ああ、クソ。逃げ出した自分がどうやって顔を出せって言うんだよチクショウ！」

彼等に失望されるだけだ。理由は何であれ自分は友人を見捨てた事となっている。こんな自分が助けに行く資格なんて無いだろう。

——ブウウウウンツ!!ブウウウウンツ!!

「ああっ!!うるさいな!何でこのバイクは墮天使の位置なんか察しているんだよ!」

隣で鎖に繋がれたらマシンキバーがエンジンを吹かしている。に舌打ちする東崎。これでは、本当に自分が助けに行く流れになってしまわないかと思ひ悩む。

「…ああクソ、キバット!そもそもコレは僕に関係の無い事だろ?だったら放つておいても良くないか?」

「お前な、木場の奴の復讐を手伝ってやるって言っただろ」

「……ハア、こんな時こそ悪魔達なんて放つておこうぜって言って欲しいのに」

キバットの言葉にガクリと項垂れる。

ここまでして、東崎が急に事件と関わろうとしないのは、ファンガイアと人間の混ざ

り合った不安定な価値観によるものだ。

東崎はファンガイアと人間のハーフだが、精神的はどちら寄りなのか？

答えはどちらもだ。

例えば、目の前で死にかけている人が居たとして、見捨てると言えば簡単に見捨てることが出来るし、助けようと思えば助ける事も出来る。

キバの鎧を身に纏えば精神はファンガイア寄りに傾き、相手を殺す事も躊躇わないだろう。

しかし東崎はキバの鎧を自分の知る『ヒーローが身に付けていたモノ』として認識している為、東崎がキバの鎧を『ヒーローが身に付けていたモノ』と認識しているまでは、ファンガイアの問題に染まり切る事は無いのだ。

つまり、東崎莉紅とはファンガイア、人間どちら片方の味方をし続ける事が出来ない半端な愚者なのだ。

「……なあ莉紅。これでも俺はお前に友人が出来た事を嬉しく思ってるんだぜ？」

「……いきなりどうしたの？」

そんな東崎にキバットは急に話を始めた。

「いやさ、お前はファンガイアと人間のハーフで、ファンガイアの命を軽く見る所や、人間の脆い部分とかを継いでいる面倒な奴だよ」

「え？何、喧嘩売ってんの？」

東崎は不快に思いながらもキバットの言葉に耳を傾ける。

「まあ、聞けよ。だけどき、キバの鎧を纏うお前が今まで一線誰かを殺すを越える事が無かったのはお前の友人達が居たからじゃねえのか？」

「……………どういう事？」

キバットは理解していた。東崎莉紅はファンガイアにも人間にもなれない者だと。だからこそ、悪魔達と接触すれば何が起こるか分からない。

最悪、三大勢力の戦争の時のようにまた新たなキバとして東崎が君臨してしまうかもしれないからだ。

……………だが、今まで見てきて確信した事がある。

「別に……けど、お前がコカビエルと戦わなければ誰が代わりに戦うと思う?」

「……万じょ」

「イツセー達だ。今のコカビエルはキバと言う名の《破壊の象徴》に囚われている。そんな状態のコカビエルにリアス・グレモリー達が勝てる確率は0に近い。確実に殺されるだろう」

東崎莉紅は友人の為にキバとして戦う事が出来る。ただ、彼は素直になれない捻くれ者なのだ。

「現時点でコカビエルと渡り合えるのはお前だけだ!それともなんだ?イツセー達が戦っている間、お前はガクガクと震えてばかりか?テメエは戦えるだろ!いつまでも捻くれてんじゃねえぞ!お前の——」

だからこそ、本心を出させる為にキバットは

「——女々しい名前は伊達じゃないってか!」



起爆剤を投与する事にした。

「——やってやるよチクシヨオ!!後で覚えておけよ!」

爆発するように東崎はその場から立ち上がり、バイクを繋いでいた鎖を解き、ヘルメットを着用した後バイクに跨る。

「待ってるコカビエル!やられる前にやってやるよチクシヨオ!」

「お、おう。が、頑張れよ?」

起爆剤の効果が予想以上だったのかキバットは引き気味に応援をする。

東崎そのままバイクのエンジンを吹かし、アクセルを全開にして走り出す。

——ガシャンツ!!!

「ぶッー!」

「……………え?」

が、バイクを走らせた直後、謎の音が聞こえると共に車体に衝撃が伝わる。東崎は恐る恐る、目を凝らしながら前方を確認すると見覚えのある青髪緑メツシユの娘が倒れていた。

「……………」

何だろうかこのデジャヴは……？

東崎は合掌を行った後、イツセー達の元へ急ぐ為にバイクに跨る——

「まあ、待て。丁度良かった。お前コカビエルが何処に居るか知らないか？」

——前に肩を掴まれる。ぶつちやけ生きていた。

教会の戦士は轢かれた程度で死ぬような脆さは持ち合わせておらず、しつかり訓練されているのだ。

「知ってるけど……ゼノヴィアさん、今まで何処に行っていたの？」

「潜伏していそうな場所を片っ端から調べていてな、243個目を調べようとした所にお前に轢かれた」

「あー成る程ね、さては脳筋だなオメー」

「貴様ア！お前も教官やイリナと同じように脳筋と呼ぶかア！」

どうやら東崎の感想は周りと同じらしく、目の前の脳筋娘ゼノヴィアはふうーふうーと怒りを落ち着かせるように深呼吸を行う。

「まあ、いい。コカビエルの元へ行くのなら私も乗せていけ……ほう、コレがバイクと言  
う物か……」

「ねえ、何で勝手に乗ってるの？ちよつと！勝手に後ろに乗らないでくれる!!？せめて  
聖剣を仕舞って！聖なるオーラが微妙に熱いから！」

無理矢理乗ってくるゼノヴィアを押し退けようとする東崎だが、それに夢中でコチラ  
にやって来るもう一人の存在に気付けなかった。

「丁度良かったよ東崎君。僕も乗せて行ってもらうよ」

「木場君……お前もか」



俺達は現在、駒王学園でコカビエルが差し向けて来たケルベロスと戦っている。

被害を最小限に抑える為に、会長達は学園に結界を張ってくれているので動けない。

木場は合流出来てないし、東崎の奴は逃げ出しやがったし！

とにかく今は俺たち部長の眷属だけでやるしか無い。

部長が言うにはこの戦いはあくまでも魔王様が来る間の時間稼ぎに過ぎない。

……けど、イリナをやったコカビエルには一泡ふかしてやんねえと気がすまねえ！

「グオオオオオオオツ!!」

「滅びなさい!」

けど、俺の神器の本領を發揮するには時間がかかる為、今は部長達の戦いを見守る事

しか出来ない。

クソ！こんなのじゃ負ける気しかしねえ……………!!??

「アーシア！」

「えっ……………きやあつ!!?」

俺はアーシアを抱きかかえながら、その場から飛び退く。その理由として、ケルベロスがもう一体居たからだ！もう一体いんのかよ！双子か!!??

「イ、イツセーさん……………！」

「安心しろアーシア。俺が囷になって！」

「い、いえイツセーさん！ケルベロスがもう2体……………！」

「…は？」

よく目を凝らしてみると、奥の闇の中からケルベロスが2体現れたのだ。はあ!!??.  
なんて嬉しくねえ追加だよ！

「アーシア、お前は隙を見てここから離れてくれ」

「イツセーさんは？」

「俺はあの2体…いや、3体をなんとかする！……おら！俺はこっちだついて来い！」

そう言いながら俺は挑発をしつつ、校庭を走り回る。現状俺に出来る事と言えば囷になつてケルベロス達の間を与える事くらいだ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「危ねえッ！」

問題なのは俺の神器ブースデッド・ギアの倍加の途中に攻撃する。もしくは、攻撃されてもリセットされてしまう。

俺はその場で跳躍、ケルベロスの頭の上を踏み台にする、脚の下をくぐり抜けるといったように攻撃をかわし続ける。

……こんなんじやダメだ……!

東崎ならさっさとケルベロスを倒せるに違いない。俺とアイツの間に来ている差がこうも実感できるのはとても辛い事だ……!

「グオオオオオオツ!!」

「ツ!しまっ——」

思考で頭がいつぱいになっており、ケルベロスの爪が迫って来ている事に気が付かなかった俺は咄嗟に両腕をクロスさせ防御の体勢を取る。

「アアアアアアアアアアアアアアアアツ!!?」

いつまで経っても痛みが襲って来ない事に疑問を覚えた俺が目を開くと、そこには見覚えのある2つの紋章に挟まれ悲鳴を上げているケルベロスの姿があった。

「コレは……!」

——ガツシャアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

〈結界がああああああ!!?〉







「東崎！木場！来てくれたのか！」

「やあ、おまたせイツセー君。迷惑をかけちゃったようだね」

キバの鎧を纏った東崎と、いつもと変わらないような笑みを浮かべた木場がそこに立っていた。

「お前ら………来るのが遅えんだよ！つたく、こんな奴ら俺一人で充分だったっての」

「それにしても苦戦しているように見えたけどね」

「うっせ！……でも、サンキューな」

有難い援軍が来てくれた。いつも憎たらしく思うイケメンの木場だが、今回はとても心強いと思う。

……けどな、

「東崎危ねえだろ！！俺ごと轢くつもりかよ！」

「いやいやいやいや、違うから。バイク自身と彼女の所為だから」

そう言いながら指をさした方向には……ッ!??

ケルベロスがアーシアに狙いを定めている！クソ、目を離れた隙にいつの間……！

「アーシ………！」

「はあああああああああああッ!!」

刹那、叫びと共にアーシアを狙っていたケルベロスの首がストンと落ちる。更に、銀色の一閃がケルベロスの身体を真つ二つに切り裂いた！

「怪我は無いか？」

「ゼ、ゼノヴィアさん………！」

なんと、アーシアを助けたのはあのゼノヴィアだった。すげえ、人間なのに悪魔以上のパワーでケルベロスを真つ二つにするのかよ……。

「無事のようなな」

「はい！ありがとうございます！」

「礼を言われる程、私は大した事をした覚えは無いさ。アールシア、下がっている此処は私達が引き受ける」

アールシアにそう言い施すと手に持った剣を改めて握り直し、構える。………なんだろう。ゼノヴィアって俺達よりもカッコいいって言うか何というか。おっぱいのついたイケメンと言うか……。

だが、今の俺達にとつて、頼もしい援軍とも言える。

「ありがとな東崎。俺達はお前が逃げ出したんじゃないかと思つていたけど………やつぱりお前は」

「違うー！」

東崎は否定する……東崎？お前、何を言つて……。

「勘違いしないでよね！別に助けに来た訳じゃない！ただ僕は2人に無理矢理、此処へ連れて行くように言われただけなんだからねッ！」

「……………」

いや、何だそのテンプレなツンデレ発言……!??

「そう言う事にしておいてあげるよ東崎君。君達には色々と迷惑をかけちゃったからね……すまない皆」

「……」

「木場……」

木場は俺達に頭を下げて謝る。

「……はあ、それじゃ今後そうならない用に僕達に相談してよね」

「え？」

東崎の言葉に木場は驚いたような声を出す。

「だからさー人で全部抱え込んで問題に起こすんだったら、皆に相談してスッキリした方がいいでしょ」

そう言いながら東崎はトンと拳を木場の胸に当てる。

「ほら一応、僕等は友達……？的な奴だからさ」

「……東崎……君」

東崎の言葉を目を見開く木場。しばらくすると木場はフツと微笑んだ表情を見せる。

「ありがとう……君は、君達は最高の友達だ」

「全く……こう言うのはイツセー君のやる事なのに何でやらないかなあ」

「俺の所為かよー」

「だって、こう言うのは僕がやる事じゃないし………！」

すると、校舎の壁を突き破りこちらへ何かが飛んで来る。東崎は俺達の前に出るとジャンプしながら身体を捻り、ソレを跨るように受け止め着地する。

ソレの正体は東崎達が乗って来た赤いバイクだった。すると、そのバイクはロデオマシンの如く暴れ始める。

ど、どうなってんだアレ？一人でに暴れてんのか？

「うおおつと……！ほ、ほらほら落ち着いて。そりや墮天使幹部相手にバイク一騎つてのはなあ……」

そう東崎が呟くと同時に校舎の壁をぶち壊しながらコカビエルがこちらに向かって来る。

「ハハハハハ！待ち侘びたぞキバア!!!」

「ヒエツ……イツセー君。任せても良い？」

「俺に押し付けんなよ！」

いや、確かに気持ちは分かるぞ東崎。俺だって、クレイジーサイコホモ野郎とは戦いたくねえよ？でも押し付けんなよ！ハッキリ言うとな今の俺はお前より弱いからな!!？

「えー……ハア……分かったよ。それじゃあこつちはコカビエルと戦つて来るよ……やだなあ……」

愚痴を言いつつもハンドルのグリップを握りながらコカビエルに向き合う東崎。そこに部長達が駆け寄って来る。

「東崎！相手は墮天使の幹部、1人で戦うのは流石の貴方でも危険よ！」  
「分かっています。けど…そうもいかないみたいです」

瞬間、一筋の眩い光が立ち昇り校庭全体が輝きに包まれた。

~~~~~

光の発生源に目をやるとそこには一本の剣が存在した。その剣は悪魔達だけではなく、ファンガイアである東崎にも悪寒を与えるオーラを放っていた。

「遂に…遂に完成したぞ！これが7本の内4本の聖剣を統合したエクスカリバー！」

バルパーの眩きと共にエクスカリバーの下に描かれた陣の光が一段と強く輝き、校庭全体に光が走る。その光景にキバットは声を上げる。

「やべえな。エクスカリバーが一本に統合された所為で光で下の術式も完成しちまった……後20分もしないうちにこの町は崩壊するぞ！」

リアス達は出されたタイムリミットに焦りを露わらにする。キバットの言葉が本当ならば自分達の愛するこの町が、無関係の人々が犠牲となる。

「アレってどう見てもヤバイ奴ですよ。俺の知っているエクスカリバーと大きくかけ離れてますよ」

「残り20分……魔王様が来るまでに間に合わないわね」

一刻一刻と迫る崩壊までのカウントダウンを前に東崎は前に出る。

「リアス先輩、今のコカビエルは僕にしか眼中に無い状態です。ここは僕一人で戦った

方が最適だと思えます」

「……本当に一人で戦うつもりなの？」

リアスの言葉に東崎は無言で頷くが、イツセーは東崎の肩を掴む。

「待てよ！俺達にだってやれる事はあるだろ？一人で戦おうとしたんじゃ——」
 「ハッキリ言つて今のイツセー君達じゃ足手纏いなんですよ」

東崎の言葉にイツセーは驚愕する。今、自分の目の前に居るのは人間としての東崎莉紅ではなく、ファンガイアとしての東崎莉紅だ。

今の彼はただ、コカビエルと言う名の障害を取り除く為に闘う化物モンスターとして、圧倒的な王の力で蹂躪するキバ兵器として戦う——

——ガンツ!!

突如として東崎は自身の頭をバイクに打ち付ける。

「どうした!?？」

「……いや、間違えた」

仮面越しに額を抑えながら話す東崎の姿は先程のものと比べて一瞬だけ、焦っている様子が見られた。

しかし、そこに居るのはイツセー達を知る何時もの東崎莉紅。多少の違和感を覚えはしたが東崎の話に耳を傾ける事にした。

「キバットの話から察するに現状、アイツとマトモに渡り合えるのは僕しかないんです……僕にやらせてください。いや、僕がやらなくちゃいけないんです」

「……先輩」

（——危なかった。思考が乗っ取られかけた）

小猫が心配する中、東崎は内心で凄まじい焦燥感に駆られていた。イツセー達に向けたあの言葉は紛れもなく東崎莉紅自身の言葉。

——だがそれはあくまでファンガイアとしてののだ。

一瞬だけ、人間としての自分を見失った東崎が最初に抱いた感情は恐怖だった。自分

が自分で無くなった事実には東崎は畏れてしまったのだ。

キバの鎧に施されているファンガイアの王として証の力により、思考、精神はファンガイアとして傾き、いつしか東崎莉紅と言う名の人格は別の物に変貌を遂げてしまう。

このキバの鎧は東崎莉紅が知るモノとは、似て非なる物だ。

異世界転生してチート特典で無双？巫山戯るな。

このチート特典神から与えられた反則の力の代償はそれ相応のモノとなる。

この力を使い続けければ、東崎莉紅と言う名の自分の存在は自分自身でも気が付かない内に別の者になっているのだろう。

——「力を手に入れるってのは、それ相応の覚悟が必要なんだよ」

(……誰の言葉だっけか?)

ふと東崎の頭の中にそんな言葉が過ったが、どうしても誰が発した言葉なのか思いうす事が出来ない。

東崎はそんな事を思い浮かべ——

——ブオオンツ!!

「ツ!」

エンジンを吹かし、前輪を軸にコマを回すかの如く車体を回転。コカビエルが投擲して来た光の槍を後輪で弾いた。

「それに——今のコイツはマシンキパー機嫌が悪いですし」

東崎は考えるのをやめた。今、やるべき事は目の前の敵を倒す事だ。この町の為、罪の無い人々の為、友達のために——自分らしく無い事を行う。

「キバット、陣の解除方法は？」

「コカビエルを倒す。以上」

「成る程、だいたい分かった」

キバットと言葉を交わした東崎はこちらに対してニタリと笑うコカビエルと視線が

28話　ダークネスムーンブレイク

紅き鉄馬が駆け抜ける。駆けた跡には光の槍が突き刺さる。黒と紅がぶつかり合う。王は槍を物ともせず、鉄馬を巧みに操る。

「そうだ……！今は僕に従え……キバの鎧……！」

精神をファンガイアの王として相応しいモノに変える力を持つ鎧を羽織る彼はそう呟きながら鉄馬を走らせる。

「ハハハハハ！楽しいなあ！キバアツ！！これならどうだツツ！」

黒き翼をはためかせ墮天使のコカビエルは光を圧縮させ、両手に納めた巨大な槍が投擲される。

「ツ！」

キバである東崎はソレを片手で掴み、握りつぶした。キバの鎧は悪魔程では無いが聖なる力に弱い部分がある。だからこそ東崎は考えた。

もう面倒臭いから真正面からぶつ壊した方が早いんじゃないか？

……と。一々逃げるより、自分自身にその程度の攻撃は通用しないと言う警告も兼ねて

の選択を東崎は選んだ。

(熱ッ!??)

熱された鋼鉄を素手で触れたような感覚が襲って来た。

しかしすぐに握りつぶしたので、一瞬で元の体温に下がる。未だに手の平はヒリヒリするが、自身の顔の半分以上が黄色い複眼で占められている為、表情は全く変わらない。

「やるなア！これならどうだッ！」

空中で静止し、両手を上に向けると東崎を中心に360度、半球のように展開された無数の光の槍がキバである彼に狙いを定める。光の槍が一斉に射出される。それに対して彼は

「…あつ、駄目だコレ」

捌き切る事を不可能と察した。直後、彼は眩い光に包み込まれる。



天然のデュランダル使い、イレギュラーの禁手である双覇ソード・オブ・ビトレイヤの聖魔剣の出現により5本の統合されたエクスカリバーは破壊された。

その際、木場が握る聖魔剣を見たバルパーは何か気付くが、その事を口にする事は永遠に無かった。バルパー・ガリレイはコカビエルの放った光の槍によって亡者と化したのだ。

キバと戦いを繰り広げていた筈の墮天使の介入に驚愕を露わにするグレモリー達。強力だった筈の木場の聖魔剣、ゼノヴィアのデュランダルの攻撃は難なく捌かれ、姫島の雷撃も通用する事は無かった。

木場達は決して弱くない。ましてやデュランダルはトロイアの英雄ヘクトール、シャルマーニユ勇士のローランが扱ったとされる不滅の刃だ。

……が単純な話、使いこなせてないのだ。

木場は禁手の聖魔剣を発現させたばかり。

ゼノヴィアのデュランダルは四つの聖遺物が秘められた悪魔にとって危険な力を持ち、迂闊に払う事が出来ない。

姫島は本来の力を引き出せてない為にコカビエルにダメージを与える事ができない。グレモリー眷属達は将来性に優れているが、まだまだ。まだ、本来の力を引き出せていないのだ。

苦戦する眷属達を前にコカビエルは

「……飽きた」

そう吐き捨て、両手を上空に掲げる。

すると、先程まで使っていた光の槍と比べて数十倍はあるであろう光が収縮され、巨大な矛が現れる。

それを見てリアスは咄嗟に側にいた一誠に声を掛ける。

「イツセー！私に譲渡を！」

「ツ！分かりました！」

『Transfer!』

直後、コカビエルが放った矛とりアスの滅びの魔力がぶつかり合う。激しい閃光と紅がスパークを起こし、周囲の景色を抉っていく。

攻撃の余波によつてグラウンドは無残な姿と化し、校舎も所々が崩壊していく。

「……………選択を誤ったな。グレモリーの娘」

「……………ツ！部長！」

すると、腕を突き出していたリアスはその場に崩れ落ちる。すぐさま一誠が駆け寄り、彼女を抱きかかえ呼びかける。

その様子にフンとつまらなそうにコカビエルは鼻を鳴らす。

「先程の攻撃は素晴らしかった……………が、後先考えずに最大出力の”滅びの魔力”を使うとはな。滅びの魔力は、文字通り対象滅ぼす魔王の力。それと俺の光の力がぶつかり合った余波で自分の身を傷つけるとは……………愚かな女だ」

そうでもしなければ、眷属を助ける事は出来なかつた。

彼女は王として未熟だ。……しかし、誇り高き魔王の妹としてリアス・グレモリーは眷属達を守ると言う選択したのだ。

「魔王の妹とはいえ所詮この程度か……赤龍帝、貴様に問おう、敵わないとわかつていても、なお私に挑む気か？」

「……るせえ……」

「あ？」

「うるせえって言ってるんだよ！この野郎！愚かだと!?ふざけるのも大概にしやがれ！」

「そうか……」

瞬間、コカビエルは一誠の背後に立ち、光の槍を構える。

「ツッ!? (コイツ……!いつの間にツッ!)」

「その台詞を吐くと言うなら、この女を守るぐらいの實力はあるんだろう?」

「——っ」

そう、眩くコカビエルは一誠の側に居たりアスに向け、槍を握る腕を振り下ろした。

……が、リアスに光の槍が突き刺さる事はなかった。

鎧を身に纏った彼が槍を握り、寸前で止めていたのだ。一誠の目には自分が惚れた彼女を救う親友の姿が映っていたのだ。

「やはり、生きてるよなあ……!」

「……………」

鎧を纏った東崎は何も答えず、光の槍を握り潰した。

「そう来なくてはなあ! キb 「いい加減にしろよ」 ……ほう?」

「アンタは……何で戦おうとするんだ? 付き合わされるコッチの身にもなれよ? ……い

い加減、うんざりなんだよ」

「戦う理由だと……そんな事、決まっているツ！戦う事が俺の生き甲斐だからだ！それが俺の存在意義だからに決まっているツッ！」

「……趣味悪っ。大量の光の槍放たれた時は地面の中に隠れて奇襲を狙ったけど……このまま地面に埋まっていた方が良かった……」

「クク……、やはり面白いな……。どうだ？キバ、俺と一緒に来る気は無いか？世界を気ままにさすらい、好きな国を破壊し、旨いモノを食い旨い酒に酔う。こんな楽しい生活は無いぞ？」

「……いや、結構です」

「まあ、そうだよな……。赤龍帝はどうだ？」

「はあ？そんなもんに乗るわけ……！」

「好きにさすらい、大量の女に埋もれ、抱き放題だぞ？」

「……っ！そ、そそそそんなもんに「どうでも良い」……」

「そんなのどうでも良いからさっさと、墮天使達の所に帰れ。そんなに戦いたいなら身内同士で墮天使一武道大会でも開いてろ」

「あつ、うん。……テメエなんかにつくもんかよこの野郎！（ヤケクソ）」

「キバの言う通りだ。貴様はさっさと退場してもらおう」

「全く……実に哀れだなデュランダル使い」

「……何の話だ」

「仕える主が居ないのに、教会の犬としてこの戦場に死にきたんだ。それを哀れと言わずに何と言う？」

だが、次に発した言葉はそれ以上の衝撃をゼノヴィアは愚か、この場の全員に与えた。

「お前らの仕える聖書の神は、旧き戦争で前魔王達と同じく命を落とした。つまりは死んだのだよ」

その事実には聖職者だったアーシアは意識を失ってしまう。ゼノヴィアはその場で膝をつく程にショックを受ける。

イツセーとしては、何故そこまで落ち込んでしまうか理解出来なかった。だが神を信じていた彼女達にとって、生まれた頃から信じていたモノに裏切られたと言う意味となる。

「……………（神死んでる扱いになつてんぞ?!?え、どういう事?アレか!僕が転生された直後、ショック死したって事なのか!?マジで!?)」

実際の話、1番ショックを受けてるのは東崎本人だったりする。神つてそんな簡単にポツクリ逝くものだろうか?

しかし、コカビエルが言っているのはこの世界における聖書の神であり彼の知る”神”とは赤の他人である。

(……………あれ?)

(転生つて……………何の事だっけ?)

彼は記憶の中にポツカリとできた空白に疑問符を浮かべた。自然と出てきた単語が

何なのか、何故自分がその言葉を思い浮かべたのか原因を思い出そうとするが答えがすぐに答えか出る事は無かった。

「(転生って……輪廻転生とか今流行りの異世界無双系……ぐらいしか分からないけど……) まあ、いいか」

どうせ、自分に関係の無い事だろうと頭の隅に追いやった。

……最早、本来の名すら思い出せないであろう彼は前に踏み出す。

「神が居ようが居まいが、僕にはどうする事も出来ない。……けど、耳障りなアンタを黙らせる事は出来る」

ゴコリと足元の地面が隆起すると、紅のバイクが地上に現れる。ソレがコカビエルを捉えるとタイヤを激しく回転させ突進を仕掛けようとする。

マシンキバーに施された拘束具カテナの鎖を引き抜き、ジャラララと金属が擦り合う音が響き渡る。

紅騎馬、
Wake up

『g i ————— ツツ！』

バキバキと装甲が割れるような音と共に不快な絶叫にその場の全員は思わず耳を塞ぎこんでしまう。

彼の側にあつたであろうバイクは徐々に姿を変えていく。

骨と皮しかないような脚部がパーツの隙間から姿を現し、フロントのデイフェンダーから黒い毛の間から赤く輝く瞳が印象的な頭部が起き上がり、無機物だった鉄馬は瞬間にモンスターへと変貌を遂げていた。

「アレは……」

「……亡霊」
ファントム

「え？」

木場が呟いた言葉に一誠は思わず声が漏れてしまう。

「アレは僕と同じ、憎悪の念だ。アレは……憎しみで現代に復活した亡霊だよ」

マシンキバーはキバット族の工芸の匠であるモトバット16世、墮天使の総督であるアザゼルが意気投合して製作されたと言われる。

その際にライト周囲のカウリング内部にはとある馬の脳を、装甲の下には神経と人工骨が組み込まれた。

偶然か、はたまた必然か。

現世に再び蘇った鉄馬のかつての名を『ラムレイ』と呼ぶ。

『ツツ!』

????????????????????
 かつての主人である王が手にした剣。ソレを穢された。
 自分をこんな姿にした墮天使が目の前に居る。

——許せるものか……

——己の魂をこのような箱に詰め込んだ事を……

——そして何よりッ！今存在する民達の命を！かつての主人の剣で壊そうとするか……ッ！

『???
ッ
!?????????
——ッ
??????
ッ
ッッ！』

耳を覆いたくなる奇声を発しながら鉄馬は駆け、それと同時に見計らったように東崎は背に跨り手綱ハンドルを手にする。

前輪を激しく回転させ火花を散らしながらマシンキバーは跳躍する。脚部には筋肉が無い事が嘘のように一瞬の内にコカビエルとすれ違う。

「ぐッ——おッ！」

コカビエルは自身の肩を抑える。突如として襲って来た熱量と痛み思わず声を漏らしてしまった。視認すると、自分の肩が大きく抉れ焼けている事に気付く。

どうやら鉄馬の回転するタイヤがチェーンソーのように墮天使の肉を刈り取ったの

だろう。赤く染まった車輪を駆動させ、キバと鉄馬は再び墮天使に向かって襲いかかる。

すぐに手元に光の槍を形成するとコカビエルは槍を盾代わりにして攻撃を防ぐ。ガリガリと車輪と槍が火花を散らす中、バイクに跨っていた東崎は跨っていたシートを踏み台にすると宙で身体を捻り、コカビエルの背後に回る。

「墮ちろッ!!」

「ぐあああああああッッ!」

ブチブチ!と無防備な背から生えた鴉のような黒い翼をもぎ取り悲痛の叫びを上げる墮天使はそのまま地へ落ちていく。

「ハア……ハア……!ぐおつ……ッ流石だア……キバア……!それでこそ殺し甲斐があるッ!」

「しつこいなあ!」

口から血を吐きながらもコカビエルは光の槍を手に立ち上がる。何度も攻撃をしたと言うのに立ち上がる目の前の存在に東崎は苛立ちを見せる。

「ハハハ、だが、お前と会えて本当に良かった！やはりあの茶髪の女の雑魚とは全く違う！」

「茶髪の女の……雑魚？」

瞬間、頭が冴え渡った。直後、体の内から熱いナニカが炎のように侵食するのを感じた。

「ん？もう一人の教会の戦士だ。まあ、良いだろう、あんな女の事はどうでも良い！さあ！さつさと戦いを始めようじゃ無いかツツ！さあツツ！」

それに対して確実に息の根を止めようと鉄馬は車輪を激しく回転させる。

「…あとは僕がやる」

しかし突如として鉄馬はバイク形態に姿を戻した。東崎の手にはカテナの鎖が収められ、これ以上の暴走を許す事は無かった。

「不満だろうけど、これ以上暴れたら皆にも危害を出すかもしれないんだ。だからココは我慢して」

今にもボディの内側から出てきそうなモンスターを宥めると、納得したのか次第とエンジン音が小さくなる。

「まあ、我慢できないのは僕なんだけどね……」

震える手でホルダーからフェッスルを取り出す東崎。

恐らく、これは怒りだ。

怒りで我を失いそうになるのをギリギリの所で踏ん張りがついたのは奇跡だった。

「よし、…行くよキバット。…殺さないように」

『ああ!』

「……………莉紅……………」

皆が見守る中、一誠の左手から声が響く。

彼の内に眠る龍のドライブが話しかけてきたのだ。

『相棒、キャツスルドランを覚えているか? 二天龍である俺達の一部も奴等によって改造されてしまったと言う事を』

「改造されたって……………何で今、そんな話をするんだよ」

『俺の鱗や皮膚、更には歴代の赤龍帝の神器その物がファンガイアが作り出した兵器に組み込まれたのさ』

「そうなのか!??でも、一体どう言う……」

『見ろ、相棒。奴が俺の力を扱う様をな』

あらゆる物語で月の光は怪物に力を与える魔力を持つ。ファンガイアはそれに目を付けた。

月の満ち欠けにより強さが増減されるウルフェン族の特性をキバの鎧に組み込む事が出来れば……その結果、闇のキバの鎧が造り上げられた。

結果、キバの鎧は擬似的に月相が存在する結果を張る能力が備えられ、これにより Safe^新から Danger^満と調節が可能となった。

『いくぜ……Wake up!!?』

更に、鎧に二天龍の一角の力を取り入れる事にファンガイアは成功したのだ。

嚴重に拘束具カテナで封じられた右脚か解き放たれた。赤龍と赤龍帝の神器の一部である宝玉で作られた「ヘルズゲード」が姿を現した。

「アレは……ッ!」

「校庭が……!」

「……やったのか?」

「……っ! まだです」

先程の一撃で倒した。

そう思ったのも束の間。小猫はコカビエルにまだ意識がある事に気づく。

「……ッ、がはっ! い、生きてる……だと……? そうかつ! キバツ! お前はまだ戦い足りないのだなッ! 待っているろ! 今すぐに貴様を殺し!」あのさあ……」

コカビエルの側で同じ高さに合わせてるようその場で屈む。

「いい加減にしながら。コカビエル……さんだっけ? 戦い足りないって冗談じゃ無いよ。誰が好んでヤンホモと戦うかっての……」

「……は、はは! 何を言ってるキバ! お前は!」

「僕は東崎莉紅。人間とファンガイアのハーフ。別に好きでファンガイアの王になりた

い訳じゃないし、なる気もないから。ハイ、以上！」

よつと……と呟きながら、東崎はコカビエルをその場に放つてグレモリー眷属達の元へ歩いて行く。

（何故だ……？）

（俺の何がいけなかった？）

（俺の何処が不満だったのだ？）

コカビエルの脳裏に刻み込まれたあの言葉が蘇る。

『コカビエル……面白いな貴様。暇つぶしに戦うとしよう』

金色の剣を手にした、黒の鎧を纏い翠色の瞳を輝かす異形の戦士が自分にそう言った。

目の前に現れた、破壊の象徴は自分を見ている。自分だけを見てくれている。かの存在は消え失せた。……が、こうして再び現世に蘇って来てくれた。

歓喜した。目の前にこうして己と向き合ってくれた事にコカビエルは歓喜したのだ。

……なのに、何故だ。

何故、コイツはファンガイアとしての誇りを……キバとしての誇りを蔑ろにする？

「……があああああああッ！認めんッ！認めんぞッ！キバアアアアアッ！！貴様はア……！貴様は！ファンガイアなんだぞッ！俺を殺せッ！戦争を起こせッ！他の生命を糧にしろオ！世界を種族の死体で埋めつくせエッ！」

「やだよ。何でそんな事しなきゃ駄目なのさ」

コカビエルの叫びは一蹴される。何の興味も示さず、飽きた玩具のようにこちらを見向きもせず答えた。

「なん……だと……ッ!?？」

「だって、僕は趣味で楽器を作っていたいし。駒王町の甘い物だって未だ制覇出来てないし」

しばらくして、東崎は考え込む素振りを見せる。

「……可哀想な人、じゃなかった。可哀想な墮天使だ。世界には……そんな事よりも、素晴らしいモノに溢れてるのに……」

落胆したような、呆れ果てたような。彼の声色からそのような様子を読み取る事は容易い事だった。

「……きッ」

だからこそなのだろう。その言葉はコカピエルの逆鱗に触れてしまったのだ。

「きいいいいいいいいいさあああああああああまあああああああああ
あツツツ!! 貴様はツツ! キバでは無いツツ! 貴様はあああああああツ!! 紛い
モノだあああああツツ!!」

「知ってる。ホラ、いい加減に奇声をあげるのはやめなさいって。もう夜なんだし、周り

それ以上コカビエルの声を聞くことは無かった。

突如、コカビエルが凍り付いた。文字通り、全身が氷像の如く凍結したのだ。

それと同時に全員はこの場の空気が冷たくなっている事に気付く。徐々に気温が下がるのでは無く、冷蔵庫内に入ったような。冷たい空気のドーム囲まれているような感覚だ。

しかし、そんな事を悠長に考える暇は彼等には無かった。

何故なら、目の前にコカビエルを一瞬で凍結させた存在がいるのだから。

「な、なんだッ!??何が起きた!?!」

「アレは……?」

それは白銀の世界に存在すると言われた未確認生物である雪男イエティを連想させる姿をした戦士。白と金が美しく、この駒王町には似合わない風貌のソレは不気味とも言える。

皆が困惑する中、ソレに見覚えのある東崎は――

(……アレは……何だ?)

……失礼。かつて東崎莉紅はその存在を知っていた。だが、今となつてはもう思い出す事も困難だろう。

キラリと輝く青の瞳と月の光が反射する金の瞳が交差する中、一誠が呟く。

「キバ……?」

「え?……いやいや、似てないでしょアレ」

「どうして?!?キバが2人?!?」

「リアス先輩?大丈夫?疲れてない?」

コカビエルとの戦いで頭を打ったのだろうか?どう見ても姿が違う筈なのに変なことを言い出す2人に東崎は額を抑える。

「……いや、キバの言う通り、良く見ると違う」

「だよね!似てないよね!」

木場の言葉に東崎は嬉々として応える。

「キバは血のような紅をしているが……奴は対照的だ。雪のように冷たい白の姿をしている。それ以外はキバとそのまま同じだ」

「……」

コイツもかよ……と東崎は無言で頭を抱える事となった。

「コカビエルコイツは連れて帰る……ついでに死体とはぐれの神父もだ」

「なっ！待ちなs——」リアス先輩！触らぬ神に祟り無し！放っておきましょう！——
むぐっ」

このままでは自分の時みたくリアスが喧嘩を売り攻撃を仕掛ける可能性があった為、この場は去って貰うように東崎は彼女の口を塞ぐ。

「……そうだ」

と、何か思い出したようにソレはこちらを向き呟く。

「……レイ。俺の名だ……」

直後、激しい吹雪が吹き荒れ、その場の全員は思わず顔を腕で覆う。気がつく頃にはレイと言う存在はコカビエルと共に姿を消していた――。

「レイ……エヴァ○ゲリオン?」

「男のボイスだったから多分、綾波じゃ無いと思うよ?」

「少しは夢を持ってても良いだろ!」

変身を解き、元の姿へ戻った東崎と一誠がいつものような漫才?を始める。しばらくして、危機が去ったのだと確信したのか、一誠は「ハア〜」と溜息を吐き東崎のこめかみをグリグリとし始める。

「お前なあ!!最後にはコカビエルを倒せたけど!最初から戦えよ!初っ端から逃げてるじゃねえよ!」

「痛だだだだ?!だってあんなクレイジーサイコホモと戦いたくないし!」

「でも…僕達を乗せて来てくれたよね?本当は僕達も戦うべきだと思って連れて来てく

れたんだらう?」

「えっ、」

木場の発言に思わず声を漏らす東崎。

……実際の話、木場とゼノヴィアを乗せて来たのは本当に偶然だった為である。

本当はキバットに『行け!』と言われた為、渋々了承しただけである。

「全く貴方は……いえ、ここは素直に礼を言うべきよね」

「えっ?」

「私達の為に戦ってくれてありがとう。悪魔を代表として礼を言います」

「」

彼女の言動に思わず言葉を失う。

「——別に、そう言うのじゃ……ないです」

彼はただ、ガムシヤラに自分の為にやった。最初だつて悪魔と墮天使の問題だから無視しようとしていた。

「なんか……こう、コカビエルの発言にイライラしたと言うか……」

でも、途中で気がついた。：いや、そもそも最初から見て見ぬ振りをしていただけのう。

キバの鎧は精神を汚染する力を持つ。

……が、それに負けじと一つの信念で彼は戦った。

「ツ~~~~~！ああ、もう！イライラするなあ！僕はファンガイアだけど、人間でもあるんだ！友達とか知り合いが危険な目に遭つてるつてのに！放っておける程、外道じゃないんですよ！」

「……！」

何かに吹っ切れたように叫ぶ東崎を見て、リアスは愚かその場の殆どこ者が面食らつたような顔になる。

そして、何かを察したのか次第とニヤニヤとした表情へ変わっていく。

「部長、コイツはこう言った属性も持つてるんですよ」

「成る程ね……、そう言う……」

「あらあらウフフ。お可愛い事」

「やれやれ東崎君は……」

「先輩最高です」

皆がそれぞれ呟く中、(約1名可笑しな者も居るが…)東崎はその様子に少しイラツとしながら口を開く。

「おい、ちよつと。何で皆して僕に対して生温かい目を向けてるのか理由を聞こうじゃないか」

「別に?……さて、悠斗。お尻を出しなさい」

すると、リアスは手に魔力を込め始める。どうやら彼にもお仕置きと言う名の地獄が決定されたようだ。

「えっ、部長!？」

「さあ観念して尻叩きを味わいやがれ！」

先程までピリピリした空気が一変、元の日常に戻った事を感じさせる彼等の光景に東崎とキバットは安堵する。

「これで一件落着って事だな。あー、疲れた疲れた。お前が力抑えろって言うもんだから」

「仕方ないでしょ、死なせでもして戦争起きたらシャレにならないんだから」……..
なあ、キバ。教えてくれて」……..ん?」

そんな彼等の元にゼノヴィアが語り掛ける。

「君は……この世界をどう思う?」

「……何が?」

「何がとは……、勿論!神が居ない世界だ!神が居ないんだぞ!!?お前はそれでもどう

でも良いって言うのか！答えろ！」

恐らく限界だったのだろう。アーシアのように失神はせずとも、神の不在によるシヨツクは凄まじいものだった。

「今まで信じて来たモノは紛いものだった！いつか救われると……！祈り続けて来たのに……！私や、イリナ……そして、アーシアもツ!!裏切られたんだッ！」

だからこそなのだろう。敵である筈のファンガイアである彼に彼女は縋りつこうと
している。

東崎は考える素振りを見せた後、彼女に疑問を投げかける。

「……今まで祈り続けて来たの？」

「……そうだ」

「じゃあさ……、後は頑張れば良いんじゃない？」

「……は？」

「うん、例えばイツセー君。モテたいから神様をお願いするだけじゃなくて、頭悪いのに

勉強を頑張つてわざわざ駒王学園に入学したからね？」

ワイワイと笑顔で仲間達に囲まれる彼を指指しながら東崎は言う。

「うん……まあ……敵対してる僕の言葉なんか簡単に信じる事は出来ないと思うけど……とにかく！今まで祈りをし続けたなら、今度は思い切つて行動してみれば良いと思う。ゼノヴィアさんは良い人だ。馬鹿正直で頭は固いけどそれだけは分かるよ」

「……………」

彼の言葉を聞いた直後、この国に訪れる直前の出来事が脳裏に浮かんだ。

『なあ、イリナ。その”りつくん”とやらはお前にとつてどんな人なんだ？』

『え？そりゃあ、勿論……私のー、幼馴染でー？カツコよくて？紳士でー……つて、もう！何言わせるのゼノヴィア〜♪』

『あー、うん。やっぱり何でも無い。忘れてくれ……』

『うーん、でもそうね……会えばきつと、気に入ると思うわ。だって……リツ君だもの！』

「……ああ、そうか。コイツがそうなんだな……」

「イリナの言う”りつくん”とは人間もファンガイアも関係無い、目の前にいる存在の事だ。」

最初は色々と言文句をつけて不満ばかり漏らす嫌な奴だったが、気に入ると言う彼女の言葉がやつと納得できた気がする。

ゼノヴィアは笑みを浮かべると、

「イリナの仇を討ってくれて感謝するぞ”リク”」

「は？何言ってるの」

「む？」

「終盤、そのつもりでコカビエルを倒したんだから当たり前でしょ」

「……………ブツ」

「さっきのどこに笑うポイントがあったのか教えてもらえませんかね、ゼノヴィアさん？」

その問いに答えず、彼女はエクスカリバーの破片を手に彼に背を向ける。

「……イリナに伝言はあるか？」

「うん、今度来たらモケポンの対戦をしようって伝えておいて」

「ああ、そうだな。伝えておこう」

教会の戦士は一人、悪魔達の前から姿を消す。

「フフ、イリナ。お前の言う通り私は彼を気に入っちゃよ」

願わくば、もう少し悪魔達の事を知りたいと名残惜しい気持ちで胸に秘めたまま駒王町の夜から姿を消したのだった――



駒王学園にて。いつも通りの日常か戻ってきたのも束の間。僕達のクラスに転校生が来るらしい。

つい前にはアーシアさんが来たのにまた新しい転校生ですか……。

「お前ら、お待ちかねの転校生だぞ？……全く、何でこうも転校してくる奴らばかりなのか……」

「転校生のゼノヴィアだ。よろしく頼むぞ」

どう見ても見覚えのある女子生徒です。ありがとうございます……？
あるえー？マジで見覚えのあるどころじゃ無いんだけど。

男子生徒達が騒ぎ出す中、僕は一緒に騒いでいるイツセー君に目配せをする。

(*、▽、)へヤター

(・・・)……

(　・　・　・　)　?

(　・　D　・　)　へあれ?

(　・　D　)　)

(　・　D　)　)　)

こっちみんな。

て言うか、今気が付いたのか……。

「と、言うわけで3行で説明をお願いします」

「悪魔になりたいと言われた

ナイトの駒を渡した

眷属GETした。ハイ以上」

ホントに3行で説明しちゃったよ……。

「て言うか、いいのソレで!？」

「何を言う。思い切って行動してみたら良いと言ったのはリクだろう」

「思い切りすぎィ！」

するとお前の所為かよ……と言う視線がグサグサと突き刺さるのを感じる。いや、
だつてこうなるとは予想もつかないでしょフツッ。

「しかし、私もついに悪魔か……フフ、教会の戦士でイクサ装着者候補と言われた私も地に落ちたものだ……（白目）」

ああ、ムシヤクシヤしてやった後悔はしているですね。分かります。

……ん？イクサ？

なんか、聞き覚えのある単語が出たような……。

「ま、まあともかく。私は君達に失礼なことを言った。幾ら謝罪してもしきれないと思

う。望むなら私を殴っても構わない」

「そ、そんな事言わないでください。確かに教会に異端認定され、追放された時は悲しかったです。でも今は教会にいた頃は見ることも聞くこともなかった大変をできまし、大切な人達と出会えました。お陰で今は毎日が幸せです。ですから……ゼノヴィアさんも気にしないで下さい」

「ありがとうございます。そう言ってもらえると助かる」

どうやら、アーシアさんとゼノヴィアさんは仲直りできたようだ。

「さて、リク。君にも酷い事をした。君が望むなら殴っても構わない」

……よし、それじゃあ助走を付けて……。

そう思いながら彼女から距離を取ろうとすると周りの皆が急に僕の体を押さえつけ始めたのだ!!

「なっ、何をするだぁーっ!」

「それはこっちの台詞だ! 空気を読め空気を!」

「そう言うところだぞリク！」

「キバットまで！」

くそっ！流行らせコラ！

「3人に敵うわけ無いだろ！」

「馬鹿野郎お前！勝つぞ僕は……って、そう言えばイリちゃんは？」

「……彼女は私のエクスカリバーも含めた全てを持って帰っていったよ。彼女は運が良かった。真実を知っていたら宗教心が強いからね。心を崩したかもしれない」

「……そっか」

そうか、……もう少し日本に滞在していれば良かったのに……。

そう思っているとゼノヴィアさんが何か思い出したように口を開く。

「それとだ。『勝負には負けちゃったけど、モケポン通信対戦は負けないんだから！』

……だ、そうだ」

……そうか、……そうか……！

「よし！帰ったら急いで新作の進めて殿堂入りしないと！僕のトライゴンが火を噴く事になるなあ！」

「レート1500以下が何言ってるんだよ」

「絶許」

こうして、新しい仲間を加え日常は過ぎて行く……。

だが、僕達は知らなかった。

まさか、あんな事が起こるだなんて……！

「おい、地の文で何言ってるんだお前」

……映画化しそうな雰囲気醸し出せたらいいなあ。とキバットを無視して一人、こっそりと呟くのだった。



「成る程な、”仮面ライダー”じゃないのか。それに似たナニカあって所か……。この世界は他と比べてワケが違うみたいだな」

彼はレンズ越しに彼等を覗く。その場を後にしようとして足を運ぶと、彼の前に見慣れない男性が立ち塞がる。

「よお、初めましてだな。世界の破壊者さん」

「……誰だお前」

「俺か？俺は墮天使の総督。アザゼルって言うもんだ」

「……成る程、大体分かった」

幾多もの世界を回り、その瞳は何を見る——